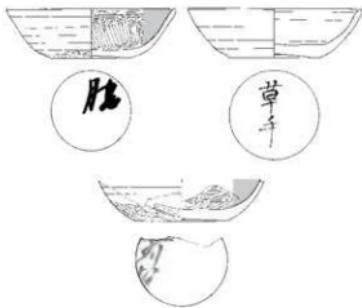


前戸内遺跡

— 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 —



2013年（平成25年）3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

前戸内遺跡

— 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 —



1. 調査区全景（1区南・南から）



2. SB10 挖立柱建物跡（平安時代）



1. SI1 積穴住居跡（平安時代）



2. SI142 積穴住居跡（平安時代）



3. SI194 積穴住居跡（平安時代）



4. SX13 廃棄土坑（平安時代）



5. SB10 挖立柱建物跡（平安時代）



6. SB127 挖立柱建物跡（平安時代）



7. SI140 積穴住居跡（奈良時代）



8. SX114 粘土探査坑（奈良時代）



1. 第1群土器（奈良時代）



2. 第2群土器（平安時代）



1. SI13 積穴住居跡出土土器（平安時代）



2. SI194 積穴住居跡出土土器（平安時代）



3. SX13 廃棄土坑出土土器（平安時代）



4. 鉄製品・鉄滓（平安時代）



5. 墨書き土器（平安時代） 上段：S=1/4 中段：任意 下段（赤外線写真）：任意拡大

序 文

蔵王山麓の豊かな自然に恵まれた私たちの蔵王町は、大昔から大変住み良い土地だったのでしょう。私たちの足もとに埋もれている多くの遺跡が、悠久の時をこえてそのことを力づよく物語っています。

蔵王町の北東部に位置する円田盆地では、平成8年度に大規模なほ場整備事業が計画されました。事業の計画区域には多くの遺跡が含まれていたことから、文化財の保存についての協議が重ねられました。この結果、水田となる部分は盛土によって遺跡を保存し、道路や水路などの工事によってやむを得ず破壊される部分について、平成13年度より記録保存のための発掘調査を行なうことになりました。

本書において皆さまにご報告するのは、平成20・21年度に行なった前戸内遺跡の発掘調査成果についてです。今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見され、当時の集落が営まれていたことが判明しました。集落内には計画的に建物を配置した場所があり、当時の地域有力者一豪族の居宅であったと考えられます。郡名とみられる「茹田」と記した墨書き土器も出土し、当時の円田盆地周辺が茹田郡に属していたことを示す重要な資料です。

これらは、蔵王山麓に暮らした当時の人びとの暮らしぶりの一端を窺い知ることのできる貴重な成果です。本書にまとめられた学術的成果が、広く皆さまに活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

ほ場整備事業計画の策定と実施にあたっては、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区、地元地権者の皆さまより文化財の保存と発掘調査実施へのご理解とご協力をいただきました。地元作業員の皆さまにはさまざまな気象条件の下、野外での発掘作業にあたっていただきました。ご協力を賜りました関係各位の皆さまにあつく心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、先人の残した文化遺産を町民の宝として永く後世に継承していくことは、これから地域色豊かなまちづくりには欠かせない大切なことであります。今後とも、町民各位のご理解とご協力を念願して序といたします。

平成25年3月

蔵王町教育委員会
教育長 佐藤 茂廣

例　　言

1. 本書は、藏王町大字小村崎字前戸内地内に所在する前戸内遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う事前調査として行なったものであり、発掘調査から整理作業および本書の作成に至る一連の業務は、調査原因となった事業の主体者である宮城県大河原地方振興事務所を委託者、藏王町を受託者とする業務委託契約を締結し、藏王町教育委員会が平成20・21年度に発掘調査・基礎整理作業、平成23・24年度に本整理・報告書作成作業を実施した。
3. 本発掘調査と整理作業は藏王町教育委員会が主体となり、教育総務課文化財保護係が担当した。職員体制は下記のとおりである。

教　育　長　山田　祐（H22）　佐藤茂廣（H23-）

教育総務課長　大沼　芳國（H22）　高野　正人（H23-）

課　長　補　佐　阿部　宏（H21）　高野　正人（H22）　佐藤　浩明（H23-）

文化財保護係長　佐藤　洋一　主　事　鈴木　雅

文化財臨時職員　庄子　善昭（H17-）・我妻　なおみ・鈴木（山戸）和美（H20-）・安倍　奈々子・古田　和誠（H20）・中沢　祐一（H21-22）・渡邊　香織（H22-）・海藤　元（H24）

発掘調査作業員　我妻　英子・我妻　儀八・我妻　大・浅沼　一郎・芦立　清・太田　忠義・大庭　慶志郎・加藤　初子・加藤　洋一・亀井　勇二・熊坂　信子・小杉　佐和子・後藤　扶美江・小林　四郎・小林　美智子・佐藤　和子・佐藤　貴美子・佐藤　照子・佐藤　福治・佐藤　義晴・眞貝　誠一・鈴木　光一・鈴木　勝・清野　政男・竹内　恵子・樋口　良子・堀内　博・山家　次郎（H20-21）・佐藤　かおる・吉田　三郎（H20）・我妻　武夫・市川　康雄・大沼　さつき・加藤　力・佐藤　摩里恵・鈴木　春夫・竹内　求・武田　憲繁（H21）

室内整理作業員　我妻　英子・小杉　佐和子・小林　四郎・小林　美智子・佐藤　貴美子（H20-21・23-24）・竹内　恵子（H20-21）・佐藤　かおる（H20・23-24）・大庭　慶志郎・佐藤　里栄（H21・23-24）・市川　康雄（H21）・岩佐　若奈・佐藤　恵子・松田　律子（H23-24）・我妻　功康・菅野　慶一・松崎　祐二（H24）

4. 本発掘調査と整理作業・本書の作成に際しては、下記の諸機関・諸氏よりご指導・ご協力を賜った。宮城県教育庁文化財保護課・石黒伸一朗・菅原　祥夫・早瀬　亮介・山田　しょう（敬称略・五十音順）

5. 本発掘調査の整理作業は、下記の調査員が中心となり、調査員全員で協議しながら進めた。

遺構：我妻　なおみ・土師器・須恵器：庄子　善昭・鈴木　和美・木製品・金属製品：庄子　善昭・陶磁器：庄子　善昭・渡邊　香織・弥生土器：渡邊　香織・石器：中沢　祐一・統括：鈴木　雅・庄子　善昭

6. 本書に掲載した遺構実測図のトレース、遺物実測図の作成およびトレース、遺物拓本、図版レイアウトなどは文化財臨時職員が中心となり、室内整理作業員がこれを助けた。

7. 本発掘調査と整理作業・本書の作成に使用した撮影機材・ソフトウェア等は下記のとおりである。

現場写真撮影　カメラ：NikonD100・NikonD70s／レンズ：AF-S NIKKOR 18-70mm f3.5-4.5G ED

遺物写真撮影　カメラ：NikonD90／レンズ：AF MICRO NIKKOR 60mm F2.8 D・AF-S NIKKOR 18-105mm f3.5-5.6G ED VR／ストロボ：SUNPAK auto544・Nissin Di866 MARK II／赤外線カメラ：RICOH R8(α)／赤外線LEDライト：AE-LED56

撮影ソフトウェア：Nikon Camera Control Pro2／現像ソフトウェア：Adobe Photoshop Lightroom3 ver.3.0

遺構実測図トレース、写真画像処理、図版レイアウト

Adobe Photoshop6.0・CS4／Adobe Illustrator10.0・CS4／Adobe InDesignCS4

- 出土炭化物の放射性炭素年代測定は、(株) 加速器分析研究所に委託して行ない、その結果を本書の第5章に収録した。
- 本書の作成は下記の調査員が中心となり、本文は調査員全員の協議を経て鈴木 雅が執筆した。
遺物写真撮影：庄子 善昭、表作製：鈴木 和美、復元画作製：我妻なおみ、本文執筆・編集：鈴木 雅、校正・照合：佐藤 洋一・鈴木 和美
- 本発掘調査で出土した遺物および写真・図面等の記録資料については、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

凡　例

- 本発掘調査における測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第X系による。測量成果表は第6図に示した。なお、方位は座標北を表している。
- 本発掘調査では、調査区内に工事用測量基準杭を基準として3mグリッドを設定し、東西・南北方向に数字を付した。グリッドの局地座標における北は日本測地系に基づく平面直角座標第X系における座標北を基準として東に6.3°の方位である。
- 本書に掲載した挿図・写真図版のうち、地図・空中写真は下記のものを使用して作成した。
第3図：5万分の1都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」（宮城県、昭和58年調査）
第4図：2万5千分の1地形図「村田」電子国土配信データ（国土地理院、平成13年修正）
第125図：都市圈活断層図「白石」電子国土配信データ（国土地理院、平成11年調査）
写真図版1-2：空中写真 電子国土配信データ（国土地理院、昭和31年米軍撮影）
- 本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」（小川・竹原2005）を参照した。
- 本書で使用した遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
- 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
S I：竪穴住居跡、S B：掘立柱建物跡、S A：柱列跡、S E：井戸跡、S K：近世墓・落とし穴状土坑・土坑
S D：溝跡、S X：粘土採掘坑・廃棄土坑・竪穴状遺構・性格不明遺構
- 遺構・遺物実測図の縮尺は下記の通りで、それぞれ図中にスケールを付して示した。
調査区配置図：1/3,000、調査区設定図：1/1,500、遺構配置図：1/400・1/300
掘立柱建物跡・柱列跡：1/100（断面図：1/60）、溝跡：1/100・1/200（断面図：1/60）、竪穴住居跡・井戸跡・近世墓・落とし穴状土坑・廃棄土坑・土坑・粘土採掘坑・竪穴状遺構・性格不明遺構：1/60
土器・陶磁器・木製品：1/3、石器：2/3・1/3・1/5、金属製品：1/1・1/3
- 遺構平面図において、柱穴に柱痕跡および柱材抜き取り痕跡、柱材圧痕が確認され、柱の位置・形状・規模等が推定できる場合には、スクリーントーン（15%）で示した。
- 遺構断面図に付した土層注記表の備考欄では、下記の略号を使用して記載した。
(柱掘)：柱穴掘方埋土、(柱痕)：柱痕跡、(柱抜)：柱材抜き取り痕跡
(堆)：堆積土、(崩)：崩落土、(構)：構築土、(人為)：人為的埋土（特記ないときは自然堆積土）
- 遺構の説明では下記の表記方法を使用して記載した。
方位 (例) 北を基準として東に10度傾く：「N - 10° - E」
重複関係 (例) AよりBが新しい：「A→B」、同時機能：「A = B」、新旧不明：「A - B」
柱間寸法 柱痕跡が確認されなかった柱穴は中心点を基準に計測し、() 付きで示した。

11. 遺物観察表で、器面調整・加工の前後関係が確認でき、Aの痕跡よりBの痕跡が新しい場合「A→B」、前後関係が不明の場合「A・B」のように記載した。また、() 内の数値は残存値である。墨書き器で判読不能の文字は□で記載した。
12. 本発掘調査の成果については、下記においてその概要を公表しているが、これと本書の内容が異なる場合には、本書が優先するものである。
- 前戸内遺跡・西屋敷遺跡 発掘調査成果見学会（平成 21 年 6 月 13 日）
平成 21 年度宮城県遺跡調査成果発表会（紙上発表）
「蔵王町前戸内遺跡－県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の概要－」
(平成 21 年 12 月 12 日、会場：東北歴史博物館、主催：宮城県考古学会)
13. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献については巻末に一括して掲載した。

調査要項

遺 蹤 名：前戸内遺跡（宮城県遺跡登録番号：05108 遺跡記号：UA）

所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字前戸内地内

発掘調査面積：3,557.2m²

調 査 期 間：平成 20 年 11 月 10 日～12 月 19 日、平成 21 年 6 月 1 日～9 月 30 日

調 査 原 因：経営体育施設整備事業円田 2 期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）

調 査 主 体：蔵王町教育委員会 教育長 山田 紘

調 査 担 当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係

調 査 員：佐藤 洋一・鈴木 雅（教育総務課文化財保護係）

庄子 善昭・妻野 なおみ・山戸 和美（H20-21）・

安倍 奈々子・古田 和誠（H20）・中沢 祐一（H21）

調 査 指 導：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 協 力：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区・蔵王町小村崎区

目 次

序 文 例 言 凡 例 調査要項 目 次

第 1 章 遺跡の概要	1
第 1 節 遺跡の位置と地理的環境	1
第 2 節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第 2 章 調査に至る経緯	9
第 3 章 調査の方法と経過	10
第 4 章 調査の結果	15
第 1 節 基本層序	15
第 2 節 発見された遺構と遺物	15
1 1 区南	16
2 1 区北	58
3 2 区	74
4 3 区	120
5 遺構確認調査区	121
6 その他の遺構と出土遺物	122
7 遺構観察表	124
第 5 章 自然科学的分析	129
第 1 節 放射性炭素年代	129
第 6 章 考察	131
第 1 節 遺物の特徴と編年的位置づけ	131
第 2 節 遺構の特徴と機能時期	140
第 3 節 災害痕跡の評価	151
第 7 章 総括	153
引用・参考文献	154

写真図版 遺跡全景 …… 1 遺構 …… 2 遺物 …… 35

解 説

報告書抄録

挿図目次

第 1 図 蔽王町の位置	1	第 45 図 SK39・45・46・49・50・66 土坑	54
第 2 図 遺跡の位置と周辺の地形	1	第 46 図 SK42・52-55・57・62 土坑	55
第 3 図 遺跡の位置と周辺の地形区分	2	第 47 図 SD64・67 溝跡、SD64 出土遺物	56
第 4 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第 48 図 SB101 挖立柱建物跡・出土遺物	58
第 5 図 現況測量図・調査区配置図	10	第 49 図 SB102 挖立柱建物跡	59
第 6 図 調査区設定図と主要な遺構の分布	11	第 50 図 SB103 挖立柱建物跡	60
第 7 図 遺構配置図	13	第 51 図 SB145・243-245 挖立柱建物跡	61
第 8 図 1 区遺構配置図	17	第 52 図 SA109・246・247 柱列跡	62
第 9 図 SI1 積穴住居跡	18	第 53 図 SE06・07 井戸跡、SI08 土坑、SE06・111・112 井戸跡	63
第 10 図 SI1 積穴住居跡出土遺物	19	第 54 図 SE111-113 井戸跡	64
第 11 図 SI2 積穴住居跡	20	第 55 図 SK119-121・126 土坑	65
第 12 図 SI3・SI14 積穴住居跡(1)	21	第 56 図 SD104・105 溝跡	66
第 13 図 SI3・SI14 積穴住居跡(2)	22	第 57 図 SD128・129 溝跡	67
第 14 図 SI3・SI14 積穴住居跡(3)	23	第 58 図 SX114 粘土探掘坑、SX117 積穴状遺構	68
第 15 図 SI3・SI14 積穴住居跡(4)	24	第 59 図 SX114 粘土探掘坑、出土遺物(1)	69
第 16 図 SI3 積穴住居跡出土遺物(1)	25	第 60 図 SX114 粘土探掘坑出土遺物(2)	70
第 17 図 SI3 積穴住居跡出土遺物(2)	26	第 61 図 SX114 粘土探掘坑出土遺物(3)	71
第 18 図 SI4 積穴住居跡(1)	27	第 62 図 SX117 積穴状遺構出土遺物	72
第 19 図 SI4 積穴住居跡(2)	28	第 63 図 SI125 積穴住居跡	73
第 20 図 SI4 積穴住居跡(3)	29	第 64 図 SI125 積穴住居跡出土遺物	74
第 21 図 SI4 積穴住居跡出土遺物	30	第 65 図 2 区遺構配置図	75
第 22 図 SI8 積穴住居跡	31	第 66 図 SI139 積穴住居跡・出土遺物	76
第 23 図 SB9 挖立柱建物跡	32	第 67 図 SI140 積穴住居跡(1)	77
第 24 図 SB10 挖立柱建物跡	33	第 68 図 SI140 積穴住居跡(2)	78
第 25 図 SB10・15・20 挖立柱建物跡出土遺物	34	第 69 国 SI140 積穴住居跡出土遺物(1)	79
第 26 国 SB15 挖立柱建物跡	35	第 70 国 SI140 積穴住居跡出土遺物(2)	80
第 27 国 SB17・18 挖立柱建物跡	36	第 71 国 SI142 積穴住居跡・出土遺物	81
第 28 国 SB20・21 挖立柱建物跡	37	第 72 国 SI143 積穴住居跡(1)	82
第 29 国 SB22・23 挖立柱建物跡	38	第 73 国 SI143 積穴住居跡(2)	83
第 30 国 SB24・25 挖立柱建物跡	39	第 74 国 SI143 積穴住居跡(3)	84
第 31 国 SB26・28・229 挖立柱建物跡	40	第 75 国 SI143 積穴住居跡出土遺物	85
第 32 国 SB30・230 挖立柱建物跡	41	第 76 国 SI156 積穴住居跡	86
第 33 国 SB231・234・236 挖立柱建物跡	42	第 77 国 SI156 積穴住居跡出土遺物	87
第 34 国 SB235・237・238 挖立柱建物跡、SA232 柱列跡	43	第 78 国 SI156 積穴住居跡(1)	88
第 35 国 SA27・233 柱列跡	44	第 79 国 SI157 積穴住居跡(2)	89
第 36 国 SA239-242 柱列跡	45	第 80 国 SI157 積穴住居跡出土遺物(1)	90
第 37 国 SE63 井戸跡、SX13 廃棄土坑	46	第 81 国 SI157 積穴住居跡出土遺物(2)	91
第 38 国 SK16・58・65 落とし穴状土坑	47	第 82 国 SI159 積穴住居跡	92
第 39 国 SE63 井戸跡出土遺物	48	第 83 国 SI160・178 積穴住居跡・出土遺物	93
第 40 国 SX13 廃棄土坑出土遺物(1)	49	第 84 国 SI194・196 積穴住居跡	94
第 41 国 SX13 廃棄土坑出土遺物(2)	50	第 85 国 SI194 積穴住居跡出土遺物(1)	95
第 42 国 SK5・6・40・51 土坑、SK6 土坑出土遺物	51	第 86 国 SI194 積穴住居跡出土遺物(2)	96
第 43 国 SK7・12・19・31・32・48 土坑、SK7 土坑出土遺物	52	第 87 国 SB127 挖立柱建物跡・出土遺物	97
第 44 国 SK33-38・41・44・47・68 土坑	53	第 88 国 SB146・147 挖立柱建物跡	98
		第 89 国 SB199・228 挖立柱建物跡	99
		第 90 国 SA118 柱列跡・SE183 井戸跡	100
		第 91 国 SK12・163・166 近世墓、SK164・165 土坑、SK166 近世墓出土遺物	101
		第 92 国 SK205-208・224 近世墓、SK208 近世墓出土遺物	102

第93図	SK216・217近世墓、SK216近世墓出土遺物	103
第94図	SK135・169・210・211・213・222・225落とし穴状土坑	104
第95図	SK211落とし穴状土坑出土遺物	105
第96図	SK130-134土坑、SK131・132土坑	106
第97図	SK137・151・152・154・167・168土坑、SK151土坑出土遺物	107
第98図	SK170土坑・出土遺物	108
第99図	SK171-174・176・177・179・180土坑	109
第100図	SK181・184・185・189-193・195・227土坑	110
第101図	SK197・198・209・212・215土坑	111
第102図	SK193・209・227土坑出土遺物	112
第103図	SK218-221・223・226土坑、SK226土坑出土遺物	114
第104図	SD144溝跡	117
第105図	SD144溝跡出土遺物	118
第106図	SD161・182・187溝跡、SD161溝跡出土遺物	119
第107図	SX153性格不明遺構	120
第108図	SE122井戸跡、SK123・124土坑	121
第109図	T1・T2区遺構配置図	121
第110図	SD150溝跡出土遺物	122
第111図	柱穴跡出土遺物	122
第112図	遺構外出土遺物	123
第113図	[参考]暦年較正年代グラフ	130
第114図	土師器分類図(1)	131
第115図	土師器分類図(2)	132
第116図	ロクロ土師器分類図(1)	133
第117図	ロクロ土師器分類図(2)	134
第118図	須恵器分類図	135
第119図	第2群土器における环筋の底径口径比分布図	139
第120図	IV期遺構配置図(1)	142
第121図	IV期遺構配置図(2)	143
第122図	豪族居宅の建物配置	146
第123図	IV期集落の機能推定	147
第124図	V期遺構配置図	149
第125図	村田断層と前戸内遺跡の位置	152
第126図	土坑状変形の分布とすべり方向	152

表目次

第1表	周辺の遺跡	4
第2表	基本層序	15
第3表	遺構觀察表 穴状住居跡・堅式遺構・掘立柱建物跡(1)	124
第4表	遺構觀察表 掘立柱建物跡(2)・柱列跡	125

第5表	遺構觀察表 井戸跡・近世墓・廻妻土坑・粘土排水坑・落とし穴状土坑・土坑(1)	126
第6表	遺構觀察表 土坑(2)・溝跡・性格不明遺構	127
第7表	試料一覧および ¹⁴ C年代	130
第8表	¹⁴ C年代と暦年較正年代	130
第9表	各遺構出土土器の組成	137
第10表	遺構の機能時期と土器群	141

写真目次

写真1	湯坂山B遺跡第3a・b号堅穴住居跡	5
写真2	円田地区出土長頸壺	6
写真3	中沢A遺跡SI4堅穴住居跡出土土器	6
写真4	雁田遺跡SI101堅穴住居跡	6
写真5	十郎田遺跡材木町区画南東隅	7
写真6	都遺跡出土土器・軒平瓦	7

写真7	丈六阿弥陀如来坐像	7
写真8	平沢弥陀の杉	7
写真9	兵衛跡 北縁土堤・空堀	8
写真10	我妻家住宅	8
写真11	調査前の遺跡現況	12
写真12	発掘調査成果見学会	12
写真13	土坑状変形の分布状況とすべり方向	151
写真14	土坑状変形の確認状況	151

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

宮城県南部の蔵王連峰東麓に位置する蔵王町は、東は村田町と大河原町、西は蔵王連峰をはさんで山形県、南は白石市、北は川崎町と境を接する（第1図）。町域は東西23km、南北13kmで面積は152.85km²を占め、海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が東南部の松川と白石川の合流点で20mを測る。町域の西部が主に蔵王連峰に連なる山林原野で、東部の松川流域と円田盆地に田園地帯が形成されている。西部は蔵王国定公園に含まれ、遠刈田温泉などが蔵王観光の基地となっているほか、東部の丘陵部を中心に果樹園が営まれ、県内有数の果樹生産地となっている。

前戸内遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字前戸内地内に所在する。蔵王町役場の北東約3.9kmに位置し、円田盆地西北部にある標高約100mの低平な舌状丘陵上に立地する遺跡である（第2・3図）。

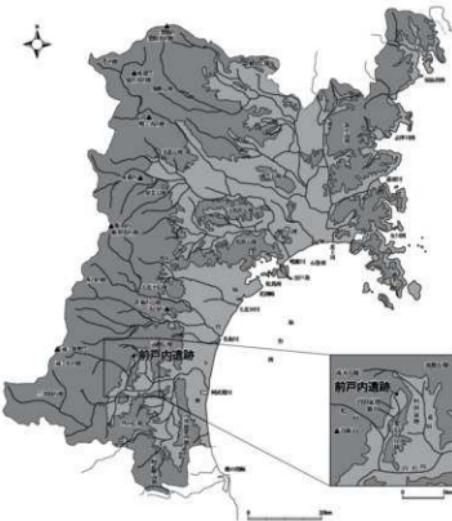
円田盆地は松川の支流である蔽川をはじめとする複数の中小河川によって形成された沖積地である。蔽川は盆地中央部から東縁に沿って緩やかに蛇行しながら南流し、盆地周囲の丘陵からは無数の小規模な沢が流入している。盆地は南をのぞく三方を丘陵で囲まれており、盆地底面の範囲は東西約1.2km、南北約3.5kmにおよぶ。蔽川流域は自然堤防が未発達で、盆地底部に湿地帯を形成しており、盆地の南側は松川との合流地点に向かって開けている。

円田盆地を三方から囲む丘陵のうち、北側から西側にかけては高木丘陵と呼ばれ、蔵王山系の東麓部にあたる。東側は高木丘陵から細長く派生した愛宕山丘陵と呼ばれる小丘陵が南へ延び、さらに東側の村田盆地との地形的な境界をなしている。標高は高木丘陵東端部で約130m、愛宕山丘陵頂部で約170m、盆地南端で約80mである。

愛宕山丘陵はやや急な傾斜をもつ丘陵地で、小規模な沢によって開析された比較高差の大きい舌状の小丘陵が連続する。盆地東縁に連なるこの舌状小丘陵上には南部で中沢A遺跡、立目場遺跡、台遺跡、塩沢北遺跡などが立地し、北部では盆地



第1図 蔵王町の位置

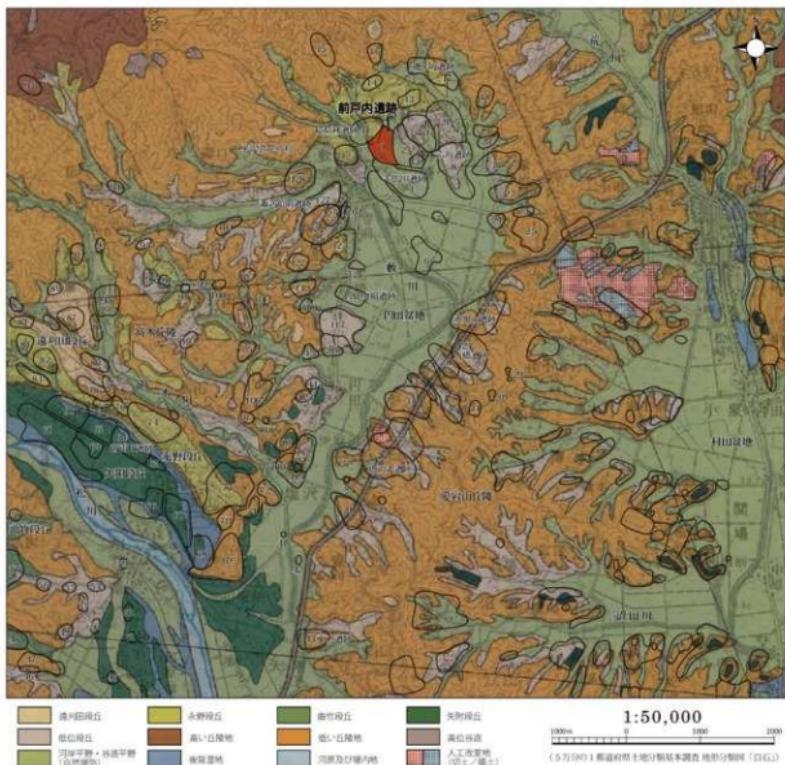


第2図 遺跡の位置と周辺の地形

底面との比高差が小さい丘陵末端部に車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡などが立地する。一方、高木丘陵は比較的なだらかな傾斜をもち、特に盆地北部では丘陵端部が緩やかに標高を減じつつ盆地中央部まで達している。盆地北西縁に連なるこの低平な丘陵上には本遺跡のほか六角遺跡、十郎田遺跡、窪田遺跡、都遺跡などが立地し、西縁の中南部では諏訪館前遺跡、宋膳堂遺跡などが立地する。

近代以降に行なわれた耕地整理の結果、遺跡の立地する地形の多くが消失し、円田盆地の大半は水田地帯となった。特に昭和37~38年の蔽川堤防改修工事とほ場整備以降、ほぼ現在の景観が形成された。現在の盆地底面の大半は水田として利用され、地形的な変化に乏しい景観を呈しているが、本来は微高地と小規模な沢状の低地とが複雑に入り組んだ景観であった。遺跡の多くは低平な丘陵や微高地上に立地し、明治40年頃までは主に畠地として利用されていた。

本遺跡は、盆地西側の高木丘陵から派生し、盆地北縁から南東方向に細長く延びる舌状丘陵の裾部に立地する。東西は丘陵を開析する沢地形に挟まれ、北西側の丘陵頂部には稻荷林遺跡、南東側の丘陵先端部には十郎田遺跡が隣接する。本遺跡と稻荷林遺跡との間には約17mの比高差があり、段丘崖の様相を呈している。十郎田遺跡は微高地状を呈し、本遺跡の立地する丘陵裾部からなだらかに連続する。また、小規模な沢を隔てて北東側に隣接する舌状丘陵上には西屋敷遺跡、西小屋館跡が立地している。

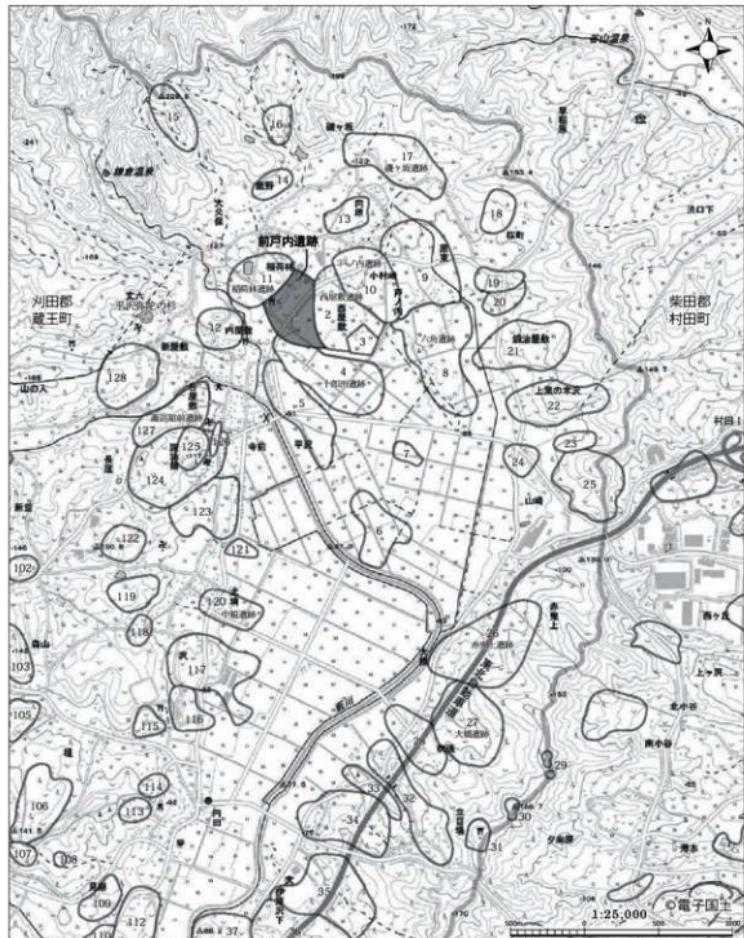


第3図 遺跡の位置と周辺の地形区分

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

藏王町における周知の遺跡は現在 190 か所を数える。その多くは町域の東部に分布し、藏王連峰から派生する丘陵部と青麻山東麓部、松川流域と円田盆地の平野部などに立地する（第3・4図、第1表）。旧石器時代から近世に至るまで多数の遺跡が形成されているが、大略的に見て縄文時代の遺跡は藏王連峰の東麓部から延びる高木丘陵上と青麻山東麓部の標高 150~250 m付近に、弥生時代中期以降の遺跡は円田盆地とその周辺の丘陵辺縁部の標高 80~100m付近に立地する傾向が見られる。

こうした様相の違いは、概ね当時の人々との生業形態の変化に伴うものと考えられる。縄文時代の食



料獲得の場は主に丘陵地に繁茂した森林であり、弥生時代中期以降の食料生産の場は低湿地に作られた水田であったことを示している。後述するが、町内で最も古い人類活動の痕跡は、青麻山東麓部にある後期旧石器時代の石器出土地である。また、稲作の開始を裏付けるものとしては、円田盆地周辺で確認されている糊殻の圧痕がある弥生土器片や、古墳時代の水田跡がある。円田盆地など低湿地の周辺に立地した縄文時代の集落は現在のところ確認されていないが、低平な丘陵と湿地の入り組んだ盆地北部の一帯は、縄文時代には狩猟の場として利用されていたことが分かっている。

以下、各時代・時期における蔵王町周辺の考古学・歴史学的様相を概観する。

第1表 周辺の遺跡（番号は第3・4図に対応）

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	山内遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文後・弥生・奈良・平安・中世	65	愛宕山遺跡	散布地	縄文後・後・古代
2	西野散跡	集落・散布地	古生・古墳・奈良・平安・中世	66	西野遺跡	集落・散布地	縄文後・後・弥生・古墳
3	西小原跡	城跡	中世	67	東山遺跡	散布地	縄文後・後・弥生・古墳・古代
4	十津川遺跡	集落・散布地	縄文・古墳・奈良・平安・中世	68	下木野B遺跡	散布地	奈良・平安
5	羽田遺跡	集落・散布地	縄文・古墳・奈良・古墳・奈良・平安・中世	69	大河原跡	城跡	中世
6	都跡	集落・散布地	縄文後・弥生・古墳・奈良・平安	70	下船山山廬跡	散布地	縄文早・奈生・古代
7	新城散跡	散布地	奈良・平安	71	蟹田遺跡	散布地	弥生
8	八角遺跡	集落	縄文・古代	72	天王古墳群	円墳・散布地	縄文早・中・弥生・古墳
9	里遺跡	散布地	縄文	73	下野遺跡	散布地	縄文早・弥生・平安
10	戸内遺跡	集落・散布地	奈良・平安・中世	74	六石遺跡	散布地	縄文早
11	福林山遺跡	散布地	縄文早・古墳	75	森木B遺跡	散布地	縄文
12	平字谷跡	城跡	中世	76	鶴山山遺跡	散布地	縄文早・後・弥生・古墳
13	后原遺跡	散布地	古代	77	下曲木A遺跡	散布地	縄文早・弥生・古墳
14	大久保遺跡	散布地	古代	78	下曲木B遺跡	散布地	縄文早・中・古代
15	白森遺跡	城跡	中世	79	枯木山B遺跡	散布地	縄文
16	鹿野遺跡	散布地	古代	80	十日遺跡	散布地	縄文早・奈生
17	穂ヶ沢遺跡	散布地	縄文・奈良・平安	81	下曲木E遺跡	散布地	縄文早・中
18	清上遺跡	散布地	古代	82	下曲木D遺跡	散布地	縄文早・中
19	二の輪遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	83	下曲木C遺跡	散布地	縄文早・中
20	赤坂成跡	散布地	奈良	84	八幡平遺跡	散布地	縄文早・中・古代
21	鶴野山遺跡	散布地	縄文早・中・古代	85	人山遺跡	散布地	縄文早・弥生・古墳
22	上栗の山遺跡	散布地	古代	86	下木野A遺跡	散布地	縄文早・後・古代
23	山崎遺跡	散布地	縄文早	87	高岡山B遺跡	集落	縄文早・中・弥生
24	中栗の山遺跡	散布地	縄文・奈良・古代	88	高岡山D遺跡	散布地	縄文早・中・古墳
25	北割山遺跡	散布地	縄文・奈良	89	柏原山遺跡	散布地	縄文早・中・古墳
26	青岸上遺跡	集落	奈生・平安・中世	90	門田B遺跡	散布地	縄文早・中
27	大槻遺跡	縄文早・中・弥生・古墳・平安		91	柏原山散跡	城跡	中世
28	尾木戸内遺跡	散布地	奈生・古代	92	門田C遺跡	散布地	縄文
29	少向南古墳群	古墳		93	西四反原跡	城跡	中世
30	古峯神社古墳	古墳		94	町山遺跡	散布地	縄文
31	愛宕山遺跡	奈生		95	二本楓A遺跡	散布地	縄文早
32	立日塙遺跡	散布地	縄文・奈生・古墳	96	人木道跡	散布地	縄文
33	中央B遺跡	散布地	奈生・平安・中世	97	山中遺跡	散布地	平安
34	中央A遺跡	散布地	縄文早・奈生・古墳・古代・中世	98	吉木道跡	散布地	平安
35	伊原沢下遺跡	集落	古墳	99	山A遺跡	散布地	古代
36	塙山B遺跡	集落	奈生・古墳・平安	100	山B遺跡	散布地	縄文
37	七遺跡	散布地・木塀	奈生・古墳・平安・中・近世	101	三木楓B遺跡	散布地	縄文・平安
38	西脇古墳	古墳		102	新石道跡	散布地	縄文早
39	中畠敷古墳	古墳		103	篠原散跡	城跡	中世
40	大山遺跡	集落	縄文早・奈生・古墳前	104	萩の山遺跡	散布地	縄文早・奈生
41	鶴附山A遺跡	古墳?		105	山D遺跡	散布地	縄文早・古代
42	豊向遺跡	散布地	奈良	106	佐野散跡	城跡	中世
43	山道跡	集落	縄文早・平安	107	月山遺跡	散布地	縄文
44	御川遺跡	散布地	縄文早・中	108	八幡山古墳群	古墳・方墳	古墳
45	小原遺跡	散布地	縄文早	109	土手山遺跡	散布地	弥生・古墳
46	矢山遺跡	散布地	縄文早	110	竹内内原跡	散布地	縄文早・中・弥生・古墳・平安・中世
47	竹内山断跡	城跡	中世	111	米原堂古墳	古墳	
48	法烏山遺跡	散布地	縄文早・古墳	112	宋家寺遺跡	散布地	弥生・古墳
49	利成寺古墳	散布地	縄文早・古墳	113	今代遺跡	散布地	平安
50	妙見遺跡	散布地	縄文早	114	鶴の内遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・古代
51	下原遺跡	散布地	縄文早	115	清水遺跡	散布地	奈良・平安
52	上原遺跡	散布地	縄文後	116	白石遺跡	集落・散布地	奈生・古墳
53	清水遺跡	散布地	縄文・奈生	117	本荘前遺跡	集落・散布地	縄文早・奈生・古墳・中世
54	日向原遺跡	散布地	縄文早・奈生・中	118	民治跡	散布地	古代
55	八野遺跡	散布地	縄文早	119	北堀遺跡	散布地	縄文早・奈生・古墳
56	西ノ沢遺跡	散布地	奈生・古代	120	中山遺跡	集落・散布地	縄文早・中・弥生・平安・中・近世
57	鶴の内遺跡	散布地	縄文早・中・奈生・古代	121	引の山遺跡	散布地	奈生・古墳・中世
58	鬼越遺跡	散布地	縄文早	122	大内内遺跡	散布地	奈生
59	白九郎古墳	古墳		123	小原遺跡・糸屋	散布地・糸屋	縄文・弥生・古墳・中世
60	西門遺跡	散布地	縄文早	124	圓山遺跡	散布地	奈生・古墳
61	木木道跡	散布地	縄文早	125	鶴原散跡	城跡	中世
62	寺門前遺跡	散布地	縄文早・後	126	鶴原城穴都跡	城跡・集落	縄文早・奈生・古墳・平安
63	谷地遺跡	散布地	縄文早・中	127	鶴原前散跡	散布地	縄文早・奈生・古墳・平安
64	西浦山遺跡	集落・散布地	縄文早・中・奈生・平安・近世	128	上八遺跡	散布地	古代

(1) 旧石器時代

宮地区の持長地遺跡、鉄砲町遺跡、明神裏遺跡、小村崎地区の前戸内遺跡が知られている。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層下部よりナイフ形石器が単独出土し(宮城県教育委員会1980b)、鉄砲町遺跡では彫刻刀形石器が採集されている。これらは後期旧石器時代後半期のものと考えられる。明神裏遺跡では細石刃と槍先形尖頭器、前戸内遺跡では槍先形尖頭器が採集されており、後期旧石器時代終末期に位置づけられる可能性がある。しかし、いずれも単独出土ないしは採集資料のため、明確な時期や遺跡の性格については不明な点が多い。なお、宮地区的二屋敷遺跡では石刃状剥片を素材としたナイフ形石器に類似する石器が出土しているが、本地域では縄文時代中期から後期初頭にかけて山形県寒河江川流域の集落から珪質頁岩製の石刃が交易品として搬入されたことが分かっており、層位的裏付けを伴わない石刃製石器の旧石器としての時期判定には注意を要する。

(2) 縄文時代

草創期については明確な遺跡が発見されていない。周辺地域でも白石市福岡深谷地区の高野遺跡で槍先形尖頭器が、同大鷹沢地区の小菅遺跡、戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されている程度で、具体的な様相は明らかでない。早期の遺跡には宮地区的明神裏遺跡、沢入D遺跡、円田地区的手代木遺跡、三本櫻A遺跡、遠刈田地区的北原尾遺跡、前期の遺跡には宮地区的長峰遺跡、八幡平遺跡、円田地区的入山遺跡、愛宕山遺跡、中期の遺跡には宮地区的上原田遺跡、円田地区的高木遺跡、鞘堂山遺跡、湯坂山B遺跡、後期の遺跡には宮地区的二屋敷遺跡、山田沢遺跡、一本木遺跡、円田地区的西浦B遺跡、晚期の遺跡には宮地区的下別当遺跡、順行寺遺跡、沢北遺跡、曲竹地区的鍛冶沢遺跡などがある。

鞘堂山遺跡では中期中葉の竪穴住居跡5軒、貯蔵穴23基などが発見され、竪穴住居跡は貯蔵穴・柱穴群を挟むように分布していた。湯坂山B遺跡では中期後葉の竪穴住居跡13軒、貯蔵穴8基などが発見され、多量の土器・石器と土笛が出土している(写真1)。西浦B遺跡では後期初頭～前葉の貯蔵穴・掘立柱建物跡群が発見されている(藏王町教育委員会2011a)。二屋敷遺跡では中期末の竪穴住居跡5軒、後期初頭～前葉の炉跡2基、土器埋設遺構4基、配石遺構などが発見されている(宮城県教育委員会1984)。順行寺遺跡では晚期の屈折土偶が採集されている。鍛冶沢遺跡では晚期の土器埋設遺構や弥生時代初頭の再葬墓と、弧状に配置された掘立柱建物跡群が発見されている(宮城県教育委員会2010)。

遺跡の分布状況をみると、早期の遺跡は小規模なものが多く、高木丘陵から青麻山東麓部にかけての広範囲に点在し、遠刈田地区から白石市福岡深谷地区にかけての不忘山東麓部にまとまった分布域を形成する。前期の遺跡数はやや少なくなるが、高木丘陵上と青麻山東麓部に点在する。中期から後期にかけては高木丘陵上に大きな集落が形成され、集中的な遺跡分布域となっている。一方、青麻山東麓部では後期になると多くの集落が形成され、晚期まで継続する大規模な集落がみられる。

このように、時期による分布域の移動と、微地形選択の志向性に変化は見られるものの、縄文時代のおよそ1万数千年間を通して本地域における生活の拠点は戦国連峰東麓部から延びる高木丘陵上と、青麻山東麓部にあったと言って良い。なお、円田盆地北部の小村崎地区にある六角遺跡、原遺跡、平沢地区の中組遺跡などでは縄文時代のものと考えられる落とし穴状土坑が確認され、低湿地に面した低平な丘陵裾部が狩猟の場として利用されていたことが分かっている。



写真1 湯坂山B遺跡第3a・b号竪穴住居跡(大木9式期)

(3) 弥生時代

縄文時代晚期から継続する宮地区的沢北遺跡、曲竹地区的殿治沢遺跡、これに後続する桜形圓式期の遺跡には宮地区的長峰遺跡、円田地区の清水遺跡、西浦遺跡、塩沢地区の宋膳堂遺跡、東根地区的立目場遺跡、円田式期の遺跡には東根地区の大橋遺跡、塩沢地区的台遺跡、上野遺跡、塩沢北遺跡、小村崎地区的都遺跡、円田地区的西浦遺跡、十三塚式期の遺跡には東根地区的愛宕山遺跡、立目場遺跡、天王山式期の遺跡には東根地区的愛宕山遺跡、塩沢地区的天王遺跡、平沢地区的赤鬼上遺跡などがある。

桜形圓式期以前の遺跡は、殿治沢遺跡などのように縄文時代晚期の立地を踏襲しながら、一部円田盆地周縁部の丘陵に立地している。円田式期になると円田盆地周縁部に急速に展開し、遺跡数も急増する。遺構が調査された例は皆無であるが、稻作が受容されたと考えるのに十分な変化と言える。円田地区では伊東信雄氏（1955）による「円田式」命名の標識資料となった長頸壺が出土している（写真2）。十三塚式期から天王山式期にかけてはこうした流れを引き継ぐ一方、愛宕山遺跡のように標高の高い丘陵上に立地する遺跡も見られる。なお、都遺跡（円田式、蔵王町教育委員会2005）、大橋遺跡（天王山式、宮城県教育委員会1980b）、中沢A遺跡（蔵王町教育委員会2007）で出土した土器片の表面には粗粒の圧痕が観察されている。



写真2 円田地区出土長頸壺

(4) 古墳時代

前期（塩釜式期）の遺跡には東根地区の大橋遺跡、伊原沢下遺跡、円田地区的堀の内遺跡、中期（南小泉式期）の遺跡には小村崎地区的都遺跡、窪田遺跡、東根地区の中沢A遺跡、台遺跡があるが、後期（住社式期）の遺跡は明瞭には確認されていない。高塚古墳には宮地区的明神裏古墳、東根地区の夕向原古墳群、古峯神社古墳、塩沢地区的宋膳堂古墳、天王古墳群、西脇古墳、中屋敷古墳、八幡山古墳がある。

古墳時代の遺跡は弥生時代の立地を踏襲し、円田盆地周縁部に集中する。前期の大橋遺跡、伊原沢下遺跡は宮城県内における塩釜式最古段階（宮城県教育委員会1980b）、中沢A遺跡は南小泉式最古段階の遺跡として知られている（写真3、蔵王町教育委員会2007）。六角遺跡では塩釜式・南小泉式期、窪田遺跡では塩釜式・南小泉式期、窪田遺跡（写真4）などでは南小泉式期の竪穴住居跡が調査されている。前期の堀の内遺跡では、後北C2-D式に位置づけられる統繩文土器が出土し（蔵王町教育委員会1997）、北方地域との関係性が窺われる。

また、盆地を取り囲む丘陵上に多くの高塚古墳が築かれている。古峯神社古墳は主軸長38m、夕向原1号墳は主軸長57mの前方後円墳（藤沢2000）、宋膳堂古墳は直径約30mの円墳で、埴輪が採集されている。明神裏古墳は昭和31年に発掘調査され、凝灰岩板石を用いた箱式石棺が確認されている。



写真3 中沢A遺跡 S14 竪穴住居跡出土土器 (南小泉式)



写真4 窪田遺跡 S1101 竪穴住居跡 (南小泉式期)

(5) 古代

飛鳥・奈良・平安時代の遺跡として 100 か所以上が知られ、このうち発掘調査が行なわれた遺跡としては宮地区的二屋敷遺跡、観音堂山遺跡、矢附地区的東山遺跡、塩沢地区的塩沢北遺跡、円田地区的西浦 B 遺跡、堀の内遺跡、平沢地区的窪田遺跡、都遺跡、赤鬼上遺跡、小村崎地区的戸ノ内遺跡、六角遺跡、十郎田遺跡などがある。また、現在その所在を確認できないが平沢地区的諫訪館横穴墓群がある。

当該期の遺跡は円田盆地周辺に多く分布する一方、町東部の丘陵麓部の広い範囲に分布するようになり、生活領域が拡大したことが窺われる。円田盆地では 7 世紀後半以降、盆地底部に面した低平な舌状丘陵上に集中的に集落を形成する。十郎田遺跡では 7 世紀後半の材木塀による区画施設を伴う集落跡（写真 5、藏王町教育委員会 2011d・e）、六角遺跡では 8 世紀前半頃の大溝による区画施設を伴う集落跡を確認している（藏王町教育委員会 2008）。都遺跡では 8 世紀前半の多賀城創建期（奈良時代初頭）に位置づけられる軒平瓦が採集されているのをはじめ、大型の掘立柱建物跡と材木塀による区画施設が確認されており、官衙関連施設が営まれていた可能性がある（写真 6、藏王町教育委員会 2005）。これらの集落では、当時の在地土師器とは異なる特徴を持つ関東系土師器を保有しており、六角遺跡では関東型カマドをもつ竪穴住居跡も確認されている。関東系土師器は窪田遺跡、堀の内遺跡などでも出土している（藏王町教育委員会 1997・2009a・2011b）。

東山遺跡では、平安時代の土器溜遺構が確認され、灰釉陶器、転用硯のほか、墨書き器が多量に出土している（宮城県教育委員会 1981）。また、東山遺跡、西浦 B 遺跡（藏王町教育委員会 2011a）、観音堂山遺跡（宮城県教育委員会 2011）、赤鬼上遺跡（宮城県教育委員会 1980a）では、燃焼部から煙道までの全体を石組みで構築するカマドを持つ竪穴住居跡が確認され、平安時代の円田盆地周辺に特有のカマド構造とされている（古田 2011）。

このほか、平沢地区に現存する丈六阿弥陀如来坐像（写真 7、県指定文化財）は平安時代末期の作風とされ、阿弥陀如来を信仰し東北各地に阿弥陀堂を造立したとされる奥州藤原氏との関係性が窺われる。また、丈六阿弥陀堂があったとされる平沢字丈六地区には、阿弥陀堂の参道杉並木として植えられた杉のうち一本が現生し、平沢弥陀の杉（写真 8、県指定天然記念物）と呼ばれている。



写真 5 十郎田遺跡材木塀区画南東隅 (7世紀中頃～後半)



写真 6 都遺跡出土土器 (7世紀中頃～後半)・軒平瓦 (8世紀前半)



写真 7 丈六阿弥陀如来坐像 (12世紀・保昌寺)



写真 8 平沢弥陀の杉

(6) 中世

城館跡に宮地区的宮城館跡、山家館跡、館の山城跡、曲竹地区的曲竹小屋館跡、円田地区的花櫛館跡、棚村館跡、小村崎地区的西小屋館跡、兵衛館跡、平沢地区的諏訪館跡、平沢館跡、矢附地区的矢附館跡などがあり、町東部の丘陵上に多くの城館が築かれている。

兵衛館跡は円田盆地最奥部に立地し、丘陵頂部の平場を画する土壘・空堀が良好に残存する（写真9）。西小屋館跡は土壘と水堀を伴う方形館で、隣接する西屋敷遺跡では区画溝を伴う鎌倉～室町



写真9 兵衛館跡 北縁土壘・空堀

時代の屋敷跡を確認している（蕨王町教育委員会2012）。山家館跡に隣接する持長地遺跡でも、鎌倉～南北朝時代の屋敷跡が確認されている（宮城県教育委員会1980b）。館の山城跡に隣接する青竹遺跡では掘立柱建物跡群が確認され、館と一緒に機能した施設の可能性が指摘されている（蕨王町教育委員会2009b）。小村崎地区的十郎田遺跡では鎌倉時代の屋敷跡を確認している。屋敷内の井戸跡から挽物椀・小皿の荒型が多量に出土し、挽物製作を行なっていたことが窺われる（蕨王町教育委員会2011d・e）。

このほか、宮地区的頼行寺遺跡は中世～近世の寺院跡と推定されている。安永風土記に「役小角叔父山之坊頼行寺跡」とあり、「宮本坊蓮藏寺書出」によれば奥州藤原氏の保護を受けて最盛期には四十八坊を有したという。また、前述の白九頭龍古墳には、文治の役（1189）で源頼朝軍に討ち取られた藤原国衡の遺骸を埋葬して弔ったとの伝説が残り、墳頂部には白九頭龍大明神の祠が建てられている。

(7) 近世以降

小村崎地区的車地蔵遺跡では掘立柱建物跡、区画溝跡、水場遺構などが確認され、近世の有力者層の屋敷地の一部と考えられる（蕨王町教育委員会2006）。伊達家臣の高野家が拝領した平沢地区の平沢要害跡は後世の改変で遺構が現存しないが、江戸期の絵図に本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭のような構造が窺える。また、遠刈田地区的岩崎山金窟跡では戦国末期には採掘が開始されていたとみられ、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。

現存する近世の建造物としては、平沢地区的日吉神社本殿（江戸中期）、宮地区的刈田嶺神社本殿（江戸中期、県指定文化財）、曲竹地区的我妻家住宅（写真10、江戸中期、国指定重要文化財）、小村崎地区の奥平家住宅（江戸後期、町指定文化財）などがある。日吉神社は高野家の領地替えの時に伊達郡より遷座され、刈田嶺神社は刈田郡總鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。

また、近世には奥州街道が宮地区を通り、さらにお宮宿から分かれて永野宿、猿鼻宿を経由し、四方峠、笹谷峠を越えて山形へ至る羽前街道が通っていた。平沢地区には羽前街道の古道の一部が保存され（旧羽前街道保存地区）、藩政時代の街道の景観を今に伝えている。

近代の遺構としては遠刈田地区的遠刈田製鉄所高炉跡などがある。遠刈田製鉄所高炉は明治時代後期に建設されたもので、近代製鉄遺構としては国内で唯一、基礎部分が現存している。



写真10 我妻家住宅 (宝暦3(1753)年建築)

第2章 調査に至る経緯

藏王町北東部の円田盆地に広がる水田地帯を対象とした経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）では、昭和63年度に盆地南部（円田1期地区）の事業計画が策定され、同年に埋蔵文化財保存協議が実施された。この結果を受け、同年から平成2年度にかけて事業実施区域内に存在する埋蔵文化財包蔵地の遺構確認調査および事前調査が宮城県教育庁文化財保護課により実施された（宮城県教育委員会 1989・1990・1991）。一方、盆地中・北部（円田2期地区）の事業計画は平成8年度に策定され、平成12年度には事業年次計画が提示された。約1,325,000m²に及ぶ広大な事業実施予定区域には多数の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、平成8年度より文化財保護側の宮城県教育委員会、藏王町教育委員会と原因者側の宮城県大河原地方振興事務所、藏王町土地改良区の四者による埋蔵文化財保存協議が開始された。

平成11年度の協議において事業実施区域内における埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布調査が必要であるとの判断がなされたことを受けて、平成12年度に藏王町教育委員会が分布調査を実施した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく広がることが判明した。この結果を基に再協議を実施し、埋蔵文化財包蔵地が破壊される面積をできるだけ少なくするよう事業計画を大幅に見直すことが決定した。平成13年度には大河原地方振興事務所により、水田および畑地となる部分については、地下の遺構を保護するよう適宜盛土を行なうとともに、幹線農道以外の作業用道路については未舗装の砂利道として事前調査対象となる破壊範囲をできるだけ減少させる見直し案が提示され、合意に達した。

平成13・14年度には宮城県教育庁文化財保護課と藏王町教育委員会によって事業実施区域内の遺構確認調査が実施された（宮城県教育委員会 2002・2003）。平成12年度の分布調査で遺物の分布が確認された範囲を中心とした幅約2mのトレンチ333か所、計11,669m²の調査により、事業実施区域内の遺構の分布状況が明らかとなった。この結果を踏まえた協議により、遺構の存在する部分については基本的に盛土による現状保存を行ない、計画田面が遺構面よりも下がる切土部分と、道路・水路の建設に伴って遺構面が掘削される部分について事前調査を実施すること、道路のうち未舗装の砂利道とする計画で遺構面に掘削が及ぼない範囲については確認調査を実施した上で盛土による現状保存することが決定した。平成14年度には事業実施区域のうち県道の南側部分を平成15・16年度に、北側部分を平成17-21年度に順次施工する事業計画が提示され、これに先立って平成15年度に南側部分を、平成17-20年度に北側部分を対象とする計14遺跡の事前調査計画が策定された。なお、その後の事業計画見直しなどにより、北側部分の調査年度については平成23年度まで延長することで合意している。

藏王町教育委員会は宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、都遺跡、窪田遺跡（南部）、新城館跡（H15・16年度、藏王町教育委員会 2005）、車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡（H17年度、藏王町教育委員会 2006）、六角遺跡（H18・19年度、藏王町教育委員会 2008）、戸ノ内遺跡（H19・20年度、藏王町教育委員会 2009a）、窪田遺跡（北部、H20年度、藏王町教育委員会 2011b）、十郎田遺跡（H19・20年度、藏王町教育委員会 2011d・e）、西屋敷遺跡（H21年度、藏王町教育委員会 2012）の事前調査を実施し、順次発掘調査報告書を刊行してきた。

本書で報告するのは、平成20・21年度に実施した前戸内遺跡の事前調査の結果である。

なお、このほかに磯ヶ坂遺跡（H21年度）、六角・原遺跡（集落部、H23年度）の事前調査を実施している。これらについては、平成25年度に発掘調査報告書を刊行して本事業計画にかかる遺跡の事前調査を終了する計画となっている。

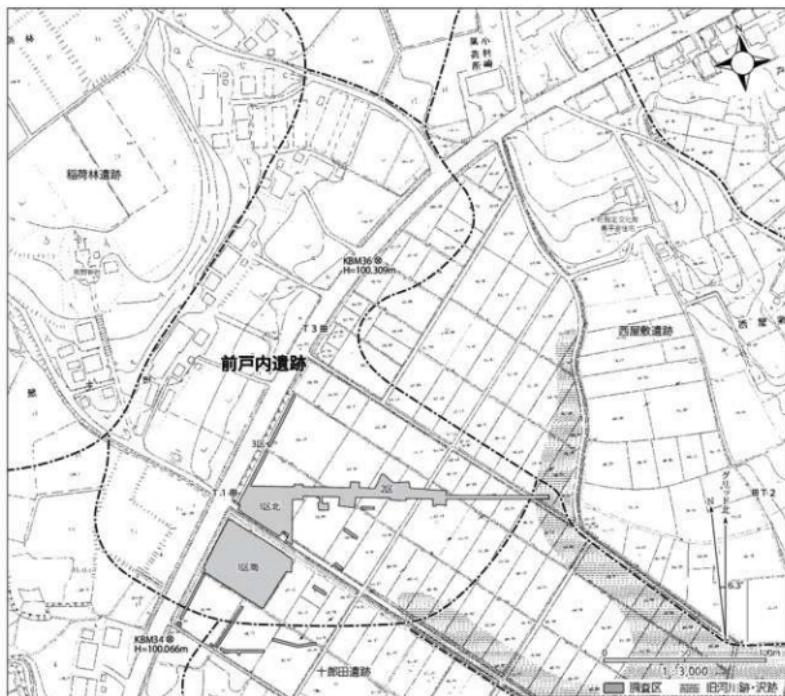
第3章 調査の方法と経過

本遺跡は、円田盆地西側の高木丘陵から派生し、盆地北縁から南東方向に細長く延びる低平な舌状丘陵上に立地する。遺跡の現況は水田で、地表面に遺物の散布が見られた。

平成8年度に開始された県営ほ場整備事業計画に伴う埋蔵文化財保存協議（事業主側：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区、文化財保護側：宮城県教育委員会・蔵王町教育委員会）において本遺跡範囲の半分程度を占める南東部が事業計画範囲に含まれることが判明したため、遺構分布状況と遺構面深度の把握を目的とした遺構確認調査を平成14年度に実施した。

この結果、南東方向に緩く傾斜する舌状丘陵裾部の平坦面（東西約160m、南北約120m、標高約96-99m）で飛鳥-奈良・平安時代と考えられる竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡3棟以上、溝跡8条、土坑6基などが確認され、古代の集落跡が存在することが明らかとなった。

平成17年度には最終的な事業設計案が提示され、田面となる部分は原則として盛土によって遺構面を保護し、止むを得ず切土が発生する道路・水路等の予定範囲について事前調査を実施して文化財保護法上必要な措置としての記録保存を図るという基本方針で合意に達した。

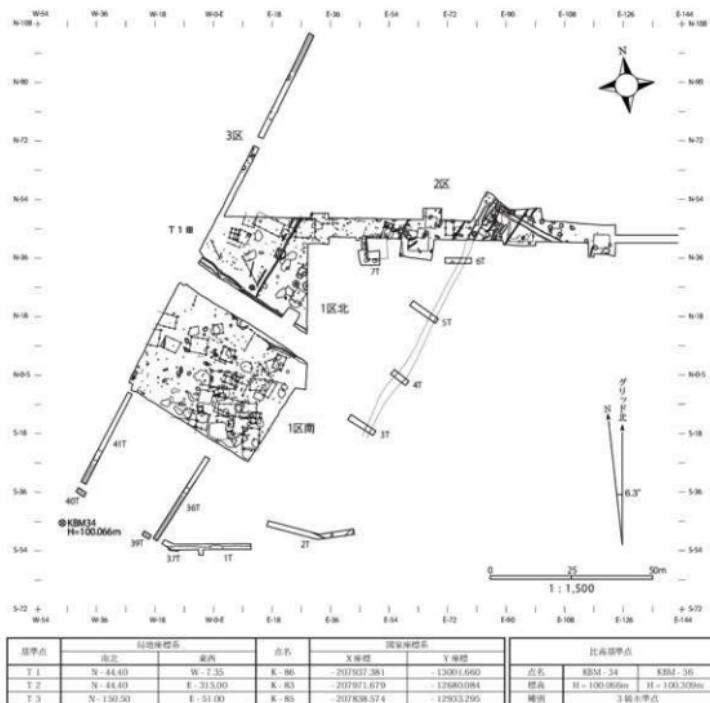


第5図 現況測量図・調査区配置図

本遺跡の事前調査については、平成20年度に業務委託契約（委託者：宮城県大河原地方振興事務所、受託者：蔵王町）を締結し、着手した。調査は当初単年度で完了する計画であったが、事前の遺構確認調査で遺構群の存在が想定されていなかった区域で新たに多数の遺構が確認され、年度内の完了が困難となつた。このため、翌平成21年度に改めて本遺跡の一部と西屋敷遺跡の事前調査にかかる業務委託契約を締結し、調査を実施した。

発掘調査は、水路および土砂溜工（沈砂池）の整備によって遺構面が削平される範囲を対象としたものである。遺跡範囲内に計画された沈砂池部分に1区（2828.6m²）、水路部分に2区（527.0m²）、小水路部分に3区（201.6m²）を設定し、順次調査を実施した（第5図）。調査面積は、合計約3,557.2m²である。調査期間は平成20年11月10日～12月19日（約1.5か月間、1・3区）、平成21年6月1日～9月30日（約4か月間、2区）の計5.5か月間を要した。

発掘調査では重機による表土除去の後、手作業による遺構確認と遺構精査を行なった。確認した遺構は竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡35棟、柱列跡11条、井戸跡8基、近世墓10基、落とし穴状土坑10基、土坑85基、溝跡10条、粘土探査坑2基、廃棄土坑1基、竪穴式遺構1基、性格不明遺構1基、柱穴多数である（第6図）。本発掘調査の測量基準点は作業道計画路線上に打設された工事用基準杭を機械設置点および方位視準点として使用し、測量基準線に平行・直交する3mグリッドを設定した（第6図）。図面についてはトータルステーションを用いて設定した3mグリッドを利用してすべて手実測



第6図 調査区設定図と主要な遺構の分布

で作成し、遺構は必要に応じて1/20縮尺の平面図・断面図を作成した。また、デジタル一眼レフカメラおよび35mmモノクロームフィルムを用いて、必要に応じて遺構の検出状況と土層断面、完掘状況、遺物の出土状況および調査区全景などの記録写真を撮影した。デジタルデータについてはDVD-ROMに記録して保管している。出土遺物は調査区および遺構、出土層位別に取り上げた。

調査期間中の平成21年6月13日には住民向けの発掘調査成果見学会を開催し、町民および県内研究者など約50名の参加があった。見学会では本遺跡（2区）と並行して発掘調査を進めていた西屋敷遺跡（5区）の発掘調査現場と出土遺物を公開して調査成果の概要を説明した。

整理作業は平成20・21年度にそれぞれ当該年度調査成果の基礎整理のための業務委託契約を締結し、平成20年12月22日～平成21年3月25日（約3.5か月間）、平成21年12月1日～平成22年3月25日（約4か月間）の計約7.5か月間の工程で実施した。本遺跡の調査成果については出土遺物の洗浄と注記、接合と修復の作業を実施したほか、図面と写真などの記録類の基礎的な整理作業を実施した。また、平成20年度にはSX114粘土探査坑出土炭化物の一部について、（株）加速器分析研究所に委託して放射性炭素年代測定を実施した。

なお、今回の調査区のうち1区南半部の周辺については、調査時点では十郎田遺跡の範囲に含まれていたが、本遺跡と一緒になす遺構群が分布していることが判明した。このため、基礎整理作業の完了を受けて、平成22年6月3日付けで十郎田遺跡北西部の一部を前戸内遺跡の範囲に編入するよう遺跡範囲の変更を行なっており、本書では変更後の遺跡範囲に基づいて記載している。

平成23・24年度にはそれぞれ平成20・21年度調査成果の本整理と報告書作成のための業務委託契約を締結し、平成23年12月1日～平成24年3月23日（約4か月間）、平成24年9月1日～平成25年3月25日（約7か月間）の計約11か月間の工程で実施した。本遺跡の調査成果については出土遺物の実測と写真撮影、実測図・遺構図トレース、および本書の執筆・編集と印刷・製本を実施した。

遺構図については、手実測で作成した図面をイメージスキャナとピットマップ画像編集ソフトウェアを用いてデジタル画像化し、調査員が作成した遺構調書を参照しながらパソコン内でベクトル画像編集ソフトウェアを用いてデジタルトレースを行なった。遺物については、洗浄の後に注記を行ない、可能な限り接合と修復を行なった上で遺物調書を作成し、遺物の性格と残存状況などに応じて実測図あるいは拓本を作成した。遺物の実測図・トレース図についてはすべて手作業により作成した。実測図等の作成が終了した遺物については、デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行なった。

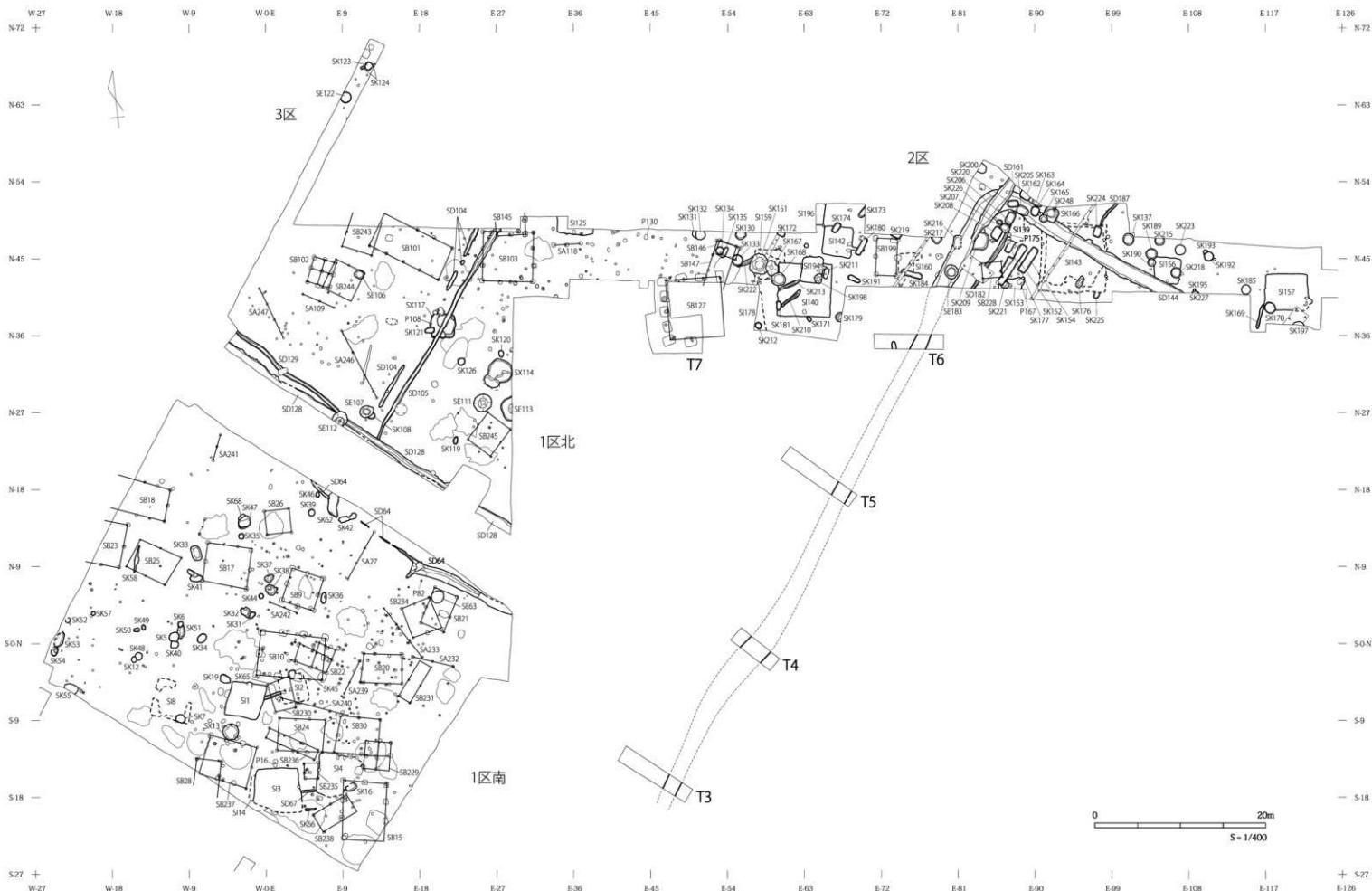
以上の経過を経て作成した遺構・遺物調書をもとに執筆した本文と、遺構・遺物の写真・図面等のレイアウトおよび編集作業をDTPソフトウェアを用いて実施し、本書の印刷・製本を完了した。



写真11 調査前の遺跡現況（東から）



写真12 発掘調査成果見学会



第7図 遺構配置図

第4章 調査の結果

第1節 基本層序

調査区により立地条件と土層の堆積状況に違いが見られるが、基本層序はⅠ～Ⅷ層に大別される。Ⅰ層は表土ないしは現耕作土で、層厚は15～25cm程度である。Ⅱ層は旧表土ないしは旧耕作土で、層厚は10～30cm程度である。近世～近代の陶器片などを含む。Ⅲ層は黒ボクと称される黒色火山灰土で、層厚は20～40cm程度である。丘陵斜面部に堆積し、斜面下部では複数の再堆積層を形成する。Ⅳ層はⅢ層下部とⅤ層上部に形成された漸移層で、層厚は20cm程度である。Ⅵ層は黄褐色ローム層で、層厚は30～40cm程度、Ⅶ層は白色粘土層で、層厚は30～50cm程度である。Ⅷ層は狼岩と称される青灰色凝灰質シルトで、層厚は20～40cm程度である。川崎スコリア層（板垣ほか1981）に相当するとみられる。Ⅸ層は砂礫を含む白色粘土層で、層厚は20cm以上である。

調査区内ですべての層序を確認した地点はなく、耕作および削平などによりⅠ層またはⅡ層の直下でⅢ層より下位の層を確認した地点が多かった。遺構はⅢ層上面あるいはⅣ～Ⅶ層の削平面で確認した。以上の状況を考慮すれば、確認した遺構の多くが本来はⅢ層上面から掘り込まれたものと考えられる。

第2表 基本層序

層名	土性	性格	層厚	備考
Ⅰ層	黒褐色シルト	表土・現耕作土	15～25cm	
Ⅱ層	黒色シルト	旧表土・旧耕作土	10～30cm	近世～近代の陶器片を含む
Ⅲ層	黒色シルト	黒色火山灰	20～40cm	古代～中世の遺構掘り込み面
Ⅳ層	暗褐色シルト	漸移層	20cm	
Ⅴ層	黄褐色粘質シルト	黄褐色ローム	30～40cm	
Ⅵ層	白色粘土	水成堆積物	30～50cm	
Ⅶ層	青灰色凝灰質シルト	スコリア堆積物	20～40cm	川崎スコリア（Za-Kw・26～31万年前）
Ⅸ層	白色粘土	水成堆積物	20cm～	砂礫を含む

第2節 発見された遺構と遺物

確認した遺構は、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡35棟、柱列跡11条、井戸跡8基、近世墓10基、落とし穴状土坑10基、土坑85基、溝跡10条、竪穴状遺構1基、粘土探掘坑2基、廐棄土坑1基、性格不明遺構1基、柱穴多数である。遺構はすべての調査区で確認した。1・2区では古代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡群、中世の掘立柱建物跡群、2区では中世の区画溝跡、近世墓群を確認した。

遺物は主に竪穴住居跡、井戸跡、土坑、溝跡などの遺構から出土し、土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、近世陶磁器、弥生土器、石器、石製品、銅鏡、金属製品、鉄滓、木製品などがある。主体を占めるのは土師器、ロクロ土師器、須恵器で、他は少量である。土師器は8世紀中頃～後半（奈良時代中頃）、ロクロ土師器は主に9世紀前葉～中葉（平安時代前葉）のものがある。出土遺物の修復後総量は遺物収納コンテナ(44×60×15cm)で25箱分である。

出土した遺物の年代と出土状況、放射性炭素年代測定結果などから、確認した遺構は8世紀中頃～後半（奈良時代中頃）、9世紀前葉～中葉（平安時代前葉）、14世紀（中世前半）に位置づけられるものがある。年代が明らかな遺構の中で主体を占めるのは、奈良時代中頃の竪穴住居跡・粘土探掘坑、平安時代前葉の竪穴住居跡・掘立柱建物跡群、中世前半の区画溝跡と掘立柱建物跡群である。

以下、発見された遺構と遺物について調査区ごとに詳述する。なお、遺構は全体の様相が把握でき特徴的なもの、遺物が出土しているものについて記述し、章末にすべての遺構の観察表を作成して掲載した。

1.1 区南

遺跡範囲の南部に位置し、長さ約50m、幅約36mの長方形の調査区である。調査区内は東へ向かって僅かに傾斜する平坦面である。遺構確認面は現地表面から深さ15~40cmのIV~V層上面である。遺構は竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡22棟、柱列跡7状、井戸跡1基、落とし穴状土坑3基、土坑33基、溝跡2条、廐棄土坑1基を確認した（第8図、写真図版2-5）。

（1）竪穴住居跡

【SI1 竪穴住居跡】（第9・10図、写真図版6・35）

【位置】1区南／平坦面

【重複】SK65→SI1

【規模・形状】長辺4.00m、短辺3.80m／方形

【方向】カマド中軸線：N-18°-E

【壁面】地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最大14cmである。

【床面・堆積土】住居掘方埋土を床とし、ほぼ平坦である。床面を覆う堆積土は地山ブロック・炭化物粒を含む黒褐色粘質シルトで、住居廐棄後の自然堆積土と考えられる。

【主柱穴】住居平面形の対角線上で2か所（P4・5）、住居南辺に接して2か所（P1・2）を確認した。柱穴掘方の平面形はP5で隅丸方形を基調とし、長辺40cm、短辺35cmである。深さは15~43cmで、1か所で平面形が直径14cmの円形を呈する柱痕跡、3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

【周溝・壁材】なし

【カマド】住居北辺中央に付設する。幅80cm、奥行85cmの燃焼部が残存し、焚口幅は60cm程度と推定される。燃焼部底面は幅46cm、奥行80cmで、床面より5cmほど皿状に窪む。焚口付近の幅18cm、奥行25cmの範囲に赤色硬化面が形成されている。側壁は地山の白色粘土を用いて構築され、長さ22~50cm、幅12~18cm、高さ13cmが残存する。焚口付近のカマド崩落土上面で河原石4点が出土しており、焚口部の構築材であった可能性がある。奥壁は住居北壁より13cmほど張り出す。

【貯蔵穴】カマド右側の住居北東隅で土坑1基（K1）を確認した。平面形が長軸120cm、短軸90cmの不整梢円形を呈し、断面形は深さ20cmの椀形を呈する。堆積土は2層に細分される。1層は地山粒を含む黒褐色粘質シルト、2層は地山ブロックを含む暗褐色粘質シルトで、1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考える。

えられる。

【その他の施設】北東主柱穴（P5）の南側で柱穴1か所（P3）、カマド左側で土坑1基（K2）を確認した。P3柱穴は掘方の平面形が長辺28cm、短辺16cmの隅丸方形を呈し、深さ26cmである。平面形が直径13cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。K2土坑は平面形が長軸31cm、短軸28cmの不整梢円形を呈し、断面形は深さ12cmの椀形を呈する。堆積土は2層に細分され、1層が均質な黒褐色粘質シルト、2層は小礫を含む黒褐色砂質シルトである。いずれも自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】住居床面直上から須恵器壺（第10図1）、カマド燃焼部底面からロクロ土師器壺（第10図2）、住居内堆積土から土師器壺（第10図3）、住居掘方埋土からロクロ土師器鉢（第10図4）が出土した。須恵器壺（第10図1）は外底面に墨書「草手」がみられる。ロクロ土師器壺（第10図2）は外底面に墨書（判読不能）が見られる。土師器壺（第10図3）は無底式の双耳瓶である。このほか、土師器小型品・甕などが出土した。土師器小型品は体部と口縁部の境に屈曲を持ち、内面にヘラミガキ調整、外面にヘラケズリ、ヘラミガキ調整を施すものがある。

【SI2 竪穴住居跡】（第11図、写真図版6）

【位置】1区南／平坦面

【重複】SK65→SI2→SB10・SB230・SA240・SK45

【規模・形状】長辺3.10m以上、短辺2.90m以上／方形

【方向】住居東辺：N-6°-W

【壁面・床面・堆積土】残存しない

【主柱穴・周溝・壁材】なし

【カマド】不明

【貯蔵穴】住居北東隅で土坑1基（K1）を確認した。平面形が長軸168cm、短軸90cmの不整梢円形を呈し、断面形は深さ27cmの逆台形を呈する。堆積土は2層に細分され、1層は白色粘土ブロックを少量含む黒色シルト、2層は白色粘土ブロックを多量に含み、焼土粒を少量含む黒褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】土師器小型品、須恵器壺などが出土した。土師器小型品は外面の体部にヘラミガキ調整、赤彩？を施すものがある。

【SI3 竪穴住居跡】（第12-17図、写真図版7・8・36・37）

【位置】1区南／平坦面

【重複】SI14・SD67→SI3a→SI3b

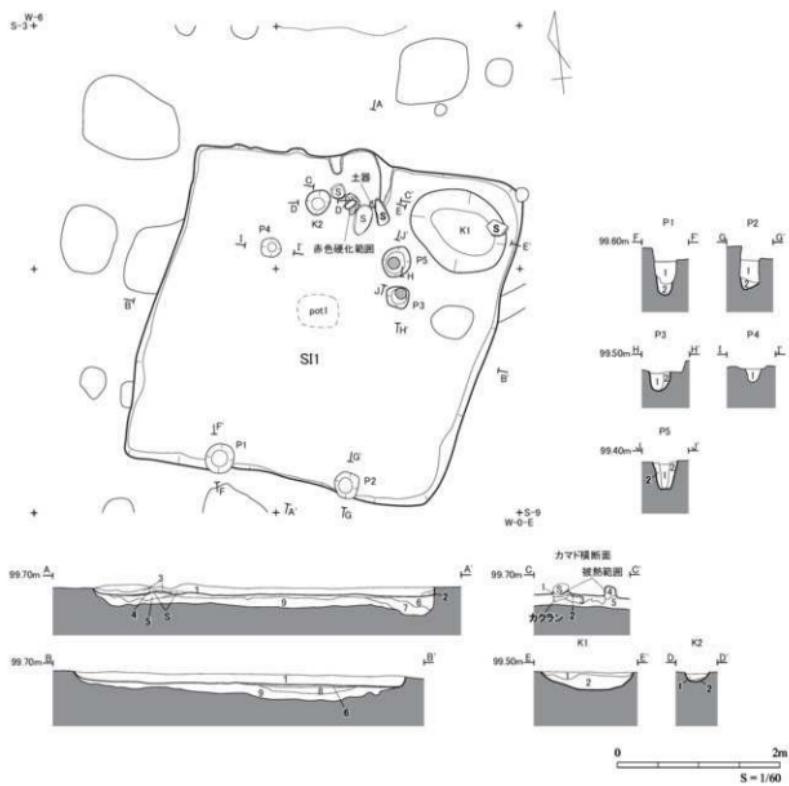
【規模・形状】長辺5.60m、短辺5.50m／方形

【方向】カマド中軸線：E-6°-S

第2節 発見された遺構と遺物



第8図 1区構造配置図



S1型(注釈群 A-A', B'B')		S1型(注釈群 P2-G-G')	
No.	土色	土性	備考
1	10YK/2 黒泥	粘質シルト	黄褐色ローム・粘土質物を含む(柱端)
2	10YK/2 黒泥	粘質シルト	黄褐色ロームを含む(柱端)
3	10YK/3 黒泥	粘質シルト	土被り、淤泥化物、砂利混入を含む(堆場)
4	2.5YR5/4 にふる泥炭	シルト	土被り、淤泥化物(淤泥断面 2 層付近)
5	10YK/2 黒泥	粘質シルト	
6	10YR/2 小黒	粘質シルト(柱端)	白粘土・淤泥化物、白色粘土(柱端)を含む
7	10YK/3 暗褐色	粘質シルト	白色粘土・ブロッカを含む(柱端)
8	10YR4/2 黄褐色	粘質シルト	白色粘土・ブロッカ・砂礫を含む(柱端)
9	10YR3/2 黒泥	粘質シルト	白色粘土・ブロッカを含む(柱端、カマド焼成地 5 層付近)
S1型(注釈群カド網標示 C-C')		S1型(注釈群 K-K')	
No.	土色	土性	備考
1	10YK/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームを含む(柱端)
2	5YR4/4 にふる泥炭	シルト	淤泥化物、土被り(柱端 4 層付近)
3	10YR3/1 黒泥	粘質シルト	淤泥化物、土被り(柱端 5 層付近)
4	10YR4/3 にふる泥炭	粘質シルト	淤泥化物、土被り(柱端 6 層付近)
5	10YK/2 黒泥	粘質シルト	白色粘土・ブロッカを含む(柱端、柱間隙空隙 3 層付近)
S1型(注釈群 P1-F-F')		S1型(注釈群 K2-D-D')	
No.	土色	土性	備考
1	10YK/2 黑泥	粘質シルト	黄褐色ローム・粘土質物を含む(柱端)
2	10YK/3 黑泥	粘質シルト	黄褐色ロームを含む(柱端)
S1型(注釈群 P1-H-H')		S1型(注釈群 P1-H-H')	
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黑泥	粘質シルト	黄褐色ローム・粘土質物を含む(柱端)
2	10YK/2 黑泥	粘質シルト	黄褐色ロームを含む(柱端)
S1型(注釈群 P3-J-J')		S1型(注釈群 P3-J-J')	
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑泥	砂質シルト	Φ 1-2mm の礫を含む(柱端)
S1型(注釈群 P5-J-J')		S1型(注釈群 P5-J-J')	
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑泥	粘質シルト	黄褐色ローム・粘土を含む(柱端)
2	10YR2/2 黑泥	砂質シルト	Φ 1-2mm の礫を含む(柱端)
S1型(注釈群 K1-E-F-F')		S1型(注釈群 K1-E-F-F')	
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑泥	粘質シルト	白色粘土を含む
2	10YR3/1 暗褐色	粘質シルト	白色粘土・ブロッカを含む(人為)
S1型(穴開跡 K2-D-D')		S1型(穴開跡 K2-D-D')	
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑泥	粘質シルト	均質土
2	10YR3/2 黑泥	粘質シルト	小礫を含む

第9図 SII 鰐穴住居跡

〔壁面〕地山を壁とする。残存壁高は最大2cmである。〔床面・堆積土〕住居掘方理土を床とし、ほぼ平坦である。床面を覆う堆積土は地山・焼土・炭化物粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

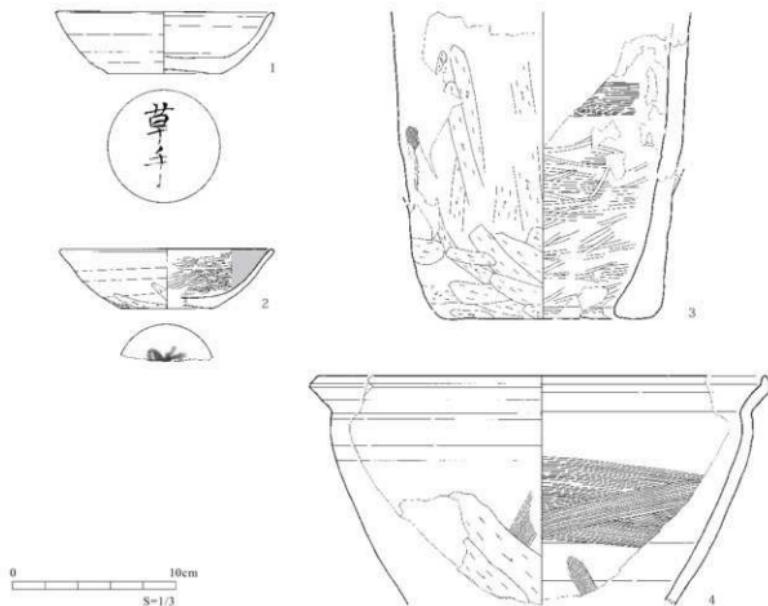
〔主柱穴〕8か所確認し、2時期の変遷が考えられる。

a期の柱穴(P1a-P4a)は住居平面形の対角線上によりそれぞれ約50cm南側に配置されている。掘方の平面形が長軸(辺)48-60cm、短軸(辺)36-60cmの楕円形・圓丸形を呈し、深さ44-56cmである。2か所で平面形が直径16-22cmの円形を呈する柱痕跡、3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。b期の柱穴(P1b-P4b)は北側の2か所が住居平面形の対角線上に、南側の2か所は住居南辺に接する位置に配

置されている。掘方の平面形が長軸40-90cm、短軸36-56cmの略円形・楕円形を呈し、深さ44-56cmである。2か所で平面形が直径22-24cmの円形を呈する柱痕跡、2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。また、1か所で掘方底面に礎板石を確認した。

〔周溝・壁材〕なし

〔カマド〕住居東辺南寄りに付設する。幅120cm、奥行76cmの燃焼部が残存し、焚口幅は不明である。燃焼部底面は幅56cm、奥行73cmで、床面とほぼ平坦である。幅56cm、奥行57cmの範囲に赤色硬化面が形成されている。側壁は地山・砂粒などを含むにぶい黄褐色シルトで構築され、長さ42-44cm、幅24cm、高さ1cmが残存する。奥壁は住居東壁と一致する。



No.	遺構名	部位	種類	剖面	表面調査・特徴	法面(cm)			残存	登録	写真
						上辺	底辺	面高			
1	SII	床面直上	梁跡	柱	外曲:ロクロナデ→(底)切削面切手跡→ヘラケズリ 内面:ロクロナデ 外底面:墨書き「草手」	13.5	7.0	3.8	7/8	001	35-1
2	SII	カマド 燃焼部底面	ロクロ上斜部	柱	外曲:ロクロナデ→(底付近)手舟ちハラケズリ。(底)切り離し不規→手舟ちハラケズリ 内曲:ヘラミガキ→黑色化粧 外底面:墨書き「口」	(13.2)	(6.0)	3.7	1/4	002	35-2
3	SII	住居内堆積土 Pot. I	土器器	瓶	外曲: (底) ヘラケズリ、(底面) ヘラケズリ→走苔 内曲: (底) ヘラケズリ→(底) ヘラミガキ、外曲:耳部欠損	(13.0)	(18.0)	一部	003	35-3	
4	SII	住居側面土上	ロクロ上斜部	柱	外曲:ロクロナデ→(底) ヘラケズリ→ヘラケズリ 内曲:ロクロナデ→(底) ヘラケズリ	(28.6)		(14.1)	一部	004	35-4

第10図 SII 穏穴住居跡出土遺物

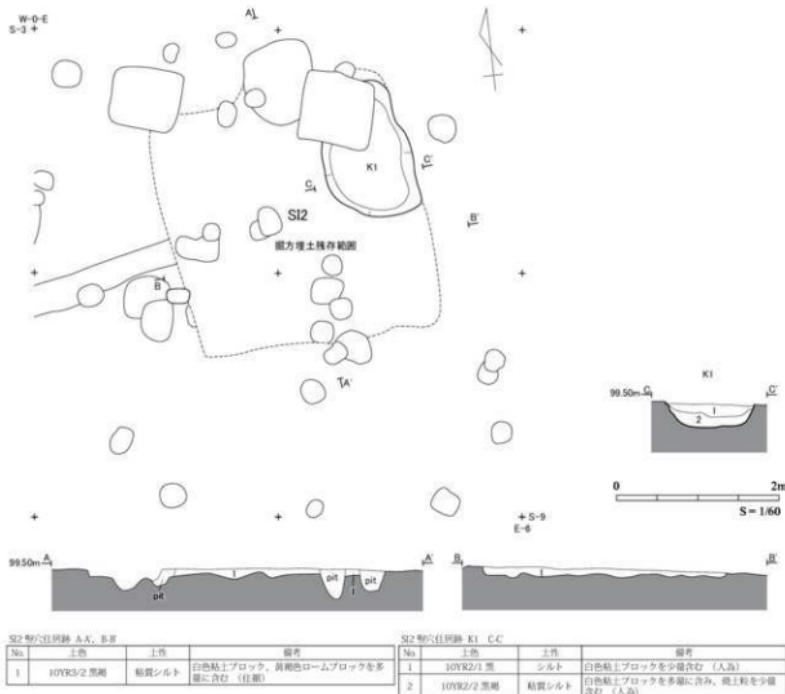
〔伊跡〕住居南側で赤色硬化範囲2か所を確認した。赤色硬化範囲はP2a柱穴・K1土坑より新しい。平面形は長軸30-42cm、短軸22-35cmの楕円形を呈する。〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東隅で土坑1基(K1)を確認した。b期の主柱穴(P2b)に壊されている。平面形が長軸176cm、短軸100cmの楕円形を基調とし、断面形は深さ22cmの逆台形を呈する。堆積土は地山・焼土粒を少量含む黒褐色シルトである。

〔床下土坑〕15基(K2-16)を確認した。住居中央部に位置し床面から掘り込まれているもの(K14)と、住居内周に位置し掘方底面から掘り込まれているもの(K2-13・15・16)がある。K14土坑は平面形が長軸194cm、短軸182cmの不整形を呈し、断面形は深さ36cmで壁面が階段状となる不整逆台形を呈する。K2-13・15・16は平面形が長軸56-176cm、短軸44-136cmの不整楕円形を呈し、断面形は深さ8-44cmの不整逆台形または袋状を呈する。重複が

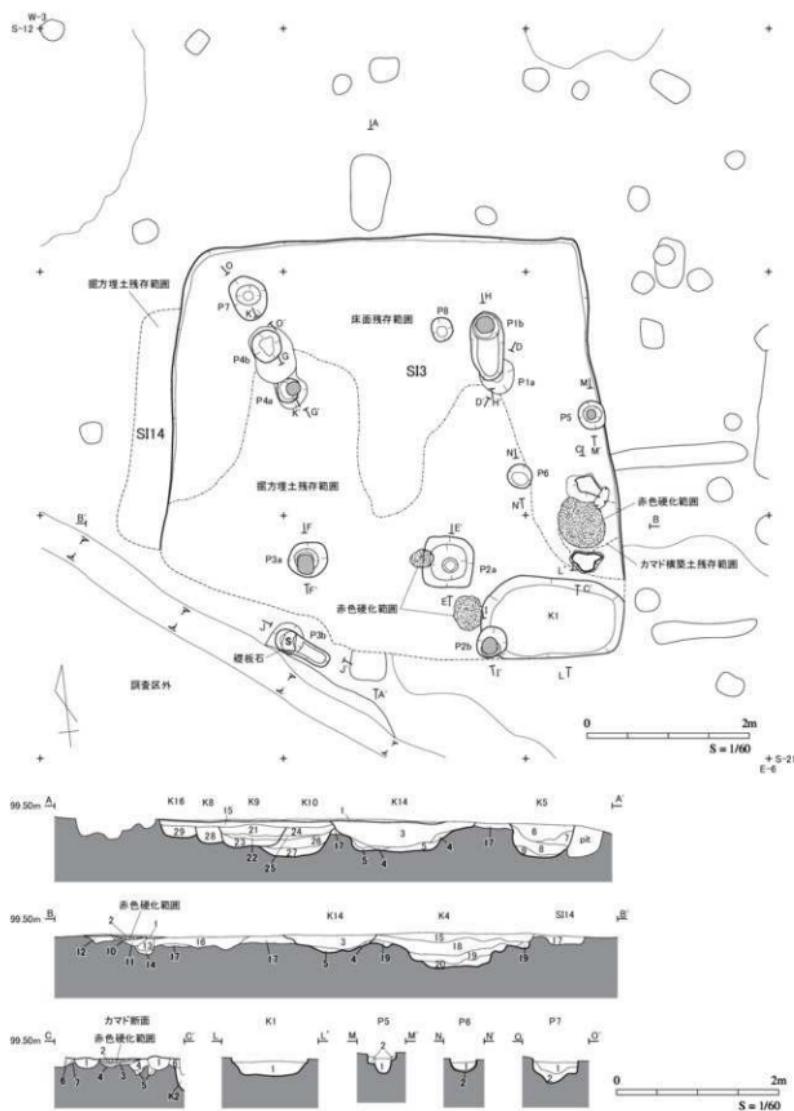
著しく、位置をずらしながら繰り返し掘り込まれている。土坑底面はK4・5・7-16で黄褐色ローム層、K2-3-6で白色粘土層である。堆積土は地山ブロック、焼土・炭化物粒を含む黒褐色シルト・黄褐色砂質シルトなどで、いずれも人為的理土と考えられる。

〔その他の施設〕住居北側で2か所(P7・8)、東側で3か所(P5・6・9)の柱穴を確認した。P5柱穴は住居東辺中央に位置し、床面から掘り込まれている。掘方の平面形が長軸35cm、短軸32cmの楕円形を呈し、深さ24cmである。平面形が直径20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。P9柱穴は住居掘方埋土を掘り込んでいるが、カマド構築土に壊されている。P6・7・8柱穴は住居掘方埋土あるいは床下土坑を壊して掘り込まれているが、床面との関係は不明である。

〔出土遺物〕住居内堆積土からロクロ土器器窓(第16図6)、P5柱穴抜き取り痕跡からロクロ土器器窓(第16図9)、K1土坑堆積土からロクロ土器器窓(第16



第11図 S12号の住居跡



第12図 SI3・14 竪穴住居跡（1）

図1・4・7・8)、灰陶土器碗(第17図4)、K9・10土坑堆積土からロクロ土器壺(第16図3)、K12土坑・P1b・P3b柱穴堆積土から須恵器壺(第17図2)、住居掘方埋土からロクロ土器壺(第16図2・5)・甕(第16図10)、須恵器壺(第17図1・3)が出土した。ロクロ土器壺(第16図5-8)は外底面に墨書きが見られ、判読できるものには「莉田」(第16図5)、「草手」(第16図6)がある。このほか、土器壺・小型品・甕、ロクロ土器壺甕、須恵器甕、弥生土器が出土した。土器壺は口縁部の外外面にヨコナデ調整、体部の外面にヘラケズリ調整を施し、内面に黒色処理を施さない。

【SI4 穴住居跡】(第18-21図、写真版8・9・38)

【位置】1区南/平坦面

【重複】SB15・SK16→SI4→SB24・SB30・SB29・SB25・SB28

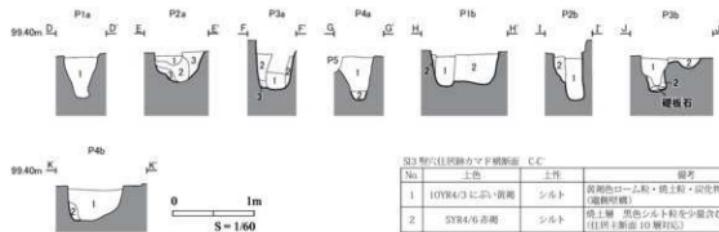
【規模・形状】長辺 5.00m、短辺 4.60m 以上/方形

【方向】カマド中軸線:N-2°-E

【壁面】地山を壁とする。残存壁高は最大 4cm である。

【床面・堆積土】住居掘方埋土を床とし、住居北西隅周辺のみ残存する。床面を覆う堆積土は地山・焼土ブロック、炭化物粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

【主柱穴】8か所確認し、2時期の変遷が考えられる。a期の柱穴(P1a-P4a)は北側の2か所が住居平

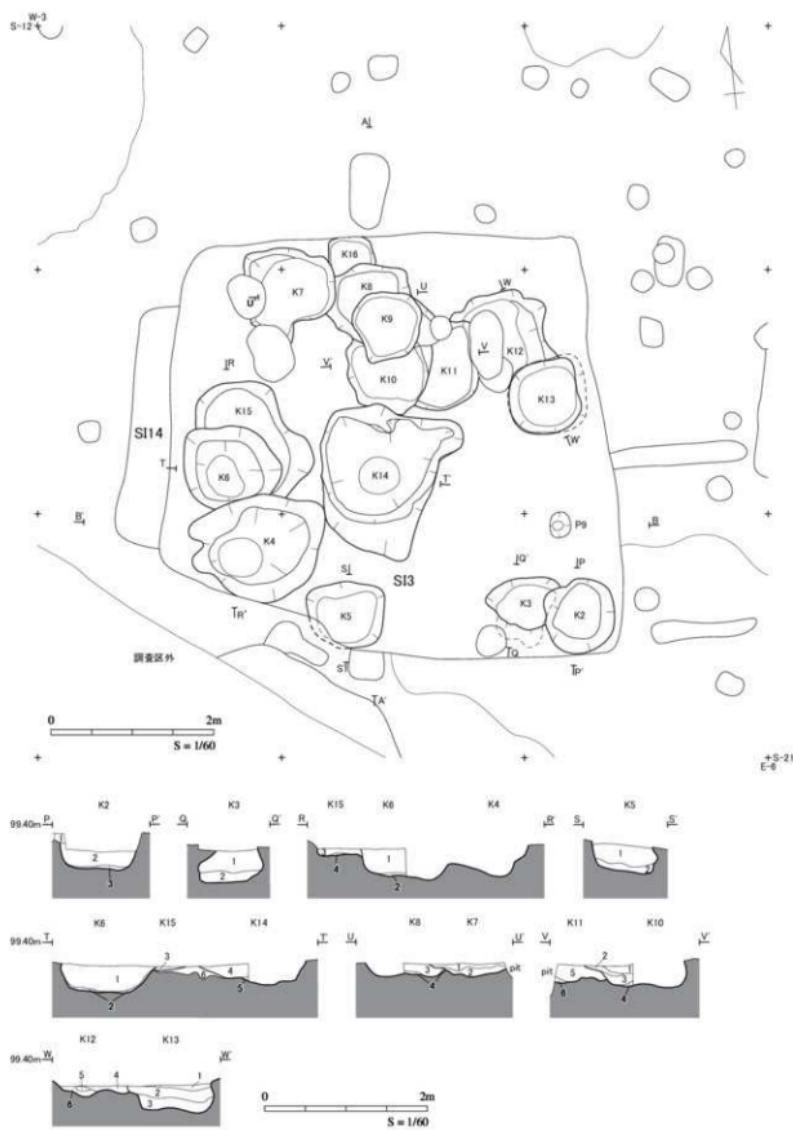


SI4 穴住居跡 A.A, B.B

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘・焼土粘・炭化物粒を含む(柱窓)
2	7SY9/4.6 黑	シルト	焼土ブロックを多量に含む(壁面)
3	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・焼土粘・炭化物粒を少額含む(人馬・K3.4 壁)
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームを多量に含む(人馬・K4.4 壁)
5	10YR4/4 黑	砂質シルト	黄褐色ローム粘・焼土粘を含む(人馬・K4.4 壁)
6	10YR3/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック・粘・焼土粘を含む(人馬・K5 壁)
7	10YR4/2 黄褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック・焼土粘を含む(壁面)
8	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・焼土粘・炭化物粒を含む(人馬・K5 壁)
9	10YR4/3 に K1 黄褐色	砂質シルト	黄褐色ローム・粘・焼土粘を含む(人馬・K5.4 壁)
10	SYR4 未確認	シルト	(柱窓下部) 黒褐色シルトを少額含む(柱窓)
11	10YR4/2 黄褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・焼土粘・黒褐色シルトを含む(壁面・柱窓下部) (柱窓)
12	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・焼土粘・黒褐色シルトを多量に含む(壁面・柱窓下部・柱窓)
13	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘を含む(柱窓)
14	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘を含む(柱窓)
15	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・焼土粘・炭化物粒を含む(柱窓)
16	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・ブロック・焼土粘・炭化物粒を含む(柱窓)
17	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・ブロック・焼土粘・炭化物粒を含む(柱窓)
18	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・ブロック・焼土粘を含む(人馬・K4 壁)
19	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・ブロック・白粘土・ブロックを含む(人馬・K4 壁)
20	10YR4/3 に K1 黄褐色	砂質シルト	白色土粘を含む(人馬・K4 壁)
21	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・焼土粘を含む(人馬・K9 壁)
22	10YR3/3 黄褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・焼土粘・砂質を含む(人馬・K9 壁)
23	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・焼土粘・砂質を含む(人馬・K9 壁)
24	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘・焼土粘・少額含む(人馬・K10 壁)
25	10YR2/3 黑褐色	シルト	焼土を無機化含む(人馬・K10 壁)
26	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘を含む(人馬・K10 壁)
27	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ローム・粘を含む(柱窓)
28	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘を含む(人馬・K8.6 壁)
29	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粘を含む(人馬・K8.6 壁)

SI4 穴(住居跡カラム)断面 C-C'		備考
No.	土色	土性
1	10YR4/3 に K1 黄褐色	シルト (焼土粘・砂質)
2	SYR4 未確認	シルト (柱窓下部) (柱窓)
3	10YR2/2 黄褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
4	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
5	10YR2/2 黄褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
6	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
7	10YR2/2 黄褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
S3 穴(柱窓跡) P1a-D-D		
No.	土色	土性
1	10YR2/1 黑	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
S3 穴(柱窓跡) P2a-E-F		
No.	土色	土性
1	10YR2/1 黑	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
2	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
3	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
S3 穴(柱窓跡) P3a-G-G		
No.	土色	土性
1	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
2	10YR2/1 黑	粘質シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
3	10YR4/4 黑	粘質シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
S3 穴(柱窓跡) P3b-F-F		
No.	土色	土性
1	10YR2/1 黑	粘質シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
2	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
3	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
S3 穴(柱窓跡) P3b-H-H		
No.	土色	土性
1	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
2	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
S3 穴(柱窓跡) P3b-I-J		
No.	土色	土性
1	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
2	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
S3 穴(柱窓跡) P4b-K-K		
No.	土色	土性
1	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
2	10YR4/6 黑	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)
S3 穴(柱窓跡) K-L-L		
No.	土色	土性
1	10YR2/2 黑褐色	シルト (焼土粘・柱窓下部) (柱窓)

第13回 SB3・14 穴穴住居跡 (2)



第14図 SI3・14 竪穴住居跡（3）

面形の対角線上に、南側の2か所が住居南壁に接する位置に配置されている。掘方の平面形が長軸(辺)22-44cm、短軸(辺)30-42cmの隅丸方形・不整楕円形を呈し、深さ44-68cmである。1か所で平面形

が直径15cmの円形を呈する柱痕跡、2か所で柱材底面の压痕、3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。b期の柱穴(P1b-P4b)はa期の配置を踏襲し、それぞれ20-40cm南側へ移している。掘方の平面形が長軸32-60cm、短軸30-48cmの隅丸方形・不整楕円形を呈し、深さ38-47cmである。3か所で平面形が直径13-17cmの円形を呈する柱痕跡、2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

【周溝・壁材】住居西壁と北・南壁の一部に沿って周溝を確認した。P4a・b柱穴、P7・11・12柱穴、K6土坑より古い。上幅8-33cm、底幅4-20cmで、横断面形は深さ13-22cmのU字形を呈する。堆積土は2層に細分され、いずれも地山ブロックを含む黒褐色シルトである。壁材痕跡は確認されなかった。

【カマド】住居北辺中央付近に付設する。幅110cm、奥行64cmの燃焼部の痕跡が残存し、焚口幅は不明である。燃焼部底面は幅52cm、奥行64cm程度と推定される。幅18cm、奥行20cmの範囲に赤色硬化面が形成されている。側壁は地山・焼土ブロックを多量に含む極暗褐色粘質シルトである。長さ46-66cm、幅32-43cmの基部が残存する。奥壁は住居北壁と一致するとみられる。

【貯藏穴】なし

【床下土坑】10基(K1-4・7・8・10-13)を確認した。床面から掘り込まれているもの(K2)と、掘方底面から掘り込まれているもの(K1)がある。K1・3・7・8・10・12・13土坑については住居床面が残存しないため、掘り込み面は不明である。平面形が長軸55-284cm、短軸46-174cmの楕円形・不整形を呈し、断面形は深さ11-44cmのU字形・不整逆台形を呈する。土坑底面はいずれも白色粘土層である。堆積土は地山・焼土ブロック、炭化物粒、凝灰岩片などを含む黒褐色・暗褐色シルト、暗褐色粘質シルトなどで、いずれも人為的理土と考えられる。

【その他の施設】住居床面で土坑3基(K5・6・9)、柱穴10か所(P5-8・11~16)、住居掘方底面で柱穴2か所(P9・10)を確認した。K5土坑は住居北側、K6土坑は住居北隣、K9土坑は住居中央付近に位置し、平面形が長軸55-100cm、短軸42-76cmの楕円形・不整圓形を呈し、断面形は深さ16-22cmの逆台形・不整逆台形を呈する。堆積土は地山・焼土ブロック、炭化物粒を含む黒色・黒褐色・褐色灰色シルトで、いずれも人為的理土と考えられる。柱穴は住居外周付近に位置するもの(P7・11-16)と、北側主柱穴の南側に位置するもの(P5・8)、南側主柱穴の北側に

S2号柱穴跡 P5・M・M			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴)

S2号柱穴跡跡 P6・N-N			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴)
2	10YR5/6 黒褐	シルト	黒褐色シルトを含む(柱穴)

S2号柱穴跡跡 P7・O-O			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴)
2	10YR3/4 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴)

S2号柱穴跡跡 K2・P-P			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴)
2	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴)

S2号柱穴跡跡 K3・Q-Q			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)
2	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)

S2号柱穴跡跡 K4・K5・K15 R-R			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)
2	10YR4/3 にじ・黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)

S2号柱穴跡跡 K5・K5-S			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土・白色粘土・固化物を含む(柱穴・K5堆)
2	10YR4/3 にじ・黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K5堆)

S2号柱穴跡跡 K6・K14・K15 T-T			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)
2	10YR4/3 にじ・黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)

S2号柱穴跡跡 K7・K8・U-U			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)
2	10YR4/3 にじ・黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)

S2号柱穴跡跡 K8・K14・K15 T-T			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)
2	10YR4/3 にじ・黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K6堆)

S2号柱穴跡跡 K9・U-U			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土・白色粘土・固化物を含む(柱穴・K7堆)
2	10YR4/4 黑	砂質シルト	黄褐色ロームと粘土・白色粘土・固化物を含む(柱穴・K7堆)

S2号柱穴跡跡 K10・K11 V-V			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土を含み、焼土粒を少額含む(柱穴・K10堆)
2	10YR3/1 黑	シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K10堆)

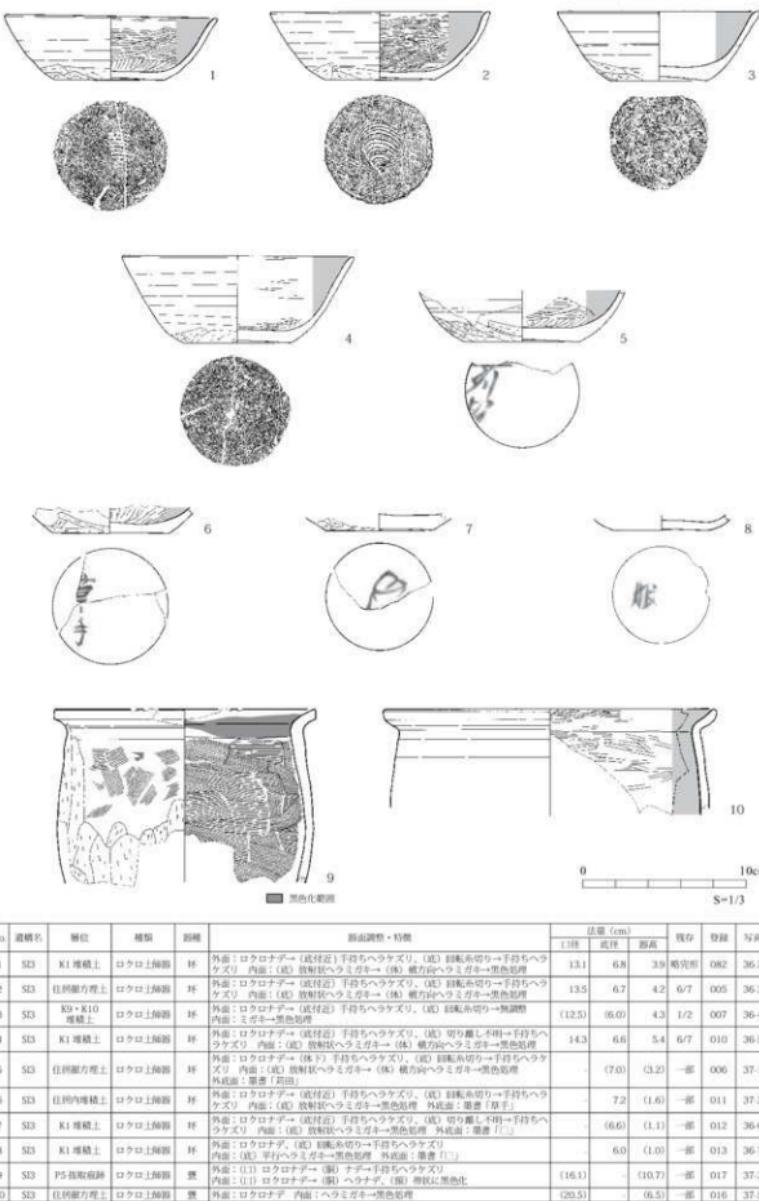
S2号柱穴跡跡 K10・K11 V-V			
No.	土色	土性	備考
3	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土・燒土粒・燒土・固化物を含む(柱穴・K10堆)
4	10YR4/3 にじ・黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームと粘土を含む(柱穴・K10堆)

S2号柱穴跡跡 K10・K11 W-W			
No.	土色	土性	備考
1	10YR1/7 黒	シルト	黄褐色ロームと粘土・固化物と、焼土粒を含む(柱穴・K11堆)
2	10YR3/4 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土・焼土粒・焼土・固化物を含む(柱穴・K11堆)

S2号柱穴跡跡 K10・K11 W-W			
No.	土色	土性	備考
3	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土・焼土粒・焼土・固化物を含む(柱穴・K11堆)
4	10YR3/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土・焼土・固化物を含む(柱穴・K11堆)

S2号柱穴跡跡 K10・K11 W-W			
No.	土色	土性	備考
5	10YR4/3 にじ・黒褐	シルト	黄褐色ロームと粘土・焼土・固化物を多量に含む(柱穴・K12堆)
6	10YR3/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームと粘土・焼土を含む(柱穴・K12堆)

第15回 S13・14 穴穴住居跡（4）



第16図 S3 穴式住居跡出土遺物（1）

位置するもの(P6)がある。平面形は長軸 22-63cm、短軸 15-60cm の楕円形・不整楕円形を呈し、深さ 14-40cm である。

〔出土遺物〕 P1b 柱穴抜き取り痕跡から土師器小型甕(第 21 図 1)、P2a 柱穴堆積土からロクロ土師器甕(第 21 図 4)、K1 土坑堆積土からロクロ土師器甕(第 21 図 3)、K10 土坑堆積土から転用甕(第 21 図 5)、住居掘方埋土からロクロ土師器甕(第 21 図 2)が出土した。このほか、土師器環・甕・須恵器甕などが出土した。土師器環は口縁部と体部の境に屈曲を持ち、内外面にヘラミガキ調整を施すものがある。

〔SI8 穫穴住居跡〕(第 22 図、写真図版 9)

〔位置〕 1 区南／平坦面

〔重複〕 SI8 → SK7

〔規模・形状〕長辺 4.60m 以上、短辺 4.50m 以上／方形
〔方向〕住居西辺：N-21°-E

〔壁面・床面・堆積土〕残存しない。住居掘方埋土の一部が残存する。

〔主柱穴〕住居南辺に接する位置で 2か所を確認した。掘方の平面形が長軸(辺) 30-48cm、短軸(辺) 32cm の隅丸方形・楕円形を呈し、深さ 34-38cm である。2か所で平面形が直径 15-17cm の円形を呈す

る柱痕跡、1か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔周溝・壁材／カマド・貯蔵穴〕不明

〔出土遺物〕住居掘方埋土から内面に黒色処理を施す土師器甕などが出土した。

〔SI14 穫穴住居跡〕(第 12 図、写真図版 7)

〔位置〕 1 区南／平坦面

〔重複〕 SI14 → SI3a → SI3b

〔規模・形状〕長辺 2.70m 以上、短辺 0.60m 以上／方形

〔方向〕住居西辺：N-13°-E

〔壁面・床面・堆積土〕残存しない。住居掘方埋土の一部が残存する。

〔主柱穴〕不明

〔周溝・壁材／カマド・貯蔵穴〕不明

〔出土遺物〕なし

(2) 据立柱建物跡

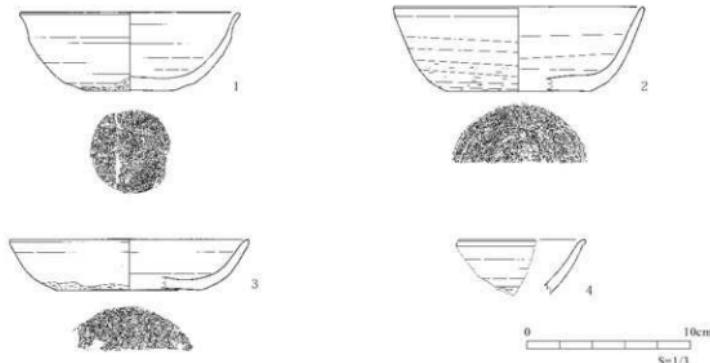
〔SB9 据立柱建物跡〕(第 23 図、写真図版 5・10)

〔位置〕 1 区南／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕桁行 2間(4.10m)、梁行 2間(4.00m)
／南北棟側柱建物

〔方向〕東側柱列：N-12°-E



第 17 図 SI3 穫穴住居跡出土遺物 (2)

〔柱穴〕8か所確認した。掘方の平面形は長辺50-62cm、短辺40-50cmの隅丸方形を基調とし、深さ18-34cmである。8か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2か所で掘方底面に平面形が直径14-24cmの円形を呈する柱材圧痕を確認した。

〔柱間寸法〕

東側柱列：北から(200)-(210)cm
南側柱列：西から(200)-(200)cm
〔出土遺物〕土師器の破片が出土した。

〔SB10 挖立柱建物跡〕

(第24・25図、写真図版5・10・38)

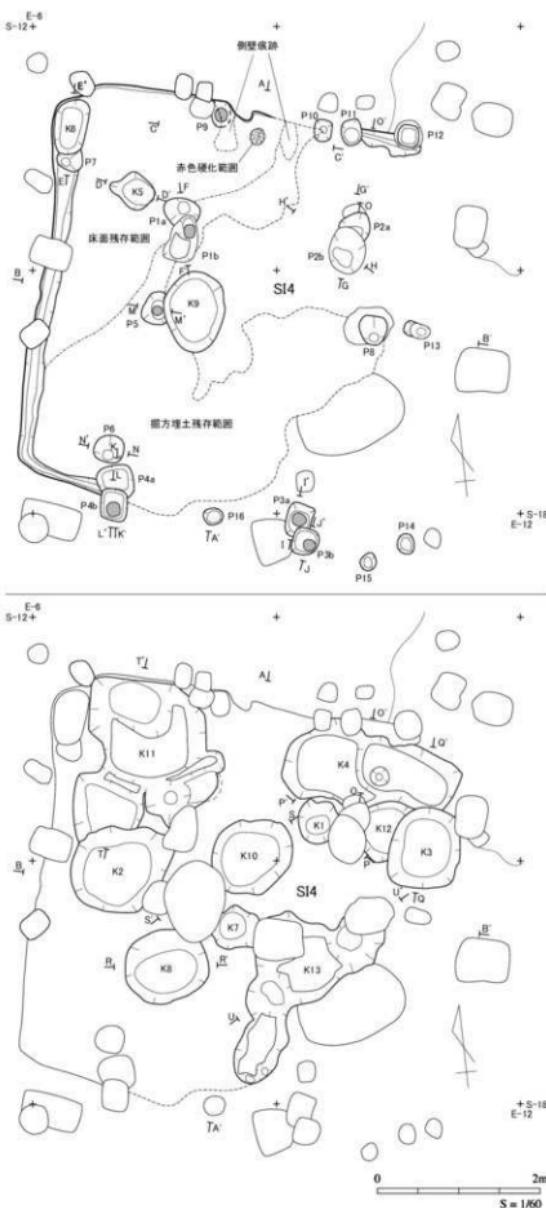
〔位置〕1区南／平坦面
〔重複〕SI2・SK45→SB10-SB230
〔規模・形状〕桁行3間(7.70m)、
梁行2間(4.90m)／東西棟側
柱建物

〔方向〕南側柱列：W-10°-N

〔柱穴〕10か所確認した。掘方の平面形は長辺76-88cm、短辺64-86cmの隅丸方形を基調とし、深さ18-56cmである。9か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、いずれも掘方底面に平面形が直径18-28cmの円形を呈する柱材圧痕を確認した。また、1か所で平面形が直径20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕

南側柱列：西から270-240-260cm
東側柱列：北から240-250cm
〔出土遺物〕P2柱穴抜き取り痕跡からロクロ土師器環(第25図2)、P8柱穴堆積土からロクロ土師器環(第25図1)が出土した。このほか、土師器甕、ロクロ土師器甕、須恵器环などが出土した。



【SB15 挖立柱建物跡】(第25・26図、写真図版3・

10・11・38)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SB15→SI4-SB238・SK16

〔規模・形状〕桁行3間(6.90m)、梁行2間(5.10m)

／南北棟側柱建物

〔方向〕西側柱列：N-6°-E

註記 9か所確認した。掘方の平面形は長辺40-68cm、短辺26-58cmの隅丸方形を基調とし、深さ10-36cmである。7か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、1か所で掘方底面に平面形が直径20cmの柱材圧痕を確認した。また、4か所で平面形が直径14-20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列：北から(240)-(210)-(240)cm

北側柱列：西から250-260cm

〔出土遺物〕P6柱穴掘方埋土から須恵器環蓋(第25図3)

が出土した。このほか、土師器環・甕、ロクロ土師器環・甕などが出土した。

【SB17 挖立柱建物跡】

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SK41→SB17

〔規模・形状〕桁行3間(5.20m)、梁行2間(4.60m)

／東西棟側柱建物

〔方向〕北側柱列：W-15°-N

(柱穴)9か所確認した。掘方の平面形は長軸20-66cm、短軸20-44cmの略円形・橢円形を呈し、深さ2-30cmである。9か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、1か所で掘方底面に平面形が直径18cmの円形を呈する柱材圧痕を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から(190)-(166)-(164)cm

西側柱列：北から(220)-(240)cm

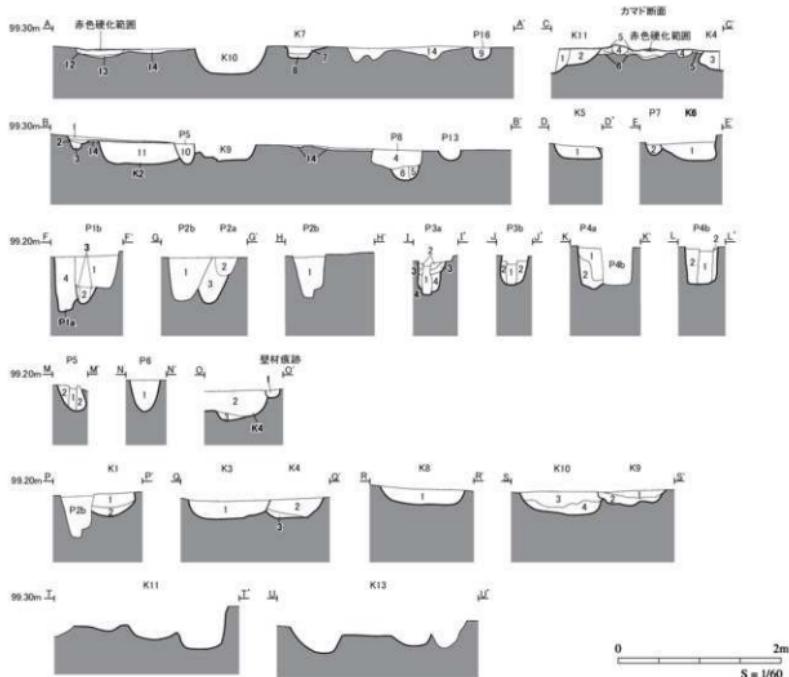
〔出土遺物〕なし

【SB18 挖立柱建物跡】(第27図、写真図版5・10・11)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕桁行2間(3.70m)、梁行2間(3.36m)



第19図 SB14 壁穴住跡(2)

以上／側柱建物

〔方向〕 東側柱列：N-10°-E

〔柱穴〕 7か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸24-40cm、短軸22-36cmの略円形・楕円形を呈し、深さ4-30cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、6か所で平面形が直径8-20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 東側柱列：北から 180-190cm

南側柱列：西から 156-180cm

〔出土遺物〕 なし

【SB20 挖立柱建物跡】(第25・28図、写真図版5・11・38)

〔位置〕 1区南／平坦面

〔重複〕 なし

S14 穴住居跡 A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	燒土小ブロック・炭化物類・黄褐色ロームブロックを含む（住居）	1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム小ブロックをごく少含む（柱孔）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック含む（壁材）	2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム小ブロックを多に含む（柱孔）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色シルトブロックを多量に含む（壁材）	S14 穴住居跡 P4b K-L			
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック含む。燒土小ブロックを含む（柱孔）	No.	土色	土性	備考
5	10YR2/2 黒褐	シルト	白褐色土・土質不明	1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土（柱材）
6	10YR2/3 黑褐	粘質シルト	白褐色土・土質不明	2	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（柱孔）
7	10YR2/3 黑褐	シルト	白褐色ロームブロックを含む。燒土小ブロック・炭化物類を含む（人為・K7堆）	S14 穴住居跡 P5 M-M'			
8	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	No.	土色	土性	備考
9	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	1	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（柱孔）
10	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色ロームブロックを含む（柱孔）	2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱孔）
11	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色ロームブロックを含む（柱孔・P2堆）	S14 穴住居跡 P6 N-N'			
12	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色ロームブロックを含む（柱孔）	No.	土色	土性	備考
13	10YR2/6 売田浜	粘土	白褐色シルトブロックを含む（柱孔）	1	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色シルトブロックを含む（人為・K6堆）
14	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色ロームブロックを多量に含む（柱孔）	2	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ローム小ブロックを多量に含む（P7柱孔）
S14 穴住居跡 A'アリヤマ断面 C-C'				S14 穴住居跡 K-D			
No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色ロームブロック・燒土小ブロックを多量に含み、炭化物類を含む（人為・K1堆）	1	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色シルトブロックを含む（人為・K5堆）
2	10YR2/1 黑	シルト	白褐色シルトブロックを含む（人為・K1堆）	S14 穴住居跡 K-E			
3	10YR2/3 黑褐	シルト	白褐色ロームブロック・燒土小ブロックを多量に含み、炭化物類を含む（人為・K4堆）	No.	土色	土性	備考
4	7.5YR2/3 黑褐	粘質シルト	焼土上・ブロック・白褐色土・白褐色シルト・黄褐色土・土質不明	1	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ローム小ブロックを含む（柱孔）
5	10YR2/1 黑	シルト	白褐色ロームブロックを含む（柱孔）	2	10YR2/3 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
6	10YR5/8 黑褐	粘質シルト	白褐色シルトブロックを含む少含む（柱孔）	3	10YR2/4 黑褐	粘質シルト	白褐色土・土質不明
S14 穴住居跡 P1a+b F-F'				S14 穴住居跡 K-L P-P'			
No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（P1b柱孔）	1	10YR2/4 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
2	-	(P1b柱孔)	-	2	10YR2/4 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
3	-	(P1b柱孔)	-	S14 穴住居跡 K-K' Q-Q'			
4	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ローム小ブロックを含む少含む（P1a柱孔）	No.	土色	土性	備考
S14 穴住居跡 P2a+b G-G'				1	10YR2/3 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
No.	土色	土性	備考	2	10YR2/3 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
1	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	3	10YR3/4 黑褐	粘質シルト	白褐色土・土質不明
2	10YR2/1 黑	シルト	白褐色土・土質不明	S14 穴住居跡 K-L R-R'			
3	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	No.	土色	土性	備考
S14 穴住居跡 P2b-H-H'				1	10YR3/1 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
No.	土色	土性	備考	S14 穴住居跡 K-O-K10 S-S'			
1	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	No.	土色	土性	備考
S14 穴住居跡 P3a-I-F				1	10YR3/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
No.	土色	土性	備考	2	10YR4/1 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
1	10YR2/1 黑	シルト	白褐色土・土質不明	3	10YR2/1 黑	シルト	白褐色土・土質不明
2	10YR2/1 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	4	10YR3/1 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
3	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	S14 穴住居跡 K-O-K10 S-S'			
4	10YR2/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	No.	土色	土性	備考
S14 穴住居跡 P3b-J-T				1	10YR3/2 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
No.	土色	土性	備考	2	10YR4/1 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明
1	10YR2/1 黑	シルト	白褐色土・土質不明	3	10YR2/1 黑	シルト	白褐色土・土質不明
2	10YR3/1 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明	4	10YR3/1 黑褐	シルト	白褐色土・土質不明

第20図 S14 穴住居跡 (3)

【SB21 挖立柱建物跡】(第28図、写真図版5・11)

〔位置〕1区南／平坦面
 〔重複〕SB21・SB234・SE63
 〔規模・形状〕桁行2間(4.40m)、梁行1間(3.00m)
 /南北棟側柱建物
 〔方向〕東側柱列:N-27°-E
 〔柱穴〕6か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸26-40cm、短軸22-34cmの略円形・隅丸方形を呈し、深さ22-30cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、3か所で平面形が直径12-14cmの円形を確認し、3か所で平面形が直径12-14cmの円形を

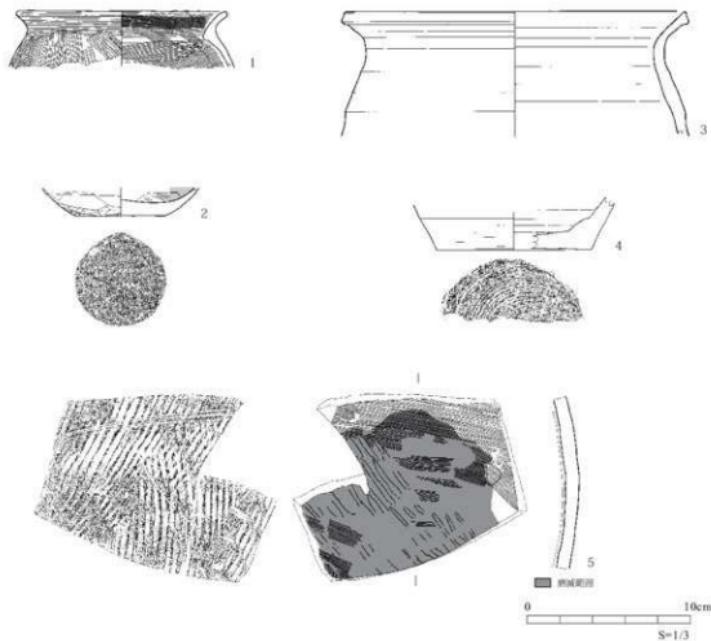
呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：北から(250)-190cm
 南側柱列：300cm

〔出土遺物〕なし

【SB22 挖立柱建物跡】(第29図、写真図版5・11)

〔位置〕1区南／平坦面
 〔重複〕SB22・SB10
 〔規模・形状〕桁行2間(3.90m)、梁行1間(170cm)
 /張出付東西棟側柱建物／北面張出1間(1.20m)
 〔方向〕南側柱列：W-26°-N



第21図 SH4 穴立柱跡出土遺物

〔柱穴〕身舎で6か所、張出で2か所確認した。身舎柱穴掘方の平面形は長軸26-56cm、短軸23-38cmの楕円形を呈し、深さ18-46cmである。6か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2か所で平面形が直径12-16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：(190)-(200) cm

東側柱列：(170) cm

〔出土遺物〕土器が出土した。

【SB23 挖立柱建物跡】(第29図、写真図版11)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕桁行2間(5.20m)、梁行1間(2.20m)

以上／南北棟側柱建物

〔方向〕東側柱列：N-19°-E

〔柱穴〕4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸40-44cm、短軸40-44cmの略円形・楕円形を呈し、深さ12-20cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、3か所で平面形が直径10-20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。また、1か所で掘方底面に凝灰岩礫による根石を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：北から260-(260) cm

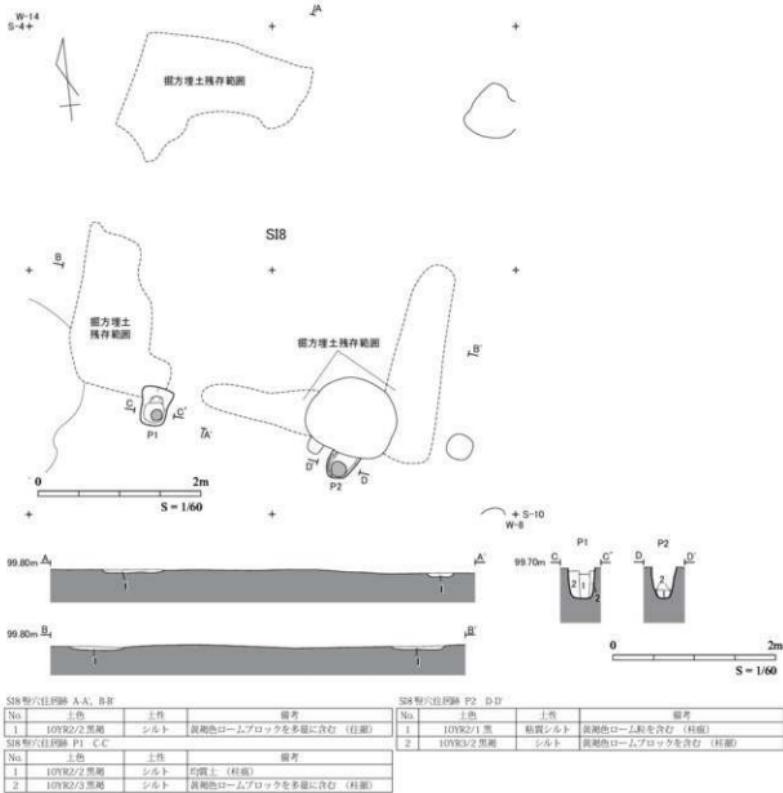
南側柱列：(220) cm

〔出土遺物〕なし

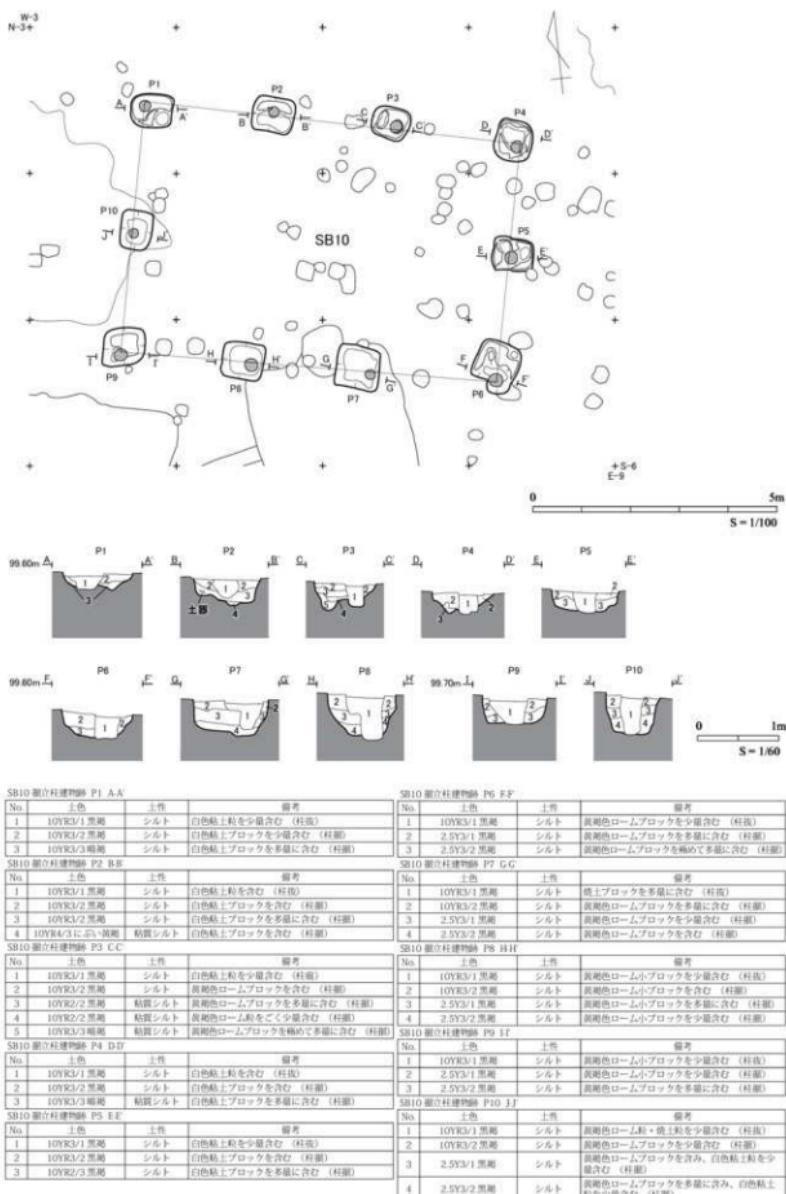
【SB24 挖立柱建物跡】(第30図、写真図版4・11・12)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SI4→SB24-SB236



第22図 SB23・24 柱穴掘跡



第24図 SB10 据立柱建物跡

〔重複〕SB28 - SB237

〔規模・形状〕桁行1間(2.90m)、梁行1間(1.70m)
以上/側柱建物

〔方向〕北側柱列: W-12° -N

〔柱穴〕3か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸36~40cm、短軸24~38cmの隅丸方形・楕円形を呈し、深さ10~24cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、1か所で平面形が直径16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列:(290)cm、東側柱列:(170)cm

〔出土遺物〕土師器、須恵器が出土した。

〔SB30 挖立柱建物跡〕(第32図、写真図版4・12)

〔位置〕1区南/平坦面

〔重複〕SI4 → SB30 → SB229

〔規模・形状〕桁行2間(4.70m)、梁行2間(4.30m)

/東西棟側柱建物

〔方向〕北側柱列: W-12° -N

〔柱穴〕7か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸20~48cm、短軸14~36cmの略円形・楕円形を呈し、深さ18~36cmである。すべての柱穴で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列:西から(220)-(250)cm

西側柱列:北から(230)-(200)cm

〔出土遺物〕土師器環、ロクロ土師器環が出土した。

〔SB229 挖立柱建物跡〕(第31図、写真図版3・12)

〔位置〕1区南/平坦面

〔重複〕SI4 → SB30 → SB229 - SB10・SA240

〔規模・形状〕桁行2間(3.08m)、梁行2間(2.88m)
/南北棟総柱建物

〔方向〕西側柱列: N-15° -E

〔柱穴〕8か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸28~54cm、短軸27~48cmの楕円形・隅丸方形を呈し、深さ13~25cmである。4か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2か所で掘方底面に平面形が直径12~13cmの円形を呈する柱材圧痕を確認した。また、5か所で平面形が直径14~20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列: 北から 162-146cm

北側柱列: 西から(140)-(140)cm

〔出土遺物〕ロクロ土師器環が出土した。

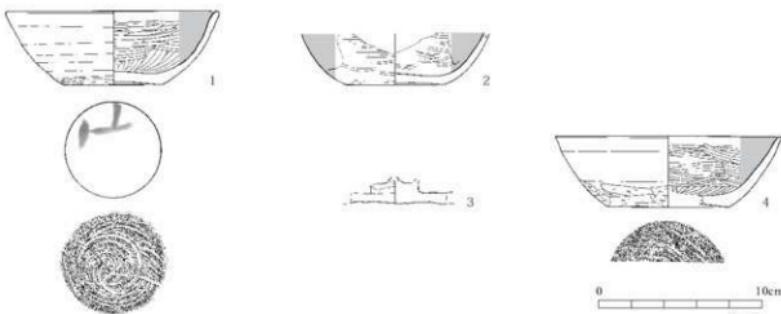
〔SB230 挖立柱建物跡〕(第32図、写真図版4・12)

〔位置〕1区南/平坦面

〔重複〕SI2・SK65 → SB230

〔規模・形状〕桁行2間(3.51m)、梁行1間(2.28m)

/南北棟側柱建物



第25図 SB10・15・20 挖立柱建物跡出土遺物

〔方向〕東側柱列：N-11°・W

〔柱穴〕6か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸26-32cm、短軸23-28cmの楕円形を呈し、深さ18-46cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2か所で平面形が直径14-17cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：北から(141)-(210)cm

北側柱列：(228)cm

〔出土遺物〕なし

〔SB231 据立柱建物跡〕(第33図、写真図版5)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕桁行2間(4.92m)、梁行1間(1.56m)

／南北棟側柱建物

〔方向〕東側柱列：N-38°・E

〔柱穴〕5か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸20-26cm、短軸19-25cmの円形・楕円形を呈し、深さ14-37cmである。5か所で平面形が直径12-20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：北から248-244cm

南側柱列：156cm

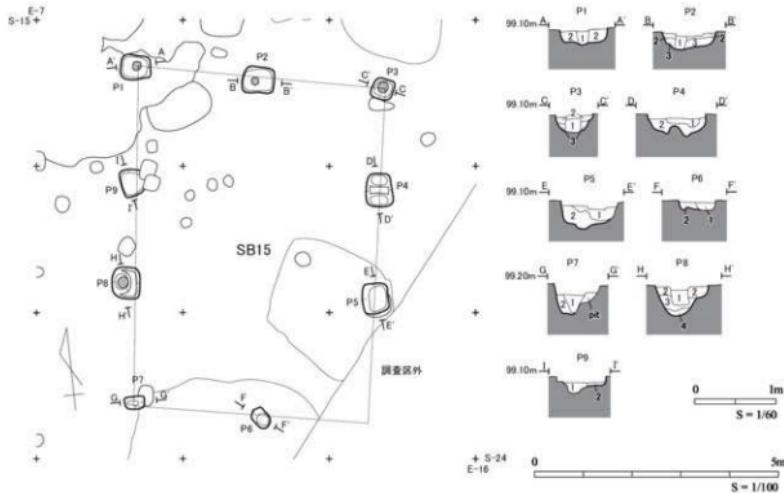
〔出土遺物〕なし

〔SB234 据立柱建物跡〕(第33図、写真図版5・12)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SB234-SB21

〔規模・形状〕桁行1間(3.86m)、梁行2間(3.54m)



SB15 据立柱建物跡 P1-A/A'

No.	上位	土性	細考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱脚)
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱脚)

SB15 据立柱建物跡 P1-B/B'

No.	上位	土性	細考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を少量含む (柱脚)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (柱脚)

SB15 据立柱建物跡 P2-C/C'

No.	上位	土性	細考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (柱脚)
2	10YR2/1 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱脚)
3	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (柱脚)

SB15 据立柱建物跡 P2-D/D'

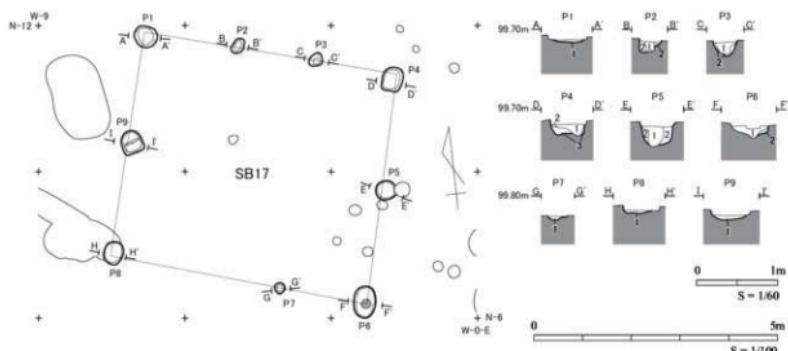
No.	上位	土性	細考
1	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を少量含む (柱脚)
2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を含む (柱脚)

SB15 据立柱建物跡 P3-E/E'

No.	上位	土性	細考
1	10YR2/1 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を少量含む (柱脚)
2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (柱脚)

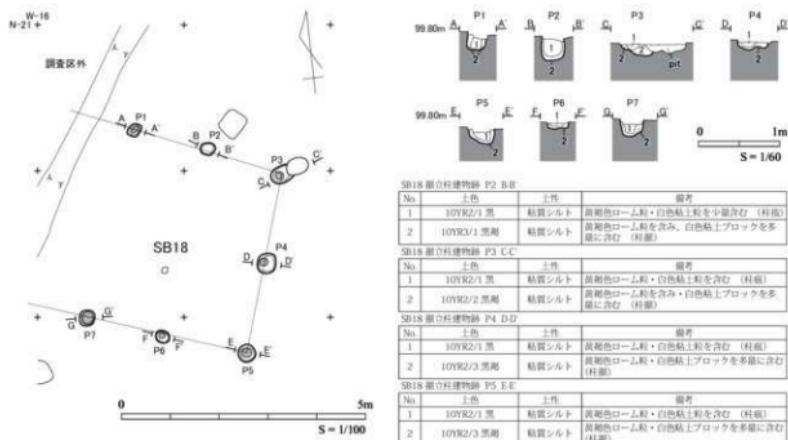
SB15 据立柱建物跡 P4-F/F'

No.	上位	土性	細考
1	(10YR2/1 黑)	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱脚)
2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (柱脚)



S817	混合軽骨建物P1 A/A		
No.	色	土性	参考
1	10YRZ-2 黒褐色	粘質シルト	白色粘土ブロック・粘土を多量に含む (粘板)
S817	混合軽骨建物P2 B/B		
No.	色	土性	参考
1	10YRZ-2 黒褐色	粘質シルト	白色粘土ブロック・粘土を含む (板状)
2	10YR4/4 黄褐色	粘質シルト	無機酸によるブロックを含み、白色粘土ブロックを多量に含む (柱端)
S817	混合軽骨建物P3 C/C		
No.	色	土性	参考
1	10YRZ-2 黒褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを小部分に多量に含み、白色粘土を含む (粘板)
2	10YR3/3 姫褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを含む (柱端)
S817	混合軽骨建物P4 D/D		
No.	色	土性	参考
1	10YRZ-3 黑褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを含む (柱端)
2	10YRZ-2 黑褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを含む (柱端)
3	10YR5-5 黄褐色	粘質シルト	白色粘土ブロックを含む (柱端)

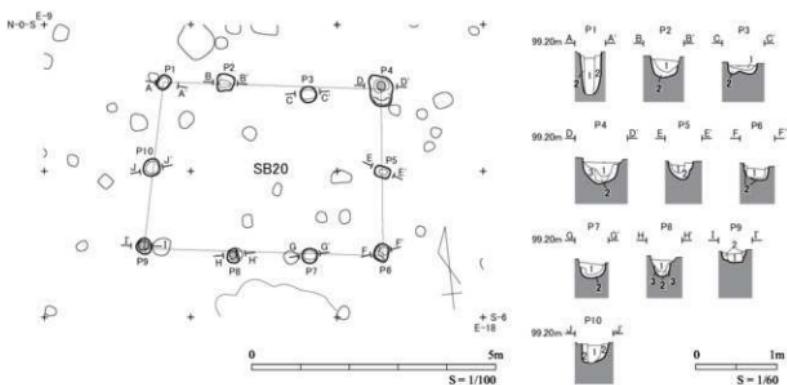
S817	樹立柱建物用 P5 E/E	
No.	上色	土性
1	10YR2/2 黒褐	転質シルト 白色粘土ブロックを含む (科後)
2	10YR2/6 黄褐	転質シルト 白色粘土ブロックを多量に含む (科前)
S817	樹立柱建物用 P6 F/F	
No.	上色	土性
1	10YR2/3 黒褐	転質シルト 白色粘土ブロックを多量に含む (科後)
2	10YR2/6 黄褐	転質シルト 白色粘土ブロックを極めて多量に含む (科前)
S817	樹立柱建物用 P7 G/G	
No.	上色	土性
1	10YR4/3 明褐	転質シルト 白色粘土ブロックを含む (科前)
S817	樹立柱建物用 P8 H/H	
No.	上色	土性
1	10YR2/3 黑褐	転質シルト 白色粘土ブロックを含む (科後)
S817	樹立柱建物用 P9 I/I	
No.	上色	土性
1	10YR2/3 黑褐	転質シルト 白色粘土ブロックを含む (科後)



SB18 相立住物 P1 AA'		備考	
No.	土色	上色	
1	10YR2/1 黒	動画シルト	黄褐色ローム粘・白色粘土粒を含む（柱頭）
2	10YR5/1 黒褐	動画シルト	黄褐色ローム粘・白色粘土ブロックを多量に含む

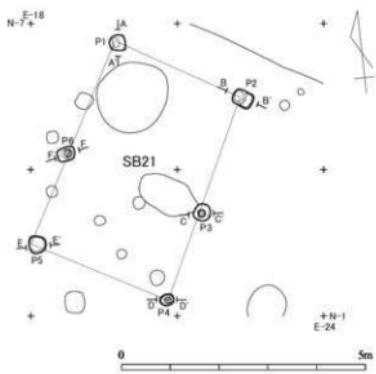
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム類、白色粘土ブロックを含む (柱相)
SH18 粘土建物部 P7 G/G			
	上色	土色	参考
1	10YR1/2 黒	粘質シルト	黄褐色ローム類、白色粘土ブロックを含む (柱相)
2	10YR4/1-2 黑	粘質シルト	黄褐色ローム類、白色粘土ブロックを含む (柱相)

第27圖 SB17：18 捷立柱建物跡



SB20 据立柱建物跡 P1-A'

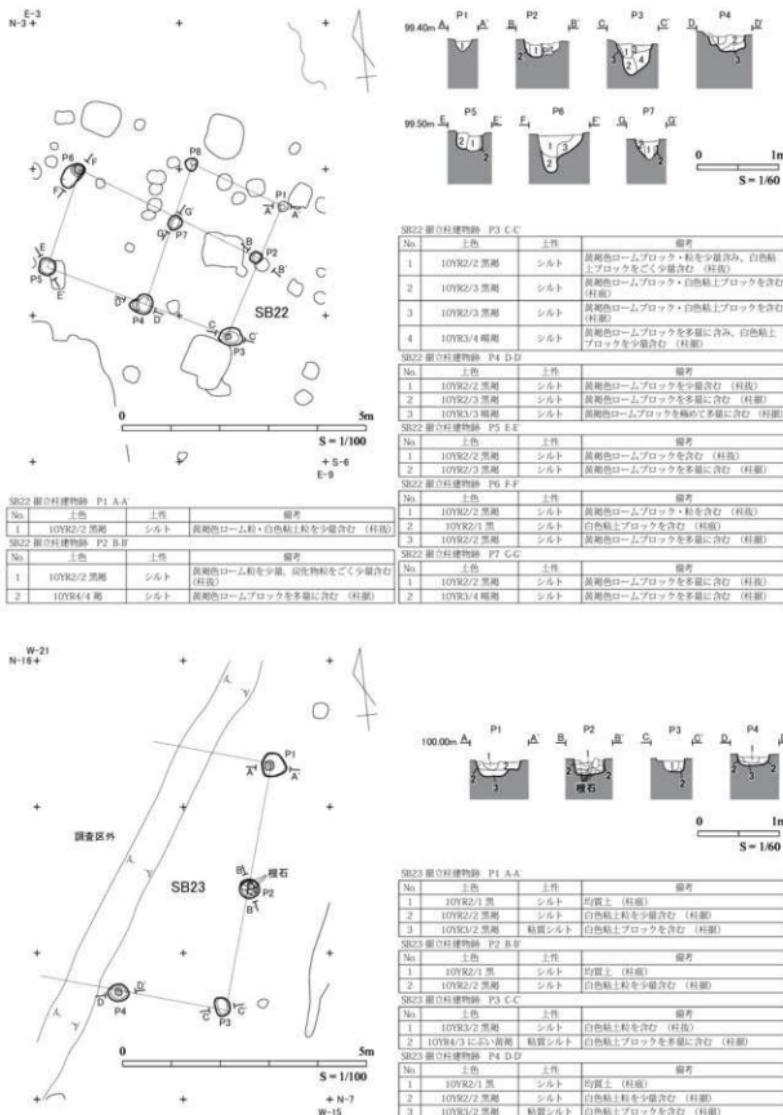
No.	上色	土性	備考	No.	上色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	1	10YR2/7/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（柱状）
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	2	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）
SB20 据立柱建物跡 P2-B'				SB20 据立柱建物跡 P2-C,C'			
No.	上色	土性	備考	No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	1	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱状）
2	10YR2/4 黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	2	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）
SB20 据立柱建物跡 P4-D,D'				SB20 据立柱建物跡 P4-H,H'			
No.	上色	土性	備考	No.	上色	土性	備考
1	7.5YR2/3 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（柱状）	1	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱状）
2	7.5YR2/2 黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む（柱状）	2	10YR2/4 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（柱状）
3	10YR2/2 黑褐色	シルト	白色粘土ブロックを多量に含む（柱状）	3	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）
SB20 据立柱建物跡 P5-E,E'				SB20 据立柱建物跡 P5-H,I			
No.	上色	土性	備考	No.	上色	土性	備考
1	10YR1/1 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	1	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱状）
2	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	2	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）



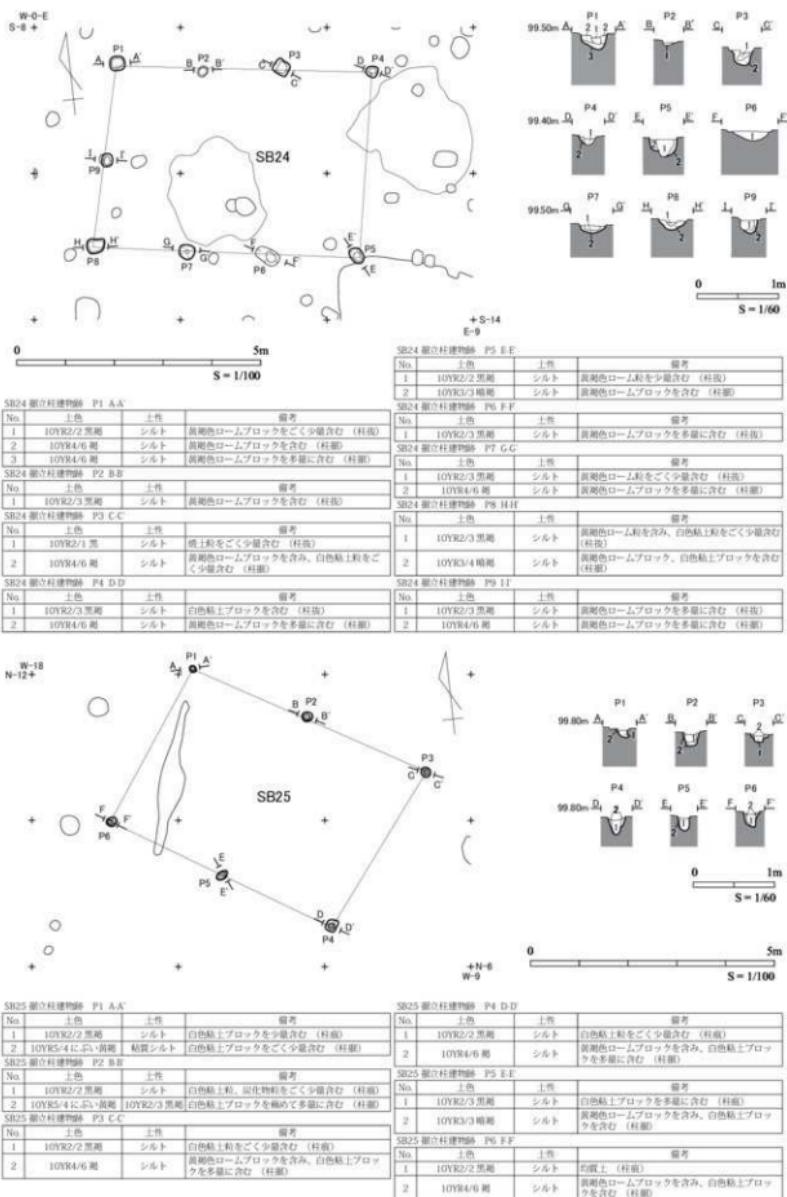
SB20 据立柱建物跡 P6-F,F'

No.	上色	土性	備考	No.	上色	土性	備考
1	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	1	SY3/1 オリーブ黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）
2	SY3/1 オリーブ黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	2	SY3/2 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）
SB21 据立柱建物跡 P2-B,B'				SB21 据立柱建物跡 P4-D,D'			
No.	上色	土性	備考	No.	上色	土性	備考
1	10YR2/1 黑	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	1	10YR2/1 黑	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱状）
2	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）	2	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱状）
SB21 据立柱建物跡 P5-E,E'				SB21 据立柱建物跡 P6-F,F'			
No.	上色	土性	備考	No.	上色	土性	備考
1	10YR2/1 黑	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱状）	1	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱状）
2	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを少量に含む（柱状）	2	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量に含む（柱状）
SB21 据立柱建物跡 P7-G,G'				SB21 据立柱建物跡 P8-H,H'			
No.	上色	土性	備考	No.	上色	土性	備考
1	10YR2/1 黑	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱状）	1	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱状）
2	10YR2/1 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを少量に含む（柱状）	2	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量に含む（柱状）

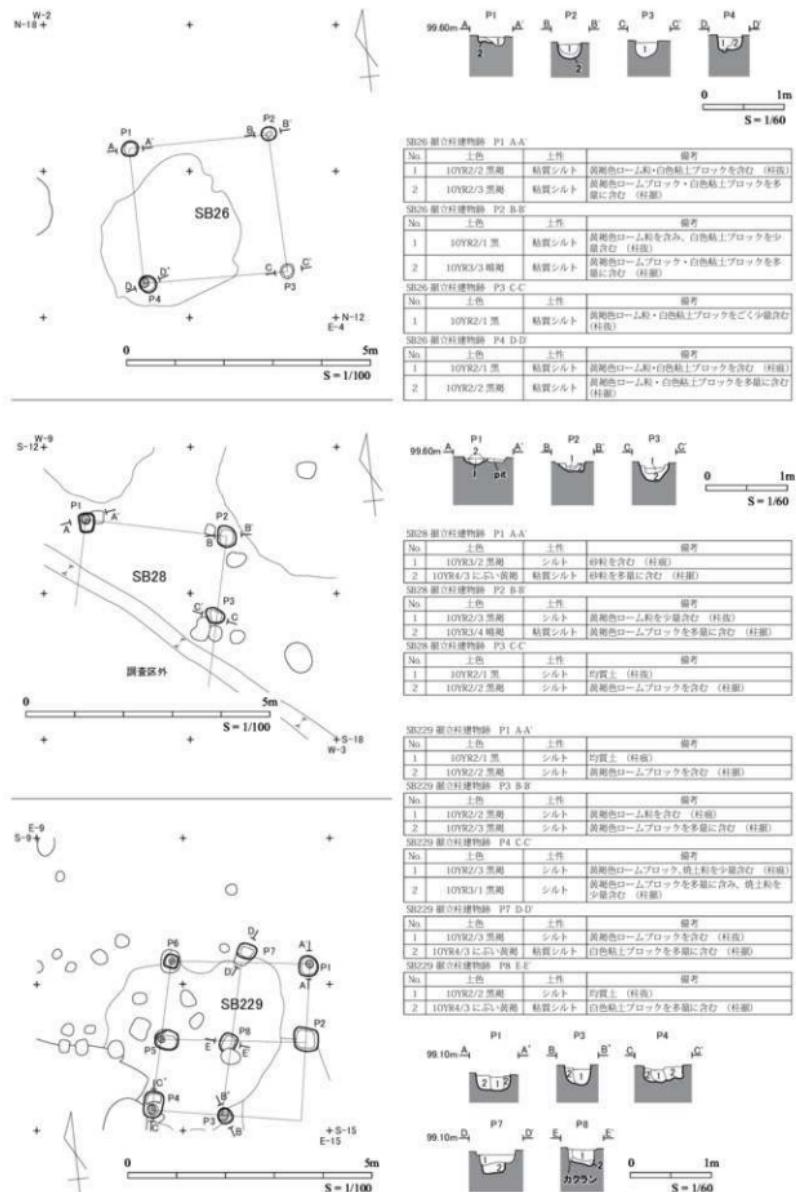
第28図 SB20・21 据立柱建物跡



第29図 SB22・23 調査柱建物跡



第30図 SB24・25 延立柱建物跡



第31図 SB26・28・229掘立柱建物跡

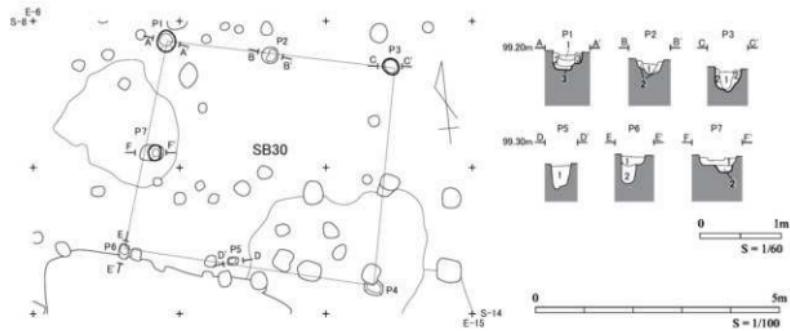
／南北棟柱建物

〔方向〕 東側柱列：N-15°-W

〔柱穴〕 6か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸23-33cm、短軸21-32cmの略円形・隅丸方形を呈し、深さ18-34cmである。4か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 東側柱列：(386) cm

北側柱列：西から (163) - (191) cm



SB30 棚立柱建物跡 P1 A-A'

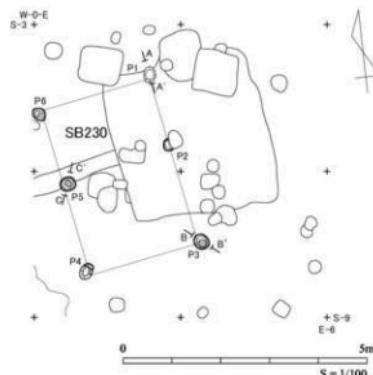
No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	(E面土) (柱地)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱地)
3	10YR4/3に近い 黒褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを多量に含む (柱地)

SB30 棚立柱建物跡 P5 D-D'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱地)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱地)

SB30 棚立柱建物跡 P7 F-F'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱地)



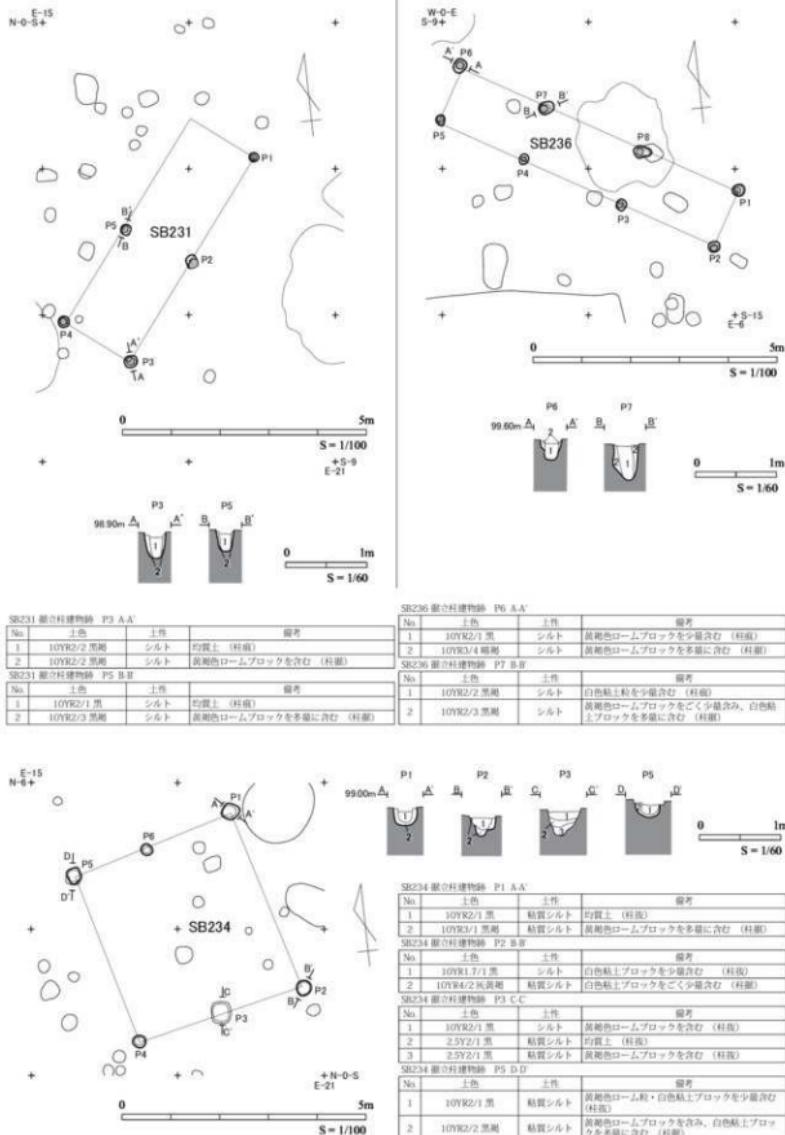
SB230 棚立柱建物跡 P1 A-A'

No.	上色	土性	備考
1	10YR3/3 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロック・白いブロック・炭化物を含む (柱地)
2	10YR2/1 黑	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを多量に含む (柱地)
3	10YR4/4 黑	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含み、白色粘土ブロックを含む (柱地)

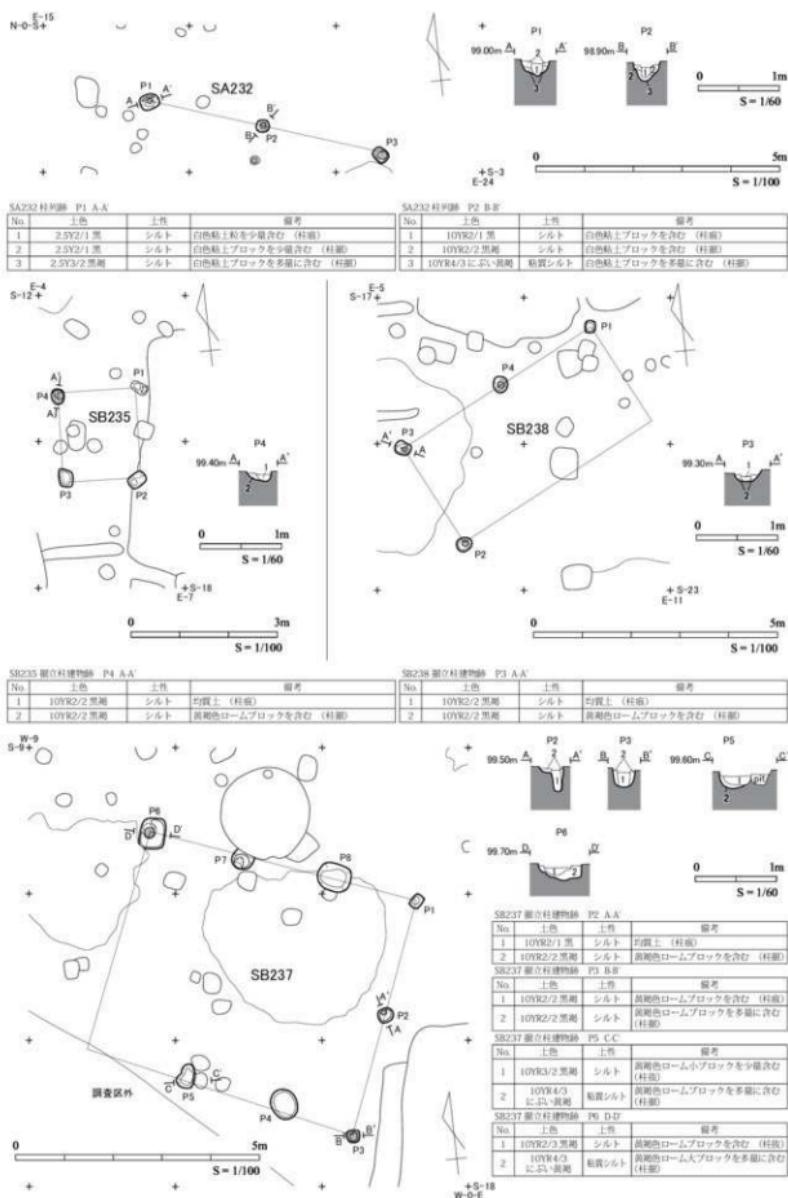
SB230 棚立柱建物跡 P5 C-C'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱地)
2	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱地)

第32図 SB30・230 棚立柱建物跡



第33図 SB231・234・236振立柱建物跡



第34図 SB235・237・238 据立柱建物跡、SA232 柱列跡

32-36cm、短軸 26-28cm の楕円形・団丸方形を呈し、深さ 13-35cm である。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、1か所で平面形が直径 22cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：(184) cm、北側柱列：(160) cm
〔出土遺物〕なし

【SB236 挖立柱建物跡】(第33図、写真図版4・12)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SB236-SB24

〔規模・形状〕桁行3間(6.20m)、梁行1間(1.20m)
／東西棟側柱建物

〔方向〕北側柱列：W-30°-N

〔柱穴〕8か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸

20-37cm、短軸 16-25cm の略円形・楕円形を呈し、深さ 13-46cm である。8か所で平面形が直径 9-16cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から 188-212-220cm

東側柱列：120cm

〔出土遺物〕なし

【SB237 挖立柱建物跡】(第34図写真図版4・12)

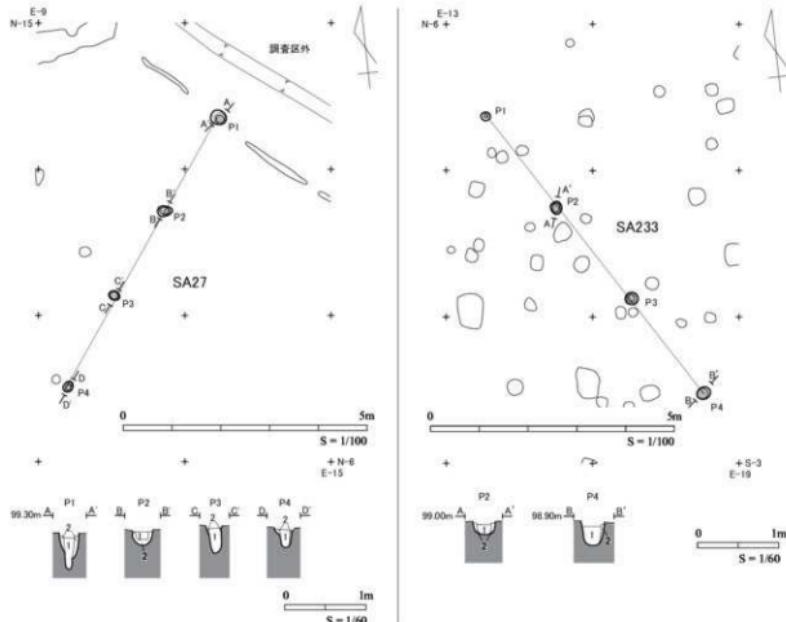
〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SB237→SX13-SB28

〔規模・形状〕桁行3間(5.66m)、梁行2間(4.96m)
／東西棟側柱建物

〔方向〕東側柱列：W-21°-N

〔柱穴〕8か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸



SA27柱跡 P1-A

No.	土色	上性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	白色軸土ブロックを少量含む (柱頭)
2	2.5Y3/2 黒褐	シルト	白色軸土ブロックを多量に含む (柱頭)

SA27柱跡 P2-B

No.	土色	上性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	白色軸土ブロックを少量含む (柱頭)
2	10YR4/1 黑褐	粘質シルト	白色軸土ブロックを多量に含む (柱頭)

SA27柱跡 P3-C

No.	土色	上性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	白色軸土ブロックを少量含む (柱頭)
2	10YR3/2 黑褐	粘質シルト	白色軸土ブロックを多量に含む (柱頭)

SA27柱跡 P4-D'

No.	土色	上性	備考
1	10YR2/2 黑褐	シルト	粘質ロームを多く少量含む (柱頭)
2	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱頭)

S A 233柱跡 P2-A

No.	土色	上性	備考
1	10YR2/1 黑	シルト	粘質土 (柱頭)
2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱頭)

SA233柱跡 P4-B

No.	土色	上性	備考
1	10YR2/1 黑	シルト	粘質土 (柱頭)
2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱頭)

第35図 SA27・233柱列跡

28~68cm、短軸 22~57cm の隅丸方形・楕円形を呈し、深さ 14~33cm である。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2か所で平面形が直径 12~17cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から (202) - (196) - (168) cm
東側柱列：北から (236) - 260cm

〔出土遺物〕土師器・須恵器小型品が出土した。

〔SB238 掘立柱建物跡〕(第 34 図、写真図版 3)

〔位置〕1 区南／平坦面

〔重複〕SB238 - SI4・SB15

〔規模・形状〕桁行 2 間 (4.60m)、梁行 1 間 (2.32m)
／東西棟側柱建物

〔方向〕西側柱列：W-27° - S

〔柱穴〕4 か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸 26~34cm、短軸 21~28cm の楕円形・隅丸方形を呈し、深さ 14~17cm である。3 か所で平面形が直径 13~14cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から 240 - (220) cm
西側柱列：232cm

〔出土遺物〕土師器環・甕、ロクロ土師器环が出土した。

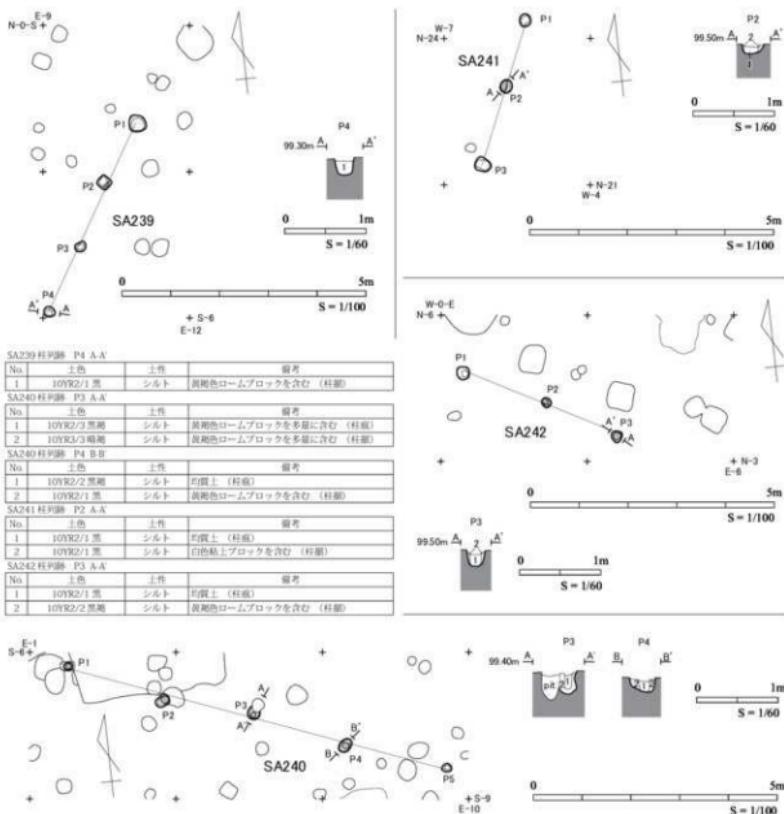
(3) 柱列跡

〔SA27 柱列跡〕(第 35 図、写真図版 5・12)

〔位置〕1 区南／平坦面

〔重複〕SA27 - SD64

〔規模・形状〕南北 3 間 (6.30m)



第 36 図 SA239~242 柱列跡

【方向】N-37°-E
【柱穴】4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸22-32cm、短軸16-29cmの略円形・楕円形を呈し、深さ20-40cmである。4か所で平面形が直径14-18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 北から 220-200-210cm

(出土遺物) なし

【SA232 柱列跡】(第34図、写真図版5・12)

(位置) 1 区南／平坦面

[重複] なし

〔規模・形状〕 東西2間(4.88m)

[方向] W-19°-N

〔柱穴〕3か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸26-38cm、短軸25-32cmの隅丸方形を基調とし、深度14-26cmである。3か所で平面形が直径11-21cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 西から 238-250cm

〔出土遺物〕なし

【SA233 柱列跡】(第35図、写真図版5・42)

〔位置〕 1区南／平坦面

(重複) なし

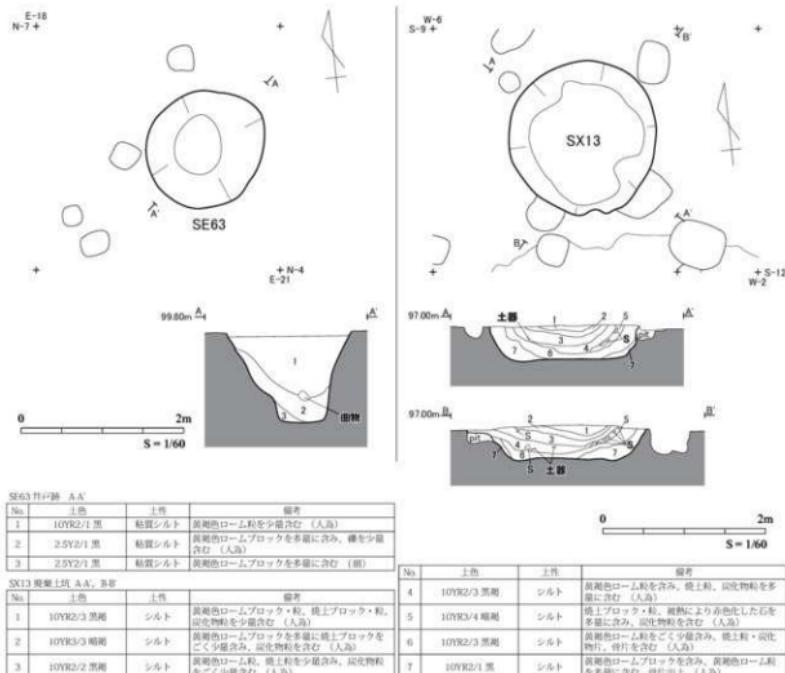
〔規模・形状〕南北3間(7.24m)

[方向] N-32°-W

〔柱穴〕4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸18-30cm、短軸18-25cmの略円形・横円形を呈し、深さ17-30cmである。4か所で平面形が直径10-24cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。また、P1柱穴の掘方底面に平面形が一辺4cmの方形を呈し、下端が杭状に加工された柱材の一部（写真図版42-9）が残存していた。

〔柱間寸法〕 北から 238-240-246cm

〔出土遺物〕 土師器が出土した。



第37図 SF63井戸跡 SX13磨擦土坑

【SA239 柱列跡】(第36図)

〔位置〕I区南／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北3間(4.25m)

〔方向〕N-32°-E

〔柱穴〕4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸23-34cm、短軸20-33cmの略円形・楕丸形を呈し、深さ14-28cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から(137)-(140)-(148)cm

〔出土遺物〕土器が出土した。

【SA240 柱列跡】(第36図、写真図版4・12)

〔位置〕I区南／平坦面

〔重複〕SI2→SA240-SB30・SB230

〔規模・形状〕東西4間(7.68m)

〔方向〕W-20°-N

〔柱穴〕5か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸18-32cm、短軸16-24cmの円形・楕円形・楕丸形を呈し、深さ18-30cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡、4か所で平面形が直径13-16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から208-182-164-(214)cm

〔出土遺物〕なし

【SA241 柱列跡】(第36図、写真図版5)

〔位置〕I区南／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北2間(3.08m)

〔方向〕N-24°-E

〔柱穴〕3か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸25-33cm、短軸24-27cmの円形・不整橢円形を呈し、深さ8-21cmである。1か所で平面形が長軸26cm、短軸14cmの橢円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から(140)-(168)cm

〔出土遺物〕なし

【SA242 柱列跡】(第36図、写真図版5)

〔位置〕I区南／平坦面

〔重複〕なし

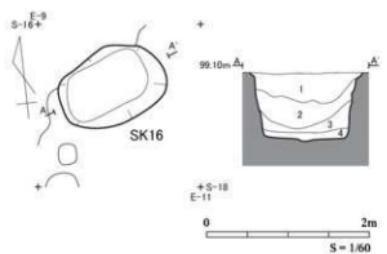
〔規模・形状〕東西2間(3.40m)

〔方向〕W-29°-N

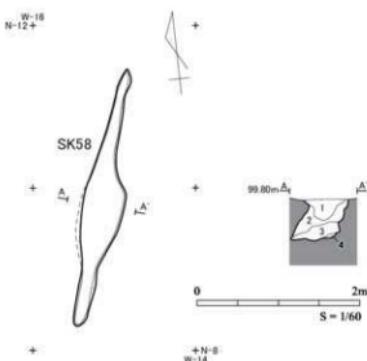
〔柱穴〕3か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸20-27cm、短軸17-25cmの略円形・楕丸形を呈し、深さ12-26cmである。2か所で平面形が直径15-17cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から(176)-164cm

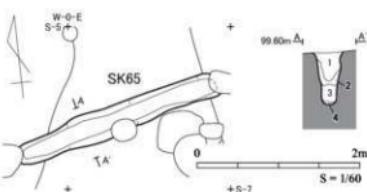
〔出土遺物〕なし



SK16 土坑 AA'		
No.	上色	上性
1	10YR2/2 黒褐色	シルト
2	10YR2/1 黒	シルト
3	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト
4	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト

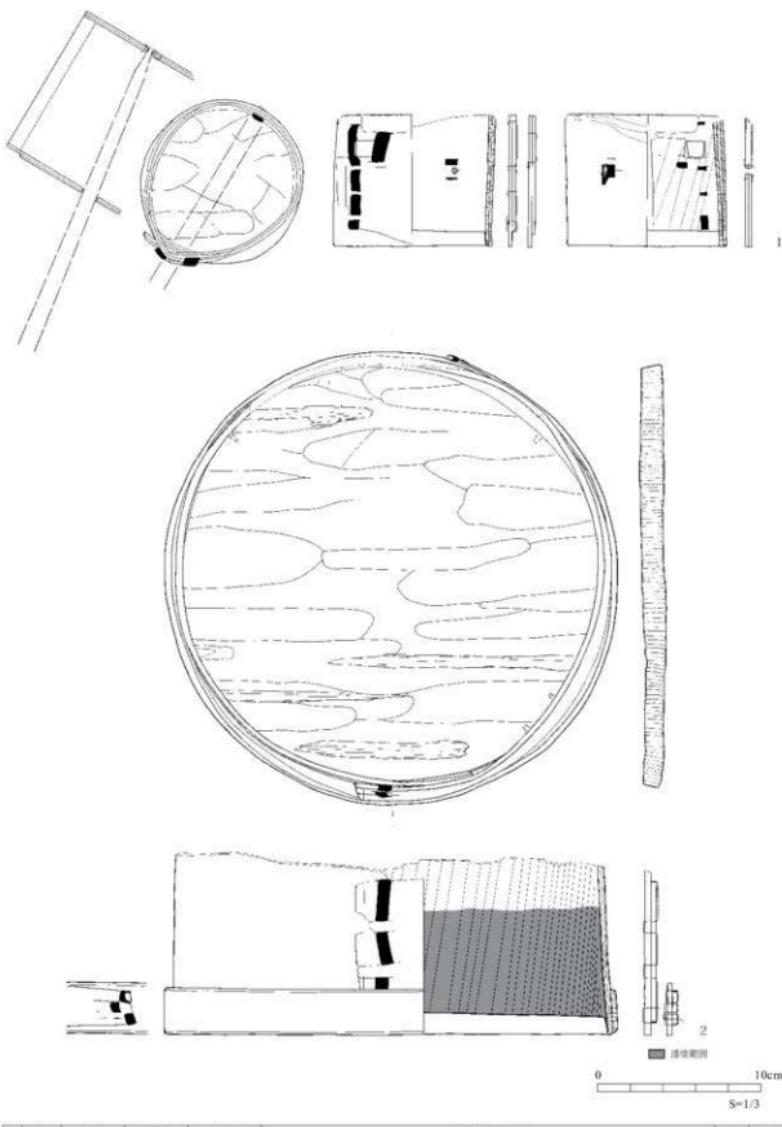


SK58 落とし穴状土坑 AA'		
No.	上色	上性
1	10YR2/3 黒褐色	シルト
2	10YR2/3 黒褐色	シルト
3	10YR2/3 黒褐色	シルト
4	10YR2/2 黒褐色	シルト



SK65 落とし穴状土坑 AA'		
No.	上色	上性
1	10YR2/3 黒褐色	シルト
2	10YR2/4 黑褐色	粘質シルト
3	10YR2/3 黑褐色	シルト
4	10YR2/4 ぶどう色	粘質シルト

第38図 SK16・58・65 落とし穴状土坑



第39図 SE63 井戸跡出土遺物

No.	遺物名	層位	種類	断面	製作方法・特徴	登録番号	写真
1	SE63	底面	木製品	油物柄杓	直径 9.8cm 高さ 8.1cm 底板厚 1.0cm 斜板厚 0.2cm 神皮墨七 柄部欠損 側板: 板目材 底板: 板目材 側板上部: 両方形穿孔 (1.10 × 1.25cm)・前穴 (約 0.3cm、内面から穿孔)	401	39
2	SE63	堆積上 2層	木製品	油物	直径 27.9cm、高さ 11.2cm、底板厚 1.2~1.5cm 側材厚 0.3~0.4cm 神皮墨七 内面: 黒漆塗 底板: 板目材 側板: 板目材・板目材 側板内面: 漆皮向の切り込み 側板下部: 板目材 (約 0.4cm 厚) 5分頭貫入 (氏板固定)	402	40

(4) 井戸跡

【SE63 井戸跡】(第37・39図、写真図版13・39・40)

【位置】1区南／平坦面

【重複】SE63 - SB21

【規模・形状】平面形が長軸154cm、短軸140cmの橢円形を呈し、深さ110cmである。下部が円筒形を呈し、上部が逆台形状に開く。井戸側は確認されなかった。

【堆積土】黒色粘質シルトで、3層に細分される。1層は少量の地山粒、2層は多量の地山ブロックと少量

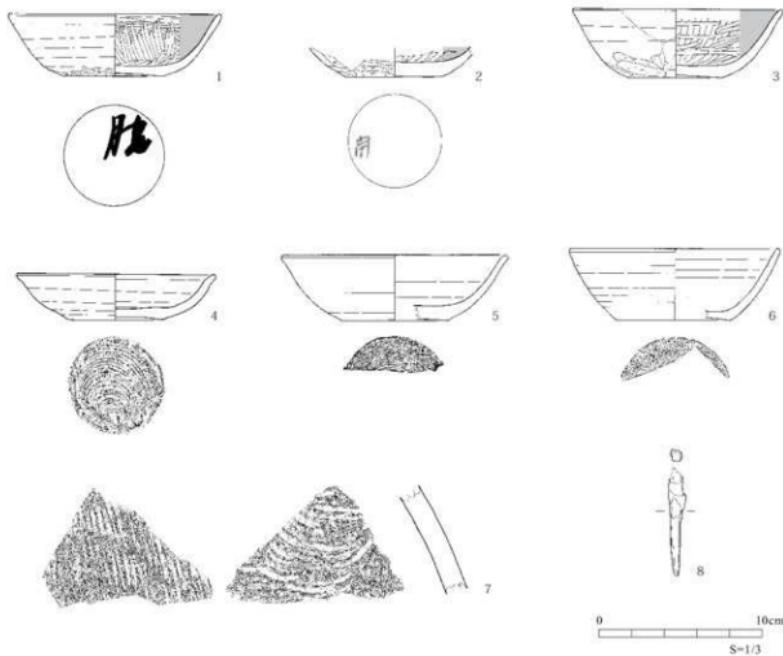
の礫、3層は多量の地山ブロックを含む。1・2層は人為的理土、3層は壁際の崩落土と考えられる。

【出土遺物】堆積土2層から木製曲物容器(写真図版39-2)、底面から木製曲物柄杓(写真図版39-1)が出土した。このほか、土器・須恵器壺が出土した。

(5) 廃棄土坑

【SX13 廃棄土坑】(第37・40・41図、写真図版14・41・42)

【位置】1区南／平坦面



No.	遺構名	層位	種類	面種	表面調査・特徴		法面(cm)				現存	回数	写真
					上界	底界	高さ	上界	底界	高さ			
1	SX13	堆積土	ロクロ土解器	环	外面：ロクロナデ→(底付近)手持ちヘラケズリ。(底)切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 機方向へラミガキ→底方向へラミガキ→(底) 放射状ヘラミ		13.2	6.2	3.8	2/3	057	41-2	
2	SX13	堆積土5層	ロクロ土解器	环	外面：ロクロナデ→(底付近)手持ちヘラケズリ。(底)切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→底方向へラミガキ→(底) 放射状ヘラミ		5.8	(1.5)	一部	059	41-4		
3	SX13	堆積土	ロクロ土解器	环	外面：ロクロナデ→(底付近)手持ちヘラケズリ。(底)ハーフカット→手持ちヘラケズリ 内面：(底付近)放射状ヘラミガキ→底方向へラミガキ→(底) 機方向へラミガキ→黑色処理 外面：(底付近)墨書き「口」 内面：(底付近) 墨書き「口」		13.0	5.8	4.2	5/6	055	41-3	
4	SX13	堆積土	漆器底	环	外内面：ロクロナデ。(底) 剥離剥切→無地格		12.3	5.9	3.9	5/6	054	41-5	
5	SX13	堆積土	漆器底	环	外内面：ロクロナデ。(底) 剥離剥切→無地格		(14.0)	(6.8)	4.1	1/3	061	41-6	
6	SX13	堆積土5層	漆器底	环	外内面：ロクロナデ。(底) 剥離剥切→無地格 内面：研ぎすき		(13.0)	(7.0)	4.4	1/3	056	41-7	
7	SX13	堆積土5層	漆器底	环	外面：平行タクタキ 内面：輪心(?)文アヌ共通					(6.4)	一部	060	41-8
No.	遺構名	層位	種類	材質	特徴		法面(mm × g)				現存	回数	写真
					上	中	下	厚	重	面			
8	SX13	堆積土5層	釘	鉄	頭部欠損		(66.0)	5.0	5.5	(6.7)	一部	208	42-3

第40図 SX13 廃棄土坑出土遺物（1）

〔重複〕SB237→SX13

〔規模・形状〕平面形が長軸190cm、短軸182cmの略円形を呈し、断面形は深さ40cmの逆台形を呈する土坑で、底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕7層に細分される。1層は少量の地山・焼土ブロック、炭化物粒を含む黒褐色シルト、2層は多量の地山ブロックとごく少量の焼土ブロック、炭化物粒を含む暗褐色シルト、3層は少量の地山・焼土粒を含む黒褐色シルト、4層は多量の焼土・炭化物粒と地山粒を含む黒褐色シルト、5層は多量の焼土ブロックと焼繰、炭化物粒を含む暗褐色シルト、6層はごく少量の地山粒と焼土粒、炭化物粒、骨片を含む黒褐色シルト、7層は多量の地山粒と地山ブロック、骨片を含む黒色シルトで、全て人為的埋土と考えられる。堆積土中層の3~5層には遺物を多く含み、下層の6~7層には骨片を含む。

〔出土遺物〕堆積土5層からロクロ土師器環（第40図6）

図2)・甕（第41図1）、鉄釘（第40図8）、須恵器环（第40図6）・甕（第40図7）、堆積土からロクロ土師器環（第40図1~3）・甕（第41図2）、須恵器环（第40図4~5）が出土した。ロクロ土師器環（第40図1~3）は外底面あるいは外面の体下部に墨書きが見られ、判読できるものには「勝」（第40図1）がある。このほか、土師器環・小型品・甕が出土した。

(6) 落とし穴状土坑

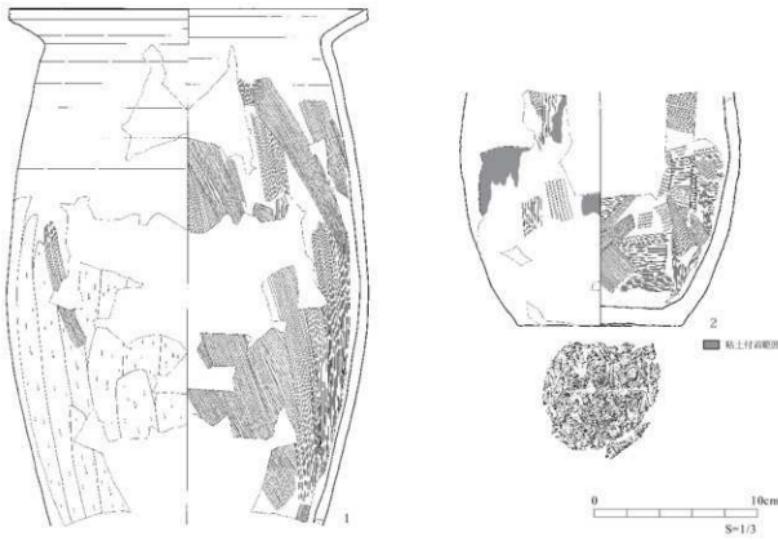
【SK16落とし穴状土坑】(第38図、写真図版13)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SK16→SI4

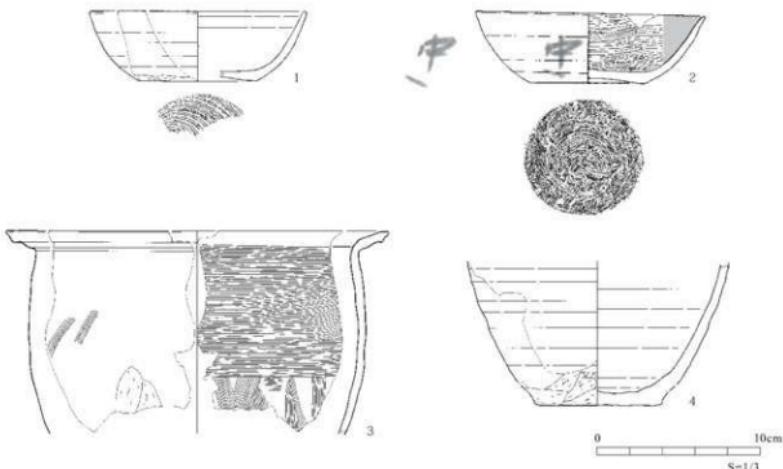
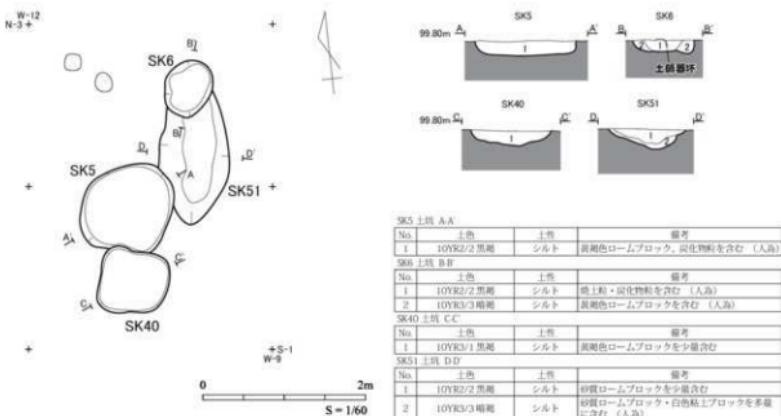
〔規模・形状〕平面形が長軸130cm、短軸92cmの梢円形を呈し、断面形は深さ82cmの箱形を呈する。

〔堆積土〕4層に細分される。1・2層は地山粒をごく少量含む黒色・黒褐色シルト、3層は地山ブロックを極めて多量に含む黒褐色粘質シルト、4層は地山ブ



第41図 SX13 墓窯土坑出土遺物（2）

No.	遺物名	層位	種類	説明	断面調査・特徴		法面 (cm)				
					上界	底性	高さ	残存	登録	写真	
1	SX13	堆積土5層	ロクロ土師器環	甕	外底: ロクロナダ→(底) ハラケズリーナダ 内面: ロクロナダ→(底) ハラナダ	(22.1)	(31.9)	一部	058	42.1	
2	SX13	堆積土	土師器環	甕	外底: ハゲメ、(底) 制代底 内面: ハゲメーナダ	外底: (脚) 粘土付縫合部	(10.2)	(14.4)	一部	062	42.2



No.	遺構名	層位	種類	基盤	形状調整・特徴		法量 (cm)			残存	物語	写真
					外面	内面	(口径)	底径	断面			
1	SK6	堆積上1層	漆器類	环	外面: ロクロナヂ→(底付近) 手持ちハラケズリ。(底) 回転木切り→無調査 内面: ロクロナヂ→(底全体) 平滑		(13.4)	7.20	4.3	1/8	068	3B-11
2	SK6	堆積上1層	ロクロ土器類	环	外面: ロクロナヂ→(底) 回転木切り→無調査 内面: (底) 斜面状ヘラミガキ→(底) 構造的ヘラミガキ→(底) 回転木切り→無調査 内面: (底) ハラケズリ・ナヂ 外面: (C-I) ロクロナヂ、(B) ハラケズリ・ナヂ 内面: (C-I) ロクロナヂ→(底) ナヂ・ヘラミナヂ		(14.1)	7.0	4.3	明完形	071	3B-10
3	SK6	堆積上1層	ロクロ土器類	盤			(23.6)		(12.5)	一部	070	3B-12
4	SK6	堆積上1層	ロクロ土器類	盤	外面: ロクロナヂ→(底付近) ハラケズリ 内面: ロクロナヂ→(底上) 小縫を多く含む			(7.9)	(8.9)	一部	072	3B-13

第42図 SK5・6・40・51土坑、SK6土坑出土遺物

ロックを含む黒褐色粘質シルトで、1・2・4層は自然堆積土、3層は崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK58 落とし穴状坑】(第38図、写真図版13)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SK58 → SB25

〔規模・形状〕平面形が長軸320cm、短軸50cmの溝状を呈し、断面形は深さ52cmの不整台形を呈する。

〔堆積土〕黒褐色シルトで、4層に細分される。1・3層はごく少量の地山粒、2層は極めて多量の地山黄褐色

色ロームブロック、4層は極めて多量の砂粒を含む。1・3層は自然堆積土、2・4層は崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

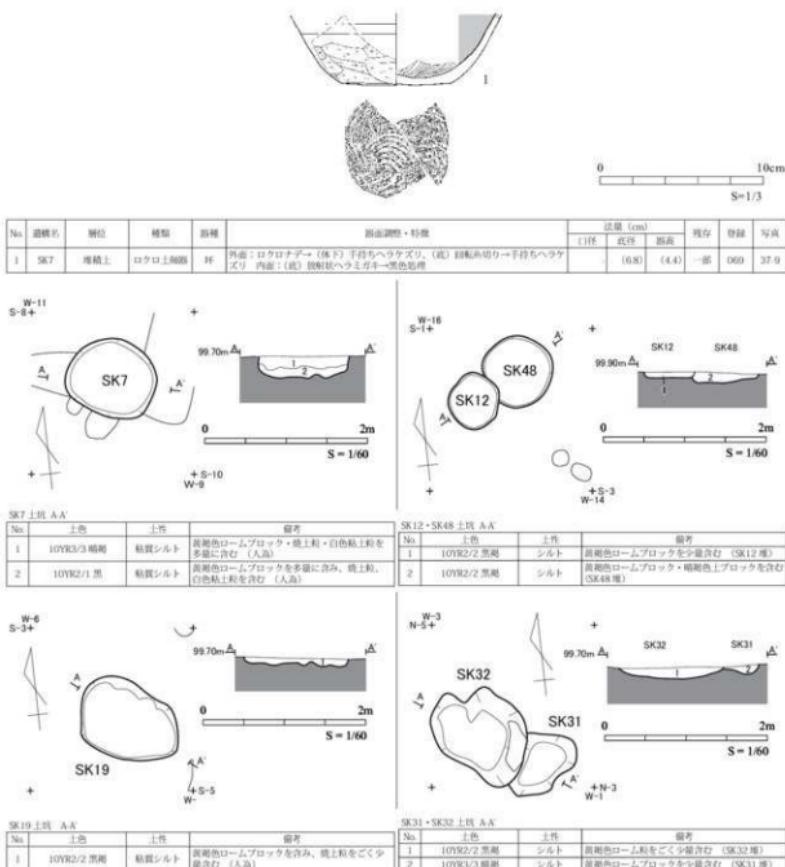
【SK65 落とし穴状坑】(第38図、写真図版13)

〔位置〕1区南／平坦面

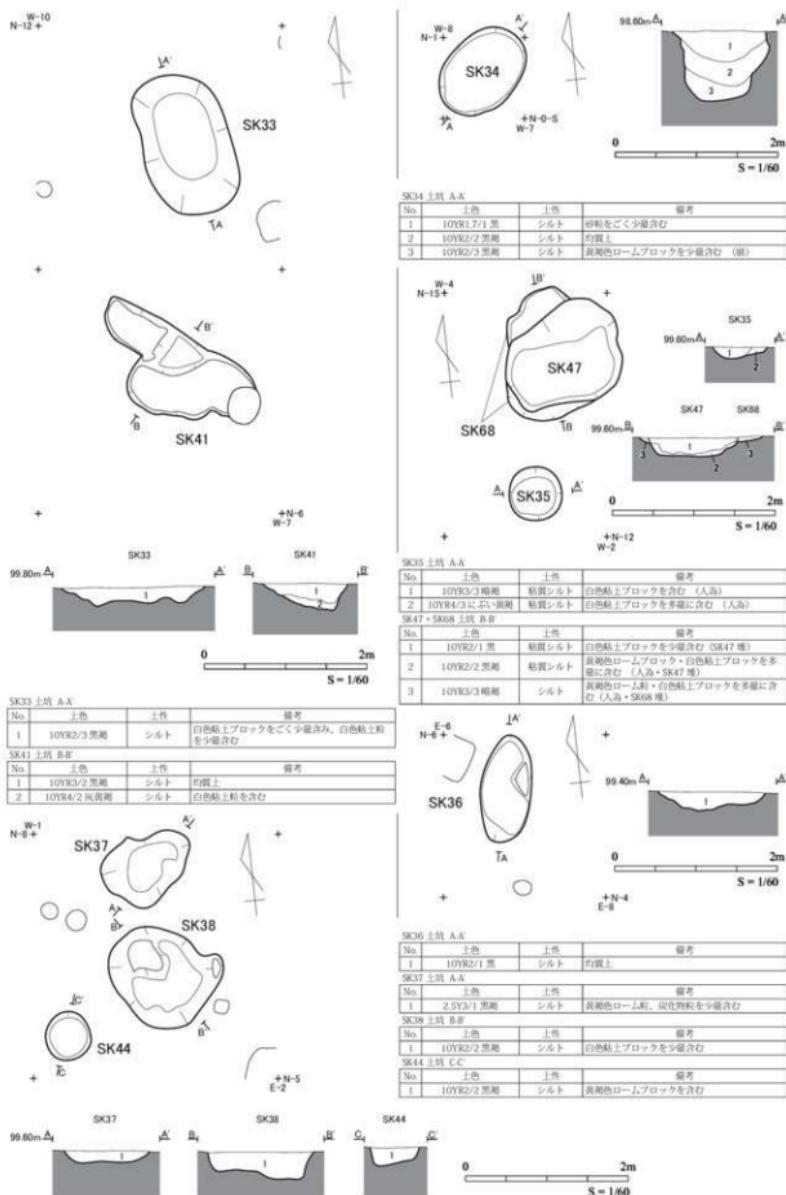
〔重複〕SK65 → SI1・SI2・SB23

〔規模・形状〕平面形が長軸208cm以上、短軸38cmの溝状を呈し、断面形は深さ62cmのU字形を呈する。

〔堆積土〕4層に細分される。1層は地山ブロック・粒を少量含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを多



第43図 SK7・12・19・31・32・48 土坑、SK7 土坑出土遺物



第44図 SK33-38・41・44・47・68 土坑

量に含む暗褐色粘質シルト、3層は地山ブロックを含む暗褐色シルト、4層は白色粘土ブロックを多量に含むにぶい黄褐色粘質シルトで、1・3層は自然堆積土、2・4層は崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(7) 土坑

【SK5 土坑】(第42図)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SK51 → SK5 → SK40

〔規模・形状〕平面形が長軸122cm、短軸114cmの楕円形を呈し、断面形は深さ18cmのU字形を呈する。

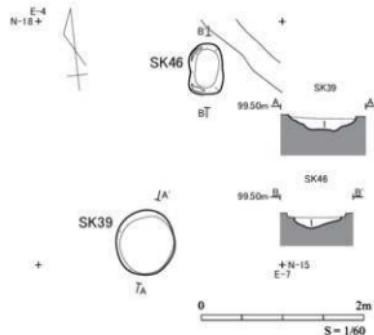
〔堆積土〕地山ブロック・炭化物粒を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕ロクロ土器器表が出土した。

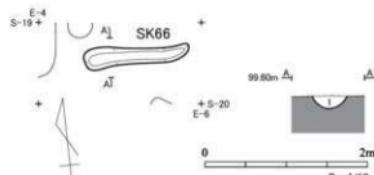
【SK6 土坑】(第42図、写真図版13・38)

〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SK51 → SK6



SK39上坑 A'		
No.	土色	土性
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト
白色粘土粒を含む（人為）		
SK46上坑 B-B'		
No.	土色	土性
1	10YR4/3 黒褐	粘質シルト
白色粘土ブロックを含む（人為）		



SK66上坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む

〔規模・形状〕平面形が長軸70cm、短軸58cmの梢円形を呈し、断面形は深さ16cmのU字形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は焼土・炭化物粒を含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを含む暗褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土1層からロクロ土器器表(第42図2)・

甕(第42図3-4)・須恵器表(第42図1)が出土した。

このほか、土器器表、ロクロ土器器表が出土した。

【SK7 土坑】(第43図、写真図版13・37)

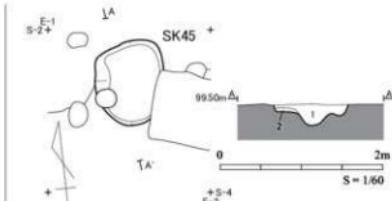
〔位置〕1区南／平坦面

〔重複〕SI8 → SK7

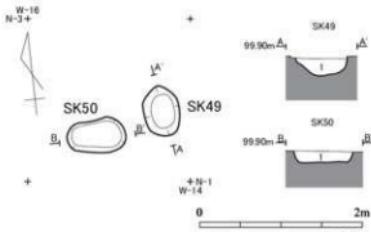
〔規模・形状〕平面形が長軸110cm、短軸100cmの梢円形を呈し、断面形は深さ28cmのU字形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は地山ブロック・焼土・白色粘土粒を多量に含む暗褐色粘質シルト、2層は地山ブロックを多量に含み、焼土粒・白色粘土粒を含む黑色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土からロクロ土器器表(第43図1)、

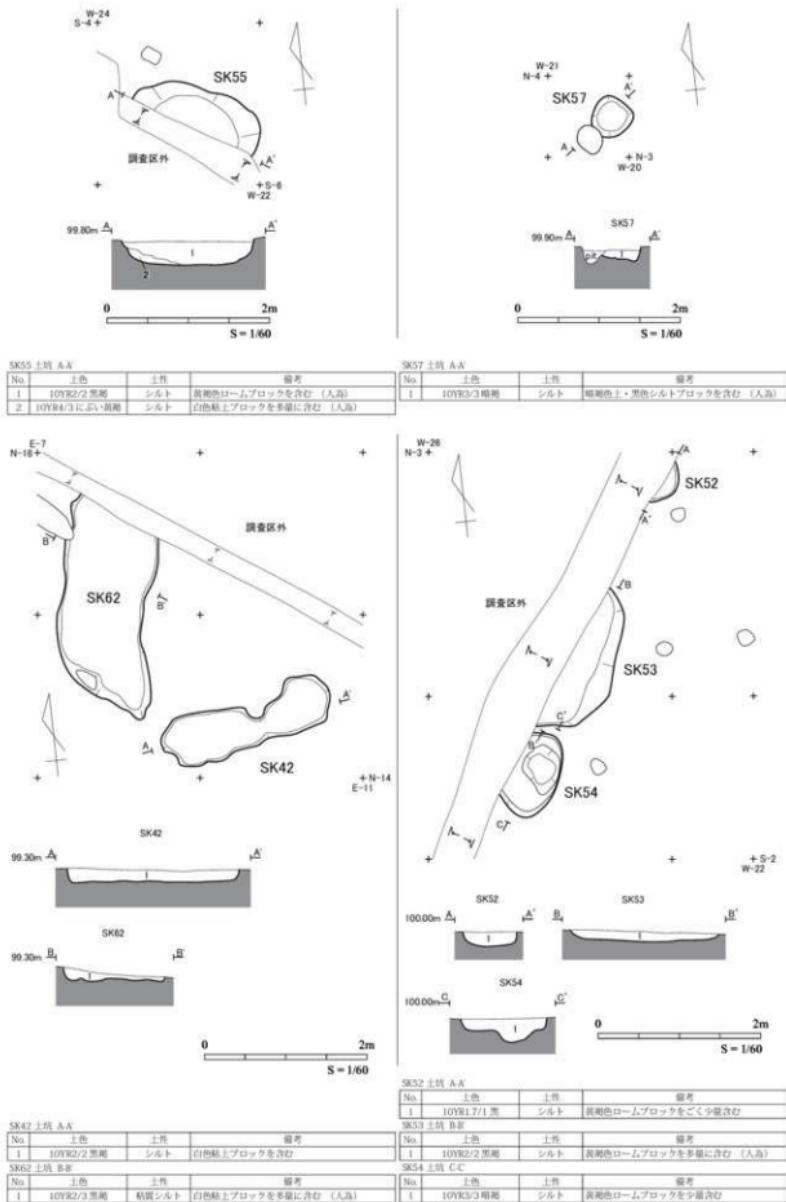


SK45上坑 A-A'		
No.	土色	土性
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト
2	10YR4/3 にぶい黒褐	粘質シルト



SK49上坑 A-A'		
No.	土色	土性
1	10YR2/2 黒褐	シルト
黄褐色ロームシルトを含む		
SK50上坑 B-B'		
No.	土色	土性

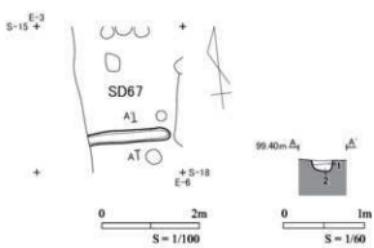
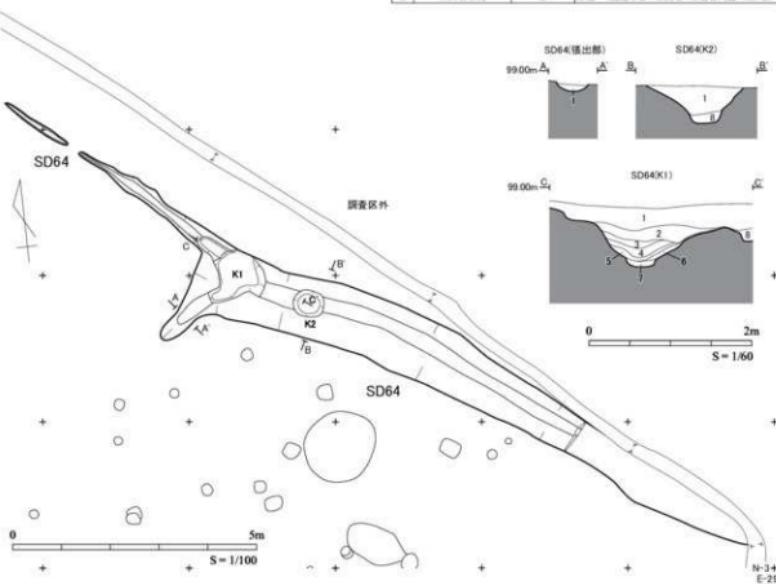
第45図 SK39・45・46・49・50・66 土坑



第46図 SK42・55-57・59・62 土坑

E-14
+N-15

SD64 溝跡 A/A, B/B, C/C		土性	工作	備考
No.				
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・砂を少混合	
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少混合、有機物を含む(K1層)	
3	2.5Y2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少混合、有機物を含む(K1層)	
4	2.5Y3/1 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(K1層)	
5	2.5Y4/1 黄灰	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(K1層)	
6	7.5Y6/1 黄	砂	砂層 (機械開墾・S成層・S層と共通・K1層)	
7	7.5Y6/1 黄	砂	小礫を多量に含む(K1層)	
8	7.5Y6/1 黄	砂	砂層 (機械開墾・水成層・S層と共通・K2層)	



SD67 溝跡 A-A'		土性	工作	備考
No.				
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム砂を少混合	
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(人馬)	

No.	遺物名	層位	種類	段名	特徴	重量 (mm × g)					
						件	厚	重	現存	登録	写真
1	SD64	堆積上・層	銅鏡	背水透鏡	跋文「背水透鏡」	24.0	1.3	3.7	完形	306	37-11



第47図 SD64・67溝跡、SD64溝跡出土遺物

須恵器甕（写真図版 37-10）が出土した。このほか、土師器环、焼けたスサ入り粘土塊が出土した。

【SK34 土坑】（第 44 図、写真図版 13）

【位置】1 区南／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸 122cm、短軸 86cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 86cm の U 字形を呈する。【堆積土】3 層に細分される。1 層は砂粒を含む少量含む黒色シルト、2 層は均質な黒褐色シルト、3 層は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトで、1・2 層は自然堆積土、3 層は崩落土と考えられる。

【出土遺物】なし

【SK45 土坑】（第 45 図）

【位置】1 区南／平坦面

【重複】SI2 → SK45 → SB10

【規模・形状】平面形が長軸 106cm、短軸 82cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 26cm の逆台形を呈するが中央部が窪む。

【堆積土】2 層に細分される。1 層は地山・焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む暗褐色粘質シルト、2 層は地山ブロックを含み、少量の焼土・炭化物粒を含むにぶい黄褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】土師器环・甕、須恵器杯が出土した。

【SK47 土坑】（第 44 図）

【位置】1 区南／平坦面

【重複】SK68 → SK47

【規模・形状】平面形が長軸 156cm、短軸 124cm の不整圓丸方形を呈し、断面形は深さ 22cm の逆台形を呈する。

【堆積土】2 層に細分される。1 層は地山ブロックを少量含む黒色粘質シルト、2 層は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘質シルトで、1 层は自然堆積土、2 層は人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】土師器甕が出土した。

【SK66 土坑】（第 45 図）

【位置】1 区南／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸 130cm、短軸 26cm の溝状を呈し、断面形は深さ 5cm の椀形を呈する。

【堆積土】地山ブロックを含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】クロクロ土師器环が出土した。

（8）溝跡

【SD64 溝跡】（第 47 図、写真図版 14・37）

【位置】1 区南／平坦面

【重複】SK62 → SD64 → SA27・SK42

【規模・形状】北西—南東方向に延びる。延長 28.5m を確認し、両端が調査区外へ延びている。中央付近の底面で 2 か所の掘り込み（K1・2）を確認した。K1 は平面形が長軸 120cm、短軸 110cm の不整形を呈し、断面形が深さ 92cm の U 字形を呈する。K2 は K1 の 0.6m 南東側に位置し、平面形が長軸 65cm、短軸 55cm の楕円形を呈し、断面形が深さ 22cm の U 字形を呈する。溝跡は K1 より南東側では上幅 118-144cm、底幅 20-38cm で、横断面形は深さ 22-40cm の逆台形を呈する。K1 より北西侧では上幅 6-40cm、底幅 6-20cm で、横断面形は深さ 12cm の椀形を呈する。また、K1 から南西側へ張り出す上幅 40cm、底幅 20cm、横断面形が深さ 12cm の椀形を呈する溝跡の一節を確認した。

【堆積土】溝跡の堆積土（1 層）は地山ブロック・粒を少量含む黒色粘質シルトである。K1 の堆積土（2-7 層）は 6 層に細分され、2 層は少量の地山ブロックと植物遺体を含む黒褐色シルト、3 層は少量の地山粒と炭化物粒を含む黒色粘質シルト、4 層は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルト、5 層は地山ブロックを多量に含む黄灰色粘質シルト、6 層は灰色砂層、7 層は小礫を多量に含む灰色砂層である。K2 には灰色砂層（6 層）が堆積している。1-4 層は自然堆積土、5 層は崩落土、6・7 層は機能時の堆積土と考えられる。

【出土遺物】堆積土 1 層から銅鏡（寛永通宝）（第 47 図）、須恵器甕の破片が出土した。

【SD67 溝跡】（第 47 図）

【位置】1 区南／平坦面

【重複】SD67 → SI3a・SI3b

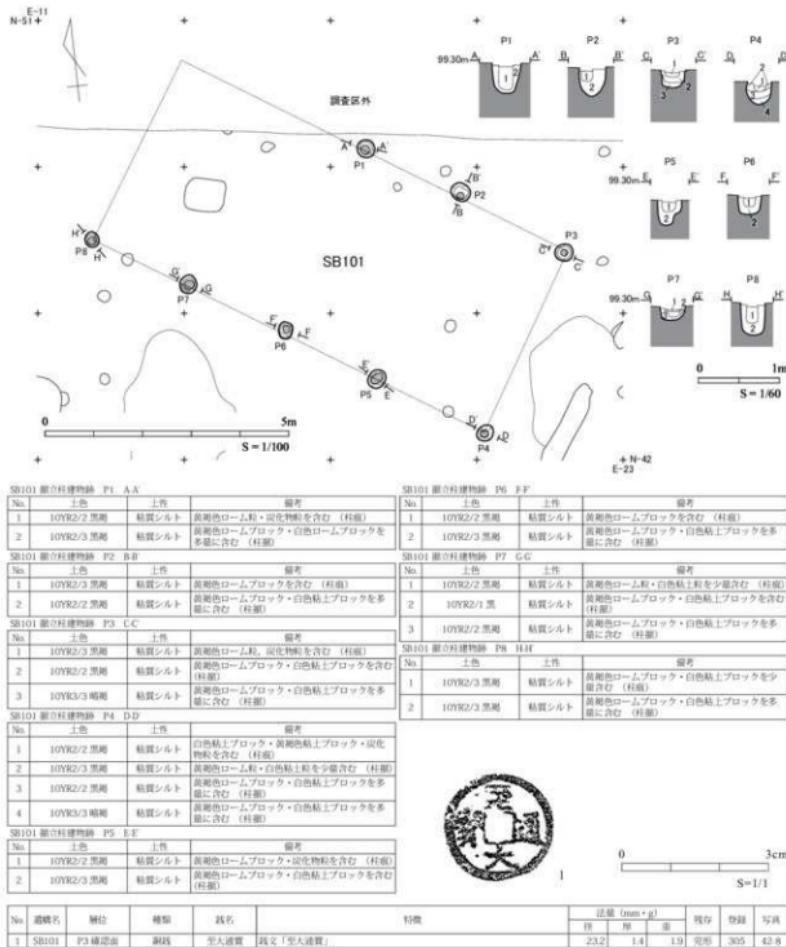
【規模・形状】東西方向に延びる。長さ 1.66m を確認し、西側は SI3 住居跡に壊されている。上幅 24-26cm、底幅 14-18cm で、横断面形が深さ 12cm の U 字形を呈する。

【堆積土】2 層に細分される。1 層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、2 層は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで、1 层は自然堆積土、2 層は人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】なし

2.1 区北

遺跡範囲の南部に位置し、長さ約36m、幅約34mの不整四角形の調査区である。調査区内は東へ向かって僅かに傾斜する平坦面である。遺構確認面は現地表面から深さ15~40cmのIV~V層上面である。遺構は掘立柱建物跡7棟、柱列跡3条、井戸跡5基、土坑5基、溝跡4条、粘土探査坑2基、竪穴状遺構1基を確認した(第48図、写真図版15~16・42)。



第48図 SB101 掘立柱建物跡・出土遺物

17~39cmである。8か所で平面形が直径15~19cmの円形または長軸22~28cm、短軸16~18cmの楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：西から220~220~212~248cm

東側柱列：400cm

〔出土遺物〕P3柱穴確認面から銅鏡（至大通宝、第48図1）が出土した。このほか、土器器類が出土した。

〔SB102 掘立柱建物跡〕（第49図、写真図版15・16）

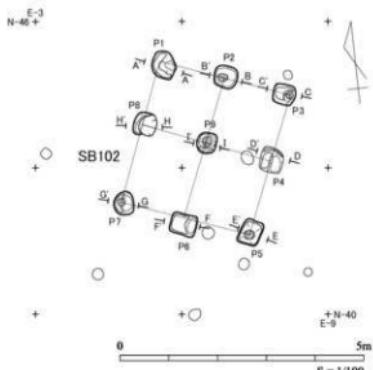
〔位置〕1区北／平坦面

〔重複〕SB102-SB244

〔規模・形状〕桁行2間（2.98m）、梁行2間（2.72m）

／南北棟総柱建物

〔方向〕東側柱列：N-22°-E



〔柱穴〕9か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸42~52cm、短軸39~52cmの圓丸形及び楕円形を呈し、深さ23~45cmである。7か所で柱材の抜き取り痕跡、3か所で平面形が直径14~20cmの円形を呈する柱痕跡、2か所で柱材圧痕を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：北から（140）・（158）cm

北側柱列：西から（134）・142cm

〔出土遺物〕ロクロ土器類が出土した。

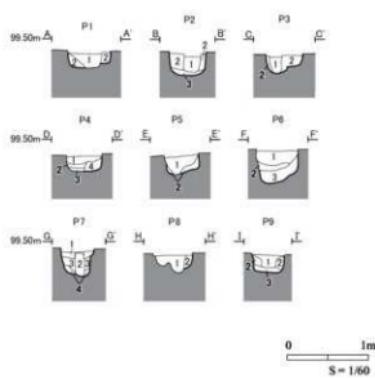
〔SB103 掘立柱建物跡〕（第50図、写真図版15-17）

〔位置〕1区北／平坦面

〔重複〕SB145-SB103-SD105

〔規模・形状〕桁行3間（5.88m）、梁行3間（5.80m）

／南北棟側柱建物



SB102 掘立柱建物跡 P1-A'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを多量に含む

SB102 掘立柱建物跡 P5-E'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを多量に含む

SB102 掘立柱建物跡 P2-B'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
3	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを多量に含む

SB102 掘立柱建物跡 P6-F'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
3	10YR3/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを多量に含む

SB102 掘立柱建物跡 P7-G-G'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロックを含む
2	10YR3/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロックを多量に含む

SB102 掘立柱建物跡 P8-H-H'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロック・泥化物を含む
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを多量に含む

SB102 掘立柱建物跡 P9-J-J'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	白色粘土を少量含む
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	白色粘土を含む
3	10YR2/1 黑褐色	粘質シルト (柱頭)	黄褐色ローム・和白色粘土を含む

第49図 SB102 掘立柱建物跡

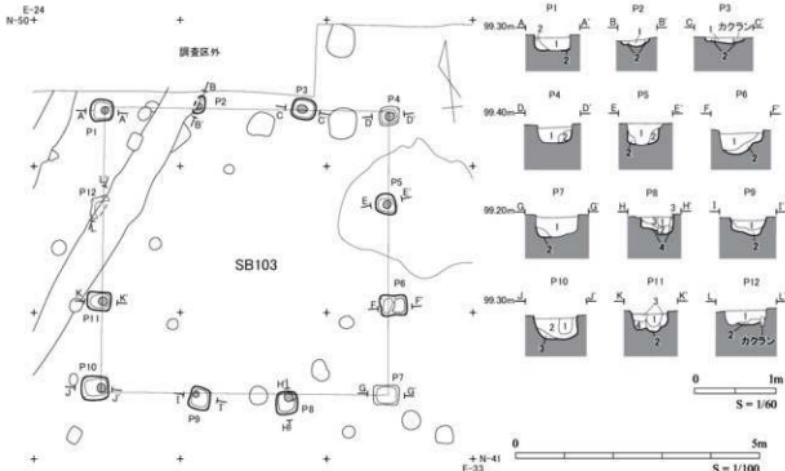
〔方向〕西側柱列：N-7°-E

〔柱穴〕12か所で確認した。柱穴掘方の平面形は長軸40-54cm、短軸37-50cmの隅丸方形を基調とし、深さ13-34cmである。8か所で柱材の抜き取り痕跡、4か所で平面形が直径15-20cmの円形を呈する柱痕跡、7か所で柱材圧痕を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列：北から（196）-（214）-178cm

北側柱列：西から186-194-200cm

〔出土遺物〕土師器、須恵器高台付环が出土した。



SB103 墓立柱建物跡 P1-A-A

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを含む
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを多量に含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P2-B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・白色粘土を含む（柱部）
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを多量に含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P3-C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを少量含む（柱部）
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを多量に含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P4-D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを少量含む（柱部）
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを多量に含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P5-E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを少量含む（柱部）
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを多量に含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P6-F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを少量含む（柱部）
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土ブロックを多量に含む（柱部）

【SB145 挖立柱建物跡】(第51図、写真図版17)

〔位置〕1区北／平坦面

〔重複〕SB103 - SB145 → SD105

〔規模・形状〕桁行2間（3.60m）、梁行1間（1.82m）以上／東西棟側柱建物

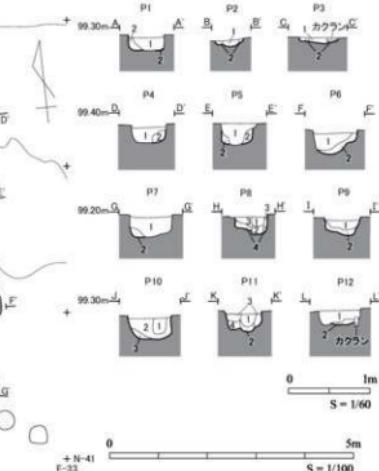
〔方向〕南側柱列：W-4°-N

〔柱穴〕4か所で確認した。柱穴掘方の平面形は長軸

40-66cm、短軸38-56cmの隅丸方形を基調とし、

深さ17-42cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡、

1か所で柱材圧痕を確認した。



SB103 墓立柱建物跡 P7-G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/6 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・粘土を含み、白色粘土上に
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多く含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P8-H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/6 明眞褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含み、白色粘土上に
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを少量含む（柱部）
3	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・白色粘土を含む（柱部）
4	10YR2/3 明眞褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P9-I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む（柱部）
2	10YR2/3 明眞褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多く含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P10-J-J'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱部）
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	白色粘土・ブロックを多く含む（柱部）
3	10YR2/3 明眞褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱部）

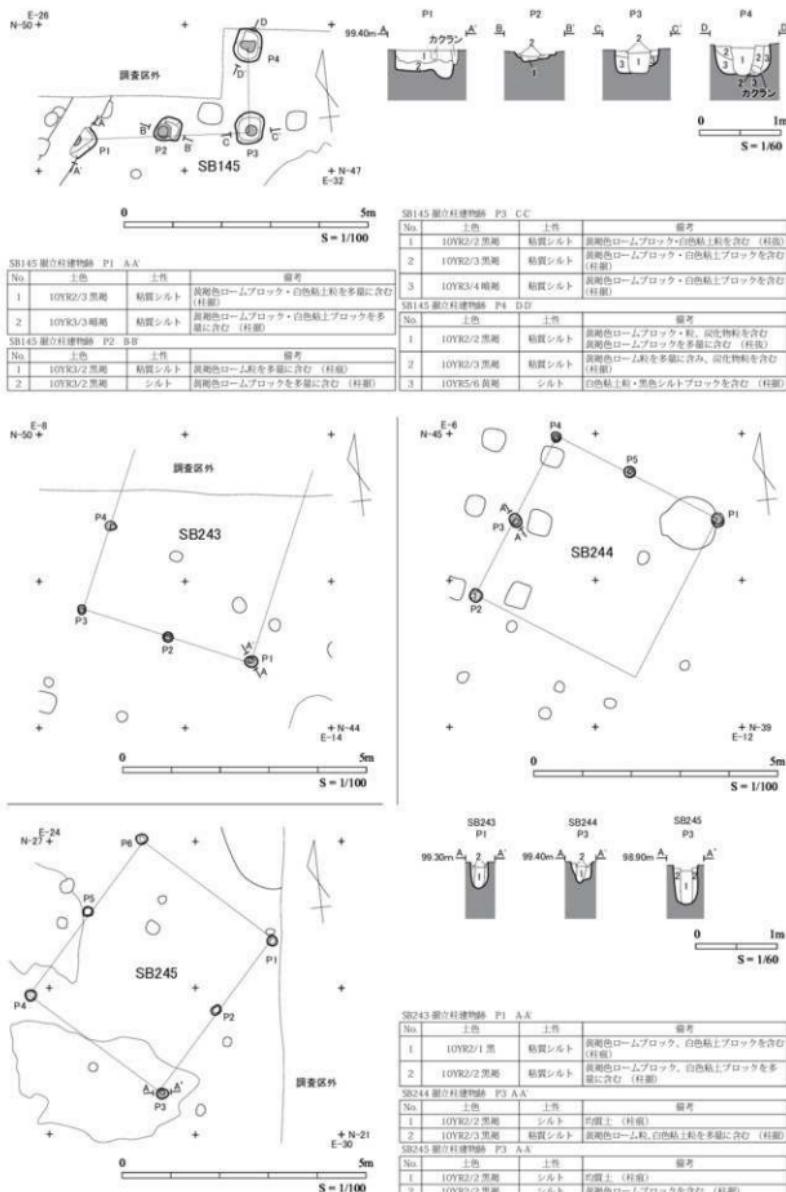
SB103 墓立柱建物跡 P11-K-K'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱部）
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多く含む（柱部）
3	10YR2/2 黒褐色	シルト	白色粘土・ブロックを多く含む（柱部）
4	10YR2/3 明眞褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱部）

SB103 墓立柱建物跡 P12-L-L'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	白色粘土・粘土を少量含む（柱部）
2	10YR2/3 明眞褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱部）

第50図 SB103 挖立柱建物跡



第51圖 SB145・243-245 捩立柱建物跡

1か所で平面形が直径23cmの円形を呈する柱痕跡、

2か所で柱材圧痕を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：西から176-184cm

東側柱列：182cm

〔出土遺物〕なし

【SB243 挖立柱建物跡】(第51図、写真図版15)

〔位置〕I区北／平坦面

〔重複〕SB243-SB101

〔規模・形状〕桁行2間(3.63m)、梁行1間(1.77m)

以上／東西棟側柱建物

〔方向〕西側柱列：W-24°-N

〔柱穴〕4か所を確認した。柱穴掘方の平面形は長軸20-24cm、短軸16-24cmの円形及び橢円形を基調とし、深さ7-34cmである。4か所で平面形が直径12-14cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：西から185-178cm

西側柱列：177cm

〔出土遺物〕なし

【SB244 挖立柱建物跡】(第51図、写真図版15・17)

〔位置〕I区北／平坦面

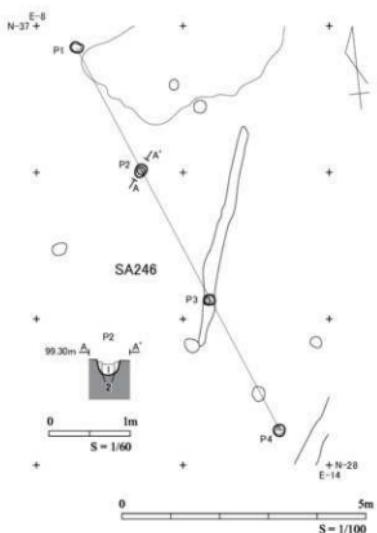
〔重複〕SB244→SE106-SB102

〔規模・形状〕桁行2間(3.75m)、梁行1間(3.66m)

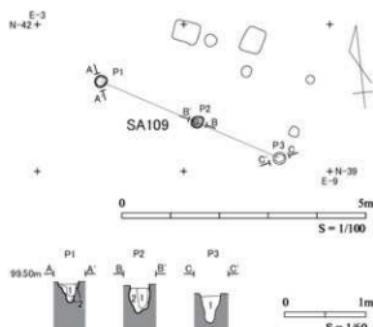
／東西棟側柱建物

〔方向〕西側柱列：W-34°-N

〔柱穴〕5か所を確認した。柱穴掘方の平面形は長軸



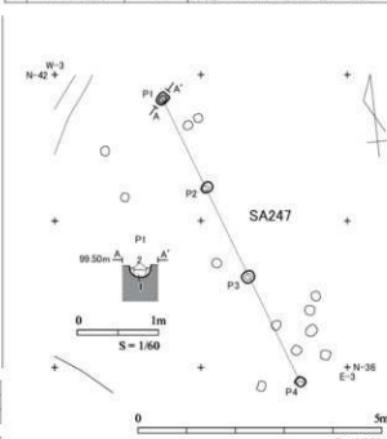
SA246 柱跡 P2 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粘土を少量含む (柱底)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームプロックを多量に含む (柱底)



SA109 柱跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐	シルト	白色粘土粒を含む (柱底)
2	10YR2/2 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームプロックを多量に含む (柱底)

SA109 柱跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐	粘質シルト	均質土 (柱底)
2	10YR2/2 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームプロックを含む (柱底)

SA109 柱跡 P3 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黑	シルト	均質土 (柱底)
2	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームプロックを含む (柱底)



SA247 柱跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黑	シルト	均質土 (柱底)
2	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームプロックを多量に含む (柱底)

第52図 SA109・246・247柱跡図

21-29cm、短軸 18-24cm の楕円形・圓丸方形を呈し、深さ 15-33cm である。1か所で柱材の抜き取り痕跡、3か所で平面形が直径 12-17cm の円形または一辺 8-10cm の方形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 北側柱列：西から 172-203cm
西側柱列：北から 192-（174）cm
〔出土遺物〕 なし

【SB245 振立柱建物跡】(第 51 図、写真図版 15)

〔位置〕 I 区北／平坦面

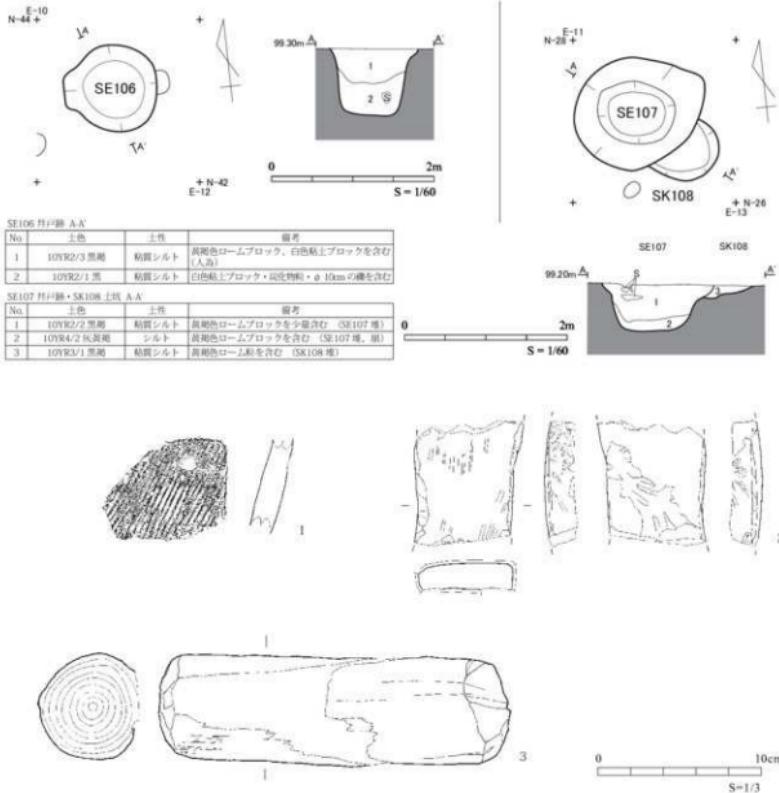
〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 衍行 2 間 (3.96m)、梁行 1 間 (3.34m)

／南北棟側柱建物

〔方向〕 西側柱列：N-44°-E

〔柱穴〕 6 か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸 20-25cm、短軸 16-24cm の円形・楕円形を呈し、深



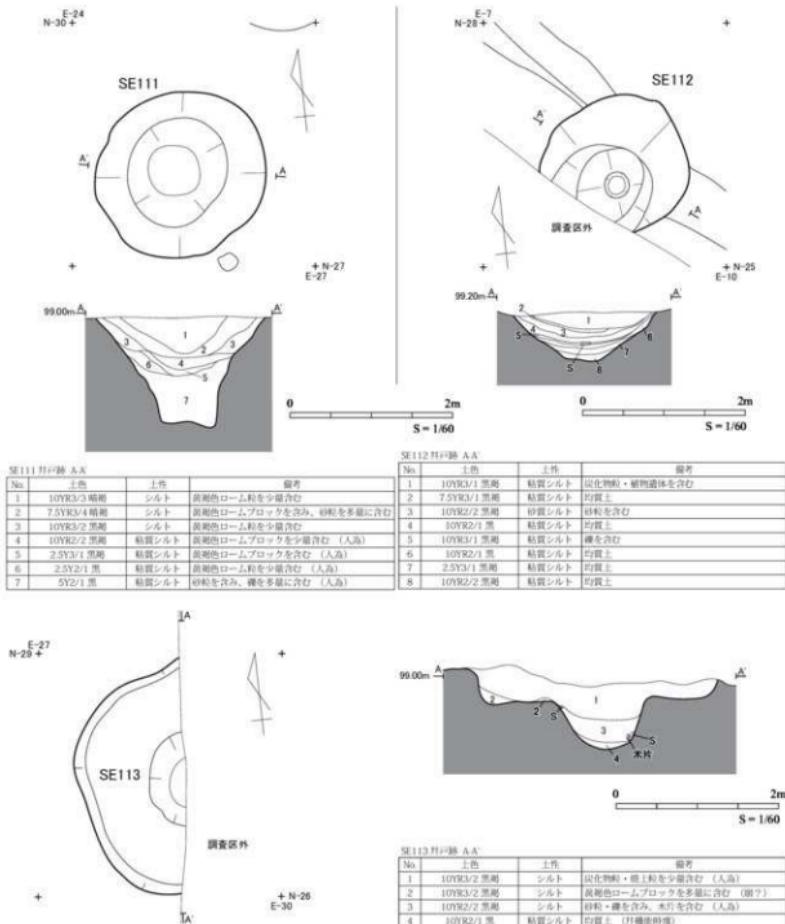
第 53 図 SE106・107 井戸跡、SK108 土坑、SE106・107・111・112 井戸跡出土遺物

さ 14-40cm である。1か所で平面形が直径 12cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。
 (柱間寸法) 東側柱列: 北から (192)-(204) cm
 北側柱列: (3.34) cm
 [出土遺物] なし

(3) 柱列跡

【SA109 柱列跡】(第 52 図、写真図版 17)
 [位置] I 区北／平坦面

〔重複〕なし
 〔規模・形状〕東西 2 間 (4.06m)
 〔方向〕W-29°-N
 〔柱穴〕3か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸 20-25cm、短軸 20-25cm の略円形・楕円形を呈し、深さ 20-30cm である。2か所で柱材の抜き取り痕跡、1か所で平面形が直径 10cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。
 〔柱間寸法〕西から (216)-(190) cm
 [出土遺物] なし



第 54 図 SE111-113 井戸跡

【SA246 柱列跡】(第 52 図)

【位置】 I 区北／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】南北 3 間 (8.94m)

【方向】 N-22°-W

〔柱穴〕 4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸 24-26cm、短軸 20-23cm の略円形・楕円形を呈し、深さ 16-29cm である。2か所で平面形が直径 13-16cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 北から (290) -300- (304) cm

〔出土遺物〕なし

【SA247 柱列跡】(第 52 図)

【位置】 I 区北／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】南北 3 間 (6.40m)

【方向】 N-20°-W

〔柱穴〕 4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸 20-26cm、短軸 18-22cm の楕円形・隅丸方形を呈し、深さ 15-36cm である。1か所で平面形が直径 17cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 北から (202) - (202) - (236) cm

〔出土遺物〕なし

(4) 井戸跡

【SE106 井戸跡】(第 53 図、写真図版 17・42)

【位置】 I 区北／平坦面

【重複】 SB244 → SE106

〔規模・形状〕 平面形が長軸 112cm、短軸 104cm の不整円形を呈し、深さ 80cm である。断面形は下部が U 字形を呈し、上部が朝顔形に開く。井戸側は確認されなかった。

〔堆積土〕 2 層に細分される。1 層は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルト、2 層は地山ブロック、炭化物粒、礫を含む黒色粘質シルトで、1 層は人為的埋土、2 層は自然堆積土と考えられる。

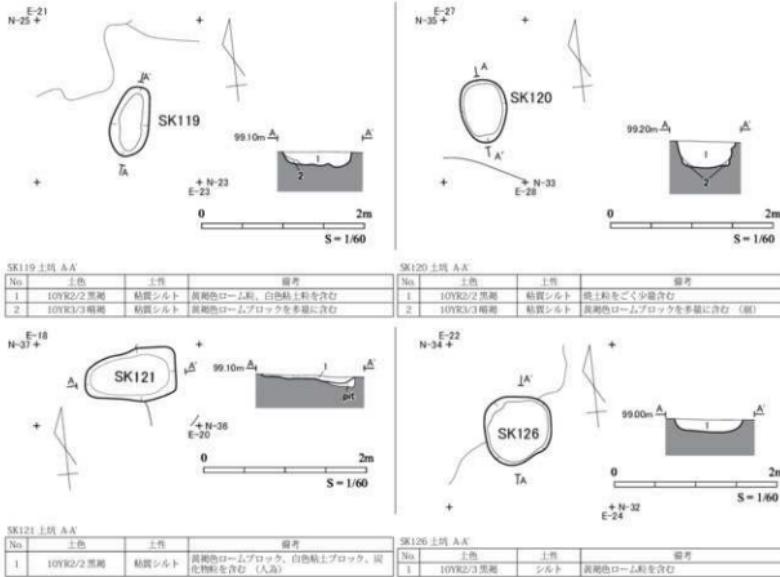
〔出土遺物〕 堆積土 2 層上面から木製曲物側板 (写真図版 42-4)、堆積土から須恵器擴 (第 53 図 1) が出土した。

【SE107 井戸跡】(第 53 図、写真図版 17)

【位置】 I 区北／平坦面

【重複】 SK108 → SE107

〔規模・形状〕 平面形が長軸 168cm、短軸 136cm の不整円形を呈し、深さ 45cm である。断面形は下部が U 字形を呈し、上部が朝顔形に開く。井戸側は確認されなかった。



第 55 図 SK119~121・126 土坑

〔堆積土〕2層に細分される。1層は礫と地山ブロックを少量含む黒褐色粘質シルト。2層は地山ブロックを含む灰黃褐色シルトで、1層は自然堆積土、2層は崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SE111 井戸跡】(第53・54図、写真図版17・42)

〔位置〕I区北／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸218cm、短軸198cmの略円形を呈し、深さ140cmである。断面形は下部が逆台形を呈し、上部が帆船形に開く。井戸側は確認されなかった。

〔堆積土〕7層に細分される。1層は地山粒を少量含む暗褐色シルト、2層は地山ブロックと砂粒を多量に含む暗褐色シルト、3層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、4層は地山ブロックを少量含む黒褐色粘質シルト、5層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、6層は地山粒を少量含む黒色粘質シルト。7層は砂粒と礫を多量に含む黒色粘質シルトで、1-3層は自然堆積土、4-7層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から木錐(第53図3)が出土した。

【SE112 井戸跡】(第53・54図、写真図版17・42)

〔位置〕I区北／平坦面

〔重複〕SD128・SD129 → SE112

〔規模・形状〕平面形が長軸176cm、短軸154cm以上の略円形を呈し、深さ65cmである。断面形は逆台形を呈する。井戸側は確認されなかった。

〔堆積土〕8層に細分される。均質な黒色・黒褐色粘質シルトで、1層は炭化物粒と植物遺体、3層は砂粒、5層は礫を含む。いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から転用砥(第53図2)が出土した。

【SE113 井戸跡】(第54図、写真図版17)

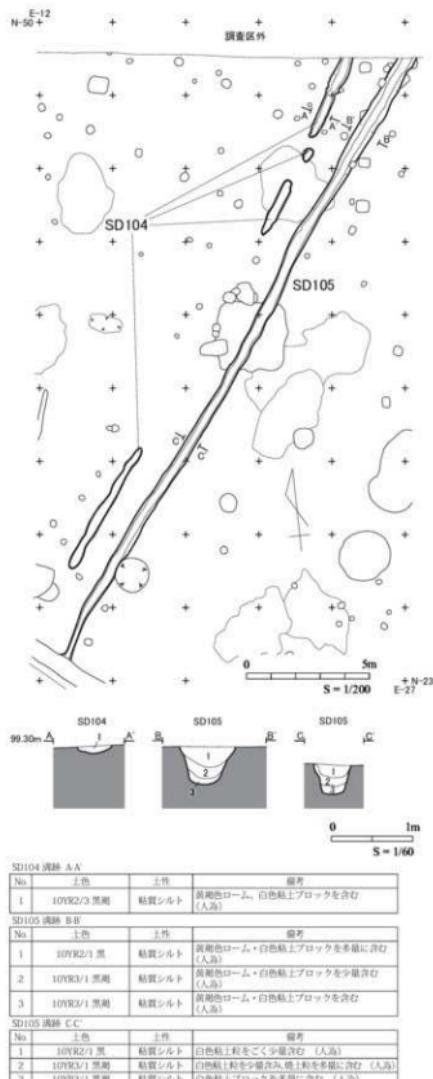
〔位置〕I区北／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸288cm以上、短軸130cm以上の略円形を呈し、深さ79cmである。断面形は中位に段を持ち、下部がU字形、上部が逆台形を呈する。井戸側は確認されなかった。

〔堆積土〕4層に細分される。1層は炭化物・焼土粒を少量含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルト、3層は砂粒と礫、木片を含む黒褐色シルト、4層は均質な黒色粘質シルトで、1・3層は人為的埋土、2層は崩落土、3層は井戸機能時の堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕土師器が出土した。



第56図 SD104・105 溝跡

(5) 土坑

【SK120 土坑】(第 55 図)

【位置】1 区北／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸 78cm、短軸 56cm の橢円形を呈し、断面形は深さ 40cm の逆台形を呈する。

【堆積土】2 層に細分される。1 層は焼土粒を多く含む黒褐色粘質シルト、2 層は地山ブロックを多量に含む暗褐色粘質シルトで、1 層は自然堆積土、2 層は崩落土と考えられる。

【出土遺物】土師器・須恵器が出土した。

(6) 溝跡

【SD104 溝跡】(第 56 図、写真図版 18)

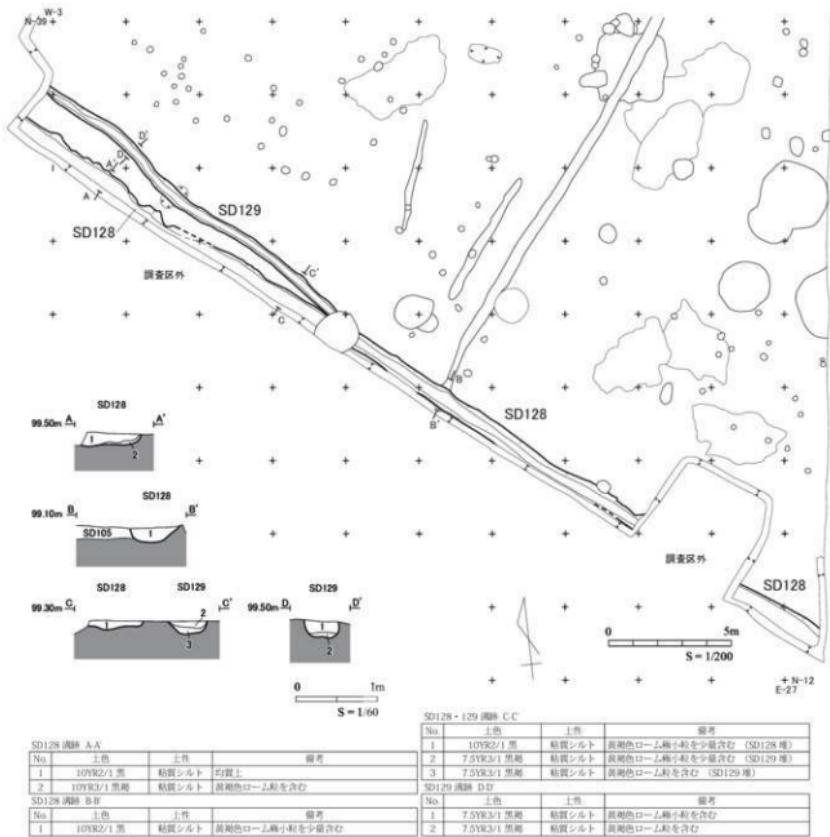
【位置】1 区北／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】北東—南西方向に直線的に延びる。SD105 溝跡と色々で 160~200cm の間隔を保って平行する。延長 23.90m を確認し、さらに調査区外の北東へ延びている。上幅 30~40cm、底幅 20~35cm で、横断面形は深さ 8~15cm の皿形を呈する。

【堆積土】地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。

【出土遺物】土師器が出土した。



第 57 図 SD128・129 溝跡

【SD105溝跡】(第56図、写真図版18)

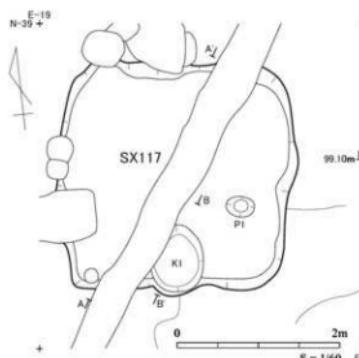
〔位置〕I区北／平坦面

〔重複〕SB103・SB145・SX117→SD105→SD128

〔規模・形状〕北東－南西方向に直線的に延びる。

SD104溝跡と芯々で160-200cmの間隔を保って平行する。延長28.20mを確認し、さらに調査区外の北東へ延びている。南端はSD128溝跡に壊されている。上幅30-50cm、底幅20-32cmで、横断面形は深さ30-50cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕3層に細分される。地山ブロックを含む黒色・



黒褐色粘質シルトで、いずれも人為的理土と考えられる。

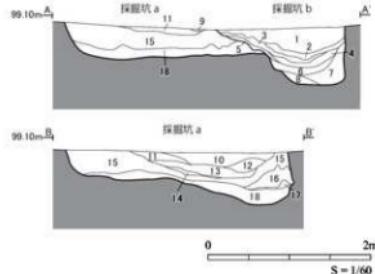
〔出土遺物〕土器破片、須恵器甕、弥生土器が出土した。

【SD128溝跡】(第57図、写真図版18)

〔位置〕I区北／平坦面

〔重複〕SD105・SD129→SD128→SE112

〔規模・形状〕北西－南東方向に直線的に延びる。延長39.50mを確認し、さらに調査区外の北西・南東方向へ延びている。SD104・105溝跡と直行し、SD105溝跡を壊している。上幅24-30cm、底幅8-18cmで、横断面形は深さ17cmの逆台形を呈する。

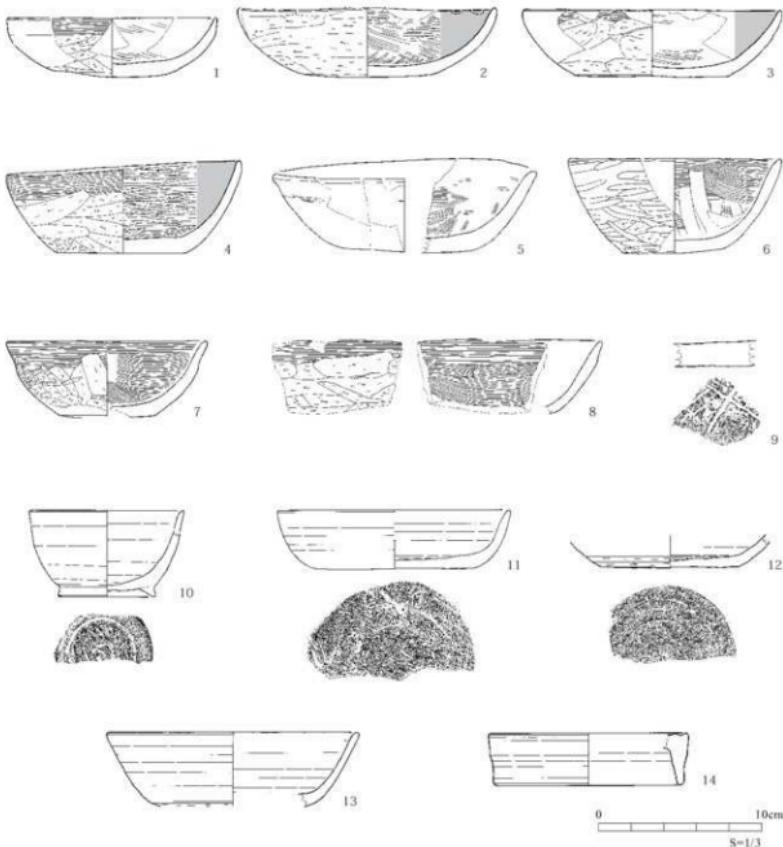


SX114 杉木塗掘跡 a-a', b-b'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (b堆)
2	10YR2/1 黑	粘質シルト	土手砂利ごく少量含む (b堆)
3	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム (2.5%泥質砂岩) を多量に含み、粘質物を含む 粘土 (油性粘土) (SYR1/1 塗覆土) (a堆, b堆)
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームを含む (b堆)
5	10YR3/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・プロックをレザス状に含む (b堆)
6	10YR3/3 黄褐色	シルト	黄褐色ローム・プロックを多量に含む (a堆, b堆)
7	10YR5/1 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・プロックを多量に含む (a堆, b堆)
8	10YR3/1 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・プロックを多量に含む (a堆, b堆)
9	2.5YR4/6 赤褐色	シルト	土手砂利を多量に含む (a堆, a堆)
10	10YR3/1 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・プロック・凝灰岩を少量含む、土手砂利を多量に含む (a堆, a堆)
11	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・プロックを多量に含む (a堆, a堆)
12	10YR4/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・プロックを多量に含む (a堆, a堆)
13	10YR4/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・プロックを少量含む (a堆, a堆)
14	10YR4/2 黄褐色	シルト	黄褐色ローム・プロック・砂利を多量に含む (a堆, a堆)
15	10YR2/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・プロック・粘化物質・土手砂利を少量含む (a堆)
16	7.5YR4/2 黑褐色	シルト	砂利・多量の砂・粘土 (油性粘土) を含む (a堆, a堆)
17	10YR5/1 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ロームを少量含む (a堆)
18	10YR4/3 黄褐色	シルト	黄褐色ローム・プロック・砂利を多量に含む (a堆)

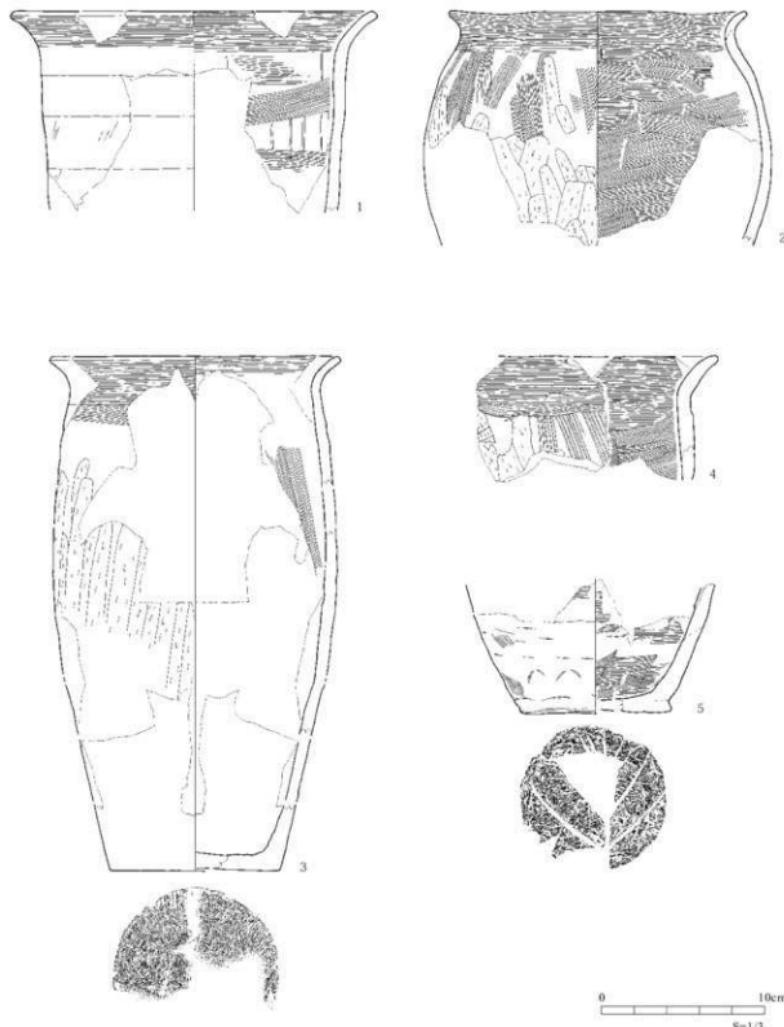


SX117 穴状構造 K1-A1, B1-B1'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・白色砂利・プロックを少量含む
2	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・白色砂利・プロックを含む
3	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ロームをごく少量含む (K1)
4	10YR4/1 黄褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・白色砂利・プロックを含む (壁方)
5	10YR4/4 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・白色砂利・プロックを少量含む (壁方)

第58図 SX114 粘土探掘坑、SX117 穴状構造

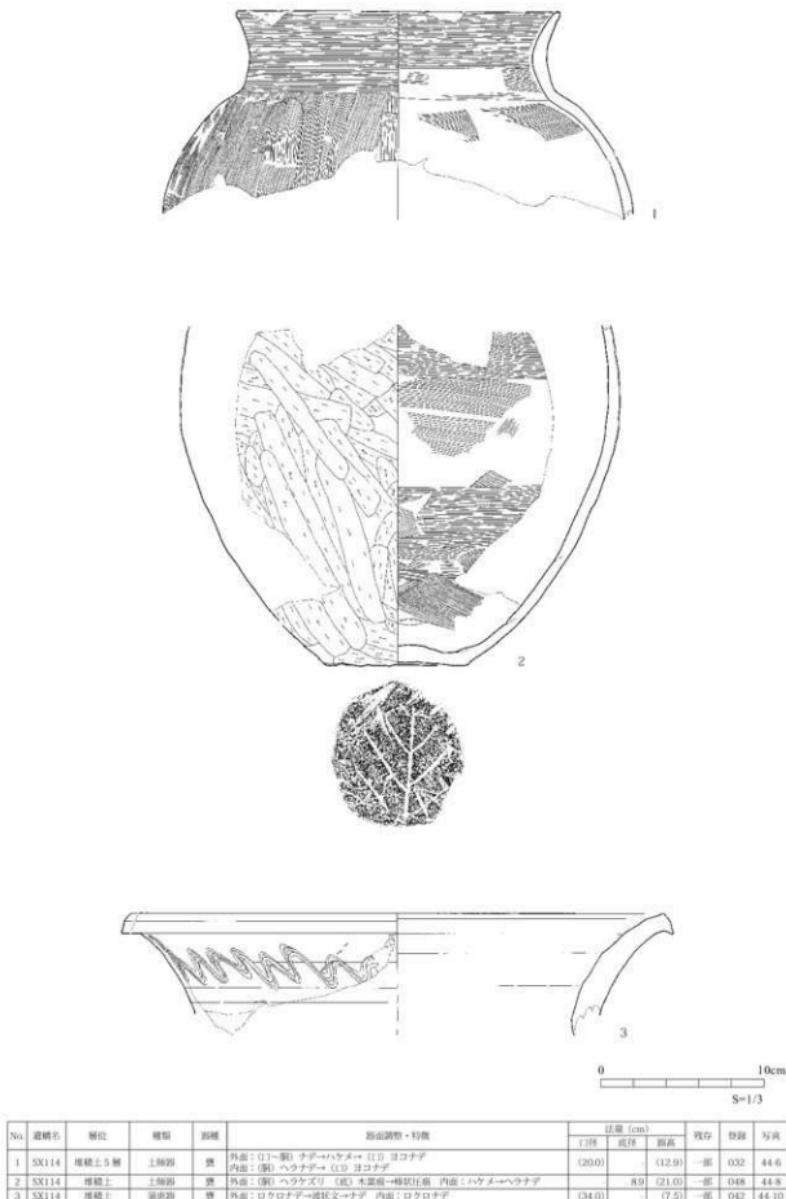


第59図 SX114 粘土探掘坑出土遺物（1）



第 60 図 SX114 粘土採掘坑出土遺物 (2)

No.	遺物名	層位	種類	面種	測定・特徴	寸法 (cm)			
						上径	底径	高さ	壁厚
1	SX114	堆積土	土鍋器	質	外由：(11) ヨコナヂ (9) ハケメー楕力内ナヂ (10) ヒラナヂ 内由：(11) ヨコナヂ (9) ヒラナヂ 工具痕	(22.6)	-	(12.3)	-部 0.47 44.7
2	SX114	堆積土	土鍋器	質	外由：(11-9) ハケメーへラケズリ → (11) ヨコナヂ 内由：(9) ヒラナヂ (11) ヨコナヂ	(18.4)	-	(14.5)	-部 0.46 44.9
3	SX114	堆積土上層	土鍋器	質	外由：(11) ヨコナヂ (9) ハケメーへラケズリ (10) ヒラナヂ 内由：(11) ヨコナヂ (9) ヒラナヂ	(17.9)	(10.4)	31.7	1/4 0.38 45.1
4	SX114	堆積土上層	土鍋器	質	外由：(9) ハケメー内ナヂ (10) ヒラナヂ → (9) ヒラナヂ × (11) ヨコナヂ 内由：(9) ヒラナヂ (11) ヨコナヂ	-	-	(7.8)	-部 0.41 45.2
5	SX114	堆積土上層	土鍋器	質	外由：(9) ナヂ (底) 木筋痕 内由：(11) ヒラナヂ・ナヂ 壁断面：保付岩	-	9.3	(8.3)	-部 0.40 45.3



第 61 図 SX114 粘土探査坑出土遺物（3）

〔堆積土〕2層に細分される。1層は均質な黒色粘質シルト、2層は地山粒を含む黒褐色粘質シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD129 溝跡〕(第 57 図、写真図版 18)

〔位置〕1 区北／平坦面

〔重複〕SD129 → SE112・SD128

〔規模・形状〕北西—南東方向にやや蛇行しながら延びる。延長 15.30m を確認し、さらに調査区外の北西側へ延びている。SD128 溝跡と並行して延び、南東端は SD128 溝跡・SE112 井戸跡に壊されている。上幅 10-20cm、底幅 4-12cm で、横断面形は深さ 20cm の逆台形及び U 字形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。地山粒を含む黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(7) 粘土探掘坑

〔SX114 粘土探掘坑〕(第 58-61、写真図版 19・43-45)

〔位置〕1 区北／平坦面

〔重複〕なし

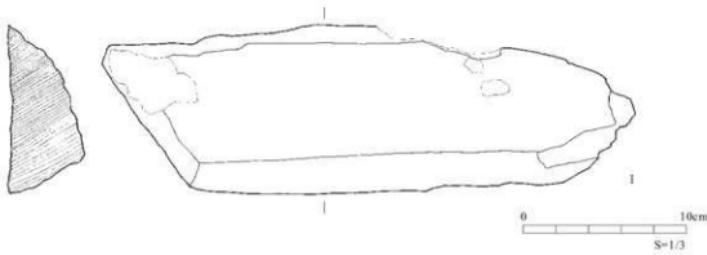
〔規模・形状〕平面形は長軸 360cm、短軸 282cm の規模で、2 基の探掘坑が重複して掘られている。探掘坑 a は平面形が長軸 282cm、短軸 255cm の楕円形を呈する。断面形は深さ 40cm の逆台形を呈するが、南東側は深さ 63cm の椀形に掘り込まれ、壁面は一部抉れている。探掘坑 b は探掘坑 a の埋没後に掘られており、平面形が長軸 190cm、短軸 162cm の楕円形を呈する。断面形は深さ 71cm の逆台形に掘り込まれ、壁面は一部抉れている。

〔堆積土〕探掘坑 a は 10 層に細分される (9-18 層)。9 層は焼土ブロックを多量に含む赤褐色シルト、10 層は少量の地山ブロック、凝灰岩粒と多量の炭化物粒を含む黒褐色シルト、11 層は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルト、12 層は地山ブロックを多量に含む灰黄褐色シルト、13 層は少量の地山ブロック、炭化物・焼土粒を含む灰黄褐色シルト、14 層は地山ブロック、砂粒を多量に含む灰黄褐色シルト、15 層は少量の地山ブロック・粒、炭化物・焼土粒を含む黒褐色シルト、17 層は少量の地山粒を含む褐灰色粘質シルト、18 層は地山ブロック・粒を多量に含む暗褐色シルトである。15 層は自然堆積土、これ以外は人為的埋土と考えられる。

探掘坑 b は 8 層に細分される (1-8 層)。1 層は少量の地山ブロック、炭化物粒を含む黒褐色シルト、2 層はごく少量の焼土粒を含む黒色粘質シルト、3 層は多量の焼土ブロックと炭化物粒を含む黒褐色シルトで、層下部に灰層がみられる。4 層は地山粒を含む黒褐色シルト、5 層は地山ブロックをレンズ状に含む暗褐色シルト、6 層は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルト、7 層は地山ブロック、砂粒を多量に含む褐灰色シルト、8 層は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトである。3・6-8 層は人為的埋土、1-2・4-5 層は自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土 5 層から土師器甕 (第 61 図 1)、須恵器甕 (第 59 図 11)、堆積土 16 層から土師器甕 (第 59 図 8)、堆積土上層から土師器甕 (第 59 図 3・7)

・甕 (第 60 図 3・4・5)、須恵器甕 (第 59 図 13)・高台付甕 (第 59 図 10)・蓋蓋 (第 59 図 14)、堆積土下層から土師器甕 (第 59 図 1)、堆積土から土師



第 62 図 SX117 穴状遺構出土遺物

器環（第59図2・4・5・6）・鉢（第60図1・2、第61図2）・甕？（第59図9）、須恵器環（第59図12）・甕（第61図3）が出土した。

このほか、堆積土から土師器環・鉢・甕、須恵器環が出土した。土師器環は内面に黒色処理を施すものと、施さないものがある。前者は外面の体部に段を持つ、口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整を施す。後者は口縁部～体部の外外面にヨコナデ調整を施し、器面調整と胎土・焼成の状態が第59図6に類似するものと、胎土に砂粒を多く含むものがある。土師器鉢は内外面の口縁部にヨコナデ、体部にナデ調整を施す。甕は無底式で内外面にナデ調整を施す。須恵器環は静止系切りによる底部の切り離し後に外面の体下部～底部外周に回転ヘラケズリ調整を施すもの、底部の切り離し方法が不明で外面の体下部～底部に手持ちヘラケズリ調整を施すものがある。

また、確認面から土師器環、須恵器環蓋が出土した。土師器環は内面に黒色処理を施し、胎土・焼成の状態が第59図6に類似する。須恵器環蓋はSI140豎穴住居跡の第69図6と接合関係を持つ。

〔自然科学的分析〕 SX114a（13・18層）、SX114b（4層）出土炭化物3点を試料として放射性炭素年代測定（AMS測定）を行ない、その結果を第5章に記載している。

（8）豎穴状遺構

【SX117豎穴状遺構】（第58・62図、写真図版18・45）

〔位置〕 1区北／平坦面

〔重複〕 SX117→SK121・SD105

〔規模・形状〕 長辺 280cm、短辺 270cm／隅丸方形

〔方向〕 東辺：N-9°-E

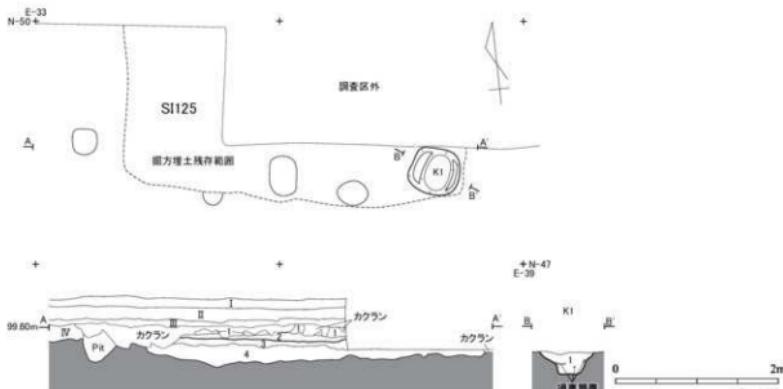
〔壁面〕 地山を壁として外傾気味に立ち上がる。残存壁高は最大18cmである。

〔床面・堆積土〕 地山および掘方埋土を床とする。やや凹凸が見られ、北東側へ向かってわずかに傾斜している。床面を覆う堆積土は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトで、廃絶後の自然堆積土と考えられる。

〔柱穴〕 南東寄りの床面で柱穴1か所（P1）を確認した。平面形が長軸35cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さ31cmである。堆積土は地山ブロックを含む黒色粘質シルトで、柱痕跡は確認されなかった。

〔土坑〕 南辺中央の床面で土坑1基（K1）を確認した。平面形が長軸88cm、短軸65cmの楕円形を呈し、断面形は深さ35cmのU字形を呈する。堆積土は地山粒をごく少量含む黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土から不明木材（第62図1）、鉄滓（写真図版48-8）が出土した。このほか、堆積土から土師器環・鉢が出土した。土師器環は内面に黒色処理を施し、外面の体部に段を持つものがある。



SI125豎穴住居跡 A-A'				SI125豎穴住居跡 K1-BB'			
No.	上位	土性	組合	No.	上位	土性	組合
1	10YR2/3 黒泥	粘質シルト	以生物糞を多く含む（注脚）	1	10YR2/3 黑泥	シルト	黄褐色ロームブロック・糞を含み、以生物糞を多量に含む（人糞）
2	10YR2/2 黒泥	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む（注脚）				
3	10YR2/2 黒泥	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む（注脚）				
4	10YR2/2 黒泥	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（注脚）				

第63図 SI125 豊穴住居跡

3.2区

遺跡範囲の南東部に位置し、東西約158m、南北約6-16mの調査区である。調査区内のうち西側95mは東へ向かって僅かに傾斜する平坦面で、これより東側では東向き緩斜面となり、調査区東端で湿地性堆積土の発達する沢地形となる。遺構確認面は現地表面から深さ15-40cmのIV-V層上面である。遺構は竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡6棟、柱列跡1条、井戸跡1基、近世墓10基、落とし穴状土坑7基、土坑45基、溝跡4条、性格不明遺構1基を確認した（第65図、写真図版20）。

(1) 竪穴住居跡

【SI125 竪穴住居跡】(第63・64図、写真図版21・45)

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕なし

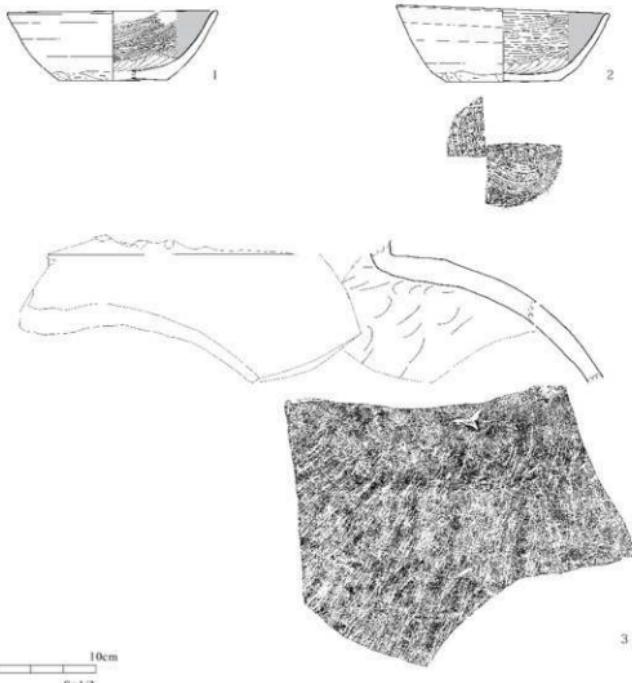
〔規模・形状〕長辺4.20m以上、短辺2.00m以上／方形

〔方向〕住居西辺：N-7° E

〔壁面〕残存しない

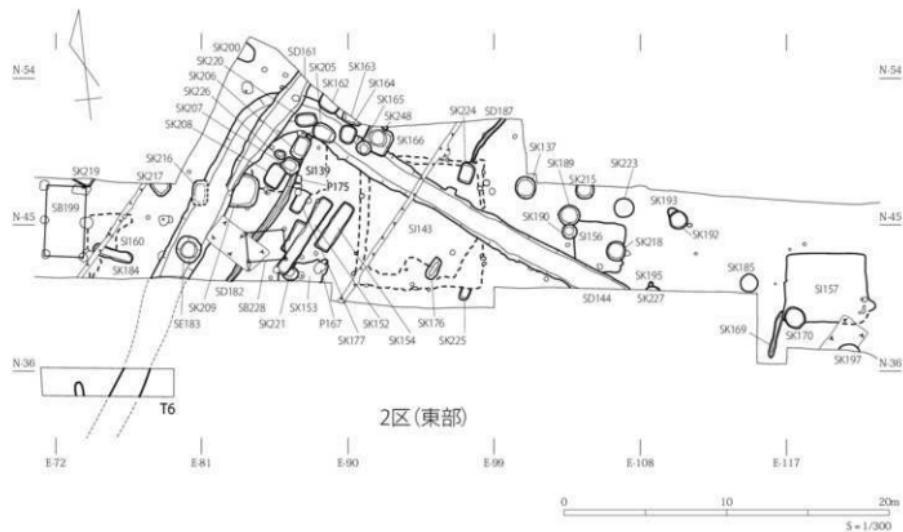
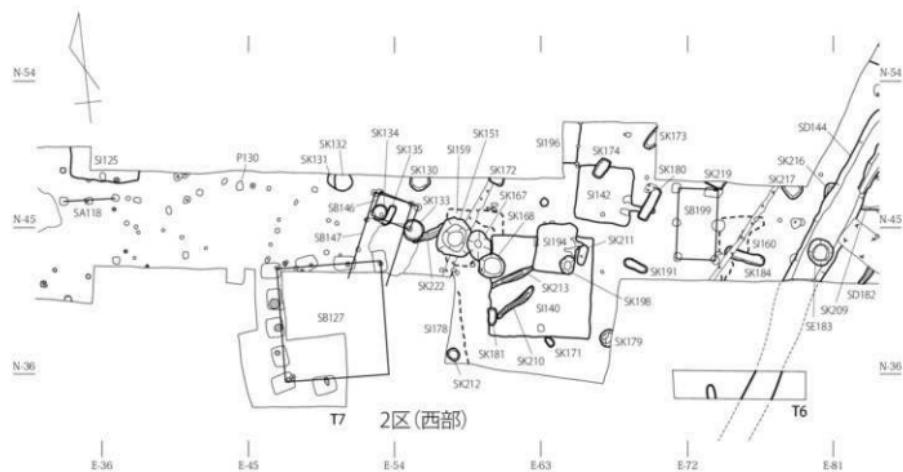
〔床面・堆積土〕住居掘方埋土を床とし、ほぼ平坦である。床面を覆う堆積土は地山・炭化物粒・焼土ブロックを含む黒褐色粘質シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

〔主柱穴・周溝・壁材〕不明



第64図 SI125 竪穴住居跡出土遺物

No.	遺跡名	層位	種類	断面	表面調査・特徴	法量(cm)				現存	登録	写真
						上辺	底辺	断面				
1	SI125	K1堆積上	ロクロ上部	井	外縁：ロコロナジー（底付近）手持ちハカリズミ、（底）切り離し不明→手持ちハラキズミ、内面：（底）削取跡ハラキズミ→（底）植木向かいハリカ→黒色鉄錆	13.0	6.6	4.3	1/4	025	45-5	
2	SI125	K1堆積上	ロクロ上部	井	外縁：ロコロナジー（底付近）手持ちハカリズミ、（底）植木向かいハリカ→手持ちハラキズミ、内面：（底）削取跡ハラキズミ（体）植木向かいハリカ→黒色鉄錆	13.1	7.0	4.5	3/4	024	45-4	
3	SI125	K1堆積上	溝底部	壁	外縁：ロコロナジー（底付近）内面：アテ其根 内底：（底）スピオサエ				（8.7）	一部	026	45-6



第65図 2区遺構配置図

〔カマド〕不明

〔貯藏穴〕住居南東隅で土坑1基(K1)を確認した。平面形が長軸60cm、短軸58cmの橢円形を呈し、断面形は深さ30cmの逆台形を呈する。位置・形状から貯藏穴の可能性が考えられる。堆積土は地山ブロック・粒と多量の炭化物粒を含む黒褐色シルトで、人为的埋立と考えられる。

〔出土遺物〕K1土坑堆積土からロクロ土器師環(第64図I・2)、須恵器甕(第64図3)、土器師、凝灰岩切石片が出土した。

【SI139 穫穴住居跡】(第66図、写真図版21・47)

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SI139→SK177・SK206・SK207・SK208・SK209・SK226・SD144・SD161・SD182

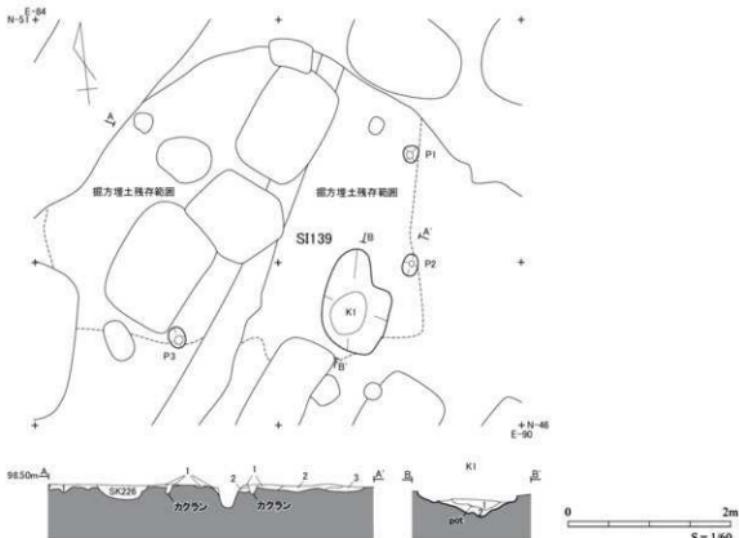
〔規模・形状〕長辺4.60m以上、短辺3.60m以上／方形

〔方向〕住居東辺：N-6°E

〔壁面・床面・堆積土〕残存しない

〔柱穴・周溝・壁材〕不明

〔壁柱穴〕住居東辺で2か所(P1・2)、南辺で1か所(P3)の柱穴を確認した。掘方の平面形は長軸20-27cm、



SI139 穫穴住居跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 喬褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(住居)
2	10YR3/3 喬褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・桃色小ブロック・炭化物粒を含む(住居)
3	10YR3/3 喬褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・白色粘土粒を含む(住居)

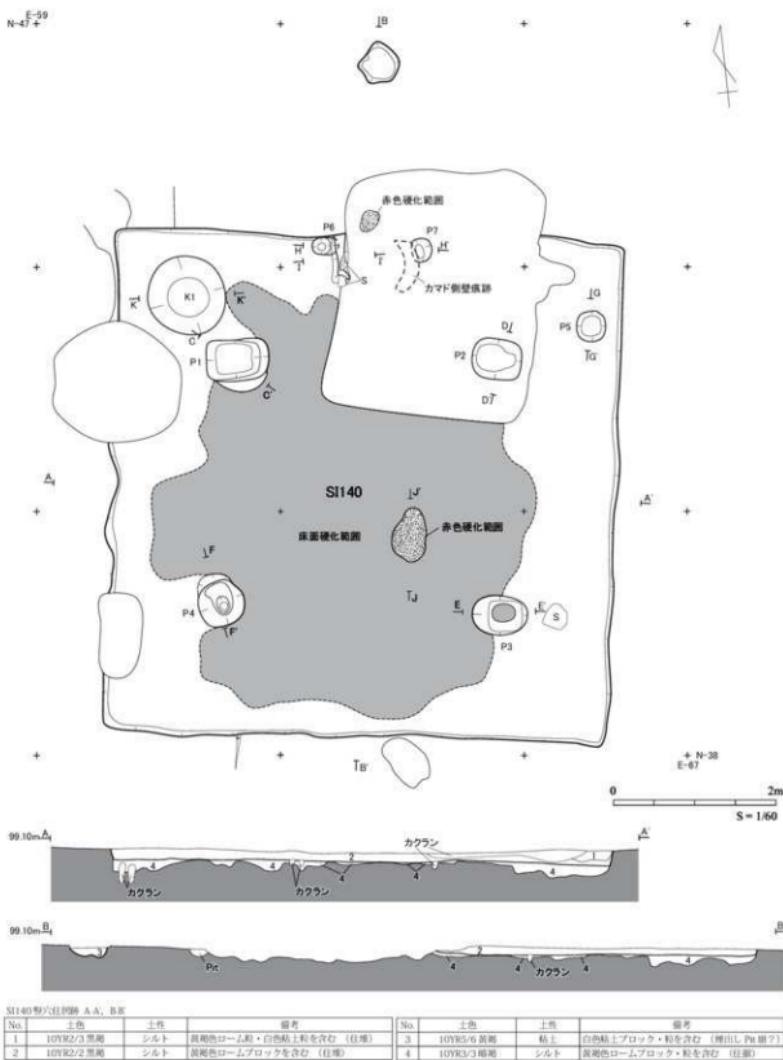
SI139 穫穴住居跡 K1 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を多く含む
2	10YR3/3 喬褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含み、黄褐色ローム粘土を少量含む(人馬)



No.	遺物名	部位	種類	器種	表面調査・特徴	法量(cm)	直徑	幅	厚	写真
1	SI139	K1堆積土上	土器師	小型甕	外面：指ナデ→(1)ヨコナデ 内面：(1)ヨコナデ→(2)ヘラナデ	(13.6)	(6.7)	一頭	100	47.1
2	SI139	K1堆積土上	土器師	甕	外面：平行波線文・V字状波線文 内面：ミガキ	(3.3)	1.1466	500	47.2	S=1/3

第66図 SI139 穫穴住居跡・出土遺物



第67図 SI140多穴住居跡(1)

短軸 18~21cm の楕円形を呈し、深さ 20cm である。

〔カマド〕不明

〔貯藏穴〕住居南東側の掘方底面で土坑 1 基 (K1) を確認した。平面形は長軸 130cm、短軸 82cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 35cm の鐘鉢形を呈する。堆積土は 2 層に細分される。1 層は地山粒をごく少量含む黒褐色シルト、2 層は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトで、1 層は自然堆積土、2 層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕K1 土坑堆積土から土器類小型甕 (第 66 図 1)、弥生土器鉢 (第 66 図 2) が出土した。このほか、土器環、ロクロ土器環・高台付环・甕が出土した。

〔SI140 穫穴住居跡〕(第 67-70 図、写真図版 21・22・46)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SI159・SK210・SK211・SK213 → SI140 → SI194・SK168・SK181・SK198

〔規模・形状〕一辺 6.30m／方形

〔方向〕カマド中軸線：N-7°-E

〔壁面〕地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最大 20cm である。

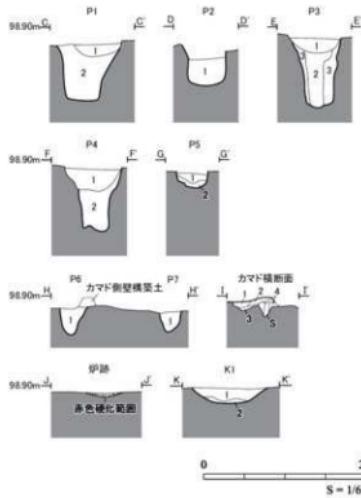
〔床面・堆積土〕住居掘方埋土を床とし、ほぼ平坦である。中央部の東西 4.75m、南北 5.10m の範囲で床面の硬化が認められる。床面を覆う堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積

土と考えられる。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上で 4 か所 (P1~4) 確認した。柱穴掘方の平面形は長軸 (辺) 60~78cm、短軸 (辺) 48~58cm の隅丸方形・楕円形を呈し、深さ 15~43cm で、1 か所で平面形が直径 14cm の円形を呈する柱痕跡、3 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔周溝・壁材〕なし

〔カマド〕住居北辺中央に付設する。燃焼部の一部と煙出しピットが残存する。燃焼部は幅 112cm、奥行 65cm 以上である。左側壁の一部と右側壁の痕跡が残存し、焚口幅は 55cm 程度と推定される。燃焼部底面は残存しないが、住居北壁よりやや張り出す位置に幅 20cm、奥行 30cm の範囲で赤色硬化範囲が認められ、燃焼部底面の痕跡の可能性がある。側壁は地山・焼土・炭化物粒を含む黄褐色粘土で構築され、左側壁で長さ 64cm、幅 21cm、高さ 4cm が残存する。左側壁の構築土中から砂岩礫片、先端部から被熱により赤色化した凝灰岩製の柱状切石が出土した。前者はカマド側壁構築時の骨材、後者は焚口部の構築材と考えられる。奥壁は残存しないが、赤色硬化範囲の位置から住居北壁より 35cm 以上張り出していた可能性がある。また、カマド側壁基部の両脇で柱穴各 1 か所を確認した。カマド側壁の構築に先行して住居掘方底面から掘り込まれている。柱穴掘方の平面形は長軸 28~32cm、短軸



第 68 図 SI140 穫穴住居跡 (2)

24-32cmの楕円形を呈し、深さ25-32cmである。

〔炉跡〕住居中央やや南東よりの位置で赤色硬化範囲を確認した。平面形は長軸66cm、短軸40cmの不整楕円形を呈する。

〔貯蔵穴〕カマド左側の住居北西隅で土坑1基(K1)を確認した。平面形は長軸102cm、短軸97cmの略円形を呈し、断面形は深さ19cmの逆台形を呈する。堆積土は2層に細分される。いずれも地山ブロック・粒を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔その他の施設〕住居北東側の床面で柱穴1か所(P5)を確認した。掘方の平面形は長軸38cm、短軸36cmの略円形を呈し、深さ21cmである。

〔出土遺物〕住居床面直上から土師器環(第69図2)、P4柱穴抜き取り痕跡から凝灰岩製の砥石(第70図1)、

K1土坑堆積土から弥生土器(第69図6)、住居内堆積土から土師器環(第69図1・3)・甕(第69図5)、須恵器环蓋(第69図4)、弥生土器(第69図7)、堆土から流紋岩製のスクレイバー(第70図2)が出土した。須恵器环蓋はSX114粘土採掘坑出土のものと接合関係がある。このほか、須恵器環・甕、黒耀石・珪質頁岩・頁岩・石英製の剥片、焼けたスサ入り粘土塊が出土した。

【SI142 穴住居跡】(第71図、写真図版22・23・47・48)

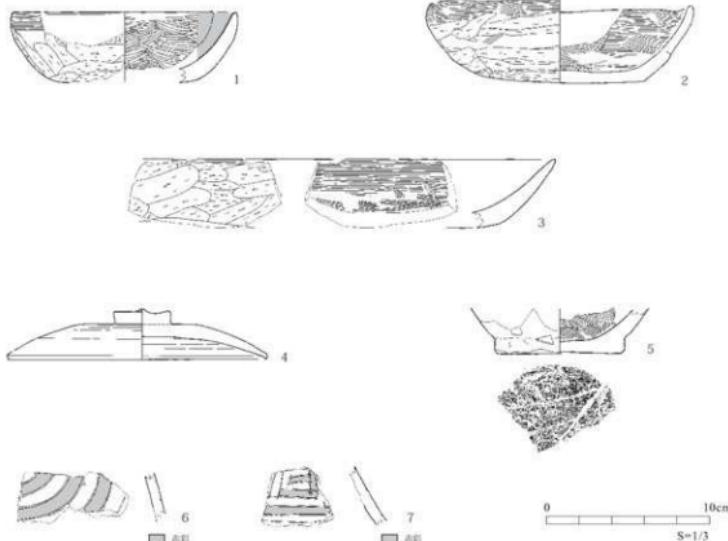
【位置】2区/平坦面

【重複】SI142→SK174・SK180

【規模・形状】長辺3.50m、短辺3.40m/方形

【方向】カマド中軸線:E-15°-S

【壁面】地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。



No.	遺構名	層位	種類	断面	断面調査・特徴		法面 (cm)				現存	登録	写真
					外面	内面	上辺	底辺	側面	法面			
1	SI140	堆積上	土師器	环	外面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ・(3)(3)一部ケズリ 内面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ・(3)(3)一部ケズリ	-	(14.0)	-	(4.3)	一部	095	46-4	
2	SI140	床面直上	土師器	环	外面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ・(3)(3)一部ケズリ 内面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ・(3)(3)一部ケズリ	16.2	10.1	4.2	4/5	092	46-2		
3	SI140	堆積上	土師器	环	外面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ 内面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ・(3)(3) 脊の芯み苦し。	-	-	(4.3)	一部	096	46-3		
4	SI140	堆積上	凝灰岩	砾	外面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ 内面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ	16.1	-	3.1	6/5	091	46-5		
5	SI140	堆積上	土師器	甕	外面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ 内面:(1)(1)ヨコナギ・(2)(2)ヘラケヅリ	-	(8.0)	(2.8)	一部	098	46-6		
No.	遺構名	層位	種類	断面	断面調査・特徴		法面 (cm)				現存	登録	写真
6	SI140	K1・SK152 堆積上	弥生土器	甕	外面:渦巻文・赤彩 内面:ナデ	-	(3.1)	体面	-	507	46-8		
7	SI140	堆積上	弥生土器	甕	外面:渦巻文・区画内赤彩 内面:ナデ	-	(3.7)	側面	-	508	46-7		

第69図 SI140 穴住居跡出土遺物(1)

残存壁高は最大 27cm である。

〔床面・堆積土〕 地山・住居掘方埋土を床とし、ほぼ平坦である。中央部の東西 1.35m、南北 0.90m の範囲で床面の硬化が認められ、カマド左側の東西 0.85m、南北 1.25m の範囲で白色粘土による貼床が構築されている。床面を覆う堆積土は地山・焼土粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

〔主柱穴〕なし

〔周溝・壁材〕なし

〔カマド〕 住居東辺中央南寄りに付設する。燃焼部・煙道・煙出しビットが残存する。燃焼部は幅 124cm、奥行 64cm、焚口幅は側壁先端間で 60cm である。燃焼部底面は幅 43cm、奥行 43cm、床面より 5cm ほど皿状に窪む。焚口側の幅 40cm、奥行 28cm の範囲に赤色硬化面が形成されている。側壁は地山の白色粘土を用いて構築され、長さ 46~58cm、幅 36~42cm、高さ 10~21cm が残存する。左右の側壁先端部に凝灰岩製の円盤状環が埋設されている。右側(写真図版 48-2)は $32.0 \times 20.0 \times 10.5$ cm、左側(写真図版 48-3)は $22.0 \times 21.0 \times 10.0$ cm である。これらはカマド側壁骨材および焚口部の構築材と考えられる。また、焚口前庭部の床面で二つに折損した凝灰岩切石(写真図版 48-1)を確認した。 $74.0 \times 15.0 \times 11.5$ cm の四角柱状を呈する。側面が被熱により赤色化し、下面に煤状の炭化物の付着が見られるところから、焚口天井部に横架された構築材と考えられる。奥壁は住居東壁と一致し、奥壁から幅 38cm、奥行 70cm 以上の煙道がのがている。煙道底面はほぼ平坦

である。また、奥壁から 105cm の位置に煙出しビットを確認した。平面形は長軸 40cm、短軸 30cm の橢円形を呈し、深さ 38cm である。

〔貯蔵穴〕 カマド右側の住居南東隅で土坑 1 基(K1)を確認した。平面形は長軸 74cm、短軸 60cm の橢円形を呈し、断面形は深さ 52cm の逆台形を呈する。堆積土は 3 層に細分される。1 層は地山粒を含む黒褐色シルト、2 層は地山粒を含む黒褐色シルト、3 層は地山粒を含む褐色粘質シルトである。1 層は自然堆積土、2 層はカマド構築土起源の人為的理土、3 層は人為的埋土と考えられる。

〔その他の施設〕 住居掘方底面で柱穴 1 か所(P1)を確認した。平面形は直径 23cm の略円形を呈し、深さ 22cm である。柱材の抜き取り痕跡を確認し、堆積土は住居掘方埋土と共通する。

〔出土遺物〕 住居床面直上から須恵器環(第 71 図 1)、住居内堆積土から凝灰岩製の砥石(第 71 図 2)が出土した。このほか、土師器环・甕、ロクロ土師器环・甕、須恵器高台付环・甕、弥生土器の破片が出土した。須恵器甕は頭部の外面にロクロナデ→櫛描波状文を施すものがある。

〔SI143 穫穴住居跡〕(第 72-75 図、写真図版 23・24・47)

〔位置〕 2 区／平坦面

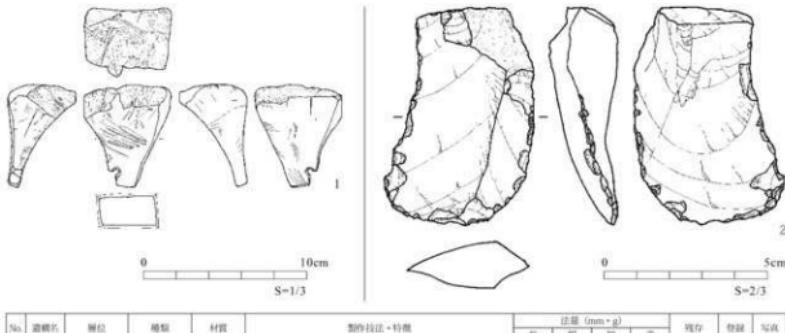
〔重複〕 SK225・SD187 → SI143 → SK176・SK224・SD144

〔規模・形状〕 一辺 7.88m / 方形

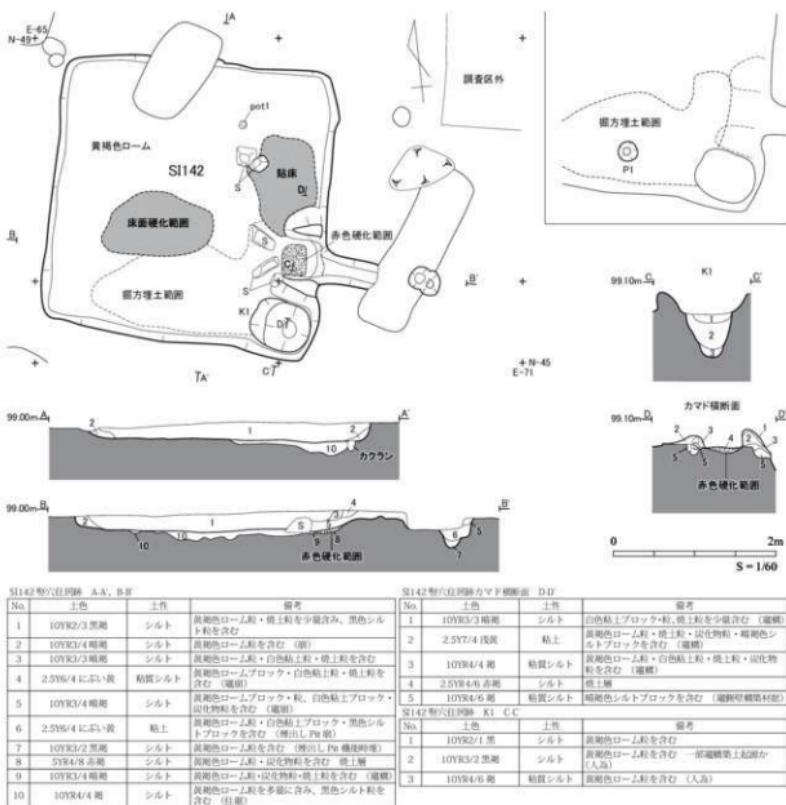
〔方向〕 北壁カマド中軸線: N-5° -W

〔壁面・床面・堆積土〕 残存しない

〔主柱穴〕 住居平面形の対角線上で 4 か所 (P1-4)



第 70 図 SI140 穫穴住居跡出土遺物 (2)

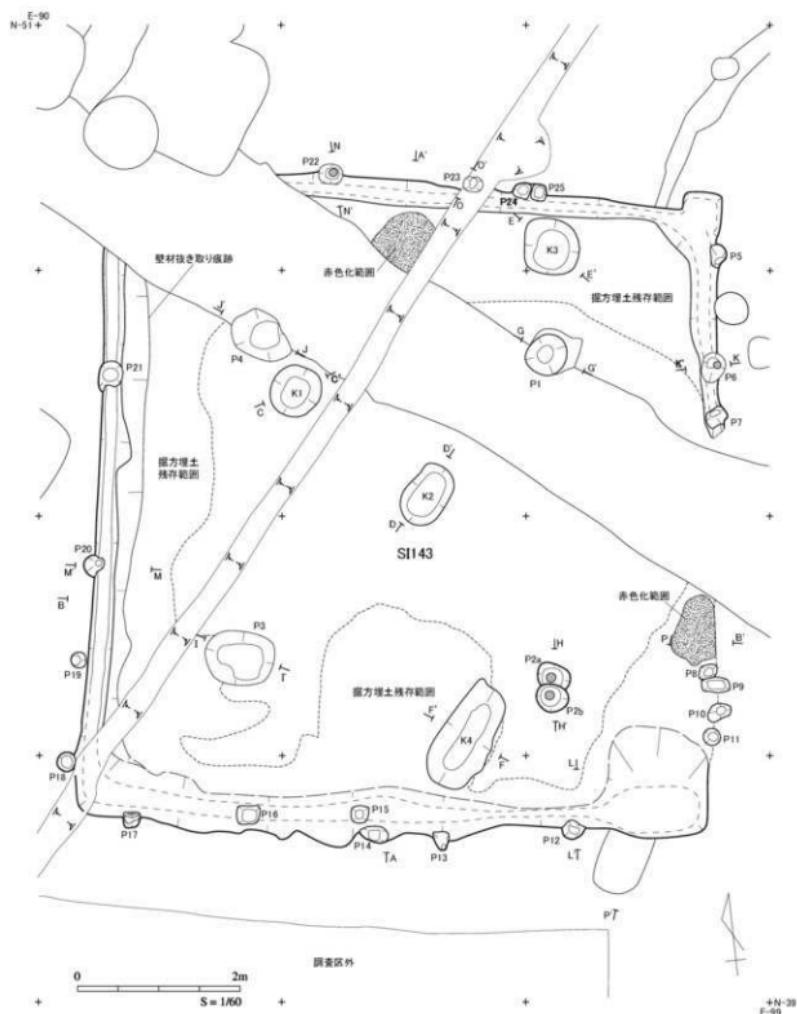


第71図 SI142号(1)住居跡・出土遺物

を確認した。南東側で2時期の変遷が確認できる(P2a・b)。柱穴掘方の平面形は長軸42-85cm、短軸30-66cmの略円形・楕円形を呈し、深さ56-60cmである。2か所で平面形が直径7-22cmの円形を呈する柱痕跡、5か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

(壁柱穴) 住居東辺で7か所(P5-11)、南辺で6か

所(P12-17)、西辺で4か所(P18-21)、北辺で4か所(P22-25)確認した。掘方の平面形は長軸18-36cm、短軸17-30cmの略円形・楕円形を呈し、深さ17-41cmである。2か所で平面形が6-12cmの円形を呈する柱痕跡、19か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。



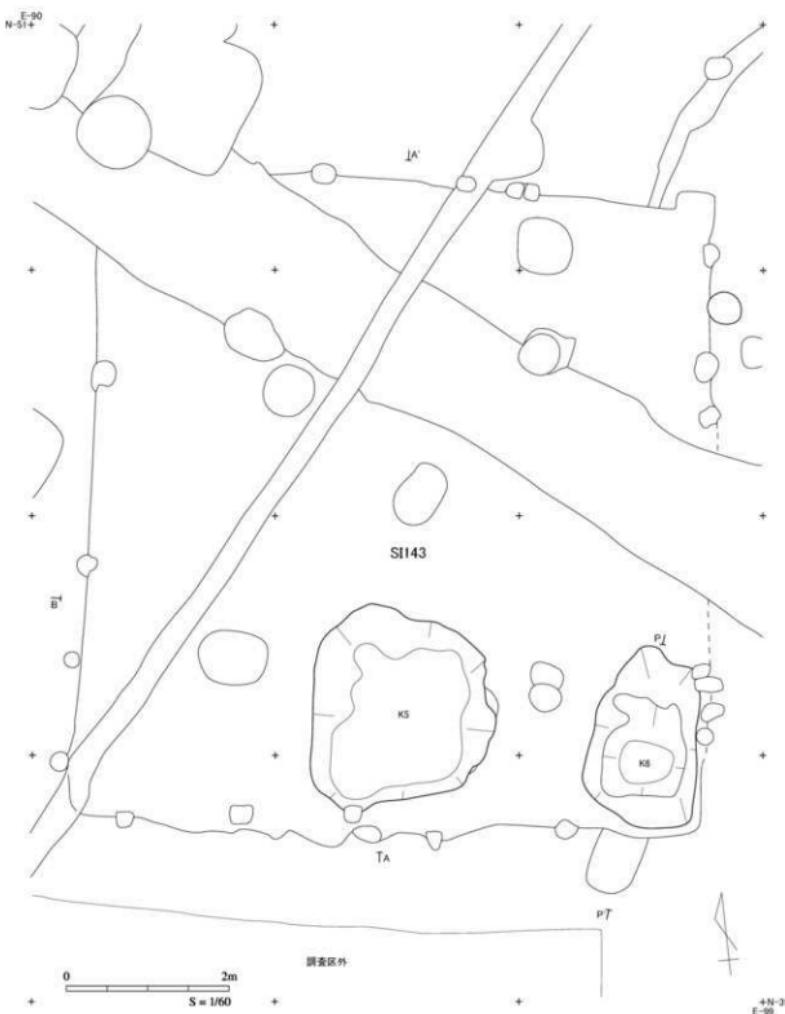
第72図 SI143 竪穴住跡 (1)

〔周溝・壁材〕幅23~32cmの壁材掘方が住居東辺の南側を除いて全周する。壁材痕跡は確認されず、住居西辺では住居内側から掘り込まれた壁材の抜き取り痕跡が確認されている。抜き取り痕跡の堆積土は壁柱穴のものと共通し、同時に抜き取られたと考えられる。

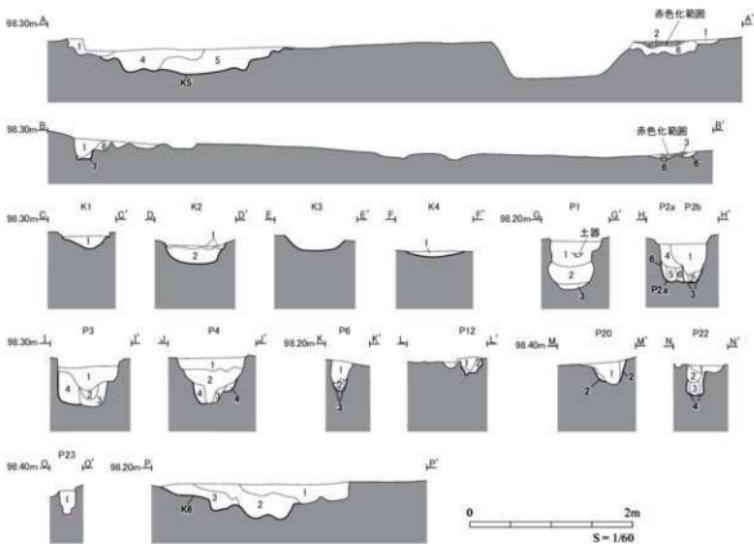
〔カマド〕住居北辺中央の幅92cm、奥行74cm、東辺

やや南寄りの幅約88cm、奥行56cmの範囲で焼土ブロックを多量に含む暗褐色シルトを確認した。位置関係からカマド燃焼部底面の痕跡と考えられる。

〔貯蔵穴〕住居北東側で土坑1基(K3)を確認した。北側のカマド痕跡との位置関係から、貯蔵穴と考えられる。平面形は長軸78cm、短軸64cmの略円形を呈し、



第73図 SI143 壁穴住居跡（2）



SI143 穂穴住跡 A-A'、B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームを多量に含む。黄褐色ロームブロックを少額含む。(埋材抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	純上部を土塊を多量に含む。黄褐色ローム粒を少額含む。(電気鉄観)
3	10YR3/4 喀褐色	シルト	純土ブロックを多量に含む。黄褐色ローム粒を少額含む。(電気鉄観)
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む
5	10YR2/3 喀褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (住居・人跡・K5 墓)
6	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (住居・人跡)
7	10YR4/4 黑褐色	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む

SI143 穂穴住跡 K1-C-C'

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR2/3 喀褐色	粘質シルト	純土を多量に含み。黄褐色ローム粒を少額含む (人跡)

SI143 穂穴住跡 K2-D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を含む。(人跡)
2	10YR4/4 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む。(人跡)

SI143 穂穴住跡 X4-F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・小ブロックを少額含む。(人跡)

SI143 穂穴住跡 P1-G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む。(柱抜)
2	10YR4/4 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック・粒を多量に含む。(柱抜)
3	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 P2ab-H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含み。黄褐色ローム粒をごく少額含む。(P2ab 柱抜)
2	10YR4/4 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(P2ab 柱抜)
3	10YR5/6 喀褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・粒を含む。(P2ab 柱抜)
4	10YR3/3 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック・粒を多量に含む。(P2ab 柱抜)
5	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(P2ab 柱抜)
6	10YR4/4 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・粒を含む。(P2ab 柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)
3	10YR3/4 喀褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)
4	10YR4/4 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(埋材抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
3	10YR4/4 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-J-J'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-K-K'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-L-L'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-M-M'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-N-N'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)
2	10YR3/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 Pm-O-O'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 喀褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)
2	10YR4/6 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)

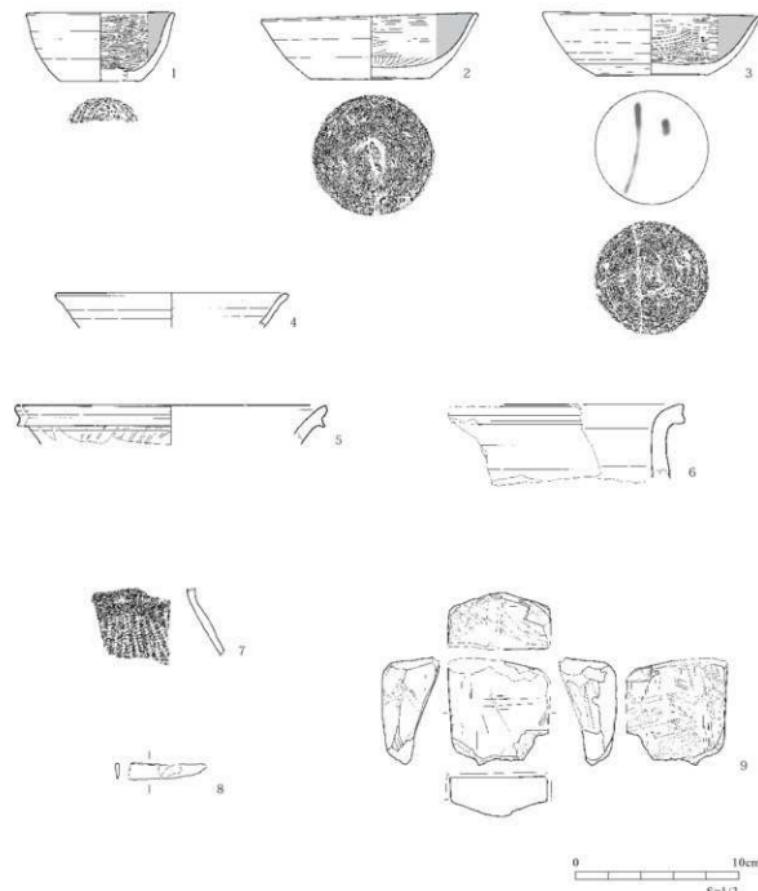
SI143 穂穴住跡 K1-P-P'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)
2	10YR3/2 喀褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)

SI143 穂穴住跡 K1-Q-Q'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)
2	10YR4/6 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む。(柱抜)

第74図 SI143 穂穴住跡（3）



No.	遺構名	層位	種類	断面	断面調査・特徴		法量 (mm)			現存	登録	写真	
					横径	高さ	直径	幅	厚				
1	SI143	K3堆積土	ロクロ上解剖	杯	外面：ロクロナデ、(底)斜削切欠き子持ちハラケズリ。 内面：平行ヘラタキ→(底)斜削切欠き子持ちハラミガキ→黒色処理	(9.2)	(5.0)	4.2	一部	103	47.3		
2	SI143	P1抜取痕跡	ロクロ上解剖	杯	外面：ロクロナデ、(底)ヘラタキ→黒色処理 内面：(底)斜削切欠き子持ちハラミガキ→(底)切刃磨し不規則削除	13.4	7.4	3.9	3/4	094	47.4		
3	SI143	K4堆積土	ロクロ上解剖	杯	外面：ロクロナデ→(底)斜削切欠き子持ちハラケズリ、(底)切刃磨し不規則削除 内面：(底)黒色	13.4	6.9	3.8	4/5	104	47.5		
4	SI143	K4堆積土	裏剥離	杯	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	(14.4)		(2.2)	一部	102	47.6		
5	SI143	K3堆積土	裏剥離	甕	外面：平行ヘラタキ→ロクロナデ 内面：ロクロナデ	(19.2)		(2.4)	一部	101	47.7		
6	SI143	確認出	裏剥離	甕	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ			(5.0)	一部	027	47.8		
No.	遺構名	層位	種類	断面	断面調査・特徴		法量 (mm)	横径	幅	現存	登録	写真	
7	SI143	K2堆積土	生土上部	甕	外面：指印ナデ・鑑文 (BL)、内面：ナデ			(4.2)	体厚	215	47.10		
No.	遺構名	層位	種類	材質	判斷		法量 (mm)	横径	幅	現存	登録	写真	
8	SI143	P2b抜取跡跡	刀子	鉄	刀身部：肉眼欠陥	(48.0)	9.0	2.0	(2.9)	一部	303	47.11	
No.	遺構名	層位	種類	材質	製作技法・特徴		法量 (mm)	横径	幅	現存	登録	写真	
9	SI143	確認出	鐵石	鐵石	鉄石(火照焼) 分割焼 頭現存 下部：火照・鉄焼	(66.1)	63.5	33.5	(140.0)	完形	219	47.9	

第75図 SI143 積穴住居跡出土遺物

断面形は深さ20cmの逆台形を呈する。堆積土は地山粘土を含む暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。【床下土坑】住居掘方底面で土坑2基(K5・6)を確認した。K5土坑は住居南側中央に位置し、平面形が長軸256cm、短軸226cmの不整方形を呈し、断面形は深さ30cmの皿形を呈する。底面は黄褐色ローム層で、凹凸が著しい。堆積土は2層に細分され、1層は地山ブロック・粒を多量に含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられ、2層は住居掘方埋土と類似する。K6土坑は住居南東隅に位置し、平面形が長軸226cm、短軸140cmの不整方形を呈し、断面形は深さ42cmの播鉢状を呈する。底面は黄褐色ローム層で、壁面は凹凸が著しい。堆積土は2層に細分され、1層は多量の地山ブロック・粒と少量の焼土粒を含む暗褐色粘質シルト、2層は地山ブロックを多量に含む褐色粘質シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。

【その他の施設】土坑3基(K1・2・4)を確認した。K1土坑は住居北西側に位置し、平面形が長軸67cm、短軸60cmの略円形を呈し、断面形は深さ19cmの播鉢形を呈する。堆積土は多量の焼土粒と少量の地山粒を含む極暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。K2土坑は住居中央部に位置し、平面形が長軸100cm、短軸52cmの楕円形を呈し、断面形は深さ30cmの逆台形を呈する。堆積土は2層に細分され、1層は地山粒を含む黒褐色シルト、2層は地山ブロック

を多量に含む褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。K4土坑は住居南側中央やや東寄りに位置し、平面形が長軸135cm、短軸70cmの不整楕円形を呈し、断面形は深さ6cmの皿形を呈する。堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】P1柱穴抜き取り痕跡からロクロ土師器環(第75図2)、P2b柱穴抜き取り痕跡から鉄製刀子(第75図8)、K2土坑堆積土から弥生土器甕(第75図7)、K3土坑堆積土からロクロ土師器環(第75図1)・須恵器甕(第75図5)、K4土坑堆積土からロクロ土師器環(第75図3)・須恵器甕(第75図4)、遺構確認面から須恵器甕(第75図6)、凝灰岩製の砥石(第75図9)が出土した。ロクロ土師器環は外底面に墨書(判読不能)が見られるものがある(第75図1)。このほか、土師器環・甕、ロクロ土師器甕、須恵器環蓋、弥生土器が出土した。

【SI156 穩穴住居跡】(第76・77図、写真図版26・49)

【位置】2区／平坦面

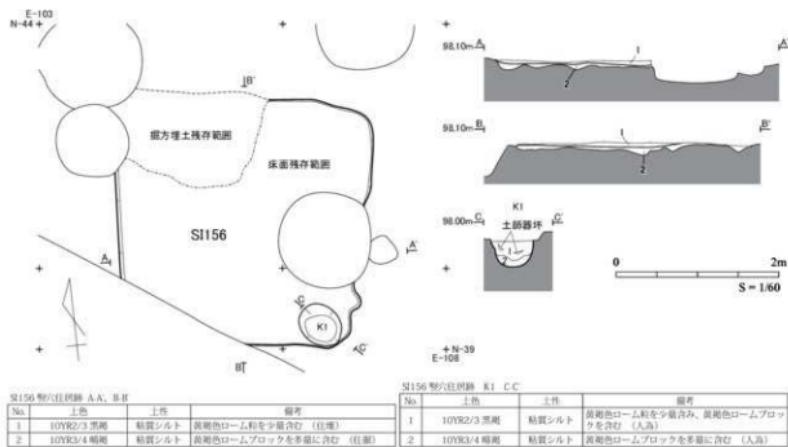
【重複】SI156 → SK189・SK190・SK218・SD144

【規模・形状】一辺3.10m／方形

【方向】住居西辺：N3°・E

【壁面】残存しない

【床面・堆積土】住居掘方埋土を床とし、ほぼ平坦である。床面を覆う堆積土は地山粒を少量含む黒褐色粘質シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。



第76図 SI156 穹穴住居跡

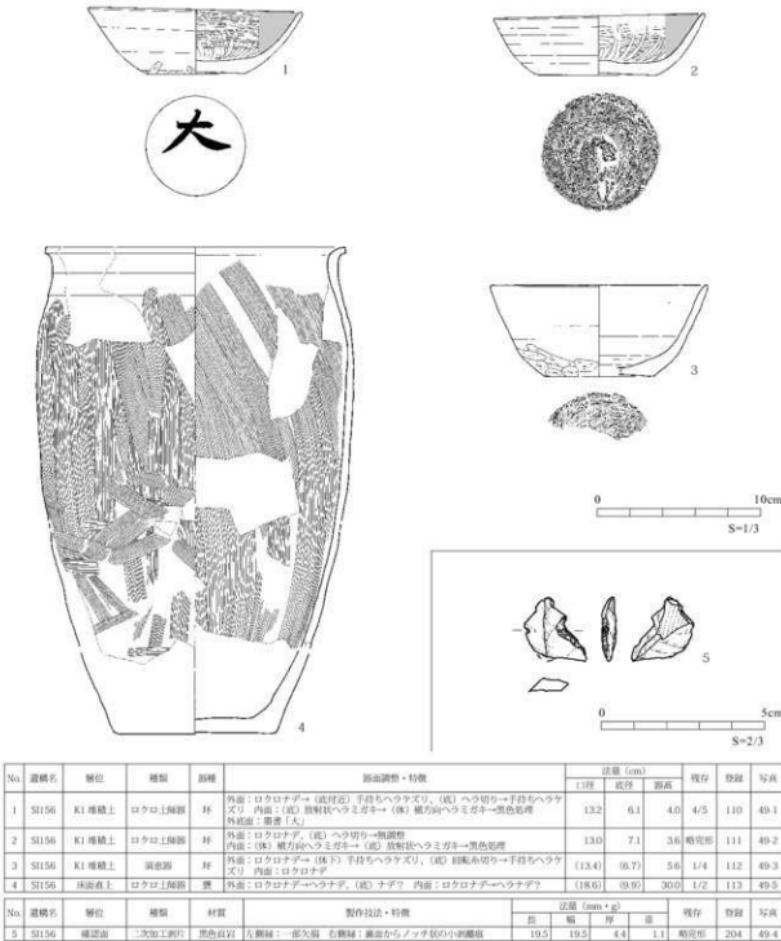
〔主柱穴・周溝・壁材〕なし

〔カマド〕不明

〔貯蔵穴〕住居南東隅で土坑1基(K1)を確認した。平面形が長軸60cm、短軸46cmの楕円形を呈し、断面形は深さ36cmのU字形を呈する。堆積土は2層に細分され、1層は地山ブロック・粒を含む黒褐色粘質シルト、2層は地山ブロックを多量に含む暗褐色粘質

シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕住居床面直上からロクロ土師器甕(第77図4)、K1土坑堆積土からロクロ土師器杯(第77図1・2)、須恵器环(第77図3)、遺構確認面から珪質頁岩製の二次加工片(第77図5)が出土した。ロクロ土師器杯は外底面に墨書き「大」が見られるものがある(第77図1)。このほか、土師器甕、ロクロ土師



第77図 SH156 積穴住居跡出土遺物

器坏、不明鉄製品の破片が出土した。土師器坏は内面に黒色処理を施すものと、外面をヨコナデ調整で仕上げるものがある。

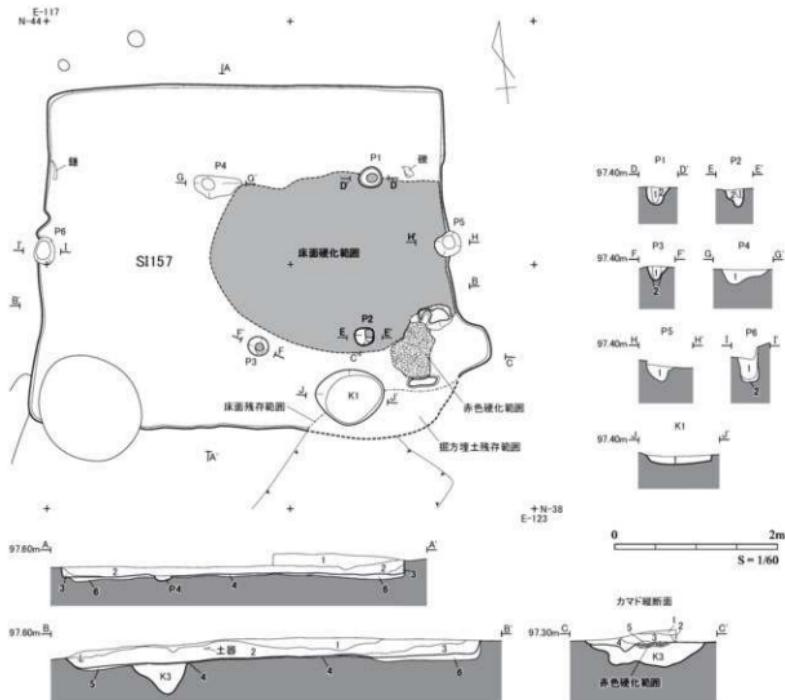
【SI157 穫穴住居跡】(第78-81図、写真図版25・50・51)
【位置】2区／平坦面

【重複】SK169 → SI157 → SK170

【規模・形状】長辺 5.10m、短辺 4.30m／方形

【方向】カマド中軸線：E-7°・S

【壁面】地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最大 20cm である。



SI157 穫穴住居跡 A-A', B-B'

No.	上色	土性	備考
1	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を含む（柱礎）
2	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を含む（柱礎）
3	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を含む（柱礎）
4	7.5YR4/6 周	シルト	黄色ロームブロックを多量に含む 上面（底面）が焼成による硬化化（柱礎）
5	10YR4/6 周	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含み、埴土粘土を含む 柱礎を含む（柱礎）
6	10YR4/6 周	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱礎）
SI157 穫穴住居跡 K1-K3	CC		
No.	上色	土性	備考
1	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	埴土粘土を少量含む
2	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を少量含む 柱礎を含む（柱礎）
3	5YR4/3 ないし 5YR4/4 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を含む、埴土粘土を極めて多量に含む
4	7.5YR4/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を多量に含み、埴土粘土・泥化物を含む
5	7.5YR4/4 周	シルト	粘土を含む（柱礎）
SI157 穫穴住居跡 P1-D-D'			
No.	上色	土性	備考
1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む（柱礎）
2	7.5YR4/3 周	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱礎）

SI157 穫穴住居跡 P2-E-E'

No.	上色	土性	備考
1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（柱礎）
2	7.5YR3/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱礎）
SI157 穫穴住居跡 P3-F-F'			
No.	上色	土性	備考
1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を含む（柱礎）
2	10YR3/2 黑褐色	シルト	黄褐色ローム粘土を少量含む（柱礎）
SI157 穫穴住居跡 P4-G-G'			
No.	上色	土性	備考
1	7.5YR3/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、黑色シルトブロックを含む（柱礎）
2	10YR3/2 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（柱礎）
SI157 穫穴住居跡 K1-J-J'			
No.	上色	土性	備考
1	7.5YR3/2 黑褐色	粘土	黄褐色ロームブロックを多量に含む（柱礎）

第78図 SI157 穫穴住居跡 (1)

〔床面・堆積土〕住居掘方埋土を床とし、東向きにやや傾斜する。住居中央部から東辺にかけての東西2.9m、南北2.2mの範囲で床面の硬化を確認した。床面を覆う堆積土は地山粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

〔主柱穴〕床面硬化範囲を囲むように4か所(P1~4)確認した。東側のP1・2は住居東辺から70~100cm、西側のP3・4は住居西辺から180~210cmに位置し、全体に東寄りに位置する。柱穴掘方の平面形は長軸26~60cm、短軸24~28cmの略円形・不整円形を呈し、深さ18~23cmである。3か所で平面形が直径10~15cmの円形を呈する柱痕跡、1か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔壁柱穴〕住居東辺中央で1か所(P5)、西辺中央で1か所(P6)確認した。掘方の平面形は長軸32~34cm、短軸26~28cmの楕円形を呈し、深さ27~44cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

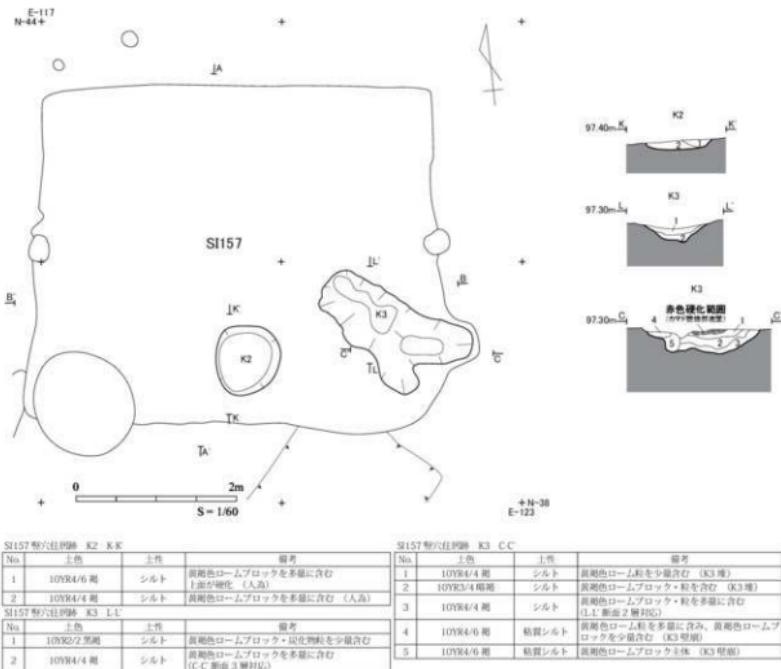
〔周溝・壁材〕なし

〔カマド〕住居東辺南寄りに付設する。幅95cm、奥行123cmの燃焼部が残存し、焚口幅は不明である。燃焼部底面は幅60cm、奥行120cmで、床面とはほぼ平坦である。焚口側の幅60cm、奥行50cmの範囲に赤色硬化面が形成されている。側壁は地山の白色粘土で構築され、長さ40cm、幅10~30cm、高さ6~10cmが残存する。奥壁は住居東壁より42cmほど張り出す。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東隅付近で土坑1基(K1)を確認した。平面形は長軸85cm、短軸66cmの楕円形を呈し、断面形は深さ10cmの逆台形を呈する。堆積土は地山ブロック、焼土・炭化物粒を含む暗褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。K2土坑

〔床下土坑〕住居南東側で土坑2基(K2・3)を確認した。

K2土坑は平面形が長軸90cm、短軸80cmの楕円形を呈し、断面形は深さ11cmの逆台形を呈する。堆積土は2層に細分される。いずれも地山ブロックを含む褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。K3土坑は平面形が長軸112cm、短軸80cmの不整形を呈し、



第79図 SI157竪穴住居跡（2）

断面形は深さ45cmの逆台形を呈する。底面は凹凸が著しい。堆積土は6層に細分される。東半部では1層は地山粒を少量含む褐色シルト、2層は地山ブロック・粒を含む暗褐色シルト、3層は地山ブロック・粒を多量に含む褐色シルト、4層は地山粒を多量に含む褐色シルト、5層は地山ブロックを主体とする褐色シルトで、1~3層は人為的埋土、4・5層は壁際の崩落土と考えられる。また、西半部では上部に地山ブロック、炭化物粒を少量含む黒褐色シルトが堆積し、自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】住居床面直上から鉄製鎌先（第80図6）、凝灰岩製の砥石（第81図1・3）、住居内堆積土からロクロ土器器環（第80図1・2・3）、凝灰岩製の砥石（第81図2）、住居掘方埋土から弥生土器壺（第80図4・

5）が出土した。ロクロ土器器環（第80図1-3）は外底あるいは外面の体下部に墨書き見られ、判読可能なものは「三〇〇」（第80図1）がある。また、第80図2は外面の口縁部・体部に油煙の付着が見られる。このほか、土器器環・壺・須恵器壺・弥生土器・焼けたスナ入り粘土塊が出土した。

【SI159 穫穴住居跡】（第82図、写真図版26）

〔位置〕2区／平坦面

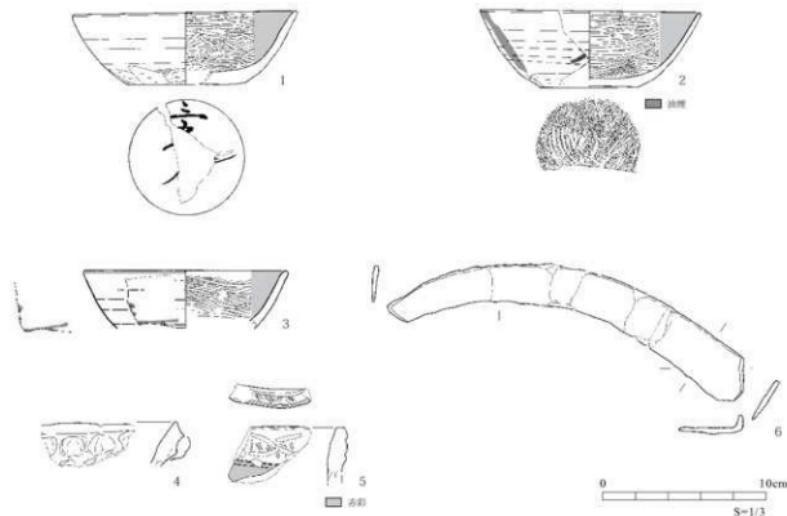
〔重複〕SK222→SI159→SI140・SK151・SK167・SK168

〔規模・形状〕長辺3.50m以上、短辺3.40m以上／方形

〔方向〕住居東辺：N-7°-E

〔壁面・床面・堆積土〕残存しない

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上で4か所確認した（P1-4）。柱穴掘方の平面形は長軸24-50cm、短軸



No.	遺物名	層位	種類	材質	測量調整・特徴		法規(cm)		現存	登録	写真
					口径	底径	高さ	幅			
1	SI157	堆積土	ロクロ土器環	环	外底：ロクロナメテ（底付石）手持ちヘラケズリ、（底）切り離し不明→手持ちヘラケズリ、内面：（底）切削跡ヘラミガキ（木）柄・斜め方向ヘラミガキ一黑色危険 外底面：墨書き「三〇〇」？ 外面：（1-1）油煙	13.9	7.1	4.5	5/6	105	50-1
2	SI157	堆積土上層	ロクロ土器環	环	外底：ロクロナメテ（底付石）手持ちヘラケズリ、（底）油煙・手切り一黑色 危険 外底面：墨書き「三〇〇」？ 外面：（1-1）油煙	13.6	6.0	4.7	1/2	106	50-2
3	SI157	堆積土	ロクロ土器環	环	外底：ロクロナメテ 内面：（底）油煙・手切りヘラミガキ→柄・斜め方向ヘラミガキ→黑色危険 外底面：墨書き「三〇〇」	(12.6)		(3.6)	一部	108	50-3
No.	遺物名	層位	種類	材質	測量調整・特徴		法規(cm)		現存	登録	写真
4	SI157	堆積土上層	須恵器	壺	外底：（1-1）隆起貼付・面部土痕 内面：ナデ		(2.8)		11頭部	505	50-5
5	SI157	住居掘方土	須恵器	壺	外底：（1-1）墨書き・赤彩 内面：ナデ		(3.5)		11頭部	506	50-4
No.	遺物名	層位	種類	材質	特徴		法規(mm・g)		現存	登録	写真
6	SI157	床面直上	鐵	鉄	鉄頭欠損 基礎部：曲折		(225.5)		290	3.0	(63.0)

第80図 SI159竪穴住居跡出土遺物（1）

24~38cm の楕円形を呈し、深さ 25~70cm である。1か所で平面形が直径 20cm の円形を呈する柱痕跡、3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔周溝・壁材〕不明

〔カマド〕不明

〔貯蔵穴〕住居北東隅付近で土坑 1 基 (K1) を確認した。平面形は長軸 34cm、短軸 32cm の略円形を呈し、断面形は深さ 6cm の皿形を呈する。堆積土は地山ブロック・粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕遺構確認面から土師器、須恵器が出土した。

〔SI160 穹穴住居跡〕(第 83 図、写真図版 24)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SI160 → SB199・SK184

〔規模・形状〕長辺 3.80m 以上、短辺 2.50m 以上／方形

〔方向〕住居西辺：N 8° -E

〔壁面・床面・堆積土〕残存しない

〔主柱穴〕4 か所確認した (P1~4)。柱穴掘方の平面形は長軸 30~36cm、短軸 22~32cm の隅丸方形・楕円形を呈し、深さ 36~50cm である。4 か所で平面形が直径 12~22cm の円形を呈する柱痕跡、3 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔周溝・壁材〕不明

〔カマド・貯蔵穴〕不明

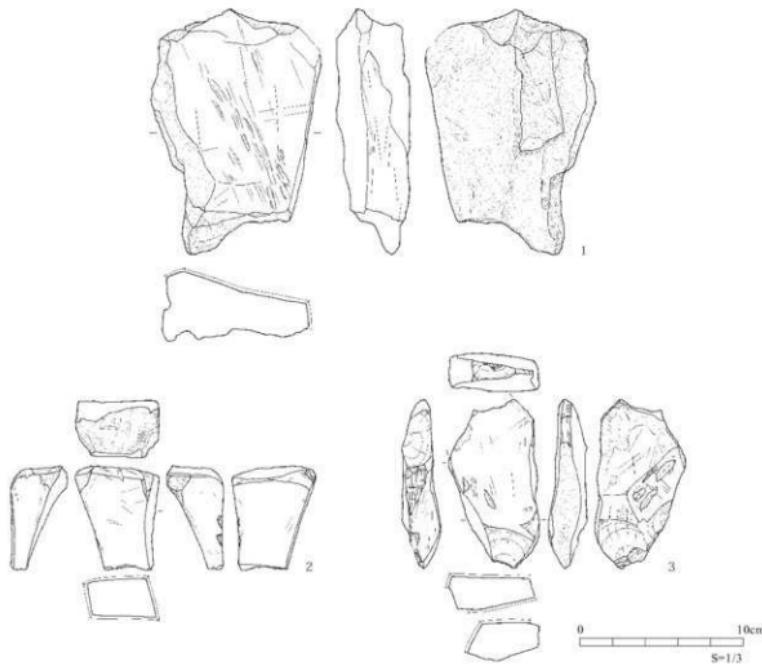
〔出土遺物〕P3 柱穴確認面から土師器が出土した。

〔SI178 穹穴住居跡〕(第 83 図、写真図版 25・49)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SI178 → SK212

〔規模・形状〕長辺 4.70m 以上、短辺 1.40m 以上／方形



No.	遺構名	層位	種類	材質	製作技法・特徴	法規 (mm・g)			現存	登録	写真
						長	幅	厚			
1	SI157 (柱穴直上)	硬石	塊状	塊状	底面数：3、底部研磨面、裏面：欠損→使用による削減	151.0	105.0	41.5	556.0	完形	205 50.6
2	SI157 堆積土	硬石	塊状	塊状	底面数：5、下面：研磨	(64.0)	51.0	34.2	(101.5)	一部	207 50.8
3	SI157 (柱穴直上)	硬石	塊状	塊状	底面数：7、外底面：四面部に整型時の削離面 内面：欠損→側面成形→使用による削減	103.5	56.0	23.8	131.0	一部	206 50.7

第 81 図 SI157 穹穴住居跡出土遺物 (2)

〔方向〕住居東辺：N-2°-W

〔壁面〕地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は8cmである。

〔床面・堆積土〕住居掘方埋土または貼床面を床とし、南向きにやや傾斜する。床面を覆う堆積土は地山極小粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

〔主柱穴〕不明

〔周溝・堆積土〕住居北辺の一部で周溝を確認した。幅32cmで、断面形は深さ8cmのU字形である。堆積土は住居内堆積土と共に、壁材痕跡は確認されなかった。

〔カマド・貯蔵穴〕不明

〔出土遺物〕遺構確認面から土師器環（第83図1）が出土した。内面にナデ調整、黒色処理を施す。外縁部には粘土紐の輪積み痕跡を残し、口縁部にヨコナデ調整を施す。底部には糸切り痕が見られる。

【SI194 穫穴住居跡】（第84-86図、写真図版27-52・53）

〔位置〕2区・平坦面

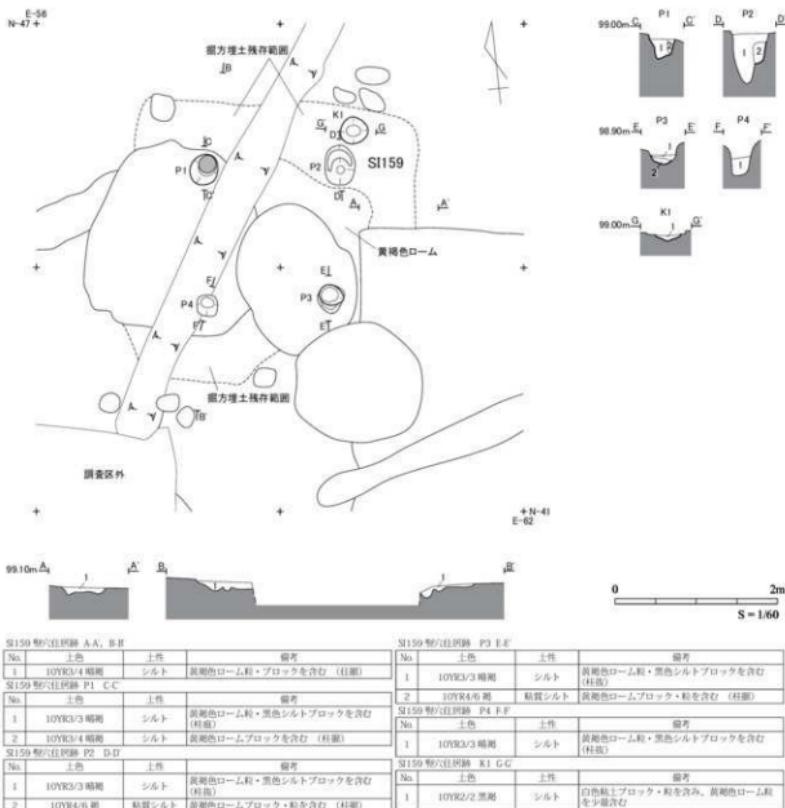
〔重複〕SI140・SK211・SK213→SI194→SK198

〔規模・形状〕長辺3.08m、短边2.46m／方形

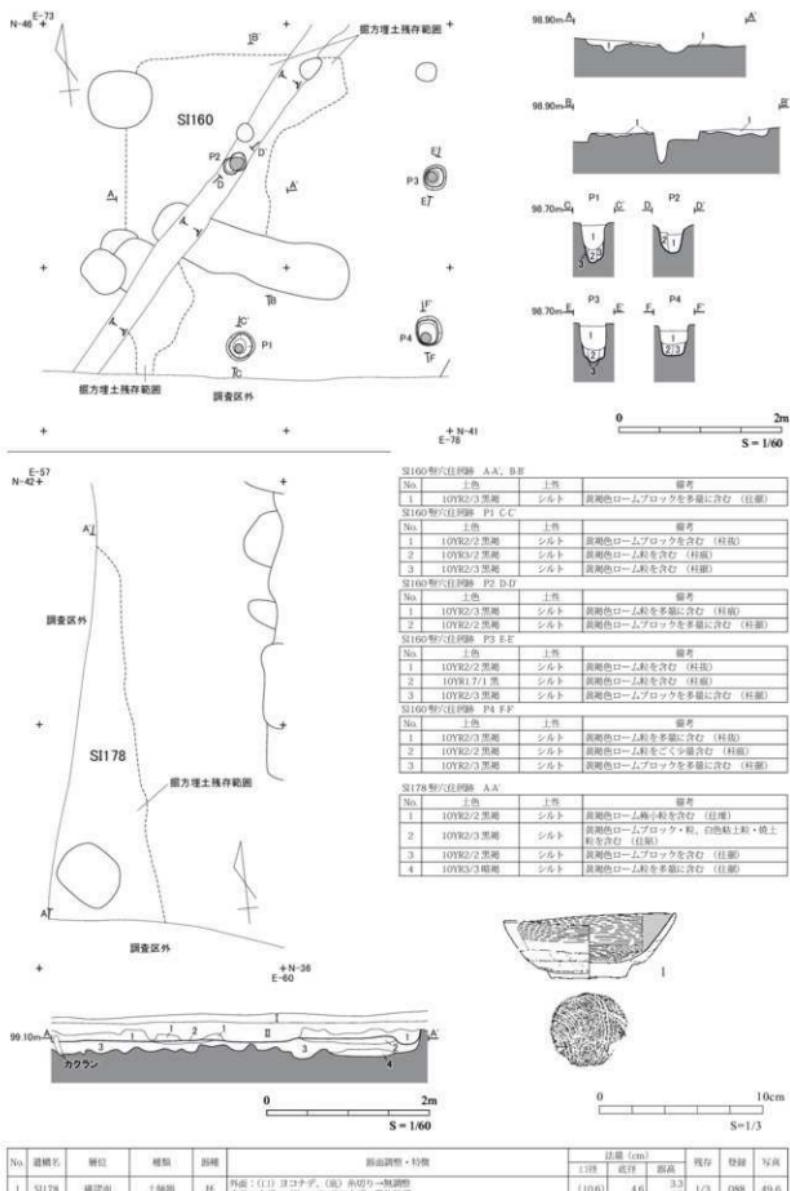
〔方向〕カマド中軸線：E-8°-S

〔壁面〕地山を壁として緩やかに立ち上がる。残存壁高は最大11cmである。

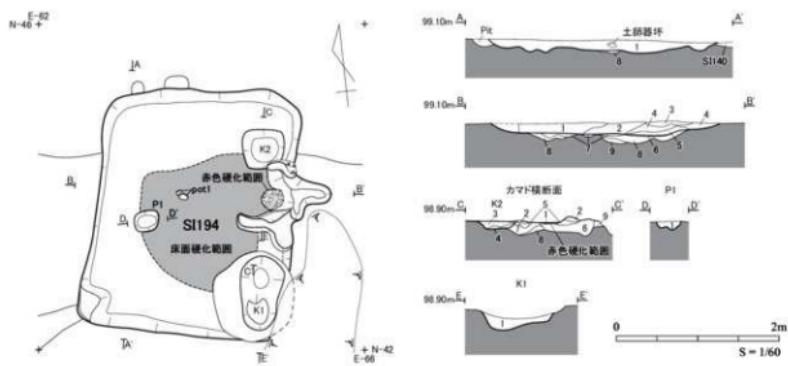
〔床面・堆積土〕住居掘方埋土・地山を床とする。ほぼ平坦で、住居中央部から東辺にかけての東西1.45m、



第82図 SI159 穫穴住居跡

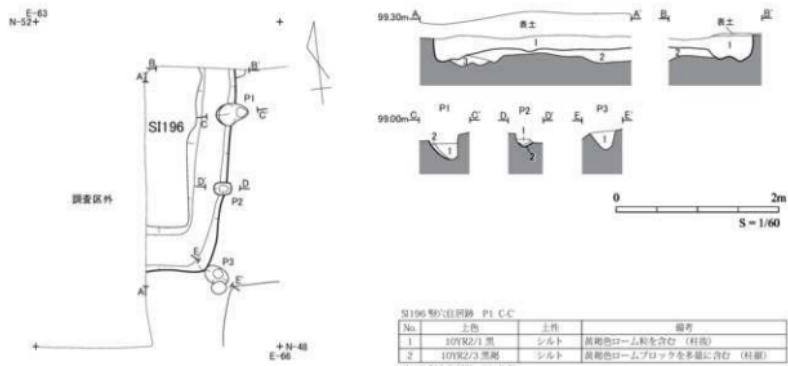


第83図 SI160・178 穴住居跡・SI178 穴穴住居跡出土遺物

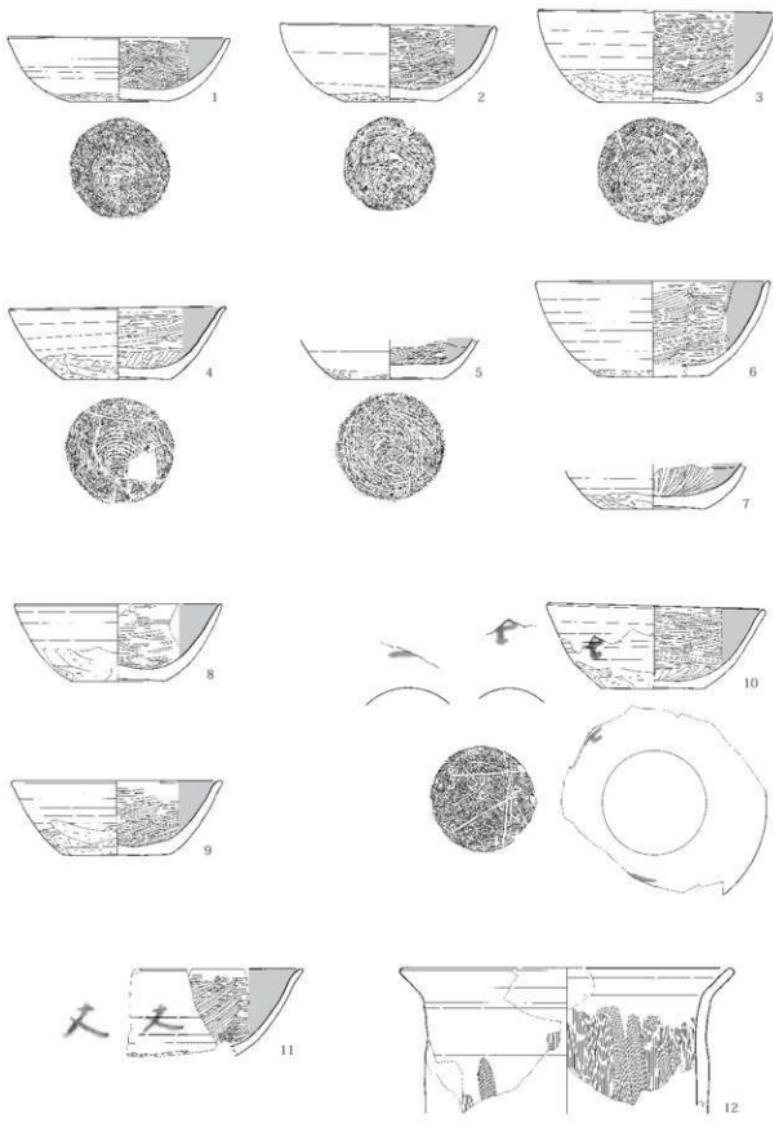


S194 鄭六桂納路 A.A. B.B'

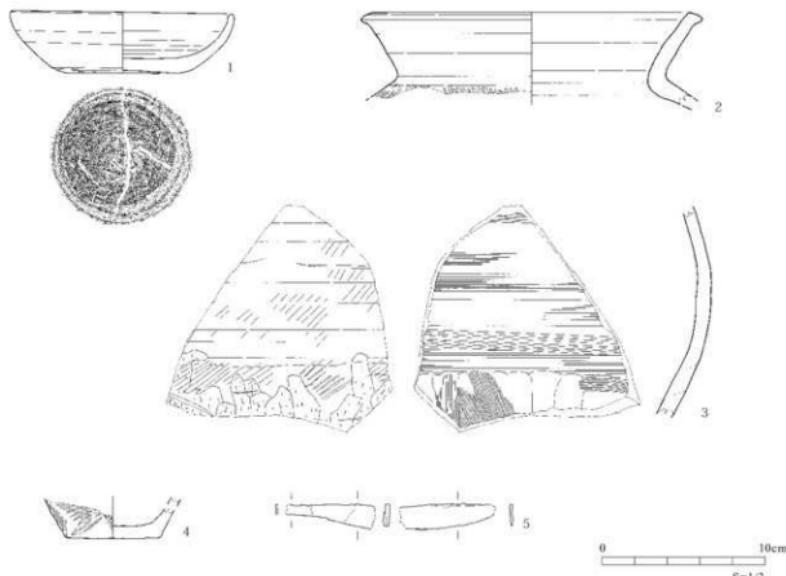
No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒潤	シルト	黄褐色ローム・黒色粘土を含み、稍土粒・化成物を少々含む(潤)	1	5YR16/2 黒潤	シルト	黄褐色ローム・黒色シルトを含む(潤)
2	10YR3/3 潤	シルト	黄褐色潤シルト・プロトク・澱土粒・化成物を含む(潤)	2	2.5Y14/4 オリーブ潤	粘土	稍土粒・黒色シルト・プロトクを含む(透水性弱・土面は6度傾斜)
3	7.5YB4/4 潤	シルト	黒土粒・黄褐色ローム・白色粘土・プロトク・化成物を含む(潤)	3	10YR2/2 黒潤	シルト	黄褐色ローム・プロトク・稍土粒と含む(2度傾)
4	10YK2/2 黒潤	シルト	黒土粒・白色粘土・プロトクを含む(潤)	4	10YR3/4 潤	シルト	黄褐色ローム・粘土・稍土粒・黑色シルトを含む(透水性弱・土面は2度傾)
5	5YR4/4 に赤潤	シルト	黒土粒・白色粘土・プロトク・黒色シルト・プロトクを含む(潤)	5	10YR3/4 潤	シルト	黄褐色ローム・粘土・稍土粒・黑色シルトを含む(潤)
6	2.5Y4/4 オリーブ潤	粘土	黒土粒・白色粘土・プロトクを含む(透水性弱・透水性強・2度傾斜)	6	10YR4/3 に黄潤	粘質シルト	黄褐色ローム・粘土・稍土粒を含む(形・風化曲線)
7	10YR4/4 潤	粘土	黒土粒・白色粘土・プロトクを含む(潤)	7	10YR4/4 黄潤	粘質シルト	黄褐色ローム・粘土を含む(往潤)
8	10YR2/2 黑潤	シルト	黄褐色ローム・粘土・白色粘土・プロトクを含む(潤)	8	10YR3/4 黄潤	粘質シルト	黒色・黒色シルトを少々含む(往潤)
9	10YR4/4 潤	粘質シルト	黄褐色ローム・白色粘土を含む(透水性弱・透水性強・5度傾斜)	9	10YR4/4 潤	粘質シルト	黑色シルトを含む(往潤・干透す9度傾斜)
SI194#(透水性 P1 D7)							
No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 潤	シルト	黄褐色ローム・白色粘土・黑色シルトを含む(人為)	1	10YR2/2 黑潤	シルト	黄褐色ローム・粘土・黑色シルトを含む(人為)
SI194#(透水性 E1 E-E)							
No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黑潤	シルト	黄褐色ローム・粘土・黑色シルトを含む(人為)				



第 84 図 SI194・196 積穴住居跡



第85図 SI194 壁穴住居跡出土遺物（1）



No.	遺物名	層位	種類	部材	断面調整・特徴		法量(cm)		残存	登録	写真	
					外曲	内曲	直径	幅				
1	SII194	K1 堆積土	箇唐器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→回転へラケズリ 内曲: ロクロナナデ		13.8	7.1	3.7	6/7	085	53-10
2	SII194	K1 堆積土	箇唐器	環	外曲: (底) ロクロナナデ、(側) 平行タキ→ロクロナナデ (側) ハラケズリ 内曲: 平行タキ→ロクロナナデ (側) ハラケズリ	(21.0)	-	(5.7)	-	077	53-8	
3	SII194	K2 堆積土	箇唐器	環	外曲: ロクロナナデ→(底付近) ハラケズリ (側) ハラケズリ→(底下) ナデ			(13.0)	-	079	53-11	
No.	遺物名	層位	種類	部材	断面調整・施工・特徴		法量(cm)		残存	登録	写真	
4	SII194	堆積土	箇土上器	抹たまは唐	外曲: 体削調文 (L)・底削木茎底 内曲: ナナデ 既往: 5.8cm		(2.5)	-	514	53-9		
No.	遺物名	層位	種類	部材	特徴		法量(mm・g)		残存	登録	写真	
					外曲	内曲	長	幅				
5	SII194	堆積土	刀子	鉄	刀身部: 両端穴留 茎部: 両端大穴留		(59.0)	(15.0)	2.0	(4.7)	-	084

(第 85 図)

No.	遺物名	層位	種類	部材	断面調整・特徴		法量(cm)		残存	登録	写真	
					外曲	内曲	直径	幅				
1	SII194	堆積土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理 外曲: (底) 既往: 5.8cm		13.7	5.9	4.0	2/3	081	52-2
2	SII194	堆積土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		13.4	5.7	4.7	2/3	084	52-3
3	柱列火葬場上 Pt.3	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		14.9	6.8	5.6	5/6	083	52-4	
4	SII194	カマド側底土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		13.4	6.7	4.5	断面形	090	53-1
5	SII194	礎面	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 回転軸切り→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		(6.6)	(2.5)	-	-	086	53-2
6	SII194	K1 堆積土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		(14.5)	(6.9)	5.9	1/5	087	53-4
7	SII194	堆積土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 構造状へラケズリ (側) 放射状へラケズリ→黒色处理		6.3	(2.8)	-	080	53-6	
8	SII194	K1 堆積土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		(12.8)	(5.8)	4.9	1/5	078	53-5
9	SII194	堆積土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		(13.0)	(6.6)	4.6	1/2	089	52-6
10	SII194	堆積土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		(13.5)	6.4	4.9	2/3	093	52-5
11	SII194	堆積土	ロクロ土師器	环	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理 外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		(5.4)	-	-	076	53-3	
12	SII194	堆積土	ロクロ土師器	環	外曲: ロクロナナデ→(底付近) 手捻へラケズリ、(底) 切り離し不規→手捻へラケズリ 内曲: (底) 放射状へラケズリ (側) 橫方向へラケズリ→黒色处理		(20.6)	(9.0)	-	097	53-7	

第 86 図 SII194 瓦穴住居出土遺物 (2)

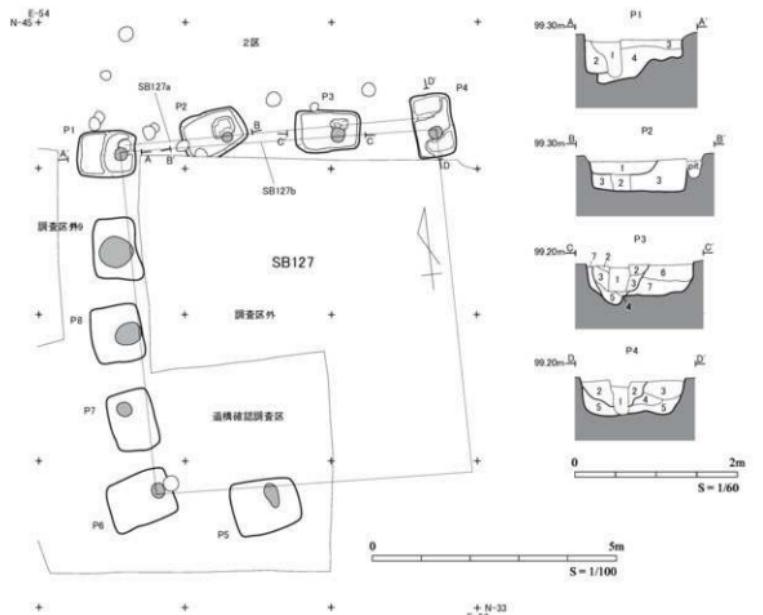
南北 1.70m の範囲で床面の硬化を確認した。床面を覆う堆積土は地山ブロック・粒・焼土・炭化物粒を含む黒褐色・暗褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

〔主柱穴〕住居西側中央付近で 1か所 (P1) 確認した。平面形は長軸 29cm、短軸 24cm の楕円形を呈し、深さ 10cm である。柱材の抜き取り痕跡の可能性がある。

〔周溝・壁材〕なし

〔カマド〕住居東辺中央付近に付設し、燃焼部と煙

道が残存する。燃焼部は幅 112cm、奥行 66cm で、焚口幅は不明である。燃焼底部底面は幅 52cm、奥行 54cm で、床面とほぼ平坦である。奥壁側の幅 25cm、奥行 28cm の範囲に赤色硬化面が形成されている。側壁は焼土粒・黒色シルトブロックを含むオーレー褐色粘土で構築され、長さ 36-68cm、幅 13-24cm、高さ 6-16cm が残存する。奥壁は住居東壁と一致する。煙道は残存長が奥壁から 50cm で、幅 26cm、深さ 6cm である。なお、側壁は K2 土坑の上面に構築されてお



SB127 備合柱建物跡 P1 A/A'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (b 断面版)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (b 断面版)
3	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多く含む (a 断面版)
4	10YR3/4 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを極めて多量に含む (a 断面版)

SB127 備合柱建物跡 P2 B/B'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (b 断面版)
2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (b 断面版)
3	10YR1/1 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを 多量に含む (b 断面版)

SB127 備合柱建物跡 P3 C/C'

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (b 断面版)
2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (b 断面版)
3	10YR2/2 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (b 断面版)
4	10YR2/2 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む (b 断面版)
5	10YR3/4 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む (b 断面版)
6	10YR3/4 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (a 断面版)
7	10YR2/1 黑	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (a 断面版)

SB127 備合柱建物跡 P4 D/D'

No.	上色	土性	備考
1	10YR3/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを極少量含む (b 断面版)
2	10YR3/4 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (a 断面版)
3	10YR4/4 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを極めて多量に含む (a 断面版)
4	10YR3/4 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (a 断面版)
5	10YR4/6 黑	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (a 断面版)



0 10cm

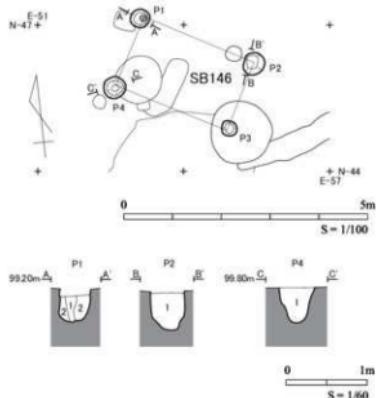
No.	遺構名	断面	推定	測定	備考	写真
1	SB127b	P4	柱柱上	約1.1m高	厚さ1.1m	S=1/3

第 87 図 SB127 掘立柱建物跡・出土遺物

り、側壁構築土下に焼土を含む土層（C-C'断面4-6層）が見られることから、カマドの作り替えが行われた可能性が考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東隅で土坑1基（K1）を確認した。平面形は長軸91cm、短軸53cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ20cmの逆台形を呈する。堆積土は地山・焼土粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。また、カマド左側の住居北東隅付近で土坑1基（K2）を確認した。旧カマドに伴う貯蔵穴と考えられる。カマド左側壁より古く、平面形は長軸52cm、短軸48cmの楕円形を呈し、断面形は深さ10cmの逆台形を呈する。堆積土は2層に細分され、1層は地山ブロック・焼土粒を含む黒褐色シルト、2層は地山・焼土粒を含む暗褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられ、旧カマド構築土起源の可能性がある。

〔出土遺物〕住居床面直上からロクロ土師器環（第85図3）、カマド崩落土からロクロ土師器環（第85図4）、K1土坑堆積土からロクロ土師器環（第85図6・8）、須恵器環・甕（第86図1・2）、K2土坑堆積土から須恵器甕（第86図3）、住居内堆積土からロクロ土師器環（第85図1・2・7・9・10・11）、甕（第85図12）、



SB146 垂立柱建物跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックをぐるなび石（粘土）
2	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（粘土）
SB146 垂立柱建物跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を含む
SB146 垂立柱建物跡 P4 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含み、黄褐色ローム を多量に含む

鉄製刀子（第86図5）、弥生土器（第86図4）、遺構確認面からロクロ土師器環（第85図5）が出土した。ロクロ土師器環は外面の体部に墨書「丈」が見られるもの（第85図11）、墨書「中」？・「一」？が見られるもの（第85図10）がある。このほか、土師器環・甕、須恵器環・流紋岩製の剥片が出土した。土師器環は外側面にミガキ調整→赤彩を施すものがある。

【SI196 竪穴住居跡】（第84図、写真図版27）

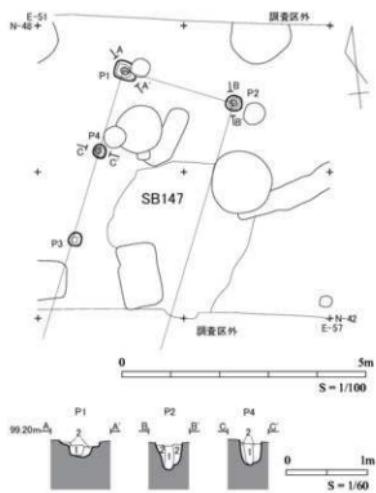
〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕長辺2.50m以上、短辺0.70m以上／方形
〔方向〕住居東辺：N-13°-E

〔壁面〕地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最大で20cmである。

〔床面・堆積土〕住居掘方埋土を床とし、ほぼ平坦である。床面を覆う堆積土は地山ブロック・粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。



SB147 垂立柱建物跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含み、黄褐色ロームを含む（粘土）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を含む（粘土）
SB147 垂立柱建物跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む（粘土）
2	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ロームを含む（粘土）
SB147 垂立柱建物跡 P4 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を含む（粘土）
2	10YR3/3 單褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む（粘土）

第88図 SB146・147 垂立柱建物跡

〔主柱穴〕不明

〔壁柱穴〕住居東辺で3か所（P1-3）確認した。平面形は長軸20-40cm、短軸14-27cmの楕円形を呈し、深さ17-30cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔周溝・壁材〕住居壁面に沿って幅35-52cmの周溝を確認した。断面形は深さ18cmの不整なU字形である。堆積土は住居内堆積土と共通し、壁材痕跡は確認されなかつた。

〔カマド・貯蔵穴〕不明

〔出土遺物〕住居掘方理土から土師器が出土した。内外面にヘラミガキ調整、赤彩を施すものがある。

(2) 挖立柱建物跡

〔SB127a 挖立柱建物跡〕(第87図、写真図版28)

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SB127a → SB127b - SB147

〔規模・形状〕桁行4間（6.96m）、梁行3間（6.43m）
／南北棟側柱建物

〔方向〕西側柱列：N $^{\circ}$ 2-W

〔柱穴〕9か所確認し、4か所で掘り下げを行なった。柱穴掘方の平面形は長軸118-132cm、短軸80-92cmの楕円形を呈し、深さ49-56cmである。掘方底面

は平坦なものと、階段状に掘削されているものがある。3か所で平面形が長軸20-27cm、短軸13-23cmの楕円形を呈する柱材の抜き取り痕跡および柱材圧痕を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列：北から(188)-(172)-(156)-(180)cm
北側柱列：西から210-233-(200)cm

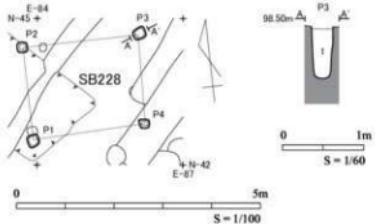
〔出土遺物〕なし

〔SB127b 挖立柱建物跡〕(第87図、写真図版28・51)

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SB127a → SB127b - SB147

〔規模・形状〕桁行4間（6.96m）、梁行3間（6.52m）
／南北棟側柱建物



No.	上色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少額含む (粘土)
2	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少額含む (粘土)
3	10YR4/6 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (粘土)

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/4 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (粘土)

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少額含む (粘土)
2	10YR2/4 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少額含む (粘土)
3	10YR4/6 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (粘土)

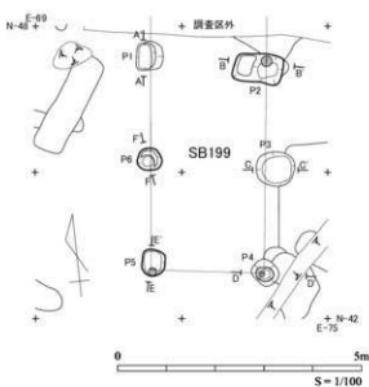
No.	上色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (人骨)

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少額含む (粘土)
2	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少額含む (粘土)

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/4 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (粘土)

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (粘土)

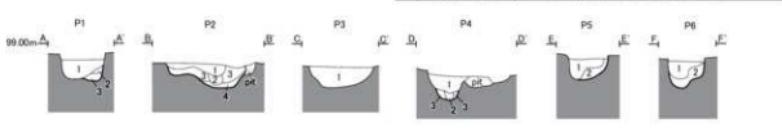
No.	上色	土性	備考
1	10YR2/4 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (粘土)



No.	上色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (人骨)

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少額含む (粘土)
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少額含む (粘土)

No.	上色	土性	備考
1	10YR2/4 黑褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量含む (粘土)



第89図 SB199・228 挖立柱建物跡

〔方向〕西側柱列：N-2° -W

〔柱穴〕9か所確認し、4か所で掘り下げを行なった。柱穴掘方はSB127a掘立柱建物跡の柱材抜き取り穴を利用しており、柱位置を約20cm南側へ移している。柱材はいずれも抜き取られており、抜き取り痕跡から推定される柱材の平面形は直径22-26cmの円形である。

〔柱間寸法〕西側柱列：北から(188)-(172)-(156)-(180)cm

北側柱列：西から222-226-204cm

〔出土遺物〕P4柱穴堆積土から弥生土器（第87図1）が出土した。このほか、土師器小型品、ロクロ土師器等が出土した。

〔SB146 掘立柱建物跡〕（第88図、写真図版28）

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SB147・SK133・SK134・SK135→SB146

〔規模・形状〕桁行1間(2.38m)、梁行1間(1.56m)

／南北棟側柱建物

〔方向〕北側柱列：W-30°-N

〔柱穴〕4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸38-44cm、短軸38-44cmの不整円形を呈し、深さ42-47cmである。1か所で平面形が直径14cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：(238)cm、西側柱列：(156)cm

〔出土遺物〕なし

〔SB147 掘立柱建物跡〕（第88図、写真図版28）

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SB147→SB146-SB127・SK134・SK135

〔規模・形状〕桁行2間(3.60m)以上、梁行1間(2.38m)／南北棟側柱建物

〔方向〕西側柱列：N-23°-E

〔柱穴〕4か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸36-46cm、短軸28-36cmの不整円形を呈し、深さ20-34cmである。3か所で平面形が直径12-17cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列：北から172-(188)cm

北側柱列：238cm

〔出土遺物〕なし

〔SB199 掘立柱建物跡〕（第89図、写真図版28・29）

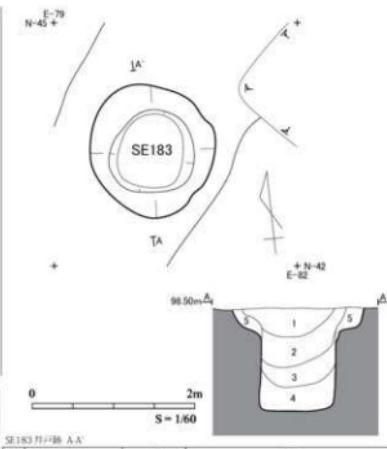
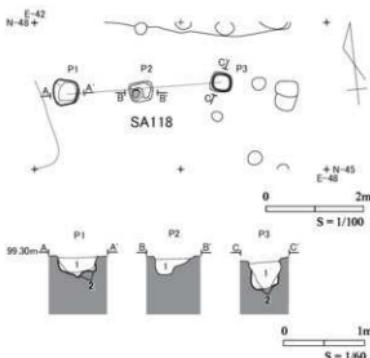
〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SI160→SB199→SK219

〔規模・形状〕桁行2間(4.40m)以上、梁行1間(2.30m)／南北棟側柱建物

〔方向〕西側柱列：N-6°-E

〔柱穴〕6か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸50-110cm、短軸44-70cmの隅丸方形を基調とし、



No.	上色	上性	断面	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む	(柱施)
2	10YR2/3 噴出物	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む	(柱施)

No.	上色	上性	断面	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む	(柱施)
2	10YR2/3 噴出物	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む	(柱施)

No.	上色	上性	断面	備考
1	10YR2/3 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (5壁起築)	
2	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色	
3	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色	
4	10YR2/1 黑褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多く少々含む	
5	10YR3/6 黄褐色	粘質シルト	黄褐色	

第90図 SA118柱列跡・SE183井戸跡

深さ 28~36cm である。6か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2か所で平面形が直径 10~22cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 東側柱列：北から (220) - (220) cm
南側柱列：230cm

〔出土遺物〕 土器器表が出土した。

〔SB228 掘立柱建物跡〕(第 89 図)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SB228 → SK152

〔規模・形状〕 桁行 1 間 (2.43m)、梁行 1 間 (1.92m)

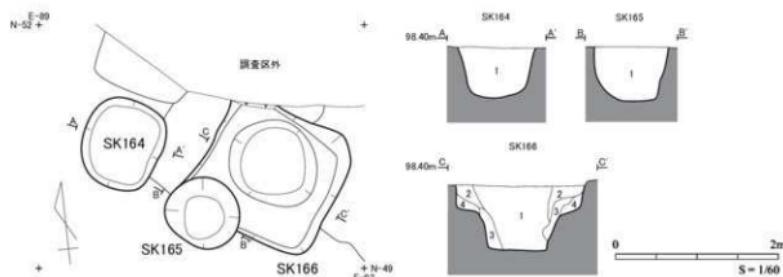
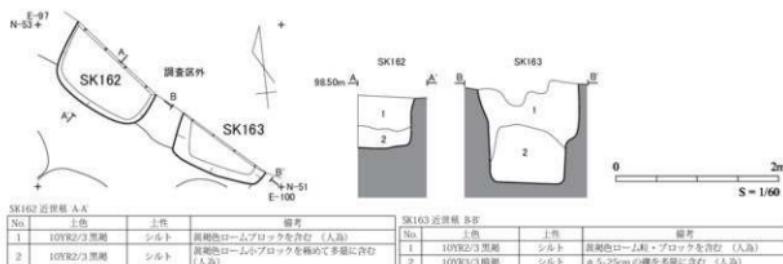
／東西側柱建物

〔方向〕 北側柱列 : W·O°

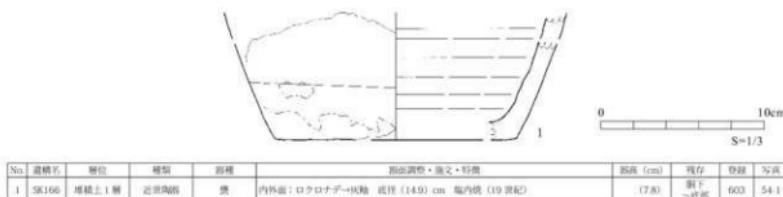
〔柱穴〕 4 か所確認した。柱穴掘方の平面形は長軸 20~26cm、短軸 18~24cm の方形を呈し、深さ 45~64cm である。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕 北側柱列 : (192) cm、西側柱列 : (243) cm

〔出土遺物〕 なし



SK166 近世墓 C-C'			
No.	上色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む（人骨・鉢）
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（瓶）
3	10YR3/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを極めて多量に含む（瓶）
4	10YR2/3 黑褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック体（瓶）



第 91 図 SK162~166 近世墓、SK166 近世墓出土遺物

(3) 柱跡

【SA118 柱跡】(第90図、写真図版28・29)

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕なし

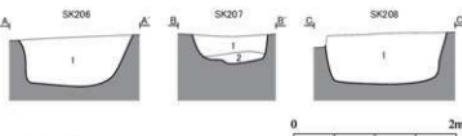
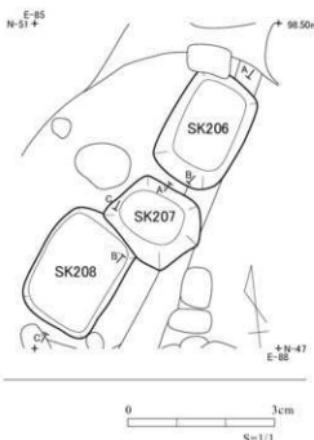
〔規模・形状〕東西2間（3.20m）

〔方向〕W-1°・N

〔柱穴〕3か所で確認した。柱穴掘方の平面形は長軸48-52cm、短軸38-49cmの隅丸方形を呈し、深さ27-34cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から（156）-（166）cm

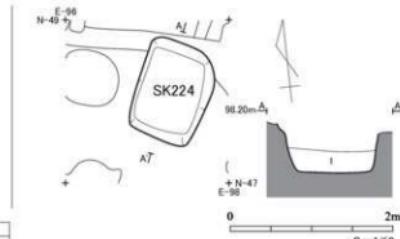
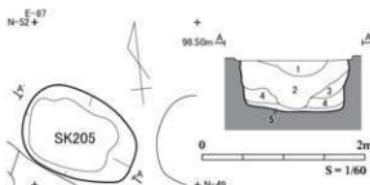
〔出土遺物〕土師器が出土した。



SK206 近世層 A-A'			
No.	色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（人為）
SK207 近世層 B-B'			
No.	色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム・粘土を含む（人為）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（人為）
SK208 近世層 C-C'			
No.	色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む（人為）



No.	遺物名	部位	種類	銘名	特徴	法量 (mm・g)				写真
						径	厚	重	現存	
1	SK208	堆積土	銅錢	寶永通寶	銘文「寶永通寶」	22.7	1.0	2.6	完形	313a 54.4
2	SK208	堆積土	銅錢	寶永通寶	銘文「寶永通寶」背文「文」	25.2	1.3	2.3	完形	313b 54.6



SK205 近世層 A-A'			
No.	色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを少額含む（人為）
2	10YR2/4 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量含む（人為）
3	10YR2/3 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを少額含む（人為）
4	10YR2/2 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム・粘土を少額含む（人為）
5	10YR2/3 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを少額含む

SK224 近世層 A-A'			
No.	色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロック・粘土を多量に含む（人為）

第92図 SK205-208 近世墓、SK208 近世墓出土遺物

れる。5層は均質な黄褐色粘質シルトで、井戸側の掘方埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から弥生土器（第105図3）が出土した。弥生土器はSD144溝跡出土のものと接合関係がある。このほか、土師器環・須恵器環・甕が出土した。

（5）近世墓

〔SK162近世墓〕（第91図）

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SD144 → SK162

〔規模・形状〕平面形が長軸130cm、短軸72cm以上の隅丸方形を呈し、断面形は深さ66cmの箱形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

〔堆積土〕2層に細分される。地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕須恵器、不明鉄製品が出土した。

〔SK163近世墓〕（第91図、写真図版54）

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SD144 → SK163

〔規模・形状〕平面形が長軸121cm、短軸50cm以上の隅丸方形を呈し、深さ105cmである。下部が箱形、上部は逆台形を呈し、東壁の中位に段を形成する。底面は平坦である。

〔堆積土〕2層に細分される。地山ブロック・粒・纏を多量に含む黒褐色・暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から銅鏡（寛永通宝、写真図版57-1~4）が出土した。このほか、土師器甕・須恵器環、近世陶器甕が出土した。近世陶器甕は内外面に灰釉が見られ、大堀相馬産とみられる。

〔SK166近世墓〕（第91図、写真図版29・54）

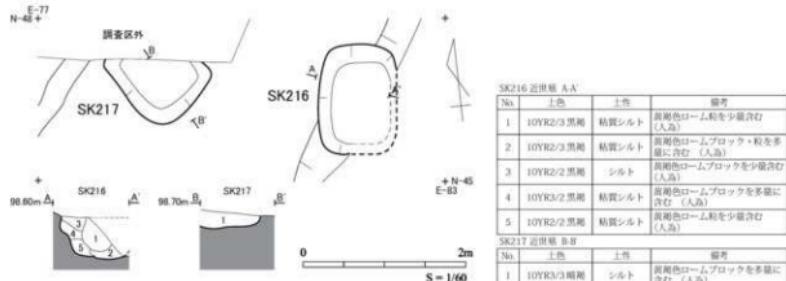
〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SK248・SD144 → SK166 → SK165

〔規模・形状〕平面形が長軸164cm、短軸164cmの隅丸方形を呈し、深さ78cmである。下部が円筒形、上部は逆台形を呈し、中位に段を形成する。底面は平坦である。

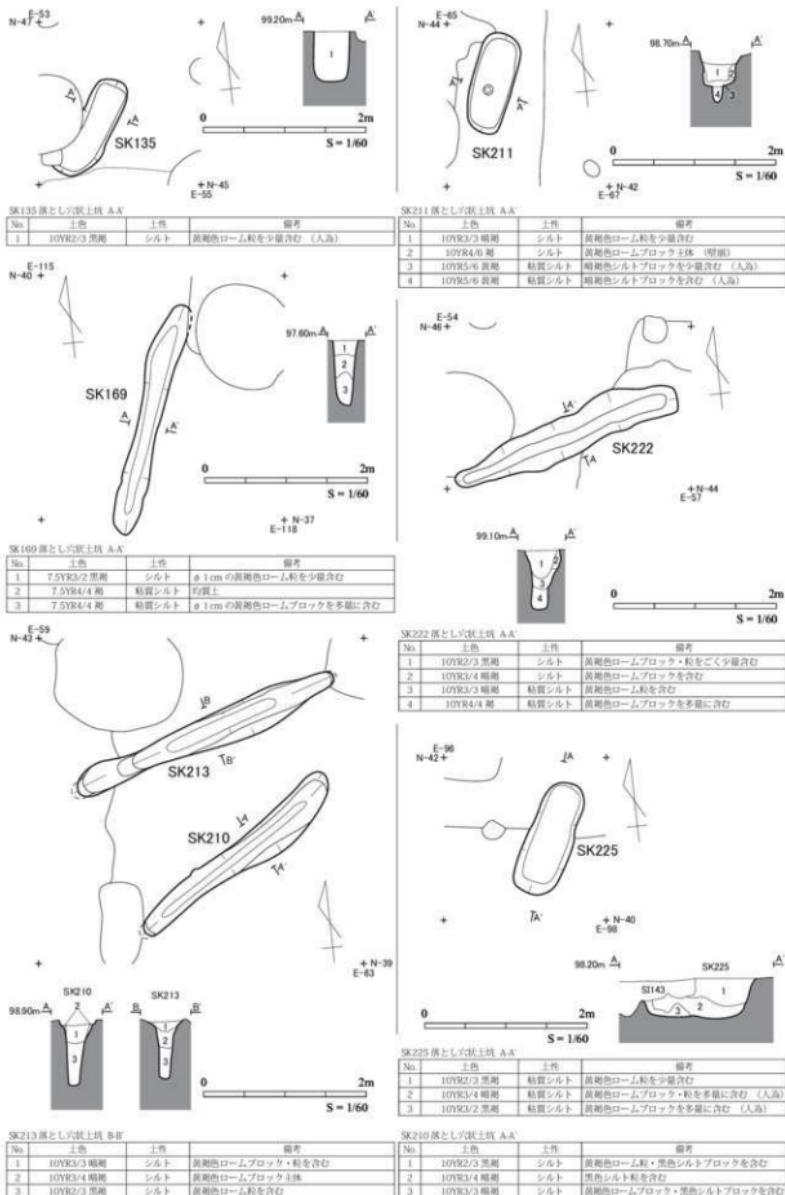
〔堆積土〕4層に細分される。1層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、2~4層は地山ブロックを多量に含む黒褐色・暗褐色シルトである。いずれも人為的埋土で、2~4層は埋葬時の埋土、1層は崩落土の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕堆積土1層から近世陶器甕（第91図1）、堆積土から銅鏡（寛永通宝、写真図版53-9）が出土した。近世陶器甕（第91図1）は内外面に灰釉が見られ、村田塙内産（19世紀）とみられる。このほか、土師器甕・弥生土器が出土した。



No.	遺構名	層位	種類	鉢名	形態	判斷				
						柱径 (mm)	厚 (mm)	現存	登録	写真
1	SK216	堆積土	銅鏡	寛永通寶	西文「寛永通寶」	24.6	1.2	2.8	311a	55-2
2	SK216	堆積土	銅鏡	寛永通寶	西文「寛永通寶」裏面に3枚目印	23.9~24.9	1.2	11.6	312a	55-3
3	SK216	堆積土	銅鏡	寛永通寶	西文「寛永通寶」裏面に2枚目印	24.2~24.5	1.1~1.2	8.8	312b	55-4

第93図 SK216・217近世墓、SK216近世墓出土遺物



第 94 図 SK135・169・210・211・213・222・225 落とし穴状坑

【SK205 近世墓】(第92図、写真図版54)

【位置】2区／平坦面

【重複】SI144 → SK205

【規模・形状】平面形が長軸144cm、短軸105cmの隅丸長方形を呈し、断面形は深さ70cmの箱形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

【堆積土】5層に細分される。地山ブロック・粒を含む黒褐色・暗褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土で、3~5層は埋葬時の埋土、1~2層は崩落土の可能性が考えられる。

【出土遺物】堆積土から銅・竹製の煙管の一部(写真図版54-7)が出土した。このほか、土師器甕、ロクロ土師器環、須恵器環・小型甕・甕が出土した。

【SK206 近世墓】(第92図、写真図版29)

【位置】2区／平坦面

【重複】SI139・SD182 → SK206

【規模・形状】平面形が長軸148cm、短軸94cmの隅丸長方形を呈し、断面形は深さ64cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】土師器、ロクロ土師器環が出土した。

【SK207 近世墓】(第92図、写真図版29・54)

【位置】2区／平坦面

【重複】SI139・SK208・SD182 → SK207

【規模・形状】平面形が長軸108cm、短軸93cmの不整方形を呈し、断面形は深さ36cmの逆台形を呈する。底面は平坦で、北側に段を形成する。

【堆積土】2層に細分される。地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】堆積土から銅製の煙管吸い口(写真図版54-9)、竹製の煙管羅宇(写真図版54-8)が出土した。

このほか、土師器甕、ロクロ土師器環、弥生土器が出士した。

【SK208 近世墓】(第92図、写真図版29・54)

【位置】2区／平坦面

【重複】SI139 → SK208 → SK207

【規模・形状】平面形が長軸150cm、短軸102cmの隅丸長方形を呈し、断面形は深さ64cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】堆積土から銅銭(寛永通宝、第92図1・2)が出土した。このほか、土師器、ロクロ土師器甕、須恵器、弥生土器が出土した。

【SK216 近世墓】(第93図、写真図版55)

【位置】2区／平坦面

【重複】SD144 → SK216

【規模・形状】平面形が長軸136cm以上、短軸94cm以上の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ52cmの不整逆台形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

【堆積土】5層に細分される。地山ブロック・粒を含む黒褐色シルト・粘質シルトで、いずれも人為的埋土で、3~5層は埋葬時の埋土、1~2層は崩落土の可能性が考えられる。

【出土遺物】堆積土から銅・竹製の煙管の一部(写真図版55-7)、銅製の煙管雁首(写真図版55-8)、銅銭(寛永通宝、第93図1~3、写真図版54-11・12)が出土した。銅銭(写真図版55-1)は植物種子(米?)の付着が見られる。このほか、土師器・ロクロ土師器環、須恵器環が出土した。

【SK217 近世墓】(第93図)

【位置】2区／平坦面

【重複】なし

No.	遺構名	層位	種類	材質	製作技法・特徴	法面 (mm・g)			残存	登録	写真
						長	幅	厚			
I	SK211	堆積土	石器	巨頭石器	单剥離面打面 内側縫: 不規則な小切離面 下端: 外側縫に剥離から、右側縫に背面からの加工により側面削出	41.5	19.5	4.8	3.4	完形	212 56.1

第95図 SK211 落とし穴状土坑出土遺物

〔規模・形状〕平面形が長軸 112cm 以上、短軸 98cm 以上の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 22cm の逆台形を呈する。底面は皿状に浅く窪む。

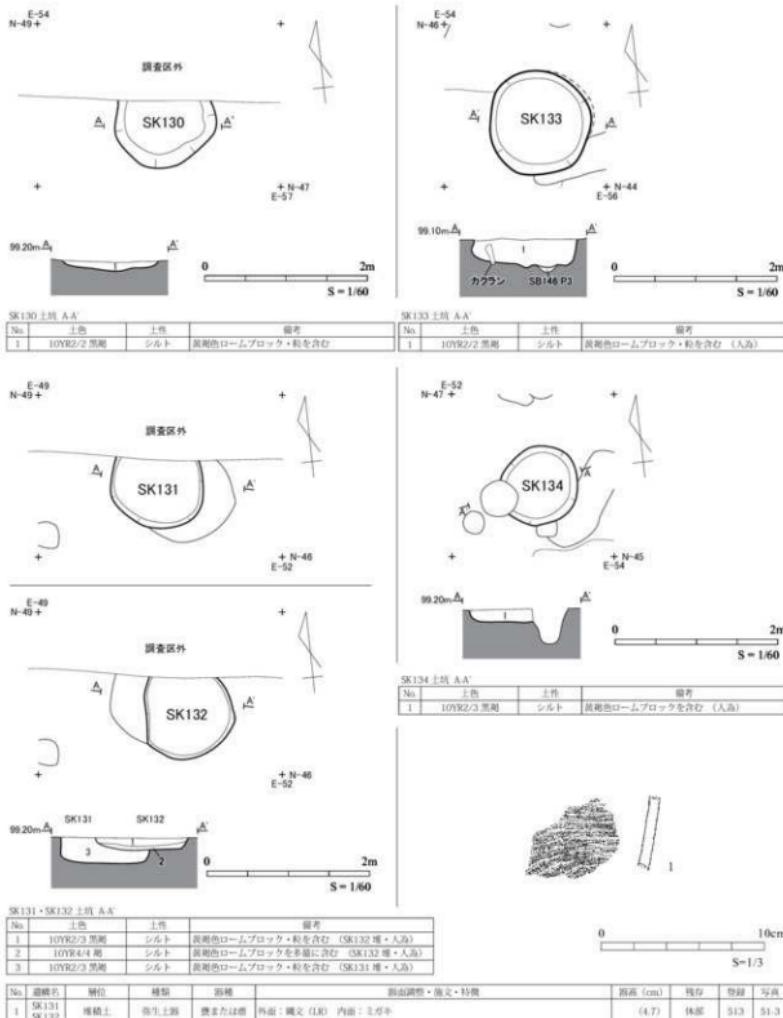
〔堆積土〕地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトで、人為的理土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から須恵器甕が出土した。外面に並行タキ調整を施す。このほか、土師器が出土した。

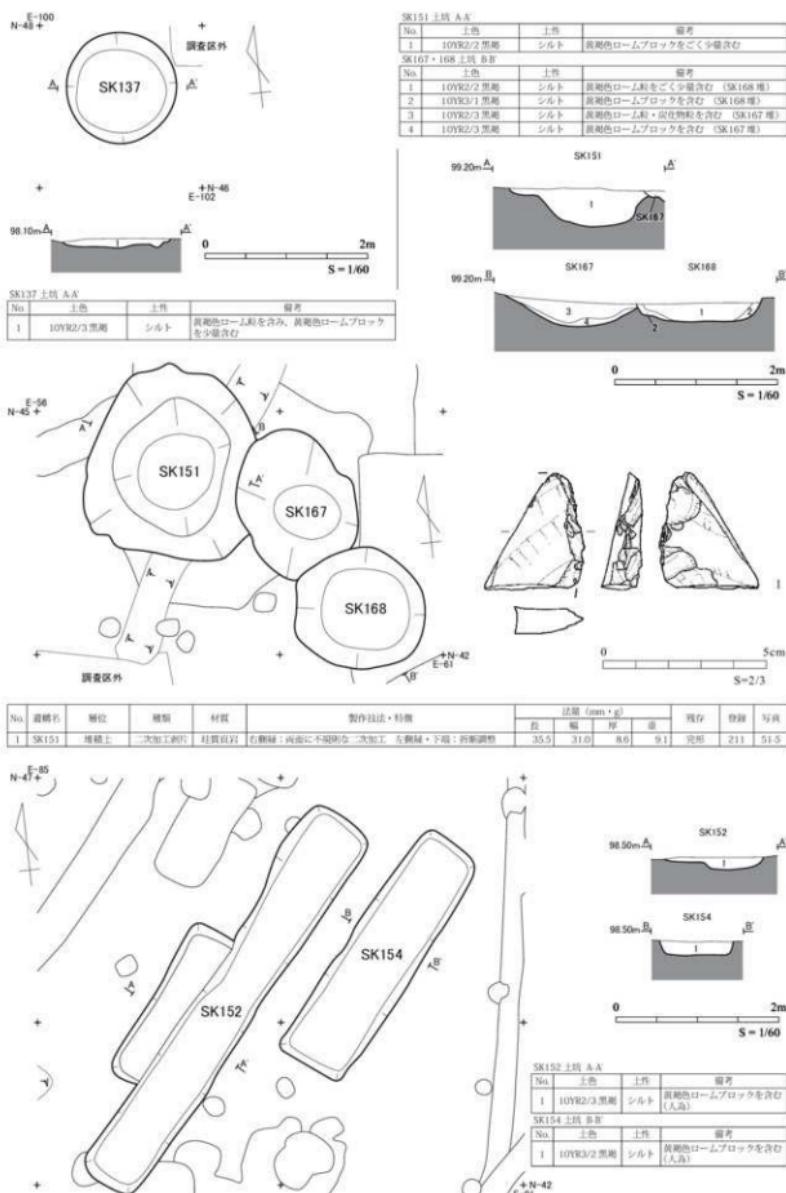
〔SK224 近世墓〕(第92図、写真図版29)

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SI143 → SK224



第96図 SK130-134 土坑、SK131・132 土坑出土遺物



第97図 SK137・151・152・154・167・168土坑、SK151土坑出土遺物

〔規模・形状〕 平面形が長軸 118cm、短軸 90cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 58cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 地山ブロック・粒を多量に含む黒褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器・ロクロ土師器坏、不明鉄製品が出土した。

(6) 落とし穴状土坑

【SK135 落とし穴状土坑】(第 94 図、写真図版 29)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SK135 → SB146・SK134 → SB147

〔規模・形状〕 平面形が長軸 132cm、短軸 44cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 63cm の U 字形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 地山粒を少量含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

【SK169 落とし穴状土坑】(第 94 図、写真図版 30)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SK169 → SI157

〔規模・形状〕 平面形が長軸 290cm、短軸 36cm の溝状を呈し、断面形は深さ 80cm の V 字形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

〔堆積土〕 3 層に細分される。1 層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、2 層は均質な褐色粘質シルト、3 層は地山ブロックを多量に含む褐色粘質シルトで、いずれも自然堆積土あるいは崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土から珪質頁岩製の石錐(第 95 図 1)が出土した。

〔出土遺物〕 なし

【SK210 落とし穴状土坑】(第 94 図、写真図版 30)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SK210 → SI140

〔規模・形状〕 平面形が長軸 300cm、短軸 46cm の溝状を呈し、断面形は深さ 80cm の V 字形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

〔堆積土〕 3 層に細分される。地山ブロック・粒を含む黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも自然堆積土あるいは崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

【SK211 落とし穴状土坑】(第 94・95 図、写真図版 30・56)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SK211 → SI140・SI194

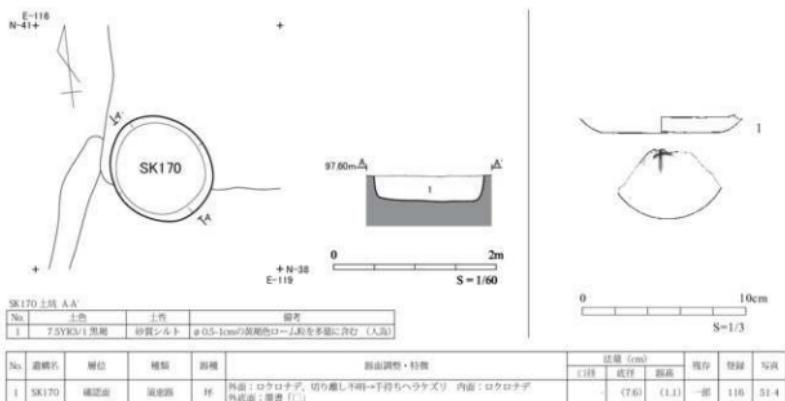
〔規模・形状〕 平面形が長軸 124cm、短軸 50cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 45cm の U 字形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでおり、中央付近に平面形が直径 12cm の略円形を呈し、深さ 15cm の小穴が掘られている。

〔堆積土〕 4 層に細分される。1 層は地山粒を少量含む暗褐色シルト、2 層は地山ブロックを主体とする褐色シルト、3・4 層は地山ブロックを含む黄褐色粘質シルトで、1 层は自然堆積土、2 層は崩落土、3・4 層は人為的埋土と考えられる。

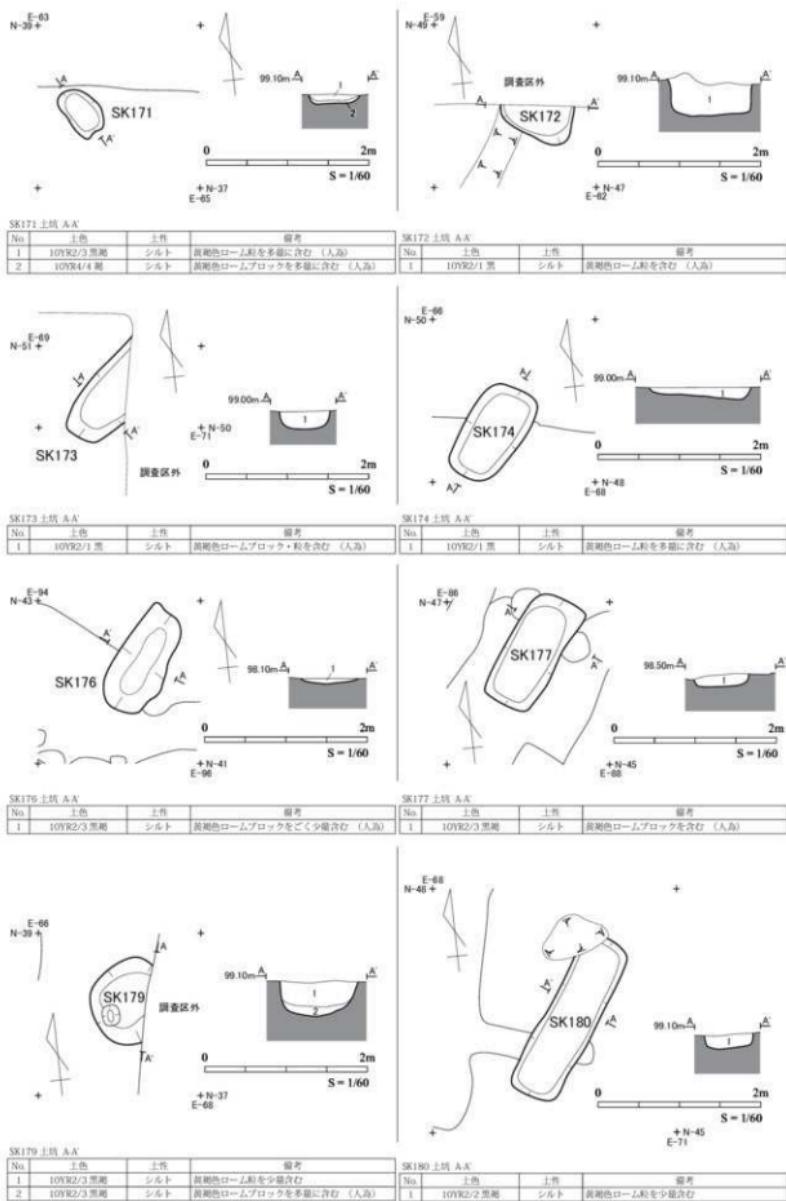
〔出土遺物〕 堆積土から珪質頁岩製の石錐(第 95 図 1)が出土した。

【SK213 落とし穴状土坑】(第 94 図、写真図版 30)

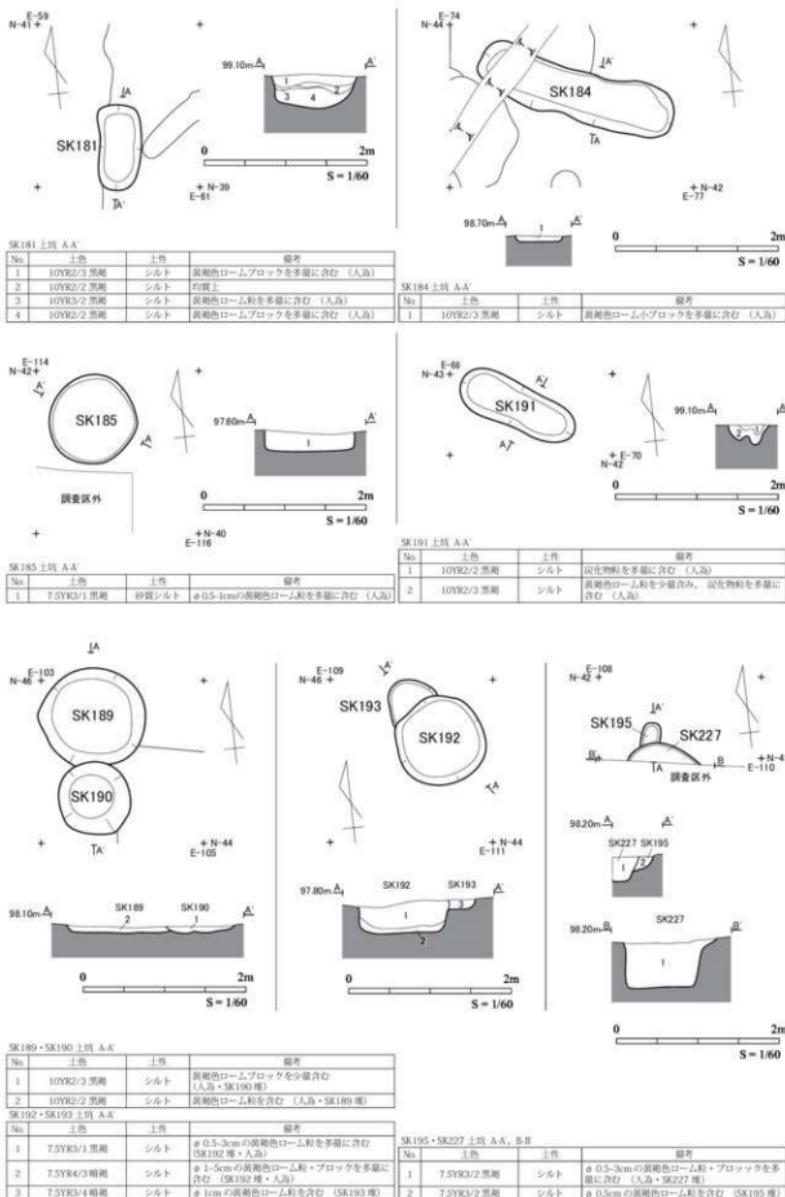
〔位置〕 2 区／平坦面



第 98 図 SK170 土坑・出土遺物



第99図 SK171~174・176・177・179・180 土坑



第100図 SK181・184・185・189-193・195・227 土坑

〔重複〕 SK213 → SI140

〔規模・形状〕 平面形が長軸 354cm、短軸 46cm の溝状を呈し、断面形は深さ 73cm の V 字形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

〔堆積土〕 3 層に細分される。地山ブロック・粒を含む黒褐色・暗褐色シルトで、自然堆積土あるいは崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

〔SK222 落とし穴状土坑〕 (第 94 図、写真図版 30)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SK222 → SI159・SK133・SK151

〔規模・形状〕 平面形が長軸 290cm、短軸 50cm の溝状を呈し、断面形は深さ 72cm の V 字形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 4 層に細分される。1 層は地山ブロック・粒を含む少額含む黒褐色シルト、2 層は地山ブロック

を含む暗褐色シルト、3 層は地山粒を含む暗褐色粘質シルト、4 層は地山ブロックを多量に含む褐色粘質シルトで、いずれも自然堆積土あるいは崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

〔SK225 落とし穴状土坑〕 (第 94 図、写真図版 30)

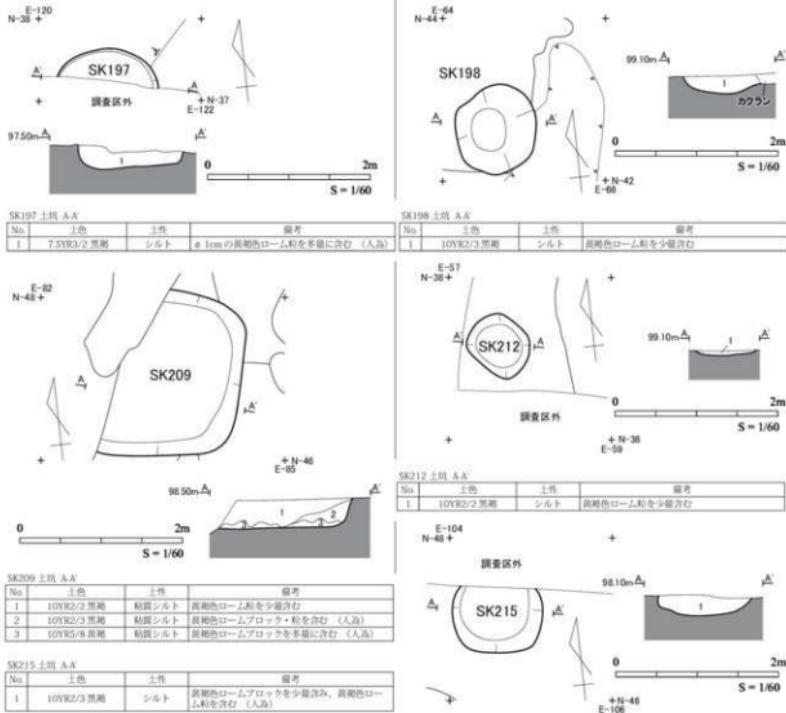
〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SK225 → SI143

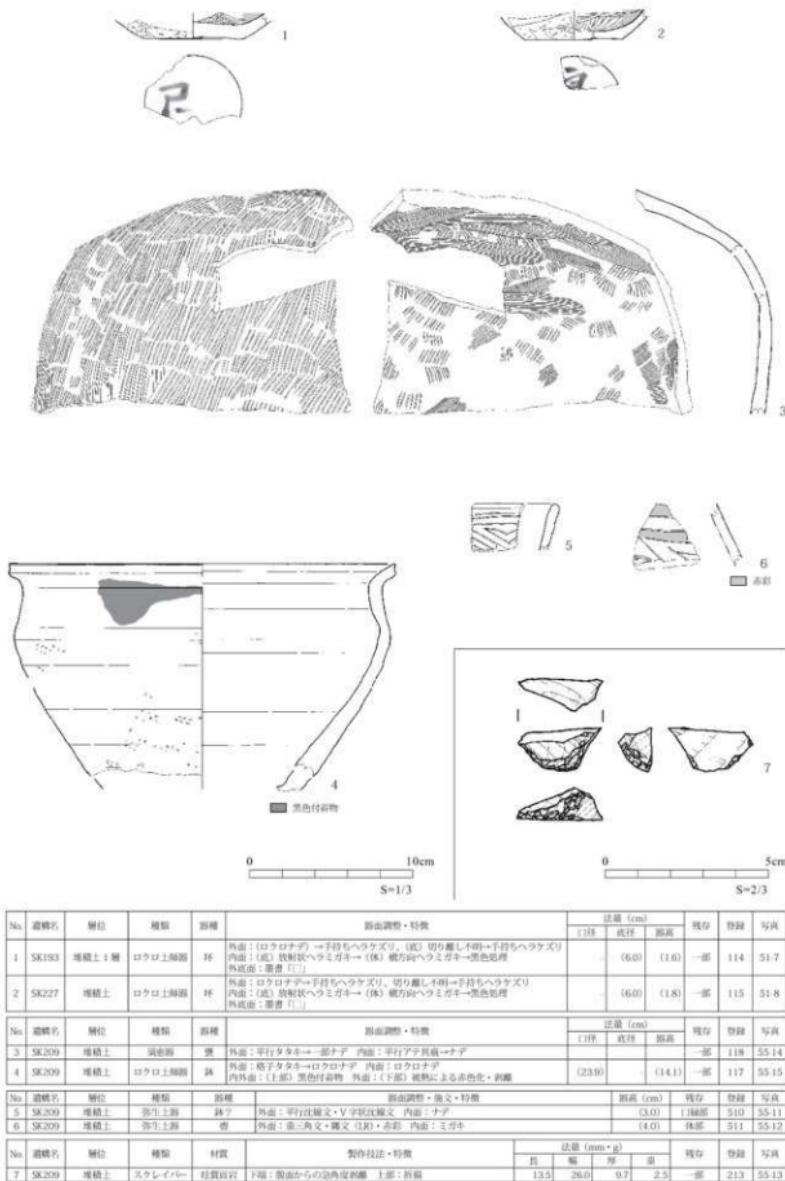
〔規模・形状〕 平面形が長軸 142cm、短軸 58cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 50cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 3 層に細分される。1 層は地山粒を少量含む黒褐色粘質シルト、2・3 層は地山ブロックを多量に含む黒褐色・暗褐色粘質シルトで、人為的理土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし



第 101 図 SK197・198・209・212・215 土坑



第102図 SK193・209・227土坑出土遺物

(7) 土坑

【SK132 土坑】(第 96 図、写真図版 51)

【位置】2 区／平坦面

【重複】SK131 → SK132

【規模・形状】平面形が長軸 118cm、短軸 100cm 以上の略円形を呈し、断面形は深さ 15cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】2 層に細分される。地山ブロックを含む褐色・黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】SK131・132 堆積土から弥生土器（第 96 図 1）が出土した。このほか、土師器、ロクロ土師器壺、須恵器壺が出土した。

【SK133 土坑】(第 96 図)

【位置】2 区／平坦面

【重複】SB146・SK222 → SK133

【規模・形状】平面形が長軸 131cm、短軸 123cm の略円形を呈し、断面形は深さ 35cm の U 字形を呈する。底面はやや凹凸が見られる。

【堆積土】地山ブロック・粒を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】ロクロ土師器壺が出土した。

【SK134 土坑】(第 96 図)

【位置】2 区／平坦面

【重複】SK135 → SK134 → SB146 — SB147

【規模・形状】平面形が長軸 102cm、短軸 92cm の略円形を呈し、断面形は深さ 17cm の U 字形を呈する。底面は平坦である。

【堆積土】地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】土師器甕が出土した。

【SK137 土坑】(第 97 図)

【位置】2 区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】平面形が長軸 138cm、短軸 124cm の略円形を呈し、断面形は深さ 10cm の皿形を呈する。底面はやや凹凸が見られる。

【堆積土】地山粒とブロックを少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】土師器壺が出土した。

【SK151 土坑】(第 97 図、写真図版 31・51)

【位置】2 区／平坦面

【重複】SI159・SK222 → SK151 → SK167

【規模・形状】平面形が長軸 250cm、短軸 230cm の不整梢円形を呈し、断面形は深さ 46cm の逆台形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

【堆積土】地山ブロックをごく少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】堆積土から鉄滓（楕形滓、写真図版 53-12）、珪質頁岩製の二次加工片（第 97 図 1）が出土した。このほか、土師器鉢、ロクロ土師器壺、弥生土器、黒曜石製の片、砂岩製の砥石、焼礫が出土した。黒曜石は漆黒で斑晶の見られるもので、蛍光 X 線分析による原産地推定（杉原ほか 2011）で秋保地区土蔵系と判定されている。

【SK152 土坑】(第 97 図)

【位置】2 区／平坦面

【重複】SB228・SK221・SX153 → SK152

【規模・形状】北東—南西方向に長い長方形の北西側に長方形の張り出し部を持つ。SK154 土坑と並列する。平面規模は長方形部分で長軸 534cm、短軸 90cm、張り出し部分で長軸 218cm、短軸 55cm である。横断面形は深さ 16cm の逆台形を呈し、深さ 7cm の張り出し部との間に段を形成する。底面は皿状に窪み、張り出し部は平坦である。

【堆積土】地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】堆積土から弥生土器（第 69 図 6）が出土した。SI140 穫穴住居跡出土のものと接合関係がある。このほか、ロクロ土師器壺、弥生土器が出土した。

【SK154 土坑】(第 97 図)

【位置】2 区／平坦面

【重複】なし

【規模・形状】北東—南西方向に長い長方形を呈する。SK152 土坑と並列する。平面規模は長軸 324cm、短軸 94cm である。横断面形は深さ 16cm の逆台形を呈し、底面は平坦である。

【堆積土】地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】土師器壺・甕が出土した。

【SK164 土坑】(第 91 図)

【位置】2 区／平坦面

【重複】SD144 → SK164

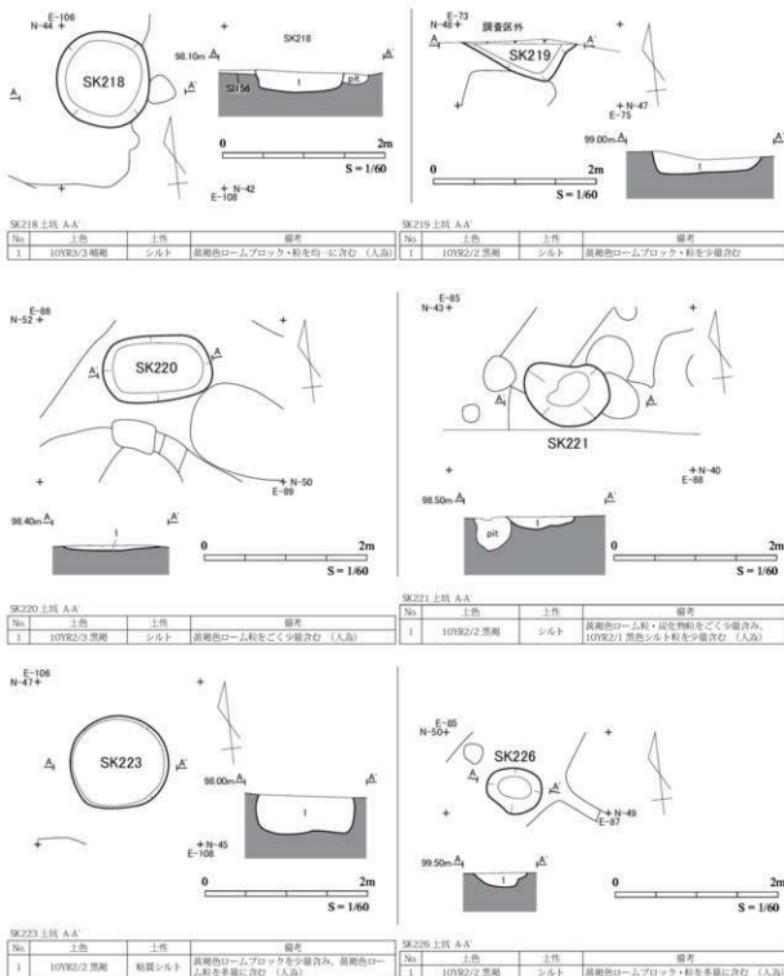
【規模・形状】平面形が長軸 110cm、短軸 98cm の梢円形を呈し、断面形は深さ 60cm の逆台形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

【堆積土】地山粒を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】ロクロ土師器壺・甕が出土した。

【SK167 土坑】(第 97 図、写真図版 31)

【位置】2 区／平坦面



No.	遺物名	部位	種類	表面	表面調査・箇所・特徴	高さ(cm)	残存	登録	写真
1	SK226	堆積土	磁器	面(中型丸瓶)	外面: 磁材(草花文) → 透明釉 内面: 透明釉 1件 (11.4) cm 高さ (18世紀?)	(3.0)	上層 → 体部	604	55.9

第103図 SK218~221・223・226 土坑、SK226 土坑出土遺物

〔重複〕 SI159・SI151→SK167→SK168

〔規模・形状〕 平面形が長軸 186cm、短軸 130cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 37cm の皿形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 2層に細分される。地山・炭化物粒・地山ブロックを含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 ロクロ土師器環、須恵器が出土した。

【SK168 土坑】(第 97 図、写真図版 31)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SI140・SI159・SK167→SK168

〔規模・形状〕 平面形が長軸 164cm、短軸 150cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 30cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 2層に細分される。地山ブロック・粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器が出土した。

【SK170 土坑】(第 98 図、写真図版 51)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SI157→SK170

〔規模・形状〕 平面形が長軸 130cm、短軸 120cm の略円形を呈し、断面形は深さ 30cm の U 字形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 地山粒を多量に含む黒褐色砂質シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 遺構確認面から須恵器環(第 98 図 1)が出土した。このほか、ロクロ土師器環、須恵器環が出土した。

【SK174 土坑】(第 99 図)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SI142→SK174

〔規模・形状〕 平面形が長軸 126cm、短軸 74cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 14cm の逆台形を呈する。底面は平坦で南へ向かって傾斜している。

〔堆積土〕 地山粒を多量に含む黒色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器甕が出土した。

【SK177 土坑】(第 99 図)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SI139→SK177

〔規模・形状〕 平面形が長軸 148cm、短軸 70cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 15cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器環が出土した。

【SK180 土坑】(第 99 図、写真図版 31)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SI142→SK180

〔規模・形状〕 平面形が長軸 214cm、短軸 62cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 16cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 地山粒を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器環、ロクロ土師器環が出土した。

【SK181 土坑】(第 100 図)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SI140→SK181

〔規模・形状〕 平面形が長軸 104cm、短軸 52cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 42cm の U 字形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

〔堆積土〕 4 層に細分される。1・3・4 層は地山ブロック・粒を含む黒褐色シルトで人為的埋土、2 層は均質な黒褐色シルトで自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器環、弥生土器が出土した。

【SK184 土坑】(第 100 図)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SI160→SK184

〔規模・形状〕 平面形が長軸 246cm、短軸 66cm の長楕円形を呈し、断面形は深さ 70cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器甕、ロクロ土師器環、須恵器環が出土した。

【SK189 土坑】(第 100 図)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 SI156→SK189→SK190

〔規模・形状〕 平面形が長軸 132cm、短軸 120cm 以上の略円形を呈し、断面形は深さ 6cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕 地山粒を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 ロクロ土師器環が出土した。

【SK191 土坑】(第 100 図)

〔位置〕 2 区／平坦面

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形が長軸 154cm、短軸 58cm の長楕円形を呈し、断面形は深さ 24cm の逆台形を呈する。底面は凹凸が著しい。

〔堆積土〕 2 層に細分される。地山・炭化物粒を多量

に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】須恵器甕が出土した。

【SK193 土坑】(第 100・102 図、写真図版 51)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SK193 → SK192

〔規模・形状〕平面形が長軸 68cm 以上、短軸 38cm 以上の楕円形を呈し、断面形は深さ 11cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕地山粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】堆積土 1 層からロクロ土師器環（第 102 図 1）が出土した。外底面に墨書（判読不能）が見られる。このほか、土師器、須恵器环蓋が出土した。

【SK209 土坑】(第 101・102 図、写真図版 31・55)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SI139 → SK209 → SD144・SD161

〔規模・形状〕平面形が長軸 204cm、短軸 150cm 以上の隅丸方形を呈し、断面形は深さ 36cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕3 層に細分される。1 層は地山粒を少量含む黒褐色粘質シルト、2・3 層は地山ブロック・粒を含む黒褐色・黄褐色粘質シルトで、1 層は自然堆積土、2・3 層は人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】堆積土からロクロ土師器甕（第 102 図 4）、須恵器甕（第 102 図 3）、弥生土器（第 102 図 5・6）、珪質頁岩製のスクレイパー（第 102 図 7）が出土した。このほか、土師器環・甕、須恵器、赤碧玉・珪質頁岩製の剝片が出土した。

【SK218 土坑】(第 103 図)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SI156 → SK218

〔規模・形状〕平面形が直径 116cm の略円形を呈し、断面形は深さ 26cm の逆台形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

〔堆積土〕地山ブロック・粒を含む暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】土師器甕、ロクロ土師器環、頁岩製の剝片が出土した。

【SK219 土坑】(第 103 図)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SB199 → SK219

〔規模・形状〕平面形が長軸 140cm 以上、短軸 50cm 以上の隅丸方形を呈するとみられ、断面形は深さ 28cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕地山ブロック・粒を少量含む黒褐色シルト

で、自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】土師器が出土した。

【SK221 土坑】(第 103 図)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SX153 → SK221 → SK152

〔規模・形状〕平面形が長軸 105cm、短軸 74cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 14cm の皿形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

〔堆積土〕地山・炭化物粒をごく少量含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】ロクロ土師器環が出土した。

【SK223 土坑】(第 103 図)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸 122cm、短軸 114cm の略円形を呈し、断面形は深さ 50cm の U 字形を呈する。壁面はやや抉れており、底面はやや起伏が見られる。

〔堆積土〕地山ブロック・粒を含む黒褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】土師器環・甕、ロクロ土師器環、須恵器環、不明鉄製品が出土した。

【SK226 土坑】(第 103 図、写真図版 55)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SI139 → SK226

〔規模・形状〕平面形が長軸 68cm、短軸 52cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 28cm の逆台形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

〔堆積土〕地山ブロック・粒を多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】堆積土から磁器碗（第 103 図 1）、銅鏡（寛永通宝、写真図版 55-10）が出土した。磁器碗は中型の丸碗で外面に染付草花文、内外面に透明釉が見られる。肥前産（18 世紀）とみられる。

【SK227 土坑】(第 100・102 図、写真図版 51)

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SK195 → SK227

〔規模・形状〕平面形が長軸 78cm 以上、短軸 24cm 以上の楕円形を呈し、断面形は深さ 55cm の円筒形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕地山ブロック・粒を多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

【出土遺物】堆積土からロクロ土師器環（第 102 図 2）が出土した。外底面に墨書（判読不能）が見られる。このほか、須恵器環が出土した。

(8) 溝跡

【SD144 溝跡】(第 104・105 図、写真図版 31・32・56)

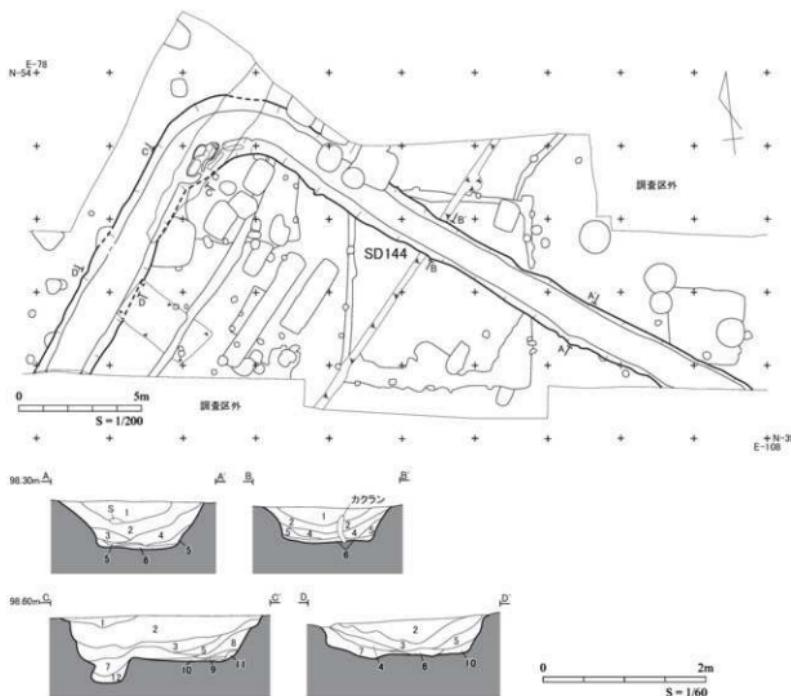
〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SI139・SI143・SI156・SK209・SD182 → SD144
→ SE183・SK162・SK163・SK164・SK165・SK166・
SK205・SK216・SK220・SD161

〔規模・形状〕L 字形に延び、区画を形成していると見られる。南東から北西方方向へ直線的に 23.00m 延び(北辺)、北西端で約 90° の角度で屈折して南西方へ直線的に 12.00m 延びる(西辺)。調査区外の南

東・南西側へさらに延びている。遺構確認調査 T3-6 区で確認した溝跡は SD144 溝跡西辺の延長部分と考えられる(第 6 図)。区画の規模は北辺 23.5m 以上、西辺 78m 以上と推定される。上幅 136-272cm、底幅 104-160cm で、横断面形が深さ 40-80cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、一部凹凸が見られる。

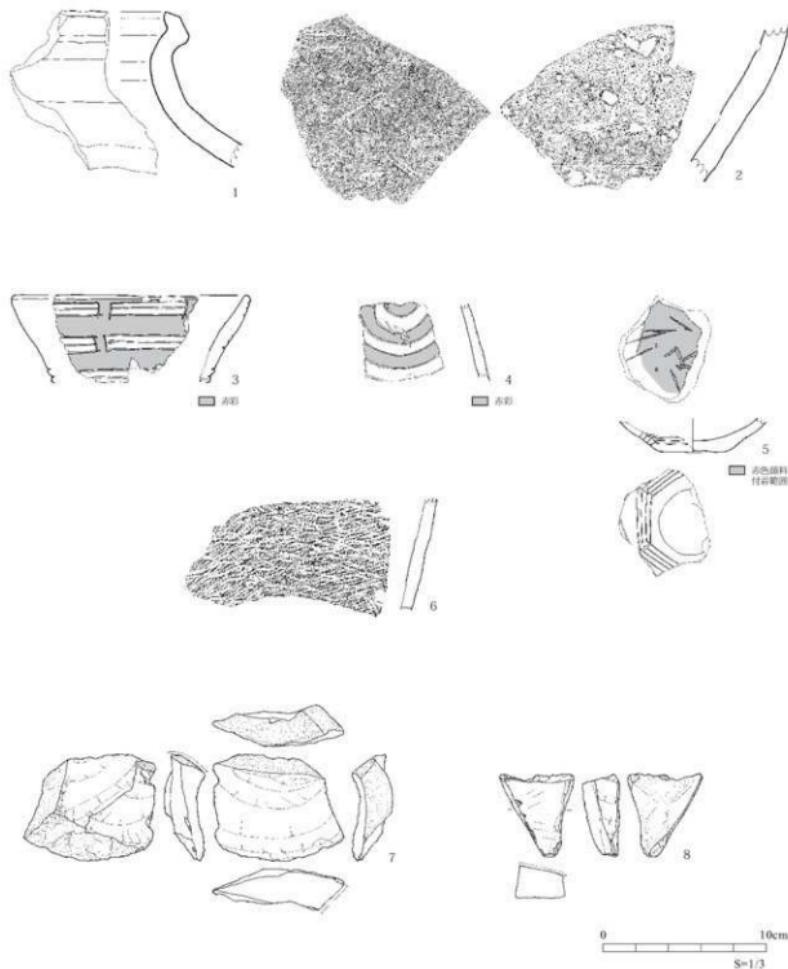
〔堆積土〕北辺で 6 層、西辺で 12 層に細分される。いずれも底面付近に機能時堆積土がみられ、廃絶後は自然埋没していると考えられる。北辺 1-5 層は地山ブロック・粒を含む黒褐色・暗褐色・褐色シルトで、



SD144 溝跡 A-A', B-B'

No.	上位	土性	参考	No.	上位	土性	参考
1.	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粘土を含む	3.	10YR3/1 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (堅固)
2.	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粘土を多量に含む	4.	10YR3/3 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を多量に含む (堅固)
3.	10YR4/4 黑褐	シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む (堅固)	5.	10YR2/3 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム粘土を少量含む
4.	10YR3/0 黑褐	シルト	黄褐色ローム小ブロックを多く含む (堅固)	6.	10YR2/2 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム粘土を含む
5.	10YR2/2 黑褐	シルト	黄褐色ローム粘土を多量に含む (堅固)	7.	10YR3/4 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム粘土を多量に含む
6.	10YR2/3 黑褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (堅固)	8.	10YR3/3 黑褐	粘質シルト	黄褐色13-15cmブロックを多量に含む (堅固)
				9.	10YR2/2 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム粘土を含む
				10.	10YR3/3 黑褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粘土を含む (堅固)
				11.	10YR5/6 灰褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (堅固)
				12.	10YR2/3 黑褐	粘質シルト	黄褐色ローム粘土を含む

第 104 図 SD141 溝跡



No.	遺物名	層位	種類	材質	測定調査・度文・特徴	測高(cm)	残存	登録	写真
1	SD144	堆積土	中唐陶器	壺	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ+ナデ	(30.1)	口縁 一部	601	56.5
2	SD144	堆積土	中唐陶器	壺	外面：ハラナデ+自然 内面：ナダ=白粉粒	(19.7)	全体	602	56.6
No.	遺物名	層位	種類	材質	測定調査・度文・特徴	測高(cm)	残存	登録	写真
3	SD144	堆積土	生土層	壺	内面：集落紋様文（平行波線+幾刀波紋線）一枚面内ミ刀刃、底面外赤彩 外面：ナダ+一握二ガリ牛（身）：(4.8) cm	(5.4)	1.縁部	501	56.7
4	SD144	堆積土	生土層	壺	外面：酒文、赤彩	(3.8)	全体	502	56.8
5	SD144	堆積土	生土層	鉢	内面：集落紋様文（平行波線+幾刀波紋線）一枚面内ミ刀刃 外面：ハラナデ、(底)赤色顔料付着、底径：(4.1) cm	(2.1)	底部	503	56.9
6	SD144	堆積土	生土層	壺	外面：繩文、結節文、内面：ナダ	(6.9)	全体下部	504	56.10
No.	遺物名	層位	種類	材質	測定方法・特徴	法規 (mm・g)	残存	登録	写真
7	SD144	堆積土	砾石	石灰質砂岩	砾石数：2 砂由を平坦な面として測定的に計り測量	長 65.5 幅 81.0 厚 19.5 重 102.7 510	-	209	56.11
8	SD144	堆積土	砾石	石灰質砂岩	砾石数：1 表面：泥付+側縫合の跡（剥離調整なし）	幅 46.0 厚 21.2 重 40.4 -	-	208	56.12

第105図 SD144 溝跡出土遺物

自然堆積土あるいは崩落土、6層は地山ブロックを含む暗褐色シルトで機能時堆積土と考えられる。また、西辺1-9層は地山ブロック・粒を含む黒褐色・暗褐色粘質シルトで自然堆積土あるいは崩落土、10-12層は地山ブロック・粒を含む暗褐色・黄褐色粘質シルトで機能時堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から中世陶器甕（第105図1・2）、弥生土器（第105図3-6）、石英質砂岩製の砥石（第105図7・8）が出土した。弥生土器（第105図3）

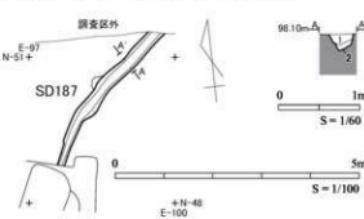
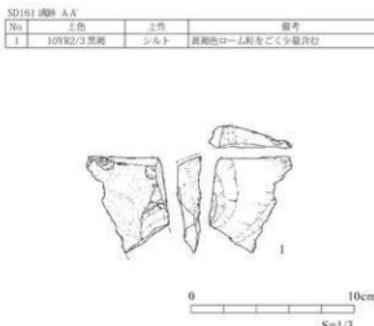
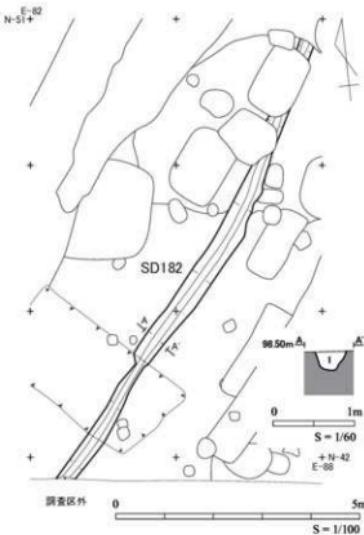
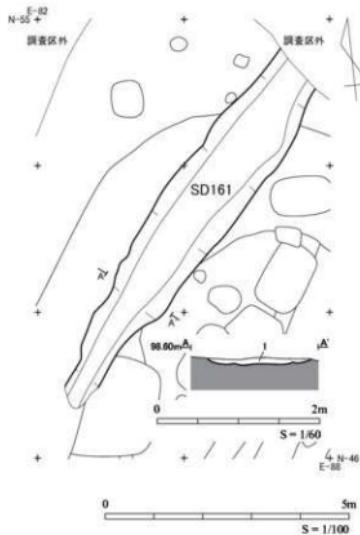
はSE183井戸跡出土のものと接合関係がある。このほか、土師器環・甕、ロクロ土師器小型品、須恵器環・甕・小型品、中世陶器甕・鉢？、焼穢が出土した。

【SD161溝跡】（第106図、写真図版56）

〔位置〕2区／平坦面

〔重複〕SI139・SK209・SD144→SD161

〔規模・形状〕北東—南西方向に直線的に延びる。南側は削平により消失しており、北東側は調査区外へさらに延びている。長さ8.36mを確認した。上



第106図 SD161・182・187溝跡、SD161溝跡出土遺物

幅 53-154cm、底幅 30-110cm で、横断面形は深さ 3-8cm の皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。
〔堆積土〕地山粒をごく少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から凝灰岩製の砥石（第 106 図）が出土した。このほか、土師器、ロクロ土師器壺、須恵器壺が出土した。

【SD182 溝跡】（第 106 図）

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SI139 → SD182 → SK206・SK207・SD144 → SE228

〔規模・形状〕北東一南西方向に僅かに蛇行しながら延びる。北東側は SD144 溝跡に壊されており、南西側は調査区外へさらに延びている。長さ 10.20m を確認した。上幅 18-54cm、底幅 10-16cm で、横断面形は深さ 24cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。
〔堆積土〕地山粒をごく少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕土師器壺、ロクロ土師器壺・甕、須恵器壺・甕、弥生土器が出土した。

【SD187 溝跡】（第 106 図）

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SD187 → SI143

〔規模・形状〕北東一南西方向に蛇行しながら延びる。南西側は SI143 穴住居跡に壊されており、北東側は

調査区外へさらに延びている。長さ 3.40m を確認した。上幅 13-27cm、底幅 4-16cm で、横断面形は深さ 20cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は地山粒を含む黒褐色シルトで自然堆積土、2 層は地山ブロック・粒を含む黒褐色シルトで人為的理土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

（9）性格不明遺構

【SX153 性格不明遺構】（第 107 図、写真図版 31）

〔位置〕2 区／平坦面

〔重複〕SX153 → SK152・SK221

〔規模・形状〕平面形が長軸 260cm 以上、短軸 140cm 以上の不整形を呈し、南側は調査区外へ延びている。断面形は深さ 24cm の逆台形を呈し、底面は凹凸が著しい。竪穴住居跡に伴う掘方埋土の可能性が考えられるが、関連する施設の痕跡は確認されなかった。

〔堆積土〕多量の地山ブロックを含む暗褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕須恵器壺が出土した。

4.3 区

遺跡範囲の南部に位置し、長さ約 62m、幅約 2m の長方形の調査区である。調査区内は北東側へ向かてわずかに傾斜する平坦面で、調査区北端で湿地性堆積層を確認した。遺構確認面は現地表面から深さ 30-40cm のⅣ～V 層上面である。遺構は調査区中央部で井戸跡 1 基、土坑 2 基を確認した（第 7 図、写真図版 33）。

（1）井戸跡

【SE122 井戸跡】（第 108 図、写真図版 33）

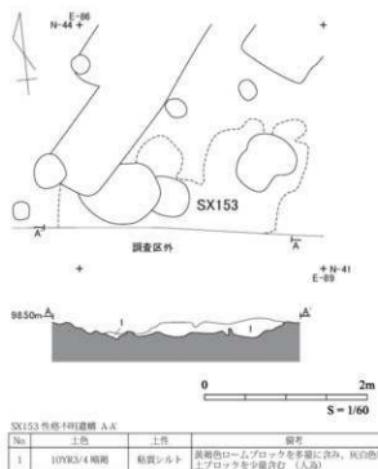
〔位置〕3 区／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸 122cm、短軸 118cm の略円形を呈し、断面形は深さ 50cm の逆台形を呈する。外周部分で掘方埋土の残存を確認した。井戸側材は残存していない。

〔堆積土〕4 層に細分される。1-3 層は地山ブロック・粒、小礫を含む黒色・黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。4 層は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトで、井戸側の掘方埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし



第 107 図 SX153 性格不明遺構

(2) 土坑

【SK123土坑】(第108図、写真図版33)

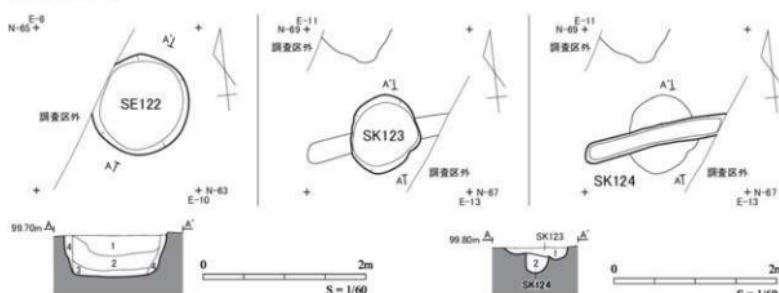
【位置】3区／平坦面

【重複】SK124→SK123

【規模・形状】平面形が長軸98cm、短軸84cmの略円形を呈し、断面形は深さ12cmの逆台形を呈する。底面は凹凸が見られ、北側へ傾斜している。

【堆積土】地山ブロック・粒を含む黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】なし



第108図 SE122井戸跡、SK123・124土坑

5. 遺構確認調査区

調査区周辺の遺構分布状況と遺構面深度の把握を目的として、遺構確認調査を実施した(第6図)。本発掘調査とあわせて2008年度に実施したT1-7区、十郎田遺跡の発掘調査とあわせて2007年度に実施したT36・37・39-41区を合わせて報告する。

【SK124土坑】(第108図、写真図版33)

【位置】3区／平坦面

【重複】SK124→SK123

【規模・形状】平面形が長軸172cm以上、短軸25cmの溝形を呈し、断面形は深さ22-30cmのU字形を呈する。底面は皿状に浅く窪んでいる。

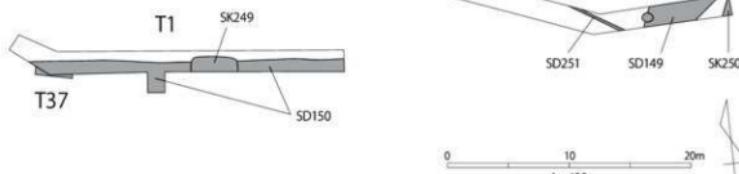
【堆積土】地山粒を含む黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

【出土遺物】なし

SE122 井戸跡 AA			SK123・SK124 上坑 AA		
No.	土色	土性	No.	土色	土性
1	10YR10/1 黒褐色	粘質シルト 黒褐色ローム粘土を含む	1	10YR2/3 黑褐色	粘質シルト 黑褐色ローム粘土を含む (SK123埋)
2	10YR10/1 黑褐色	粘質シルト 黒褐色ロームブロック・粘土を含む	2	10YR2/2 黑褐色	粘質シルト 黑褐色ローム粘土を含む (SK124埋)
3	10YR2/1 黑褐色	粘質シルト φ1-3mmの小礫を含む			
4	10YR3/2 黑褐色	粘質シルト 黑褐色ロームブロックを含む (東方)			

T1区では溝跡1条、土坑1基、T2区では溝跡2条、土坑1基、T3-6区では溝跡各1条、T7区では掘立柱建物跡1軒、T36区では溝跡1条、T41区では土坑1基などを確認した。

T1区で確認したSD150溝跡は東西方向に直線的に26m以上延びており、幅1.5m以上の比較的大きい溝跡と考えられる(第109図)。T3-6区で確認した

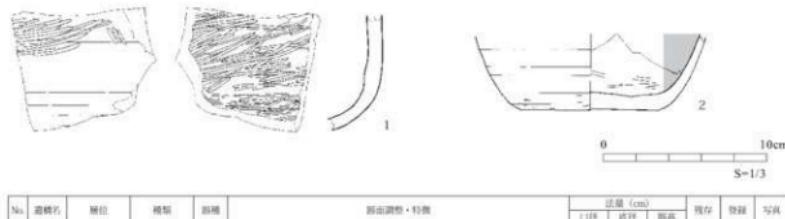


第109図 T1・T2区遺構配置図

溝跡は、2区で確認したSD144溝跡西辺の延長部分と考えられ、区画の西辺が78m以上であることを確認した。T2区で確認したSD149溝跡とSD144溝跡との関係は不明である。T7区では、2区で確認したSB127掘立柱建物跡の延長部分を確認し、東西3間、

南北4間の規模を持つ側柱建物であることが判明した（第87図）。

遺物はSD149溝跡の確認面から土師器、SD150溝跡の確認面からロクロ土師器環（第110図2）、須恵器不明品（第110図1）、須恵器甕が出土した。



第110図 SD150 溝跡出土遺物

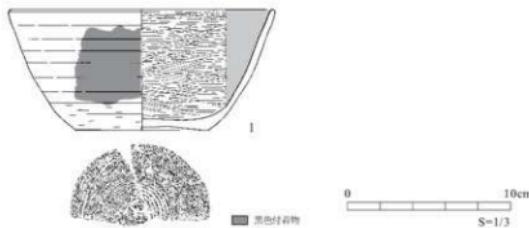
6. その他の遺構と出土遺物

(1) 組み合わない柱穴跡

調査区のほぼ全域で確認しており、1区北・南、2区西部にかけての範囲にまとまって分布する。これらは掘立柱建物跡の分布する範囲と一致することから、多くは掘立柱建物を構成していたものと考えられる。

1区南P16柱穴跡の掘方埋土からは須恵器中型品が出土した。第110図1と特徴が類似する。1区南P82柱穴の掘方底面に下端部が杭状に加工された柱

材の一部（写真図版57-8）が残存していた。1区北P108柱穴跡の柱痕跡・掘方埋土からは鐵滓、不明鉄製品が出土した。2区P130柱穴跡の堆積土からはロクロ土師器環（第111図1）が出土した。2区P167柱穴跡の堆積土からはロクロ土師器環、須恵器環、焼けたスサ入り粘土塊が出土した。2区P175柱穴跡の柱材抜き取り痕跡からは油煙の付着が見られるロクロ土師器環が出土した。このほか、土師器環・甕・小型品、ロクロ土師器環・甕、須恵器環・甕・中型品、弥生土器、珪質頁岩・流紋岩製の剝片が出土した。



第111図 柱穴跡出土遺物

(2) 遺構外出土遺物

3区遺構確認面からロクロ土師器環(第112図3)、珪質頁岩製の笠形石器(第112図4)が出土した。1区北の遺構確認面からロクロ土師器環(第112図1)が出土した。また、ロクロ土師器環(第112図2)が調査区付近で表面採集された。

このほか、表土・遺構確認面・擾乱から土師器環・甕、ロクロ土師器環・甕、須恵器環・甕・短頸甕、弥生土器、近世陶器(大堀相馬産)が出土した。

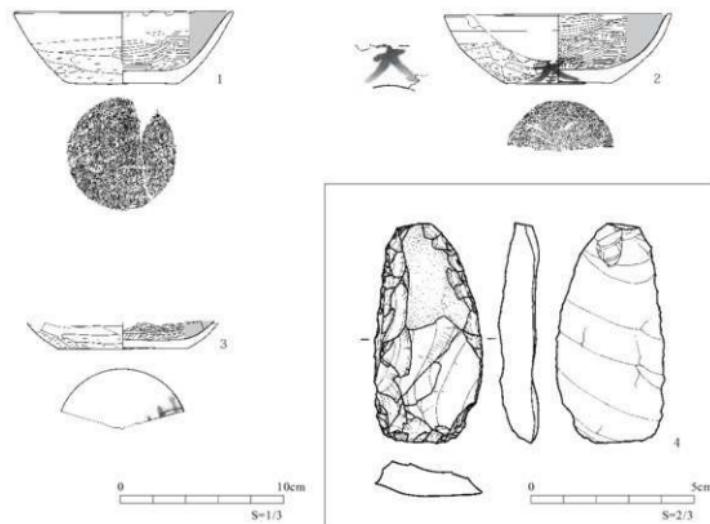
土師器環は内面に黒色処理を施すものと施さないものがあり、前者は回転糸切りによる底部の切り離し後に外底面に手持ちヘラケズリ調整を施すもの、外面にヘラミガキ調整を施すものがある。また、判読できないが外底面に墨書きが見られるものがある。後者は内面にヘラミガキ、外面にヘラケズリ調整を施す。土師器不明品には体部の内面にナデ調整、外面にヘラミガキ

調整を施すもの、内外面にヘラミガキ調整→赤彩を施すものがある。土師器甕は外底面に木葉痕の見られるものがある。

ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、外底面に静止糸切りまたは回転糸切り痕が見られるもの、回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下部にヘラケズリ調整を施すもの、底部の切り離し方法が不明で体下部・底部にヘラケズリ調整を施すものがある。また、外面の体下部に墨書き(判読不能)が見られるものがある。

須恵器環は回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下部に手持ちあるいは回転ヘラケズリ調整を施すものがある。須恵器甕は外面に平行タキ調整を施す。

近世陶器甕は内外面に灰釉が見られ、大堀相馬産とみられる。



No.	層位	種類	剖面	表面調整・特徴				法量(cm)	寸法	底径	高さ	残存	登録	写真	
				(上)	(中)	(下)	(右)								
1	遺構確認面	ロクロ土師器	环	外底: ロクロナメ→(底) 手持ちヘラケズリ、(底) 静止糸切り→手持ちヘラケズリ 内面: (底) 横方向へくまごり→黒色底面 内面: (底・体上半) 黒減紫しない				13.5	6.8	4.5	1/3	053	57.3		
2	表土	ロクロ土師器	环	外底: ロクロナメ→(底) 手持ちヘラケズリ、(底) 回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内面: ロクロナメ→(底) 手持ちヘラケズリ、(底) 横方向へくまごり→黒色底面 外面: (底) 三折式縁(人) ?				(14.0)	8.5	4.3	1/3	063	57.4		
3	遺構確認面	ロクロ土師器	环	外底: ロクロナメ→(底) 下持ちヘラケズリ、(底) 切り離し・手持ちヘラケズリ 内面: (底) 横方向へくまごり→(底) 傾・斜め方向へくまごり→黒色底面				(8.0)	(1.7)	一部		074	57.5		
No.	層位	種類	材質	製作技術・特徴	法量(cm)				寸法	幅	厚	重	残存	登録	写真
4	遺構確認面	スクレーパー	粗粒灰岩	単面削面(片面) 背面: 一部自然面 下端・内側縁: 整形の跡	67.5	33.0	10.0	25.4	実用				214	57.6	

第112図 遺構外出土遺物

第3表 遺構觀察表 積穴住居跡・堅穴状遺構・掘立柱建物跡(1)

第4表 遺構根聚表 挖立柱建物跡(2)・柱列跡

第5表 遺構觀察表 井戸跡・近世墓・廐墓土坑・粘土探鉢坑・落とし穴状土坑・土坑(1)

柱印跡		柱	遺構名	位置	形狀	寸幅(cm)			出土遺物	重複關係	時期	國
平面	側面					長	寛	深				
1区南	SD63	平坦面	楕円形		底面	154	140	110	土師器・須恵器・陶器		V	37
1区北	SE106	平坦面	不整円形		底面	112	104	80	須恵器・陶器側板	SB224より新	V	53
1区北	SE107	平坦面	不整円形		底面	168	136	45	なし	SB108より新	—	53
1区北	SE111	平坦面	楕円形		底面	218	198	140	木綿	なし	—	54
1区北	SE112	平坦面	(楕円形)		底面	176	(154)	65	須恵器軋目鏡	SD128・SD129より新	—	53
1区北	SE113	平坦面	(楕円形)		底面	(288)	(130)	79	土師器	なし	—	54
2区	SE83	平坦面	不整円形		底面	164	150	126	少々土器・土師器・須恵器	SD144より新	—	90
2区	SE122	平坦面	楕円形		底面	122	118	50	なし	なし	—	108
近世墓		柱	遺構名	位置	形狀	寸幅(cm)			出土遺物	重複關係	時期	國
平面	側面					長	寛	深				
2区	SK162	平坦面	(楕円形)	(楕円)	底面	130	(72)	66	須恵器・不明鉄製品	SD144より新	VI	91
2区	SK163	平坦面	(楕円形)	(楕円)	底面	121	(50)	105	土師器・須恵器・近世鏡・貴人達	SD144より新	VI	91
2区	SK166	平坦面	(楕円形)	(楕円)	底面	164	164	78	土器・土器・須恵器・近世鏡・SD248・SD144より新、SK165	VI	91	
2区	SK205	平坦面	圓丸長方形	楕円	底面	144	105	70	土器・須恵器・土器・須恵器	SD144より新	VI	92
2区	SK206	平坦面	圓丸長方形	楕円	底面	148	94	64	土器・須恵器	SI139・SD162より新	VI	92
2区	SK207	平坦面	不整方形	逆円形	底面(沒有)	108	93	36	土器・土器・土器・ロクロ土器・禮賛	SI139・SK208・SD182より新	VI	92
2区	SK208	平坦面	圓丸長方形	逆円形	底面	150	102	64	少々土器・土器・ロクロ土器・須恵器	SI139より新、SK207より古	VI	92
2区	SK216	平坦面	(圓丸長方形)	(楕円)	(底面)	(136)	(94)	52	土器・須恵器・貴人達	SD144より新	VI	93
2区	SK217	平坦面	(圓丸長方形)	(逆円)	(底面)	(112)	(96)	22	土器器・須恵器	なし	VI	93
2区	SK224	平坦面	圓丸長方形	逆円形	底面	118	90	58	土器・土器・ロクロ土器・不明鉄製品	SD143より新	VI	92
廐墓土坑		柱	遺構名	位置	形狀	寸幅(cm)			出土遺物	重複關係	時期	國
平面	側面					長	寛	深				
2区	SK162	平坦面	(楕円形)	(楕円)	底面	130	(72)	66	須恵器・不明鉄製品	SD144より新	VI	91
2区	SK163	平坦面	(楕円形)	(楕円)	底面	121	(50)	105	土器器・須恵器・近世鏡・貴人達	SD144より新	VI	91
2区	SK166	平坦面	(楕円形)	(楕円)	底面	164	164	78	土器・土器・須恵器・近世鏡・SD248・SD144より新、SK165	VI	91	
2区	SK205	平坦面	圓丸長方形	楕円	底面	144	105	70	土器・須恵器・土器・須恵器	SD144より新	VI	92
2区	SK206	平坦面	圓丸長方形	逆円形	底面	148	94	64	土器・須恵器	SI139・SD162より新	VI	92
2区	SK207	平坦面	不整方形	逆円形	底面(沒有)	108	93	36	土器・土器・土器・ロクロ土器・禮賛	SI139・SK208・SD182より新	VI	92
2区	SK208	平坦面	圓丸長方形	逆円形	底面	150	102	64	少々土器・土器・ロクロ土器・須恵器	SI139より新、SK207より古	VI	92
2区	SK216	平坦面	(圓丸長方形)	(楕円)	(底面)	(136)	(94)	52	土器・須恵器・貴人達	SD144より新	VI	93
2区	SK217	平坦面	(圓丸長方形)	(逆円)	(底面)	(112)	(96)	22	土器器・須恵器	なし	VI	93
2区	SK224	平坦面	圓丸長方形	逆円形	底面	118	90	58	土器・土器・ロクロ土器・不明鉄製品	SD143より新	VI	92
柱とし穴状坑		柱	遺構名	位置	形狀	寸幅(cm)			出土遺物	重複關係	時期	國
平面	側面					長	寛	深				
1区南	SK114a	平坦面	楕円形	逆円形	底面	282	255	63	土器器・須恵器	SK114bより古	II	58
1区南	SK114b	平坦面	楕円形	逆円形	底面	190	162	71	土器器	SD114より新	II	58
柱上採鉢坑		柱	遺構名	位置	形狀	寸幅(cm)			出土遺物	重複關係	時期	國
平面	側面					長	寛	深				
1区南	SK114a	平坦面	楕円形	逆円形	底面	282	255	63	土器器・須恵器	SK114bより古	II	58
1区南	SK114b	平坦面	楕円形	逆円形	底面	190	162	71	土器器	SD114aより新	II	58
柱孔(1)		柱	遺構名	位置	形狀	寸幅(cm)			出土遺物	重複關係	時期	國
平面	側面					長	寛	深				
1区南	SK16	平坦面	楕円形	楕円	底面	130	92	82	なし	SD1より古	I	38
1区南	SK58	平坦面	楕円	不整方平行形	底面、弧形・直角斜面	320	50	52	なし	なし	I	38
1区南	SK65	平坦面	楕円	楕円	底面	208	38	62	なし	SD1・SD2・SD230より古	I	38
2区	SK135	平坦面	圓丸長方形	U字形	底面	132	44	63	なし	SD146・SK134より古	I	94
2区	SK169	平坦面	圓丸長方形	U字形	底面	290	36	80	なし	SD157より古	I	94
2区	SK210	平坦面	圓丸長方形	U字形	底面	300	46	80	なし	SD140より古	I	94
2区	SK211	平坦面	圓丸長方形	U字形	底面	124	50	45	石器	SD140・SD194より古	I	94
2区	SK213	平坦面	圓丸長方形	U字形	底面	354	46	73	なし	SD140より古	I	94
2区	SK222	平坦面	圓丸長方形	U字形	底面	290	50	72	なし	SD159・SK133・SK151より古	I	94
2区	SK225	平坦面	圓丸長方形	逆円形	底面	142	58	50	なし	SD143より古	I	94
柱孔(2)		柱	遺構名	位置	形狀	寸幅(cm)			出土遺物	重複關係	時期	國
平面	側面					長	寛	深				
1区南	SK5	平坦面	楕円形	楕円	底面	122	114	18	ロクロ土器	SD83より新、SD84より古	II	42
1区南	SK6	平坦面	楕円形	楕円	底面	70	58	16	土器器・ロクロ土器・須恵器	SD83より古	II	42
1区南	SK7	平坦面	楕円形	楕円	底面	115	100	28	土器器・ロクロ土器・須恵器・軋目鏡	SD8より新	II	43
1区南	SK12	平坦面	楕円形	U字形	底面	70	62	6	なし	SD48より新	II	43
1区南	SK19	平坦面	楕円形	楕円	底面	134	88	10	なし	なし	II	43
1区南	SK31	平坦面	楕円形	楕円	底面	96	(64)	12	なし	SD32より古	II	43
1区南	SK32	平坦面	楕円形	楕円	底面	130	90	14	なし	SD33より新	II	43
1区南	SK33	平坦面	楕円形	楕円	底面	176	108	22	なし	なし	II	44
1区南	SK34	平坦面	楕円形	U字形	底面	122	85	86	なし	なし	II	44
1区南	SK35	平坦面	楕円形	楕円	底面	66	64	14	なし	なし	—	44
1区南	SK36	平坦面	楕円形	楕円	底面	130	62	20	なし	なし	—	44
1区南	SK37	平坦面	不整方形	楕円	底面	116	84	34	なし	なし	II	44
1区南	SK38	平坦面	不整方形	逆円形	底面	140	110	16	なし	なし	II	44
1区南	SK39	平坦面	楕円形	楕円	底面	80	72	16	なし	なし	—	45
1区南	SK40	平坦面	不整方形	楕円	底面	100	90	18	なし	SD85より新	II	42
1区南	SK41	平坦面	不整方形	U字形	底面	(204)	104	32	なし	SD87より古	II	44
1区南	SK42	平坦面	不整方形	逆円形	底面	216	64	11	なし	なし	—	46
1区南	SK44	平坦面	楕円形	逆円形	底面	60	54	17	なし	なし	II	44
1区南	SK45	平坦面	楕円形	楕円	底面	106	82	26	土器器・須恵器	SD2より新、SD10より古	II	45
1区南	SK46	平坦面	圓丸長方形	楕円	底面	62	38	20	なし	なし	—	45
1区南	SK47	平坦面	不整方形	逆円形	底面	156	124	22	土器器	SD66より新	II	44
1区南	SK48	平坦面	不整方形	U字形	底面	88	(77)	12	なし	SD12より古	II	43
1区南	SK49	平坦面	不整方形	楕円	底面	60	42	20	なし	なし	II	45
1区南	SK50	平坦面	不整方形	U字形	底面	70	44	3	なし	なし	II	45
1区南	SK51	平坦面	(圓丸形)	楕円形	底面	(164)	84	22	なし	SD5・SK6より古	II	42
1区南	SK52	平坦面	(圓丸形)	U字形	底面	(160)	(16)	16	なし	なし	II	46
1区南	SK53	平坦面	(不整方形)	楕円	底面	(192)	(64)	6	なし	なし	II	46

第6表 遺構観察表 土坑(2)・溝跡・性格不明遺構

土坑(2)

区	遺構名	位置	形状	断面			出土遺物	産業関係	時期	回
				平面	側断面	底面				
1区南	SK534	平田面	(楕円形)	U字形	平頂・楕円形	106 (56)	28	なし	なし	古 40
1区南	SK535	平田面	(楕円形)	U字形	平頂	162 (54)	28	なし	なし	古 40
1区北	SK537	平田面	不整楕丸方形	進行形	凹凸・北側傾斜	(47)	45	18なし	なし	古 40
1区北	SK562	平田面	不整楕円形	圓形	凸凹	(232)	117	14なし	S064より古	— 40
1区南	SK565	平田面	楕円形	圓形	凸凹	130	26	3 ロクロ上・脚跡	なし	古 45
1区南	SK568	平田面	(不整楕円形)	圓形	圓形	165 (98)	(6)	なし	SK47より古	— 44
1区北	SK108	平田面	(楕円形)	圓形	圓形	82 (46)	15	なし	SE107より古	— 53
1区北	SK119	平田面	楕円形	圓形	凸凹	88	48	24なし	なし	— 53
1区北	SK120	平田面	楕円形	進行形	平頂	78	56	40 上脚跡・底脚跡	なし	— 53
1区北	SK121	平田面	不整楕丸形	圓形	平頂・東側傾斜	112	64	8なし	SK117より古	— 53
1区北	SK126	平田面	不整楕丸形	圓形	平頂	90	80	10~20なし	なし	— 53
2区	SK130	平田面	(楕円形)	圓形	圓形	122 (84)	10~15	なし	なし	古 96
2区	SK131	平田面	(楕円形)	U字形	平頂	114 (80)	29~32	上脚跡・ロクロ上・脚跡・底脚跡	SK132より古	古 96
2区	SK132	平田面	楕円形	進行形	平頂	118 (100)	15	上脚跡・土脚跡・ロクロ上・脚跡	SK131より古	古 96
2区	SK133	平田面	楕円形	U字形	凸凹	131 (123)	35	ロクロ上・脚跡	SK146・SK222より古	古 96
2区	SK134	平田面	楕円形	U字形	平頂	102 (92)	17	上脚跡	SK135より古、SK146より古	古 97
2区	SK137	平田面	楕円形	圓形	凸凹	138	124	10上脚跡	なし	古 97
2区	SK151	平田面	不整楕丸形	進行形	圓形	230 (220)	230	46 上脚跡・土脚跡・ロクロ上・脚跡・石柱・瓦・瓦砾・货币・货币	SK159・SK222より古、SK167より古	古 97
2区	SK152	平田面	鬼面山丸方形	進行形	平頂	534 (90)	16	牛生上・脚跡・ロクロ上・脚跡	SK228・SK221・SK153より古	— 97
2区	SK154	平田面	長方形	進行形	平頂	324 (94)	16	上脚跡	なし	— 97
2区	SK164	平田面	楕円形	進行形	圓形	110 (98)	60	ロクロ上・脚跡	SD144より古	古 91
2区	SK165	平田面	楕円形	U字形	平頂	90 (82)	66	なし	SK166・SD144より古	古 91
2区	SK167	平田面	楕円形	圓形	平頂	186 (130)	30	ロクロ上・脚跡・底脚跡	SK159・SK151より古、SK168より古	古 97
2区	SK168	平田面	楕円形	進行形	平頂	164 (150)	30	上脚跡	SK140・SK159・SK167より古	古 97
2区	SK170	平田面	楕円形	U字形	平頂	130 (123)	30	ロクロ上・脚跡・底脚跡	SK157より古	古 98
2区	SK171	平田面	不整楕丸形	進行形	平頂	66 (42)	12	なし	なし	— 99
2区	SK172	平田面	楕円形	圓形	平頂	92 (48)	36	なし	なし	— 98
2区	SK173	平田面	(長楕円形)	U字形	平頂	(100) (66)	21	なし	なし	— 99
2区	SK174	平田面	楕丸丸方形	進行形	平頂・南西傾斜	126 (74)	14	上脚跡	SK142より古	— 99
2区	SK176	平田面	不整楕円形	圓形	圓形	145	70	7上脚跡・底脚跡	SK143より古	— 99
2区	SK177	平田面	楕丸丸方形	進行形	平頂	148 (70)	15	上脚跡	SK139より古	— 99
2区	SK179	平田面	(楕円形)	U字形	圓形	110 (70)	46	なし	なし	— 99
2区	SK180	平田面	楕丸丸方形	進行形	平頂	214 (62)	16	牛生上・脚跡・ロクロ上・脚跡	SK142より古	— 99
2区	SK181	平田面	楕丸丸方形	進行形	U字形	104 (52)	42	牛生上・脚跡・底脚跡	SK140より古	— 100
2区	SK184	平田面	楕円形	進行形	平頂	246 (66)	66	70 上脚跡・ロクロ上・脚跡・底脚跡	SK160より古	— 100
2区	SK185	平田面	楕円形	圓形	平頂	110 (108)	26	なし	なし	古 100
2区	SK189	平田面	楕円形	進行形	平頂	132 (120)	6	ロクロ上・脚跡	SK156より古、SK190より古	古 100
2区	SK190	平田面	楕円形	圓形	凸凹	92 (90)	80	なし	SK156・SK189より古	古 100
2区	SK191	平田面	楕円形	進行形	圓形	154 (58)	24	東脚跡	なし	— 100
2区	SK192	平田面	楕円形	圓形	平頂	115 (110)	40	なし	SK193より古	古 100
2区	SK193	平田面	(楕円形)	(進行形)	U字形	(68) (38)	11	上脚跡・ロクロ上・脚跡・底脚跡	SK192より古	古 100
2区	SK195	平田面	(楕円形)	進行形	U字形	(26) (22)	23	なし	SK227より古	— 100
2区	SK197	平田面	(楕円形)	U字形	平頂・南西傾斜	(124) (40)	40	なし	なし	古 101
2区	SK198	平田面	楕円形	圓形	圓形	113 (99)	23	なし	SK140・SK194より古	— 101
2区	SK200	平田面	(楕円形)	—	—	(112) (86)	—	なし	なし	— 65
2区	SK209	平田面	(楕丸方形)	(進行形)	平頂	204 (150)	36	牛生上・脚跡・底脚跡・ロクロ上・脚跡・底脚跡・U字形	SK139より古、SD144・SD161より古	古 102
2区	SK212	平田面	楕円形	圓形	平頂	78 (64)	5	なし	SK178より古?	— 101
2区	SK215	平田面	(楕円形)	進行形	圓形	110 (80)	26	なし	なし	古 101
2区	SK218	平田面	楕円形	圓形	圓形	116 (116)	28	上脚跡・ロクロ上・脚跡・石柱	SK156より古	古 103
2区	SK219	平田面	(楕丸方形)	進行形	甲頂	(140) (50)	28	上脚跡	SK199より古	古 103
2区	SK220	平田面	楕円形	圓形	平頂	134 (80)	6	なし	SD144より古	古 103
2区	SK221	平田面	不整楕円形	圓形	圓形	105 (74)	14	ロクロ上・脚跡	SK153より古、SK152より古	古 103
2区	SK223	平田面	楕円形	U字形	凸凹	122 (114)	50	上脚跡・ロクロ上・脚跡・底脚跡・U字形	なし	古 103
2区	SK226	平田面	楕円形	進行形	圓形	68 (52)	28	鐵道・鐵水道	SK139より古	古 103
2区	SK248	平田面	楕円形	圓形	平頂	(78) (24)	55	ロクロ上・脚跡・底脚跡	SK195より古	古 100
3区	SK123	平田面	楕円形	圓形	圓形	— (59)	21	なし	SK166より古	— 65
3区	SK124	平田面	圓形	—	—	(112) (86)	—	なし	なし	— 108

溝跡

区	遺構名	位置	方向	断面			出土遺物	産業関係	時期	回	
				横幅	1輪幅(cm)	底幅(cm)					
1区南	SD064	平田面	NW-SE	29.5	6~144	8~38	17~40	進行形	梁脚跡・闊足跡	SD062より古	古 47
1区南	SD067	平田面	W-E	1.66	24~26	14~18	12	U字形	なし	SD3a・SD3bより古	古 47
1区北	SD104	平田面	NE-SW	23.90	30~40	20~35	8~15	圓形	上脚跡	なし	— 100
1区北	SD105	平田面	NE-SW	28.20	30~50	20~32	30~50	進行形	牛生上・脚跡・底脚跡	SD103・SD145・SK117より古	— 100
1区北	SD128	平田面	NW-SE	39.50	24~30	8~18	17	進行形	なし	SD105・SD129より古、SK112より古	— 100
1区北	SD129	平田面	NW-SE	15.30	10~20	4~12	20	進行形・U字形	なし	SD112・SD128より古	— 100
2区	SD144	平田面	SE-NW	—	—	—	—	—	—	—	— 104
2区	SD161	平田面	NE-SW	8.36	53~154	30~195	3~8	圓形	牛生上・脚跡・ロクロ上・脚跡・底脚跡・U字形	SD182より古、SK183・SK162、SK163・SK164・SK165・SK166、SK167・SK168・SK169より古	— 106
2区	SD182	平田面	NE-SW	10.20	18~54	10~16	24	進行形	牛生上・脚跡・底脚跡	SK139・SK140・SK206・SK207	古 106
2区	SD187	平田面	NE-SW	3.40	13~27	4~16	20	進行形	なし	SK143より古	— 106

北区4号遺構

区	遺構名	位置	形状	断面			出土遺物	産業関係	時期	回
				平面	側断面	底面				
2区	SK153	平田面	(不整形)	不整楕円形	—	(260) (140)	24	圓形	SK152より古・SK221より古	古 107

第5章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

前戸内遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字前戸内地内（北緯38°07'37"、東経140°41'09"）に所在する。測定対象試料は、1区北で確認したSX114粘土採掘坑から出土した炭化物3点である（第7表）。

2. 測定の意義

SX114粘土採掘坑では奈良時代の土師器・須恵器が比較的まとまって出土しており、関東系土師器とみられるものも含まれている。本遺構および出土遺物の帰属時期は、同様に関東系土師器を出土する周辺遺跡の検討において重要な意味を持つことから、年代測定によって、その年代を明らかにしたい。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA : Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、AaAと記載する（第7表）。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、そ

れをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4. 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libby の半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (yrBP) として測る年代である。この値は、δ ¹⁴C によって補正された値である。¹⁴C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 (±1σ) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) δ ¹³C は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により ¹³C/¹²C を測定した場合には (AMS) と注記する (第7表)。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ¹⁴C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ¹⁴C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 (1σ = 68.2%) あるいは2標準偏差 (2σ = 95.4%) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ¹⁴C 年代値である。

なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6. 測定結果

SX114 出土試料 3 点の ^{14}C 年代は、 $1270 \pm 30\text{yrBP}$ 、 $1250 \pm 30\text{yrBP}$ 、 $1300 \pm 30\text{yrBP}$ である（第 7 表）。3 点の曆年較正年代（1 σ ）は、 $665 \sim 808\text{AD}$ に含まれる（第 8 表）。試料は炭化の不十分な脆弱な小破片であり、おそらく木片と推定される。樹木などの場合には、測定対象が属した年輪に応じて ^{14}C 年代に差がある。つまり、内側の年輪ほど、樹木の枯死・伐採年代を遡る年代となることを考慮する必要がある。

試料の炭素含有率は、通常の炭化物に比べてやや低く、IAAA-82801 が 37% であり、他の 2 点が 55% 程度であった。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

第 7 表 試料一覧および ^{14}C 年代

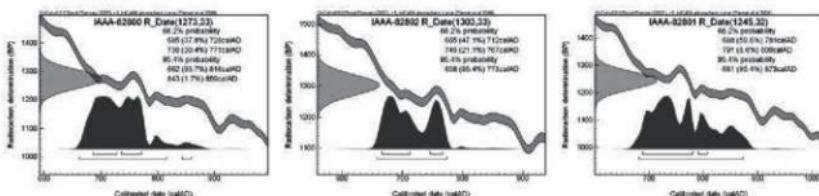
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-82800	UA08SX114-01	SX114a 粘土探査坑 B-B' 断面 18 層	炭化物	AaA	-27.97 ± 0.68	$1,270 \pm 30$	85.34 ± 0.36
IAAA-82801	UA08SX114-02	SX114a 粘土探査坑 B-B' 断面 13 層	炭化物	AaA	-30.02 ± 0.93	$1,250 \pm 30$	85.63 ± 0.35
IAAA-82802	UA08SX114-03	SX114b 粘土探査坑 A-A' 断面 4 層	炭化物	AaA	-28.23 ± 0.83	$1,300 \pm 30$	85.02 ± 0.35

[#2735]

第 8 表 ^{14}C 年代と曆年較正年代

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし Age (yrBP)	曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年年代範囲		2 σ 曆年年代範囲	
			1 σ 曆年年代範囲	2 σ 曆年年代範囲	1 σ 曆年年代範囲	2 σ 曆年年代範囲
IAAA-82800	$1,320 \pm 30$	84.82 ± 0.33	$1,273 \pm 33$	$685\text{AD} - 728\text{AD} (37.8\%)$ $736\text{AD} - 771\text{AD} (30.4\%)$	$662\text{AD} - 816\text{AD} (93.7\%)$ $843\text{AD} - 859\text{AD} (1.7\%)$	
IAAA-82801	$1,330 \pm 30$	84.75 ± 0.31	$1,245 \pm 32$	$688\text{AD} - 781\text{AD} (59.6\%)$ $791\text{AD} - 808\text{AD} (8.6\%)$	$681\text{AD} - 873\text{AD} (95.4\%)$	
IAAA-82802	$1,360 \pm 30$	84.45 ± 0.32	$1,303 \pm 33$	$665\text{AD} - 712\text{AD} (47.1\%)$ $746\text{AD} - 767\text{AD} (21.1\%)$	$658\text{AD} - 773\text{AD} (95.4\%)$	

[参考値]



第 113 図 [参考] 曆年較正年代グラフ

第6章 考 察

これまで記載した本遺跡の発掘調査結果を踏まえて、あらためて遺構と遺物について検討を加え、遺構の時期と変遷、遺跡の性格などについて考察する。なお、今回の発掘調査で発見された遺構と遺物は縄文時代から近世までのものがあるが、主体となるのは古代のものである。

第1節 遺物の特徴と編年の位置づけ

出土した遺物は、土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、近世陶磁器、弥生土器、石器、石製品、銅錢、金属製品、鉄滓、木製品などがある。このうち、主体を占めるのは土師器、ロクロ土師器、須恵器で、他は少量である。土師器には古墳時代中期の南小泉式がごく少量含まれるもの、土師器のほとんどとロクロ土師器、須恵器は奈良・平安時代のものである。ここでは、出土状況などからある程度の一括性が認められる奈良・平安時代の土師器、ロクロ土師器、須恵器について分類を行ない、編年的な位置付けを試みることとする。

なお、宮城県内の古代の土器についてはこれまでの調査・研究によって、いくつかの編年が提示されている(氏家 1957・1967、白鳥 1980、加藤 1989など)。本遺跡出土土器に関連する最近の論考として、村田晃一氏による宮城県中・南部を対象とした古墳時代後期～奈良時代の編年(2007)、多賀城周辺地域を対象とした平安時代の編年(1994)、柳澤和明氏による多賀城内の施釉陶器を含む平安時代の編年(1994)などが挙げられる。本遺跡出土土器の検討にあたっては、これらの先行研究を適宜参照しながら進めることとする。

1. 古代の土器類の分類

古代の土器類には土師器、ロクロ土師器、須恵器がある。これらを器種と器形、器面調整の状態によって以下のように分類する。

(1) 土師器

土師器のうち整形にロクロを用いていないもので、环、小型壺、甕、瓶がある。これらの中には、器形と器面調整の状態によってさらに細分されるものがあり、以下のように分類した(第114・115図)。

【环】 器形によって1-5類に分類した。さらに、器面調整の類型について外間にA-E、内間にa-eの細分項目を設け、これらの組み合わせで各細分類の特徴を示した。

(器面調整の類型)

- 外面 A類 口縁部にヨコナデ調整、体部から底部にヘラケズリ調整を施す。
- B類 口縁部から底部までヘラケズリ調整を施す。
- C類 口縁部から底部までヘラケズリ調整の後にヘラミガキ調整を施す。
- D類 口縁部にヨコナデ調整、体部から底部にヘラミガキ調整を施す。
- E類 口縁部にヨコナデ調整を施し、体部に粘土紐の輪積み痕を残す。 第114図 土師器分類図(1)



- 内面
 a類 ヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。
 b類 ヘラミガキ調整を施す。
 c類 ヨコナデ調整を施す。
 d類 ヨコナデ調整の後にヘラミガキ調整を施す。
 e類 ヨコナデ調整の後に黒色処理を施す。

杯1類 平底あるいは平底気味の丸底で体部から口縁部まで緩やかに内寄する。器面調整の類型にはAa・Ba類がある。いずれも外面はヘラケズリ調整主体で、内面を黒色処理で仕上げる。

杯2類 平底あるいは平底気味の丸底で体部から口縁部まで緩やかに内寄する。口縁部と体部の境に弱い稜を形成する。器面調整の類型にはAa・Ab・Ac類がある。いずれも外面はヘラケズリ調整主体であるが、内面は黒色処理で仕上げるものと、ヘラミガキ調整あるいはヨコナデ調整で仕上げるものとがある。

杯3類 平底気味の丸底で体部から口縁部まで直線的に外傾する。器面調整の類型にはCd・Dd類がある。いずれも内外面をヘラミガキ調整で仕上げる。

杯4類 平底で体部が内寄し、口縁部が外反する。器面調整の類型にはAc類がある。外面はヘラケズリ調整主体で、内面をヨコナデ調整で仕上げる。

杯5類 平底で体部から口縁部まで直線的に外傾する。底部が高台状に肥厚し、外底面に糸切り痕が見られる。器面調整の類型にはEe類がある。外面はナデ調整主体で、内面をヨコナデ調整で仕上げる。

【小型甕】 甕類のうち口径20cm以下のものを小型甕とし、器形によって1~2類に分類した。

小型甕1類 脊部上半が直立し、口縁部が短く外傾する。口縁部の内外面にヨコナデ調整、脣部の外面にユビナデ調整を施す。

小型甕2類 脊部上半が球脣状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁部の内外面にヨコナデ調整、脣部の外面にハケメ調整を施す。

【甕】 甕類のうち口径20cm以上のものである。器形によって1~4類に分類した。

甕1類 長脣で脣部上半が直立気味に外傾し、口縁部が短く外反する。頸部との境に脣部最大径をもつ。口縁部の内外面にヨコナデ調整、脣部の外面に横方向のナデ調整を施す。

甕2類 長脣で脣部が緩やかに内寄し、口縁部が短く外反する。口径と脣部最大径がほぼ同じである。口縁部の内外面にヨコナデ調整、脣部の外面に縱方向のヘラケズリ調整を施す。



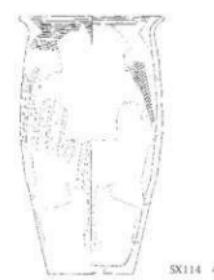
小型甕1類



小型甕2類



甕1類



甕2類



甕3類



甕4類



甕

第115図 土師器分類図(2)

表3類 球胸で頸部がくの字状に屈曲して口縁部が短く外反する。口縁部の内外面にヨコナデ調整、胸部の外面にハケメ調整の後、縦方向のヘラケズリ調整を施す。

表4類 球胸で頸部が直立し、口縁部が短く外反する。口縁部の内外面にヨコナデ調整、胸部上半の外面に縦方向のハケメ調整を施す。

【環】 無底式で胸部下半が円筒形を呈する。外面の胸下部に耳部を持つとみられる。胸部の外面にヘラケズリ調整、内面にヘラミガキ調整を施す。

(2) ロクロ土師器

土師器のうち整形にロクロを用いているもので、环、鉢、甕がある。これらの中には、器形と器面調整の状態によってさらに細分されるものがあり、以下のように分類した(第116・117図)。

【环】 器形によって1-2類に分類した。すべて内面を黒色処理で仕上げる。さらに、底部の切り離し・再調整の類型について、ロクロ台からの切り離し方法にA-D、切り離し後の再調整にa-cの細分項目を設け、これらの組み合わせで各細分類の特徴を示した。

(底部の切り離し・再調整の類型)

切り離し A類 回転糸切りによる。

B類 ヘラ切りによる。

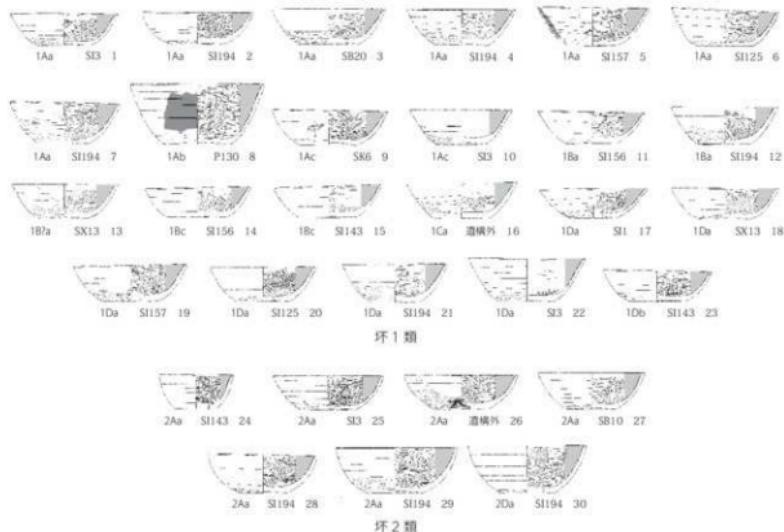
C類 静止糸切りによる。

D類 再調整により不明。

再調整 a類 手持ちヘラケズリによる。

b類 回転ヘラケズリによる。

c類 再調整を施さない。



第116図 ロクロ土師器分類図(1)

杯1類 体部から口縁部まで直線的に外傾する。底径口径比 0.43-0.55。底部の切り離し・再調整の類型には Aa・Ab・Ac・Ba・Bc・Ca・Da・Db 類がある。底部の切り離し方法が明らかなものでは回転糸切りとヘラ切りが 2:1 の比率で用いられている。ほとんどが切り離し後に再調整を施し、手持ちヘラケズリによるものが多数、回転ヘラケズリによるものがごく少数、再調整を施さないものが少數である。

杯2類 体部から口縁部まで内弯気味に外傾する。底径口径比 0.43-0.54。底部の切り離し・再調整の類型には Aa・Da 類がある。底部の切り離し方法が明らかなものはすべて回転糸切りで、いずれも切り離し後に手持ちヘラケズリによる再調整を施す。

【鉢】 体部が逆八の字形を呈する。体部上端部が内弯して頸部がくの字状に屈曲し、口縁部が短く外傾する。体部外面に格子タタキ調整を施すもの、体部外面の下半にヘラケズリ調整を施すものがある。

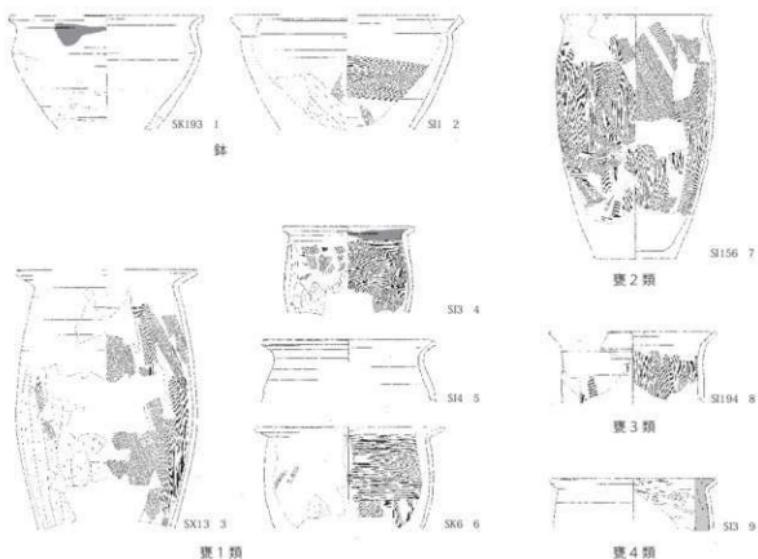
【甕】 器形によって 1-4 類に分類した。胸部下半と底部が不明な資料が多いため、主に胸部上半と口縁部の形態によって分類した。

甕1類 長胴で胸部に丸みのある梢円形を呈し、口縁部が外傾する。胸部外面の下半にヘラケズリ調整を施す。

甕2類 長胴で胸部に丸みのある梢円形を呈し、口縁部が短く外反する。胸部外面にヘラナデ調整を施す。

甕3類 胸部上半が直立し、口縁部が外傾する。

甕4類 胸部上半が直立気味に内弯し、口縁部が内弯気味に外傾する。内面にヘラミガキ調整の後、黒色処理を施す。



第117図 口クロ土器分類図(2)

(3) 須恵器

环、高台付环、环蓋、壺蓋、甕がある。これらの中には、器形と器面調整の状態によってさらに細分されるものがあり、以下のように分類した(第118図)。

【环】 器形によって1~4類に分類した。さらに、底部の切り離し・再調整の類型について、ロクロ台からの切り離し方法にA-D、切り離し後の再調整にa-cの細分項目を設け、これらの組み合わせで各細分類の特徴を示した。

(底部の切り離し・再調整の類型)

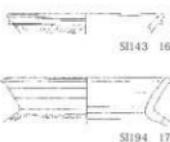
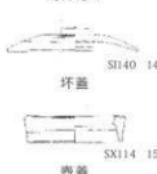
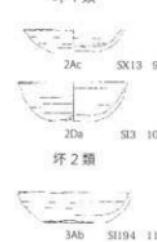
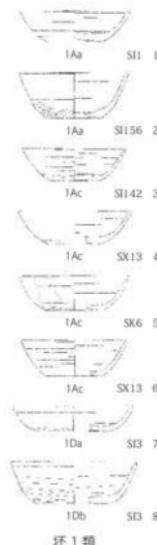
- 切り離し A類 回転糸切りによる。
- B類 ヘラ切りによる。
- C類 静止糸切りによる。
- D類 再調整により不明。
- 再調整 a類 手持ちヘラケズリによる。
- b類 回転ヘラケズリによる。
- c類 再調整を施さない。

环1類 体部下端が丸みを持って立ち上がり、体部から口縁部まで直線的に外傾する。底径口径比0.47~0.61。底部の切り離し・再調整の類型にはAa・Ac・Da・Db類がある。底部の切り離し方法が明らかなものはすべて回転糸切りで、切り離し後に再調整を施さないものがほとんどである。再調整の方法は手持ちヘラケズリによるものが少数、回転ヘラケズリによるものがごく少数である。

环2類 体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。底径口径比0.38~0.48。底部の切り離し・再調整の類型にはAc・Da類がある。底部の切り離し方法が明らかなものは回転糸切りで、切り離し後に再調整を施さないもの、手持ちヘラケズリによる再調整を施すものがある。

环3類 体部下端が丸みを持って立ち上がり、口縁部が内湾する。底径口径比0.51。底部の切り離し・再調整の類型はAb類である。底部の切り離し方法は回転糸切りで、切り離し後に回転ヘラケズリによる再調整を施す。

环4類 体部下端が丸みを持って立ち上がり、体部から口縁部まで直立気味に外傾する。底径口径比0.7。底部の切り離し・再調整の類型はBa類である。底部の切り離し方法はヘラ切りで、切り離し後に手持ちヘラケズリによる再調整を施す。



要

第118図 須恵器分類図

- 【高台付环】 口径が小さく器高が高い小鉢状の器形で、体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部は直立気味に外傾する。ヘラ切りによる底部の切り離し後に、八の字状に聞く高台が付加されている。
- 【坏蓋】 体部が直線的に外傾し、口縁端部に短い折り返しを持つ。中央部が突出する環状つまみを持つ。
- 【壺蓋】 天井部と体部がほぼ直角に屈曲し、体部から口縁部まで直立する。つまみ形状は不明。
- 【甕】 口頭部が外反し、口縁端部は上下につまみ出されて縁帯状となる。胴部形状は不明。

2. 土器群の設定と編年的位置づけ

前項で分類した土器類について、遺構ごとにまとめると第9表のようになる。これらの中で、ある程度の点数的なまとまりを持った遺構出土土器と言えるのは、SI3・SI140・SI143・SI194 竪穴住居跡、SX13 廃棄土坑、SX114 粘土採掘坑などの出土土器類である。これらの各遺構ごとの類型の組み合わせの相異に着目して土器群を設定すると、SI140 竪穴住居跡、SX114 粘土採掘坑出土土器を基準資料とし、土師器坏 1-4 類、須恵器坏 4 類を含む第1群土器、SI3・SI143・SI194 竪穴住居跡、SX13 廃棄土坑出土土器を基準資料とし、ロクロ土師器 1・2 類、須恵器坏 1-3 類を含む第2群土器の2群に大別される。以下に各土器群の特徴をまとめ、編年的位置および地域性などについて検討する。また、第2群土器には後述するように墨書き土器を含むことから、その内容についてもここで検討を加える。

(1) 第1群土器

SI140 竪穴住居跡、SX114 粘土採掘坑出土土器で構成される。土師器坏 1-4 類、甕 1-4 類、須恵器坏 4 類、高台坏环、坏蓋、壺蓋、甕がある。このうち、土師器には製作技法と形態的特徴から二つのグループが識別できる。一つは、内面に黒色処理技法を用いる坏を主要器種とする伝統的な在地の土器であり、もう一つは、内面に黒色処理技法を用いずヨコナデ調整で仕上げる坏を主要器種とする外来の土師器である。以下に、それぞれの特徴をまとめ、編年的位置などについて検討する。

在地の土師器 土師器坏は平底あるいは平底気味の丸底で、外面の体部に段を持たず、内面の体部と底部の境に屈曲が見られないものである。坏 1 類は体部から口縁部まで緩やかに内弯し、外面がヘラケズリ調整主体で、内面を黒色処理で仕上げるもので、国分寺下層式（氏家 1967・加藤 1989）の範疇に含まれる。藏王町堀の内遺跡第2群土器（藏王町教育委員会 1997）・六角遺跡第3群土器（藏王町教育委員会 2008）に類例が見られる。これらのうち坏環の器形に着目すると、堀の内遺跡では体部下端に段を形成する盤状坏が主体であり古相を示すのに対して、六角遺跡では無段の丸底坏が主体となっており、本群土器では丸底坏に平底化が見られる。このことから、<堀の内 2 群→六角 3 群→前戸内 1 群>という一応の変遷が考えられ、本群土器は六角 3 群土器にやや後出する様相を持つものと言える。堀の内 2 群土器は7世紀末～8世紀前半、六角 3 群土器は8世紀前半～中頃に位置づけられている。村田晃一氏（2007）による編年では7段階に該当し、漆紙文書を作った多賀城市山王遺跡 SD180B 溝跡出土土器（多賀城市埋蔵文化財調査センター 1991）、陸奥国分寺創建期瓦・多賀城跡政府第Ⅱ期瓦を作った利府町郷楽遺跡 11・14 号住居跡出土土器（宮城県教育委員会・利府町教育委員会 1990）などから8世紀中頃～後半の年代が与えられている。

また、須恵器坏 4 類は底径が大きく、底部はヘラ切りの後に再調整を施すが、再調整は粗い手持ちヘラケズリと軽いナデによるものである。利府町春日大沢窯跡群の硯沢窯跡 B 地区 9 号窯跡（宮城県教育委員会 1987）、石巻市須恵窯跡群の代官山遺跡 1 号窯跡（河南町教育委員会 1993）に類例が見られる。硯沢 9 号窯跡は8世紀中葉、代官山 1 号窯跡は8世紀第3四半期に位置づけられている。

以上のことから、本群土器は国分寺下層式後半段階に比定され、その年代は8世紀中頃～後半と考えられる。なお、SX114 粘土採掘坑における放射性炭素年代測定（AMS 測定、第5章）では、暦年校正年代（ 1σ ）は 665-808AD と示され、やや幅が広いものの本群土器の年代観と齟齬はない。

第9表 各遺構出土土器の組成

■: 住居跡の痕跡・断面穴。カマドの出土遺物を含む。+ : 磁器資料のみ。—: フィンダーライン: 里手土器、() : 芸能、備考: 不明品の内容、その他の出土遺物、土: 土器類、ロ: ロココ土器類、第: 池田窯
第5180-3X114出土の里手土器は普段使いで複合焼成がある。※本報告は各図版の磁器資料も含む箇項である。本遺跡の特徴・新旧關係から古代以外に帰属することが明らかな古墳は各巻の集録から除外している。

外来の土師器 在地の土師器とは異なる製作技法あるいは形態的特徴を有するものとして、坏 2~4 類、甕 2~4 類がある。これらは前述した在地の土師器と共伴関係にあるが、国分寺下層式の範疇には含まれないものであり、外来の土師器と考えられる。関東地方の土師器と類似した特徴が見られることから、東北地方南部で関東系土師器と呼称されている土器群に包括されるものと考えられる。

坏 2~4 類は、内面に黒色処理技法を用いずにコナデ調整で仕上げるものが主体である。坏 2 類は平底あるいは平底気味の丸底で体部から口縁部まで緩やかに内窵し、外面の口縁部と体部の境に弱い稜を形成する。坏 3 類は、平底気味の丸底で体部から口縁部まで直線的に外傾する。坏 4 類は平底で体部が内窵し、口縁部が外反する。甕 2 類は、長胴で胴部が緩やかに内窵し、口縁部が短く外反する。外面の頸部に段を持たず、胴部に縱方向のヘラケズリ調整を施す。甕 3 類は、球胴で頸部がくの字状に屈曲して口縁部が短く外反する。外面の胴部にハケメ調整の後、縱方向のヘラケズリ調整を施す。甕 4 類は球胴で頸部が直立し、口縁部が短く外反する。外面の胴部上半はハケメ調整である。

これらと共に持つ土師器は、藏王町六角遺跡第 2・3 群土器、堀の内遺跡第 2 群土器、崖田遺跡 SI1 住居跡（藏王町教育委員会 2011b）、栗原市御駒堂遺跡第 2 群土器（宮城県教育委員会 1982）、石巻市角山遺跡 SI54・SI130 住居跡（宮城県教育委員会 2005）などに認められ、六角 3 群・御駒堂 2 群に坏 2・3 類、甕 2・4 類、角山 SI130 住居跡に坏 3 類、堀の内 2 群に坏 3・4 類、六角 2 群に坏 4 類、角山 SI54 住居跡・崖田 SI1 住居跡に甕 4 類の類例が指摘できる。これらの土器の年代は、7 世紀末~8 世紀中頃の間にそれぞれ位置づけられている。

本群土器の年代は、在地の土師器の特徴から 8 世紀中頃~後半と考えられるが、上述のような既出の関東系土師器の年代観の中に収まるものか、8 世紀後半に降るものかについては、当地域周辺での類例の増加を待ってさらに検討を加える必要がある。

(2) 第 2 群土器

SI3・SI143・SI194 整穴住居跡、SX13 廃棄土坑出土土器を基準資料とし、これと同様の特徴を持つ SI1・SI125・SI142・SI156・SI157 整穴住居跡、SB10・SB20 捶立柱建物跡、SK6 土坑、P130 柱穴跡出土土器で構成される。ロクロ土師器坏 1・2 類、鉢、甕 1~4 類、須恵器坏 1~3 類、甕がある。

このうち、ロクロ土師器は表杉の入式（氏家 1957）の範疇に含まれる。ほぼ平安時代全般に対応するものとされた表杉の入式期は、須恵器・赤燒土器を含む坏類の形態と製作技法から細分が行なわれ（8~12 世紀代の多賀城跡出土土器を A-F 群に分ける白鳥 1980 など）、時期が降るほど口径に占める底径の比率（底径口径比）が小さくなる傾向や、ロクロ台からの切り離し後に再調整が行なわれなくなる傾向などが明らかにされた。その後、集落跡などを含めた資料の蓄積を踏まえて検討が進められている（多賀城周辺地域の 9~11 世紀代の土器を 1~8 群に分ける村田 1994 など）。

本群土器のロクロ土師器には、坏 1 類 77%、坏 2 類 23% が組成する。底径口径比は 0.43~0.55 である。ロクロ台からの切り離し方法は回転糸切り 74%、ヘラ切り 26% である。底部の再調整は 85% で行なわれている。再調整の方法は手持ちヘラケズリ 96%、回転ヘラケズリ 4% である。また、須恵器坏は、坏 1 類 73%、坏 2 類 18%、坏 3 類 9% が組成する。底径口径比は 0.38~0.61 である。ロクロ台からの切り離し方法はすべて回転糸切りで、底部の再調整は 55% で行なわれている。再調整の方法は手持ちヘラケズリ 67%、回転ヘラケズリ 33% である。

このような組成を示す土器群の例は、大河原町台ノ山遺跡第 8 号住居跡（宮城県教育委員会 1980a）、白石市青木遺跡第 21 号住居跡（宮城県教育委員会 1980c）などがある。前述の村田晃一氏の編年では 2 群土器段階に該当し、漆紙文書を伴う多賀城跡第 60 次調査 SE2101B 井戸跡 3 層出土土器などから 9 世紀第 1 四半期後半~第 2 四半期の年代が与えられている。斎野裕彦氏（1994）は、仙台市南小泉

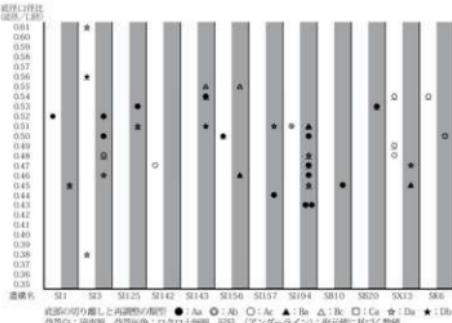
遺跡における須恵器坏の底径口径比と底部の再調整の類型から、9世紀代の土器を4段階に分けている。これによると、底部に再調整を施すものと、回転糸切り無調整のものがあり、底径口径比0.55~0.46のものは9世紀前葉~中葉とされており、本群土器の特徴と一致する(第119図)。本群土器はロクロ土師器主体であるが、ロクロ土師器の製作技法は須恵器坏のそれと連動することが複数の先行研究で示されている。

須恵器は、坏1類が仙台市台原・小田原窯跡群の五本松窯跡C群窯跡(仙台市教育委員会1987)、石巻市須江窯跡群の閑ノ入遺跡11号窯跡(河南町教育委員会2004)、いわき市梅ノ作窯跡群の梅ノ作窯跡7号窯跡(いわき市教育委員会2003)、会津若松市荻ノ窯跡(会津坂下町教育委員会2000)など、坏2類は閑ノ入11号窯跡、会津若松市大戸窯跡群の上雨屋12号窯跡(会津若松市教育委員会1993)などに類例が見られる。閑ノ入11号・梅ノ作7号窯跡は9世紀第1四半期、上雨屋12号窯跡は9世紀第1~2四半期、荻ノ窯跡は9世紀第2四半期、五本松C群窯跡は9世紀第3四半期に位置づけられている。

以上のことから、本群土器は表杉の入式前半段階に比定され、その年代は9世紀前葉~中葉と考えられる。**墨書き器** 本群土器のうち須恵器坏2点、ロクロ土師器坏26点の合計28点で墨書きを確認した。出土場所で見ると竪穴住居跡16点、土坑7点、掘立柱建物跡1点、遺構外4点である。墨書きのある部位は外底面18点、外面体部7点(正位4点、不明3点)である。肉眼観察および赤外線デジタル撮影によって判読できた墨書き文字は、「草手」・「(中)」が各2点、「薺田」・「勝」・「大」・「丈」・「(天)」・「(一)」・「三□□」が各1点である。墨書きは筆が細く早い筆運びで書かれたものが多く、肉太のものは少ないことから、比較的筆使いに慣れた書き手によるものが多いとみられる。

本遺跡周辺での墨書き土器の出土例としては、白石市青木遺跡で「大里」・「大村」・「大」・「村」・「千」・「仁」・「上」・「月」・「(財)集」・「工」・「肩」、御所内遺跡で「大里」、松田遺跡で「千」、家老内遺跡で「三」・「大」・「上」・「上井」・「新宅」・「新」・「宅」・「匁」・「貯」・「日」・「匁」、明神脇遺跡で「二万」・「(財集)」・「曹司」、藏王町持長地遺跡で「吉」・「財」・「長田」、東山遺跡で「万」・「田」・「三」・「万田」・「田万」・「子田」・「今万」・「今万田」、赤鬼上遺跡・十郎田遺跡で「本」、七ヶ宿町小梁川遺跡で「三」・「丈」・「慈」・「下屋」・「山本」、小梁川東遺跡で「弥」などがある。いずれも平安時代のもので、ロクロ土師器坏の外面体部に正位で書かれたものが多い。出土場所は住居跡あるいは土坑が多く、住居跡の場合はカマド・貯蔵穴周辺が多い。墨書きは筆が細く早い筆運びで書かれたものは少数で、肉太のものが多いことから、筆使いに慣れた書き手によるものは少なく、半ば記号化された文字を記したもののが多かったと考えられる。

これらと比較すると、竪穴住居跡や土坑からの出土が多い点では共通するが、本群土器に伴う墨書き土器は少ながら須恵器坏が含まれること、墨書きのある部位は外面体部よりも外底面に多いこと、比較的筆使いに慣れた書き手によるものが多いとみられることなどが特徴として挙げられる。共通して書かれている文字としては「大」・「丈」・「三」がある。この他の「(中)」・「勝」・「(天)」・「(一)」についても類例としては散見されるものもあるが、一字のみということもあります十分に意味を限定できない。二字の墨書きのうち、「薺田」は多賀城市市川橋遺跡で3例(多賀城市埋蔵文化財調査センター2003)が知られているほか、陸奥国分寺所要瓦に「薺」の刻字がある。「草手」については管見の限りでは類例がない。



第119図 第2群土器における坏類の底径口径比分布図

底盤の内側面と再調整の割合: ●: Aa ○: Ab □: Ar ▲: Ia △: Ib ◻: Ca ★: Da ▲: Db
背脂色: 黒墨書き 背脂色: ロクロ土師器 記号: アンダーライン: 前元に基づく数据

「苅田」は地名あるいは人名と考えられる。続日本紀の養老5（721）年10月14日条に「陸奥国柴田郡の二郷を分割して苅田郡を置く」、神護景雲3（769）年3月13日条には「苅田郡の大伴臣人足に大伴刈田臣という氏姓を賜う」という記事がある。円田盆地周辺は7世紀後半頃に設置されたとみられる当初の柴田郡に属したが、苅田郡が分置された際にいずれの郡域に属したのかは明確でない。平安時代（10世紀）の和名類聚抄には「刈田郡篤僧・那（刈）田・坂田・三田郷」の記載があるが、円田盆地との関係は不明である。中世文書に円田盆地周辺の郷村名を見ると、応永9（1402）年「刈田郡平沢郷」、天文7（1538）年「刈田郡小紫・平沢・円田・矢付」、天文13（1544）年「刈田庄小紫郷」、天文15（1546）年「柴田郡平沢邑」、天文24（1555）年「刈田庄平沢・円田・柴田庄塩沢」、文禄3（1594）年「刈田郡平沢・円田・塩沢・小紫（小村崎）」などがあり、多くは刈田郡であるが一部は柴田郡に属した時期があったことが知られる（蔵王町史編纂委員会 1987）。

以上、古代から中世にかけての刈田郡に関わる古記録を概観したが、平安時代に円田盆地周辺が刈田・柴田のいずれの郡域に属したのかを明示するものはない。本資料は、「苅田」の文字を記した考古資料としては市川橋遺跡と並んで最古段階のものであり、本遺跡で発見されたことを考慮すれば、平安時代に円田盆地周辺が刈田郡に属していたことを示す有力な証拠となりうると考えられる。

「草手」は、近世の用例を見ると、田畑の「草取り」・「草刈り」の作業、あるいは肥料その他に利用される「草木」を指す語として用いられている。また、農民が入会地となっている草刈場から得る秣・糞・糞などの草木に賦課された軽租を「草手」・「草代」・「野手」などと称し、中世には荘園領主が莊内に「草手」を賦課していた例が知られている（宮崎 2003）。康和4（1102）年9月4日の東大寺般若会支度下行日記では「衆人草手料」として「桶八柄二口」が支給されている（東京大学史料編纂所 2011a）。康元元（1256）年10月10日の日野資宣下文では、田所（莊官）の本庄宗光が莊務のため上洛するにあたり、その経費負担は、莊内に「夫役・草手」を賦課して充てよう、莊園領主（領家）の日野資宣が若山莊の番頭・百姓に、下文をもって命じている（東京大学史料編纂所 2011b）。

本資料の「草手」の意味については、比較的筆使いに慣れた書き手によるものとみられることや、後述するような集落の性格などから、除草の作業や単に草木を指したものではなく、在地有力者が軽租として徴収した「草手」、あるいは居宅内で消費する草木の調達にかかる労務の対価として支給された「草手」を指した可能性を考えて良いと思われる。その場合、「草手」と墨書きされた土器は、「草手」の收受あるいは支給に際して、米などの計量に用いられた可能性が考えられる。

第2節 遺構の特徴と遺跡の性格

確認した遺構は、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡35棟、柱列跡11条、井戸跡8基、近世墓10基、落とし穴状土坑10基、土坑85基、溝跡10条、竪穴状遺構1基、粘土探掘坑2基、廃棄土坑1基、性格不明遺構1基、柱穴多数である。これらの遺構について、第1節で検討した出土土器の年代と、各遺構の配置状況および新旧関係などから機能時期を推定し、各時期の遺跡の性格について考える。

1. 遺構の時期と特徴

確認した遺構について、第1節で検討した出土土器の年代と、各遺構の配置状況および新旧関係などから機能時期を推定すると、第10表に示すようにI～VI期の遺構期に分類できる。掘立柱建物跡については出土する遺物が小片であることが多く、遺物から遺構期を特定することが難しいことから、周辺の出土遺物および建物構造と方位、柱穴の規模・形状などから分類を試みた。ここでは、各遺構期の特徴と想定される遺跡の性格を述べる。

第10表 遺構の機能時期と土器群

遺構期	時代・時期	年代	土器群	帰属遺構
I期	縄文～弥生時代	—	—	1区南 SK16・SK58・SK65 2区 SK135・SK169・SK210・SK211・SK213・SK222・SK225
II期	奈良時代中頃	8世紀中頃～後半	第1群土器	1区北 SX114a・SX114b・SK117 2区 SI140・SI159・SI160・SI196
III期	平安時代初期	8世紀末～9世紀初頭	+	1区南 SI2・SB26・SB230・SB234・SB238・SK45 2区 SI178
IV期	平安時代前葉～中葉	9世紀前葉～中葉	第2群土器	SI1・SI3a・SI3b・SI4a・SI4b・SI8・SI14・SB9・SB10・SB15・SB17・SB18・SB20・SB23・SB24・SB28・SB30・SB229・SB235・SB237・SA232・SA241・SX13・SK5・SK6・SK7・SK12・SK19・SK31・SK32・SK33・SK34・SK37・SK38・SK40・SK41・SK44・SK48・SK49・SK50・SK51・SK52・SK53・SK54・SK55・SK57・SK66・SD67
VI期	中世前半	14世紀	中世陶器 至大通寶	1区北 SB102・SB103・SB145・SB243 SI125・SI39・SI142・SI143・SI156・SI157・SI194・SB127a・SB127b・SB199・SB228・SA118・SK130・SK131・SK132・SK133・SK134・SK137・SK151・SK167・SK168・SK170・SK185・SK189・SK190・SK192・SK193・SK197・SK209・SK215・SK218・SK219・SK221・SK223・SK227・SK153
VII期	近世後半	18～19世紀	近世陶磁器 寛永通宝	SB21・SB22・SB25・SB231・SB236・SA27・SA239・SA240・SA242・SE63 SI101・SB244・SB245・SA109・SE106 SB146・SB147・SD144・SD182
機能時期不確定	中世～近世		1区南 SD64	1区北 SE112・SD104・SD105・SD128・SD129 SI183・SK152・SK154・SK173・SK174・SK177・SK180・SK184・SK191・SD161
	不明		1区南 SA233・SK35・SK36・SK39・SK42・SK46・SK47・SK62・SK68 SA246・SA247・SE107・SE111・SE113・SK108・SK119・SK120・SK121・SK126	1区北 SD187・SK171・SK172・SK176・SK179・SK181・SK195・SK198・SK200・SK212・SK248
			3区 SI122・SK123・SK124	

*太字は出土土器群・年代測定・遺構の新旧関係による判定、細字は出土土器の大まかな特徴（土師器・ロクロ土師器など）・遺構の特徴（規模・形状・柱穴掘方の規模・形状など）と配置関係（分布・方位）などによる推定を示す。また、下線は年代測定試料が帰属する遺構を示す。

(1) I期(縄文～弥生時代)

落とし穴状土坑10基があり、狩猟場としての性格が考えられる。落とし穴状土坑は本遺跡のほか、六角遺跡、原遺跡、戸ノ内遺跡など円田盆地北縁部の遺跡で多数確認されている。いずれも機能時期を特定できる遺物は出土していないが、遺構の性格から調査区周辺に集落が形成される以前のものとみられる。円田盆地北部における集落の形成時期は弥生時代中期ないしは古墳時代前期であることから、狩猟場として利用されたのは概ね縄文～弥生時代と考えられる。円田盆地西方の高木丘陵に立地する複数の縄文時代の集落との関連性を想定すれば、縄文時代中～後期が可能性の一つとして考えられる。

落とし穴状土坑は、平面形が溝状、横断面形がV字形を呈するもの（1類、6基）と、平面形が小判形、横断面形がU字形を呈するもの（2類、4基）に分けられる。1類は1区南に2基、2区に4基、2類は1区南に1基、2区に3基が分布し、分布状況に類型間の偏在性は見られない。各遺構の長軸方向で見ると、分布範囲の重複する2区のSK210・SK213・SK222（1類）でN-15°-20°-E、SK135・SK211・SK225（2類）でN-50°-60°-Eであり、それぞれ齊一性がある。配置状況に類型間で異なる志向性が認められることから、これらの機能時期には少なくとも2時期以上の変遷があると考えられる。

(2) II期(8世紀中頃～後半)

堅穴住居跡4軒、堅穴状遺構1基、粘土探掘坑2基があり、1区北、2区に分布する。1群土器を伴うことから、機能時期は8世紀中頃～後半と考えられる。SI140堅穴住居跡は一辺6.3mの規模で、北壁にカマドを付設する。土師器壺・甕・須恵器壺・环蓋・甕が出土している。SX117堅穴状遺構は長辺2.8mの規模で、土師器・鉄滓が出土している。SX114粘土探掘坑は2時期の重複があり、長軸1.9-2.8mの

規模である。白色粘土層を抉り込むように掘り込まれ、人為的に埋め戻されている。円田盆地周辺の古代の竪穴住居跡では、カマド構築土や貼床材としての白色粘土を採掘したと考えられる床下土坑がしばしば見られるが、SX114 粘土探掘坑はこれよりも規模が大きい。堆積土中に焼土・炭化物を多く含むことから、探掘した粘土などを使用した土器の製作・焼成が付近で行われた可能性が考えられる。土師器環・鉢・甕・甑・須恵器環・高台環・壺蓋・甕が出土した。

確認した遺構が少数であるため不明な点が多いが、やや大型の竪穴住居があること、土器製作を窺わせる粘土探掘坑を伴うこと、土器の組成は在地色が希薄で関東系土師器が主体的であること、当地域では類例の少ない須恵器壺蓋を伴うこと、鐵滓が出土していることなどが特徴として挙げられる。以上のことから、Ⅱ期にはいわゆる関東系移民を主要な構成員とする集落が形成され、集落内では土器製作や小鍛冶などの生産活動が行なわれていた可能性が考えられる。

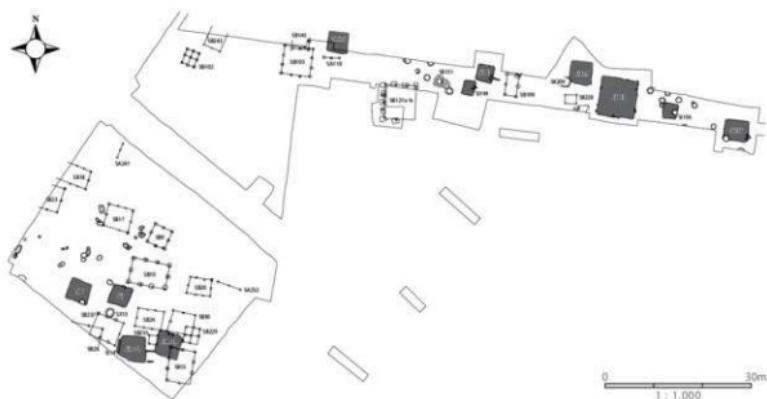
(3) Ⅲ期（8世紀末～9世紀初頭）

竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 4 棟、土坑 1 基があり、1 区南、2 区に分布する。土師器環・甕・口クロ土師器環、須恵器環の破片が少量出土している。ロクロ調整・非ロクロ調整の土師器を伴うこと、SI2 竪穴住居跡はⅣ期の SB10 掘立柱建物跡に壊されていることから、機能時期は 8 世紀末～9 世紀初頭と推定される。竪穴住居跡と掘立柱建物跡の主軸方向は N0-15°-W で、ほぼ南北方向からやや西偏する。SI2 竪穴住居跡は長辺 3.1m、SI178 竪穴住居跡は長辺 4.7m 以上の規模であるが、床面が残存しないためカマド位置は不明である。掘立柱建物跡は桁行 1-2 間、総長 2.9-4.6m の規模で、柱穴掘方の平面形は長軸 30cm 前後の略円形・橢円形を呈するものが主体である。

以上のことから、Ⅲ期には散漫に分布する竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落が形成されていたと考えられる。確認した遺構・遺物は少數であるため、集落の様相には不明な点が多い。

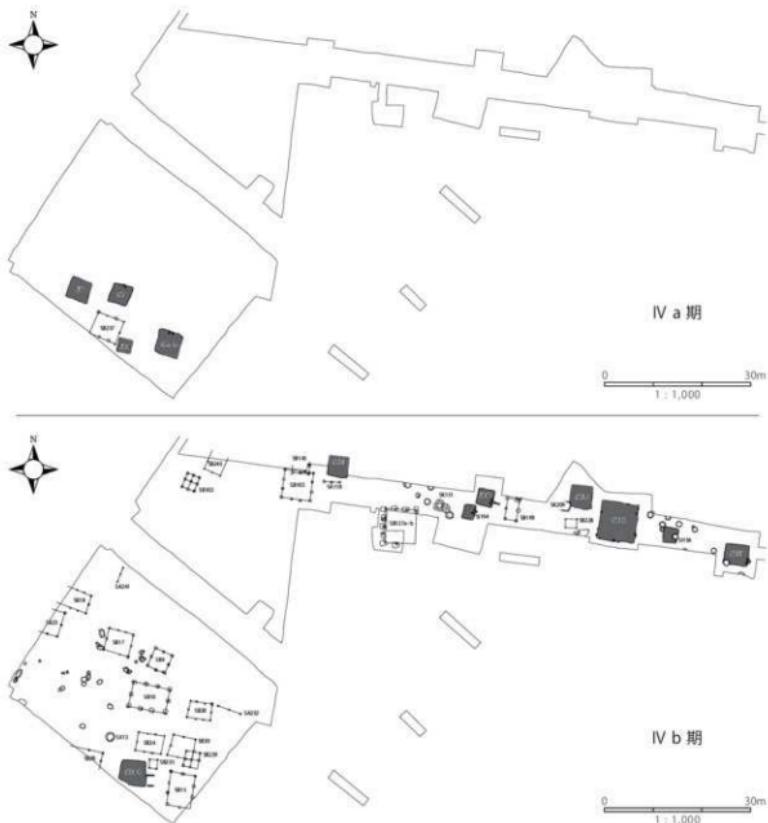
(4) Ⅳ期（9世紀前葉～中葉）

竪穴住居跡 14 軒、掘立柱建物跡 21 棟、柱列跡 3 条、廃棄土坑 1 基、土坑 47 基、性格不明遺構 1 基、溝跡 1 条があり、1 区南・北、2 区に分布する。2 群土器を伴うことから、機能時期は 9 世紀前葉～中葉と考えられる。遺構の重複関係には < SI4 → SB30 → SB229 >、< SI4 → SB15 >、< SB28・SB237 >、



第120図 Ⅳ期遺構配置図（1）

<SB103・SB145>などが見られ、2-3時期程度の変遷が考えられる。主軸方向は竪穴住居跡でN-2-21°-E、掘立柱建物跡でN-0-24°-Eで、ほぼ南北方向からやや東偏し、仔細に見るとやや東偏するA群(SI1, SI4a・b, SI8, SI14, SB9, SB102, SB237, SB243)と、これ以外でより南北方向に近いB群とに区別される。A群のSI4a・b竪穴住居跡はB群のSB15掘立柱建物跡に壊されていることから<A群→B群>の新旧関係が指摘でき、A群のSB9掘立柱建物跡とB群のSB17掘立柱建物跡は南辺が揃うことから一部は併存しながら変遷していると考えられる。このことから、IV期の遺構群はA群の竪穴住居跡5軒と掘立柱建物跡1棟で構成されるIVa期、A群の掘立柱建物跡3棟とB群で構成されるIVb期に概ね細分することが可能と考えられる(第121図)。IVa期の遺構群は1区南に分布し、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、IVb期の遺構群は1区南・2区に分布し、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡20棟、柱列跡3条、廐棄土坑1基、土坑47基などで構成される。土坑群については必ずしも明瞭に時期区分できるものではないが、新旧関係と配置状況から主にB群の遺構に伴うものと考えて大過ないと思われる所以、IVb期に位置づけておく。



竪穴住居跡 長辺 3.1~7.9m、短辺 2.5~7.9m の規模で、1 区南に 7 軒、2 区に 7 軒が分布する。時期別に見ると IV a 期は 1 区南に 5 軒、IV b 期は 1 区南に 2 軒、2 区に 7 軒が分布する。住居の規模は IV a 期では長辺 4.0~5.0m と齊一的であるが、IV b 期では長辺 3.1~3.5m の小型住居、5.1~5.6m の中型住居、7.9m の大型住居が見られ、機能の分化が窺われる。カマドの付設される位置は IV a 期で北壁 2 軒、IV b 期で東壁 5 軒、北壁 1 軒である。いずれもカマドの焚口に向かって右側の住居隅に貯蔵穴を伴う。貯蔵穴は浅い皿状を呈するものが主体であるが、IV b 期の SI142・SI125 竪穴住居跡では擂鉢状に深く掘り込まれており、貯水施設など通常の貯蔵穴とは異なる用途が推定される。

床下土坑は IV a 期の SI4b 竪穴住居跡で 10 基、IV b 期の SI3b 竪穴住居跡で 15 基、SI143 竪穴住居跡で 2 基、SI157 竪穴住居跡で 2 基を確認した。床下土坑は六角遺跡 SI424・SI601 竪穴住居跡（藏王町教育委員会 2008）、塙田遺跡 SI302・SI303・SI305 竪穴住居跡（藏王町教育委員会 2011b）、十郎田遺跡 SI207・SI217・SI218 竪穴住居跡（藏王町教育委員会 2011d）など円田盆地周辺の飛鳥～平安時代の住居跡にしばしば見られ、特に平安時代の住居跡には複数基の土坑を伴う例が多い。住居の構築・改築時に掘られており、カマド構築土や貼床材としての白色粘土を探掘したと考えられる。

遺物は IV a 期の住居跡で土師器小型甕・懶、ロクロ土師器壺・鉢・甕、須恵器壺・甕、転用低が出土している。SI1 竪穴住居跡から多く出土している。ロクロ土師器・須恵器壺には墨書の見られるものがあり、外底面に「草手」と墨書された須恵器壺がある。IV b 期の住居跡では土師器甕、ロクロ土師器壺・高台付壺・甕、須恵器壺・高台付壺・环蓋・甕、灰釉陶器碗、鉄製刀子・鎌先・不明品、磁石が出土している。SI3・SI194 竪穴住居跡から多く出土し、鉄製品・磁石は SI142・SI143・SI156・SI157・SI194 竪穴住居跡から出土している。ロクロ土師器壺には口縁部に油煙の付着が見られるもの、外底面に「刈田」、「草手」、「大」、「(中)」、「一」、「三□□」、外面の体部に「丈」と墨書されたものがある。

掘立柱建物跡 桁行 1.8~7.7m、梁行 1.6~5.8m の規模で、間数で見ると 1 × 1 間:3 棟、2 × 1 間:4 棟、2 × 2 間:5 棟、3 × 2 間:6 棟、3 × 3 間:1 棟、4 × 3 間:2 棟である。1 区南に 13 棟、1 区北に 4 棟、2 区に 4 棟が分布する。時期別に見ると IV a 期は 1 区南に 1 棟、IV b 期は 1 区南に 12 棟、1 区北に 2 棟、2 区に 6 棟が分布する。建物の規模は IV a 期では 2 × 3 間で桁行 5.7m が 1 棟、IV b 期では 1 × 1 間で桁行 1.8~2.4m が 2 棟、2 × 1 間で桁行 4.4m が 1 棟、2 × 2 間で桁行 3.0~4.7m が 3 棟、2 × 3 間で桁行 5.2~7.7m が 6 棟、3 × 3 間で梁行 5.9m が 1 棟、3 × 4 間で梁行 7.0m が 1 棟などである。建物の構造は、IV b 期の SB102・SB229 掘立柱建物跡が 2 × 2 間の総柱建物であるほかは、すべて側柱建物である。

IV a 期の掘立柱建物は、SI1 竪穴住居南側に建てられた SB237 掘立柱建物 1 棟のみであるが、IV b 期には正方形建物に SB127・SB103 掘立柱建物跡、長方形建物に SB10・SB15 掘立柱建物跡などやや大型で規格的な柱穴掘方を持つ建物が複数棟建てられ、逆 L 字形に配置される建物群を形成する。

また、SB9 掘立柱建物は A 群の方位で建てられ、これと南辺を合わせて西隣に建てられる SB17 掘立柱建物は B 群の方位で建てられている。このことから、SB9 掘立柱建物は IV b 期の中でも初期の建物と見られ、その後に順次建物が追加されたことが窺える。また、2 × 3 間の側柱建物の SB30 掘立柱建物は 2 × 2 間の総柱建物の SB229 掘立柱建物に建て替えられている。

遺物は SB10・SB15・SB20・SB102・SB127b・SB237 掘立柱建物跡などでロクロ土師器壺・甕、須恵器壺・高台付壺・环蓋が出土している。

土坑 1 区南で廃棄土坑 (SX13) を確認した。IV a 期の SB237 掘立柱建物跡を壊しており、IV b 期に伴うと考えられる。平面形が直径約 1.9m の略円形を呈する土坑で、堆積土中に焼土・地山ブロック、焼礫、焼骨・炭化木片を含み、ロクロ土師器・須恵器、鉄釘などが出土している。ロクロ土師器壺には「勝」と墨書されたものがある。堆積土はすべて人為的埋土と考えられることから、不要物を一括廃棄した土坑と考えられる。平面形が円形を基調とする土坑は IV b 期の 2 区にも多数分布し、いずれも堆積土が

人為的埋土でロクロ土師器などが出土していることから、同様の性格を持つ土坑の可能性がある。

このほか、2区のSK151 土坑では鉄滓、砥石、焼砾などが出土している。鉄滓は典型的な椀形滓の形状を呈しており、鍛冶炉の炉底に溜まった鍛冶滓と考えられる。鍛冶炉と推定できる遺構は確認されていないが、集落内で鉄製品の製作・補修のための小鍛冶が行なわれていたと考えられる。鉄製品関連の遺物は、複数の竪穴住居跡などから鉄製刀子・鎌先・鉄釘・不明品、砥石が出土している。

IV a・b期の遺構群 以上に述べたIV a・b各期の遺構群の配置状況と特徴および変遷について概観する。

IV a期の遺構群は、比較的散漫な配置状況である。南側に竪穴住居4軒と掘立柱建物1棟がある。遺物の出土状況から見れば、SI1 竪穴住居が中心的な施設と目され、その南面に隣接して2×3間のSB237 掘立柱建物が建てられている。SI1 竪穴住居では「草手」と墨書きされた須恵器環が出土している。

IV b期になると、比較的濃密な配置状況を呈する遺構群が展開する。南側の施設群は竪穴住居1軒、掘立柱建物11棟などで構成され、より一体性のある配置状況となる。竪穴住居は1軒のみとなるが、替わって複数棟の掘立柱建物がやや計画的に配置されている。建物群は逆L字形の配置を呈している。SI3 竪穴住居はIV a期の竪穴住居よりもやや大型化し、出土遺物も豊富である。掘立柱建物は2×3間が5棟、2×2間が2棟などで、このうち2×2間のSB10 掘立柱建物は隅丸方形で規格的かつ大型の柱穴掘方を持ち、際立った優位性が窺える。2×2間で総柱建物のSB229 掘立柱建物は倉庫の可能性が考えられる。また、北東側には竪穴住居7軒、掘立柱建物5軒などで構成される施設群が新たに配置される。竪穴住居は長辺3m前後の小型住居、5m前後の中型住居、約8mの大型住居が見られ、機能の分化が窺える。SI143 大型住居は残存状況が良好でないが、SI194 小型住居はカマド底面が良く焼けており、出土遺物が豊富である。3×3間のSB103 掘立柱建物、3×4間のSB127 掘立柱建物は平面形が正方形を呈しており、南側の施設群に建てられた掘立柱建物とは異なる機能が想定される。特にSB127 掘立柱建物は、南側の施設群で優位なSB10 掘立柱建物よりもさらに大型の柱穴掘方を持つ。SI3 竪穴住居では「菊田」、「草手」と墨書きされたロクロ土師器環が出土しているほか、複数の竪穴住居などで墨書き土器が出土している。また、小鍛冶が行なわれたことを示す椀形滓が出土し、刀子・鎌先などの鉄製品も出土している。

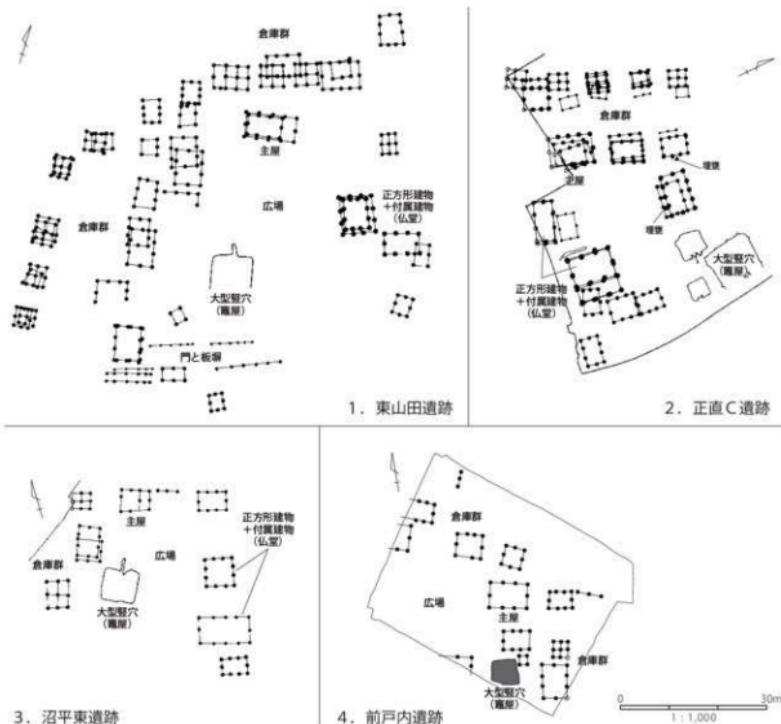
以上のことから、IV期の遺構群は2時期に概ね細分でき、IV a期には散漫に分布する竪穴住居と少数の掘立柱建物で構成される集落、IV b期には計画的に配置された規格性のある掘立柱建物群と竪穴住居群で構成される集落が形成されていたと考えられる。IV a・b期は連続的に変遷しており、「草手」の墨書き土器を伴うことなど類似した特徴が指摘できることから、IV a期を集落の形成期、IV b期を発展期として捉えることが適当と考えられる。集落内には掘立柱建物を逆L字形に配置する一角が形成され、中心施設や倉庫とみられる建物があることから、一般集落とは異なる性格が窺われる。

豪族居宅の検討 これまでの検討から、IV b期の集落には逆L字形に配置された掘立柱建物群で構成される一角が形成されていることが判明した。遺構群は調査区外へ続いていることから、南へ聞くコ字形の配置と見ることも出来そうである。こうした建物配置をとる遺構群は加美町壇の越遺跡（宮城県教育委員会2003）、利府町郷聚遺跡（宮城県教育委員会・利府町教育委員会1990）、福島県横葉町鍛冶屋遺跡（福島県教育委員会2000）、郡山市正直C遺跡（福島県文化センター1995）、東山田遺跡（菅原1998）、須賀川市沼平東遺跡（福島県教育委員会1981）などに類例が見られ、竪穴住居を主体に構成される一般集落とは異なる特殊な性格を有することが窺われる。菅原祥夫氏（1998）は、正直C遺跡・東山田遺跡など陸奥南部にみられる規格的配置の倉庫群を備えた建物群を「官衙風建物群」と呼び、富豪層居宅と位置づけている。さらに、こうした居宅の類例は関東地方にも多数確認され、その中には腰帶具や「郷長」銘の墨書き土器を伴う例があることから、一部に官に関わる性格を有したものと指摘されている。また、近年の東北各地での類例の蓄積を踏まえて全体的な動向と地域性を検討し、律令期の豪

族居宅の起点は大化前代の国造居宅に求められ、その後に官衙内の官人居宅に採用されたこと、8世紀後半以降に集落内に齊一性の強い豪族居宅が普及すること、9世紀後半以降は律令制崩壊の進行と共に太平洋側は衰退し、日本海側では発展する二極分化となり、10世紀中頃に終末を迎えることなどを明らかにしている（菅原2007・2008）。以下、これに基づいてIV b期集落の性格を検討してみたい。

典型的な律令期豪族居宅のモデルとして菅原氏が提示する東山田遺跡（第122図1）では、全体景観として①掘立柱建物主体で下向きコ字形の規格的配置、②建物規模は 2×3 間を基本、③建て替え・補修は必要に応じて行なわれ、全体の変遷は捉え難い、④瓦葺建物の不存在、内部施設として⑤総柱建物と側柱建物の2種類で構成される倉庫群、⑥多量の食器を保有する大型竪穴建物（竈屋）、⑦主屋は周囲の建物と規模・構造が特段変わらない、⑧上位ランクの居宅には正方形建物+付属建物のセットが認められ、居宅内併置の仏堂の可能性が高いなどの特徴が基本構造として挙げられている。

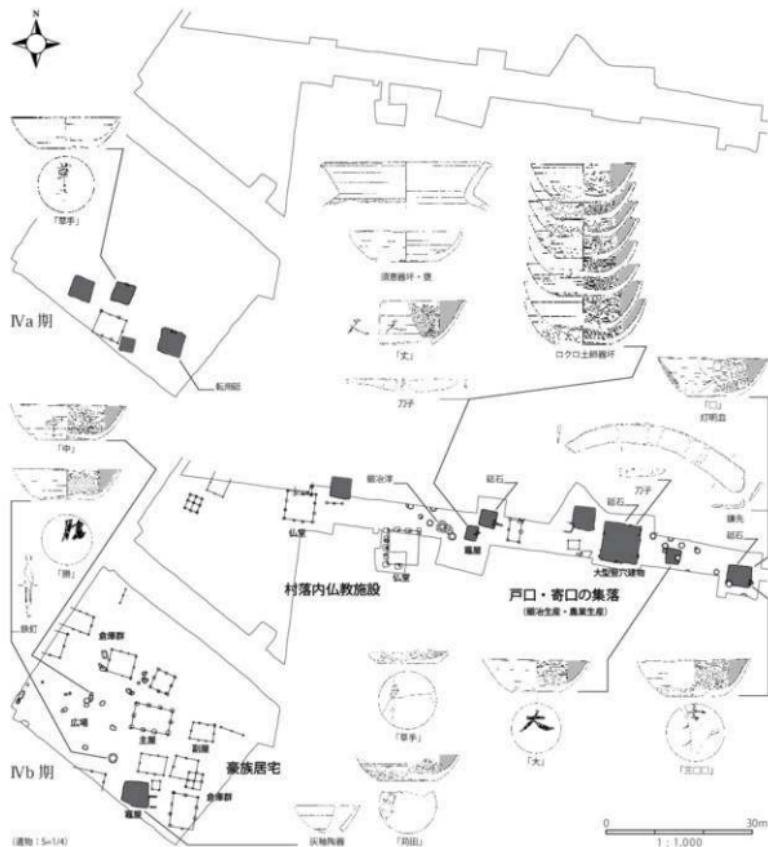
上記の基本構造をIV b期集落の遺構群に当てはめてみると、南側の一角に①掘立柱建物を主体として逆L字形ないしは下向きコ字形に配置された官衙風建物群（第122図4）があり、②建物規模は 2×3 間を基本としている。③IV b期の建物群はIV a期のものを残しながら順次整備されたことが窺える。④瓦葺建物は存在しない。⑤南東側に総柱建物と側柱建物が並び、2種類で構成される倉庫群の一部と考えられる。⑥IV a期よりもやや大型の竪穴建物があり、环類を中心的に保有する。⑦中央付近に主屋と考



第122図 豪族居宅の建物配置（1~3：菅原1998を一部改変）

えられる掘立柱建物があり、柱穴掘方が大型ではあるが建物規模・構造としては周囲と変わらないなど多くの共通点が認められ、豪族居宅としての要件を備えた遺構群であると考えられる（第123図）。

なお、前述の菅原氏の論考（1998）では、⑥居宅内の竪穴建物については、「厨」・「酒杯」の墨書き土器を伴う事例から、居住者の生活や酒宴・儀礼などの場に食膳を提供した竈屋と考えられている。また、⑧居宅内に正方形建物+付属建物のセットを伴う事例については、仏教関連遺物を伴う事例や、房総地方の村落内仏教施設に類似した建物配置が認められることなどから仏教施設と考えられている。IV期の官衙風建物群の中にこうした建物配置は認められないが、北東側の遺構群には2棟の正方形建物がある。調査区の制約から付属建物の有無については確認できず、また仏教関連遺物の出土もないため根拠は薄いが、村落内仏教施設に設けられた仏堂の可能性が考えられる。また、主屋の東隣に建てられた一回り小さい建物は、南辺を揃えることから主屋に伴う副屋と考えられ、主屋の背面から西へ通なる建物群も倉庫群と見ることが出来そうである。主屋の南西側には建物が配置されない空閑地があり、廃棄



第 123 図 IV 期集落の機能推定

土坑から墨書き器を含む食膳具が出土していることから、酒宴や儀礼が行われた可能性が考えられる。居宅内での儀礼行為は、居宅主に集落民を結集させる舞台装置として機能したと推測されている。このように、IV b期の官衙風建物群についても単純な居住施設の範囲を超えた諸機能を持つことが想定されるが、これらの建物群を囲む区画施設は認められず、付近には集落域が展開している。このような敷地全体の区画施設の欠如と集落内立地は、郡衙関連施設との大きな相違点として指摘されている。

ところで、「豪族」は古代史の立場から「①農業を中心とする大規模な經營を②世襲的に営んでいた③有力者たち」(青木 1974)と定義され、考古学的には「①大規模農業經營一背後に大規模な耕地や戸口・寄口となる集落を抱えること、②世襲的権力一居宅は継続使用されるか、世代交代の時点で移転があること、③有力者の存在を示す遺構・遺物一經濟的・社会的・行政的に優位な遺物がみられること」(田中 2003)と説明されている。IV b期集落で見れば、①集落の立地する円田盆地北部では、微高地と複雑に入り組む埋没谷地形が耕地として開発されたと考えられ、居宅の北東側に展開する住居群は居宅の運営を補完した工人や農業従事者の集落と考えられる、②居宅内の施設は順次整備されたが、同位置での建て替えではなく、短期間に廃絶している、③遺構群の特殊性については既述のとおりであるが、遺物について見ると須恵器の保有はあまり多くないが、小片ながら灰釉陶器を保有すること、墨書き器を多数保有し、郡名と見られる「辻田」や輕租の徵収を窺わせる「草手」などの墨書きが見られ、それらは比較的筆使いに慣れた書き手によるものとみられること、集落内で鍛冶生産が行なわれ、居宅主の管理下にあったとみられることなどから、經濟的・社会的・行政的な優位性が認められる一などの点が指摘でき、居宅主は在地社会において優位な立場にあった豪族と見て差し支えないと考えられる。居宅および集落が短期間で廃絶している点については、周辺を含めて後続する9世紀後半代の集落が未確認であることから在地社会に何らかの再編が起こっている可能性があり、今後の調査の進展を待って検討を加える必要がある。

豪族居宅の一部に設置された倉庫群については、郡衙の出先機能（郷倉・借倉など）と見做され、個人に帰属する豪族居宅が律令制における地方末端支配を実態として担ったと考えられている（菅原 2007）。地方豪族が「末端の官人」と「地域支配の要」という二つの側面を持つ存在だったことは、古代の官人と地方豪族について腰帶具の分析や国司・郡司等の館・居宅の分析など多方面から検討した田中広明氏（2003）によっても明らかにされている。前述の東山田遺跡の居宅主を富豪層と考える菅原氏は、彼らが同時に官人としての性格を備え、郡司ないしそれに準ずるクラスであったと推定し、沼平東遺跡（第122図3）など相似形の小規模な居宅主は、郷長・有力百姓クラスに比定している。沼平東遺跡の居宅では、併置された倉庫は少数であり、出土遺物にも特殊品は含まれない。IV b期集落の居宅で見ると、出土品に特殊品は多くなく、居宅の規模も沼平東遺跡などと同程度と見られることから、居宅主は郷長・有力百姓クラスであったと考えられる。

以上のことから、IV期には竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落が形成されており、集落形成期のIV a期から発展期のIV b期への変遷が見られた。IV b期の集落南部には掘立柱建物を主体に配置する官衙風建物群が形成されており、郷長・有力百姓クラスの豪族居宅と考えられる。また、同時に集落北東部に形成される竪穴住居を主体とする遺構群は、居宅の運営を補完した工人や農業従事者である戸口・寄口の集落であったと考えられる。居宅内には倉庫群が配置され、集落の一角には仏堂の可能性が考えられる正方形建物が配置されるなど、各遺構群には多様な機能が窺われることから、律令制下における在地の拠点的集落が形成されていたものと考えられる。

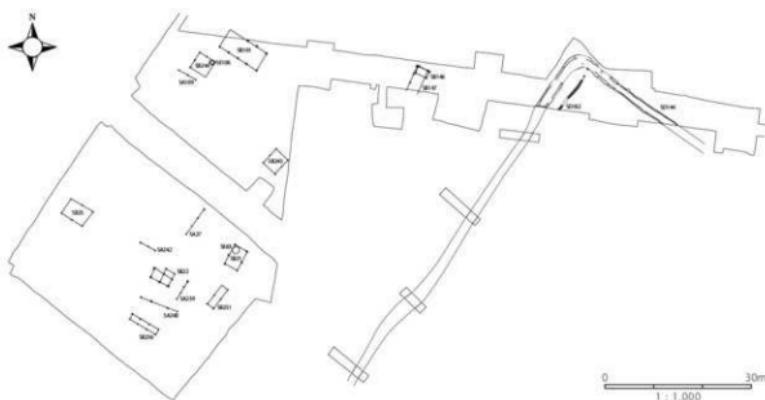
(5) V期（14世紀）

掘立柱建物 10棟、柱列跡 5条、井戸跡 2基、溝跡 2条があり、1区南・北、2区に分布する。中世陶器甕、銅錢（至大通宝）、曲物が出土している。中世陶器甕の口縁部形態は 13世紀後半頃の操業と考えられている白石市一本杉窯跡群（宮城県教育委員会 1996）に類例が見られ、至大通宝は初鋸 1,310年の元錢である。曲物は柄杓（直径 9.8cm）と内面漆塗の容器（直径 27.9cm）がある。美里町一本柳遺跡（宮城県教育委員会 2001）などに類例が見られ、13世紀中葉～14世紀代に位置づけられている。以上のことから、機能時期は 14世紀代と推定される。

建物の主軸方向は N-26°-44°-E で、東偏している。掘立柱建物跡は桁行 1-4 間、総長 2.4-9.0m の規模で、柱穴掘方の平面形は直径 25-30cm 前後の円形を基調とするものが多い。また、これらの建物群の東側に方形の区画を形成するとみられる溝跡（SD144）がある。溝は L 字形に延びる北辺と西辺を確認し、上幅 136-272cm で横断面形が深さ 40-80cm の逆台形を呈する。溝の方位は北辺で E-36° S、西辺で N-35° E で、西側の建物群の主軸方向と共に通する。遺構確認調査の結果を含めれば北辺 23.5m 以上、西辺 78m 以上の区画を形成しているとみられるが、区画内の遺構配置については不明である。

本遺跡に隣接する十郎田遺跡では、主屋とみられる二面・四面廂付建物などを配置する 13世紀後半頃の屋敷が確認されており（蔵王町教育委員会 2011d・e）、溝による東西 125m 程度の方形区画を伴ったと考えられる。また、有力国人層の居館と推定される西小屋館跡に隣接する西屋敷遺跡では、溝による東西約 40m、南北 40m 以上の方形区画内に多数の建物を配置する 13世紀後半～15世紀前半頃の屋敷が確認され、国人領主の家臣クラスの屋敷と考えられる（蔵王町教育委員会 2012）。

V期の遺構群のうち東側の溝区画については区画内の状況が不明ながら、上述の屋敷を区画する溝と規模・形状などが類似しており、同クラスの屋敷を構成している可能性が考えられる。西側の建物群については、配置やその構造から具体的な性格を推定することは難しいが、やや大型で柱筋の通りが良く規格的な配置をとる北西側の SB101・SB244 掘立柱建物跡、SA109 柱列跡については区画を伴わない小規模な屋敷の可能性が考えられ、この他の建物については耕作地に伴う作業小屋などの機能が推定される。区画施設を伴わず、配置される建物も少数で廂付建物を含まない点などから、溝で区画される屋敷の居住者よりも階層は低く、彼らに従属する下級武士あるいは百姓クラスの屋敷と考えられる。



第124図 V期遺構配置図

(6) VI期（18~19世紀）

近世墓 10基、土坑 4基、溝跡 1条があり、1区南、2区に分布する。近世陶器碗・甕、煙管、古銭（寛永通宝）が出土している。近世陶器碗は大堀相馬産（18~19世紀）、甕は村田塙内産（19世紀）で、遺構の時期は18~19世紀と考えられる。また、1区南の溝跡（SD64）と平行・直交する1区北の溝跡4条（SD104・SD105・SD128・SD129）についても同時期に機能した可能性がある。これらに伴う建物は確認されないことから、道の側溝あるいは耕作地の用水路などの性格が考えられる。溝跡の方位は前段階のV期の区画の方位と共通し、SD128・SD129溝跡は調査前まで使用されていた農道（1区南・北間）とほぼ重なることから、V期に形成された地割が基本的に現在まで引き継がれていたと考えられる。また、近世墓・土坑墓群は2区中央部の一角に集中し、耕作地が広がる微高地上の一角に墓域が設けられていたと考えられる。

2. 各時期の様相と遺跡の性格

I期（縄文～弥生時代）には、落とし穴状土坑群が形成され、狩猟場として利用されている。同様の落とし穴状土坑群は近隣の六角遺跡、原遺跡、戸ノ内遺跡などでも確認されていることから、円田盆地北縁部の低丘陵が広く落とし穴猟を行なう狩猟場として利用されていたことが窺える。盆地西方の丘陵上に営まれる集落との関連性を想定すれば、機能時期の一つとして縄文時代中～後期が考えられる。

その後、遺構は確認されていないが、弥生時代中期（円田式期）、古墳時代中期（南小泉式期）とみられる遺物がごく少数出土しており、付近で何らかの人間活動が断続的に行われた可能性がある。

II期（8世紀中頃～後半）には、竪穴住居4軒、竪穴状遺構1基、粘土探掘坑1基などで構成される集落が営まれた。竪穴住居にはやや大型のものがあり、保有する土器群は在地色が希薄で関東系土師器が主体的である。また、粘土探掘坑は土器製作との関連が窺われ、竪穴状遺構からは鉄滓が出土している。このことから、関東系移民を主要な構成員とする集落が営まれ、土器製作や小鍛冶などの生産活動が行なわれていた可能性が考えられる。

III期（8世紀末～9世紀初頭）には、竪穴住居2軒、掘立柱建物4棟、土坑1基などで構成される集落が営まれたと考えられるが、保有する土器群や集落の様相は不明な点が多い。

IV期（9世紀前葉～中葉）になると、初めに竪穴住居4軒、掘立柱建物1棟などで構成される集落が営まれ、続いて掘立柱建物19棟と竪穴住居8軒など多数の施設からなる集落へと発展する。発展期の集落では、南西の一角に郷長・有力百姓クラスの豪族居宅と考えられる官衛風建物群が、居宅とやや距離を置いた北東側には竪穴住居群が形成されている。竪穴住居群とその周辺では鉄滓や鉄製品、磁石が出土し、集落の居住者は居宅の運営を補完した工人や農業従事者であったと考えられる。居宅の内部には主屋、倉庫群とみられる建物のほか、庵屋と考えられる竪穴建物が広場を囲むように配置され、集落の一角には仏堂の可能性がある正方形建物などが建てられるなど、各遺構群には多様な機能が窺えることから、律令制下における在地の拠点的集落としての性格が考えられる。

また、IV期の土器群には墨書き器 28点がある。比較的筆使いに慣れた筆致のものが多く、居宅主や集落の性格の一端を示している。判読できた墨書き文字には「苅田」、「草手」、「勝」、「大」、「丈」などがあるが、このうち「苅田」については郡名の可能性が高く、平安時代に円田盆地周辺が刈田郡に属していたことを示す有力な証拠と考えられる。文献に示された苅田・柴田郡の郡界が明らかになっていない古代の円田盆地においては、貴重な発見と言える。また、「草手」については、居宅主が農民から草刈場の用益料として徴収した軽租、あるいは居宅内で消費する草木の調達にかかる労務に応じて支給された対価を指した可能性が考えられ、当時の集落内における豪族と農民の関係を示す資料と考えられる。

V期（14世紀）には、溝による区画を伴う有力者の屋敷が形成され、西隣にはこの屋敷の居住者に

従属する下級武士あるいは百姓クラスの小規模な屋敷が営まれた。

VI期（18-19世紀）には、溝で区画された耕作地が営まれ、微高地の一角には墓域が設けられた。道の側溝あるいは耕作地の用水路は前段階のV期の地割を踏襲し、近世を経て現在まで引き継がれた。

本遺跡における人間活動の様相は、以上に述べたような変遷が考えられた。なお、本遺跡では、今回の調査区の北西側の沢地で槍先形尖頭器が採集され、後期旧石器時代終末～縄文時代草創期初頭に属する可能性が指摘されているが（藏王町史編纂委員会 1987）、今回の調査では当該期の遺物は確認されなかった。本遺跡の一带は縄文時代には狩猟場として利用され、集落形成の端緒は8世紀中頃に求められた。関東系移民の集落であり、周辺遺跡の状況も含めて円田盆地北部の歴史的動向を反映していると考えられる。また、本遺跡における集落変遷の中で特筆されるのは、9世紀前葉～中葉に出現する豪族居宅を含む集落である。平安時代の律令型在地拠点集落の典型例とも言えるものであり、当時の在地社会における集落景観や律令支配の実態を考える上で重要な成果と考えられる。また、中世には屋敷地として利用され、周辺遺跡を含めて盆地北部の広範囲に屋敷群が営まれたことが明らかになった。

第3節 災害痕跡の評価

今回の調査では、調査区内の32か所で堆積層の土坑状の変形が確認された（写真13・14、第126図）。後世の削平により残存状況に差があるが、平面形は長楕円形を呈し、大きいもので長軸5-6mである。重複関係では調査区内で確認したとの遺構よりも古く、奈良・平安時代の集落や、弥生時代以前とみられる2区SK222落とし穴状土坑が掘られる以前に形成されている。平面的な検出状況は長軸付近に黄褐色ローム～白色粘土があり、これを挟む両側周縁部に半月～三日月形に暗褐色土が観察される。

このような土坑状変形は、これまでにも遺跡の発掘調査においてしばしば確認されており、樹木の転倒に伴って樹木根系に保持された地表付近の堆積物が回転力を伴ってすべり、その後埋没した風倒木痕と解釈してきた。しかしながら、土坑状変形が狭い範囲に密集して確認される場合でも、すべり方向が想定される卓越風向と調和的でなく、土塊の軟X線写真的観察では樹木根系の痕跡が認められず、草本ないしは小低木の根痕が見られるといった事例が報告されている。このため、従来「風倒木痕」と解釈してきた事例の一部は、地表付近の堆積層中にパッチ状に分布する含水比の異なる堆積物などが、地震動による水平せん断応力の影響で転倒した地震痕跡の可能性がある（松田・井上 2005）。

本遺跡周辺の地形環境を地震地形との関係で見ると、調査地点の西側を円田盆地西縁に沿って村田断層が南北に延びている（第125図）。村田断層は近年の調査で新たに認定された断層で、藏王町小村崎から白石市を経て福島市西部に至る福島盆地西縁断層帯（延長約57km）の北端部に位置する（今泉ほか 2000）。また本断層との連続性は不明だが、北東側には利府町から仙台市を経て村田町に至る



写真13 土坑状変形の分布状況とすべり方向

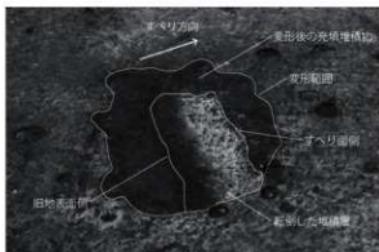
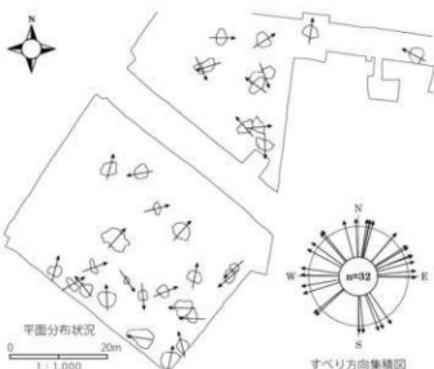


写真14 土坑状変形の確認状況



第125図 村田断層と前戸内遺跡の位置



第126図 土坑状変形の分布とすべり方向

長町一利府線断層帯（延長約40km）が連なる。いずれも断層の北西側が相対的に隆起する逆断層で、それぞれの断層帯が一つの活動区間として活動した場合、長町一利府線断層帯はマグニチュード7.0-7.5程度、福島盆地西縁断層帯はマグニチュード7.8程度の地震を起こす可能性があるとされている（地震調査研究推進本部地震調査委員会2002・2005）。村田断層はこうした大規模な断層帯の一部であることから、活動時には非常に強い地震動が発生し、地表付近へも甚大な影響を与えたことが推定される。

本遺跡の土坑状変形について平面的な検出状況からすべり方向を推定すると、明瞭な卓越方向がなく、複数時期の累積を考慮したとしても同一地点における風化痕跡としては異常である（写真13、第126図）。転倒している土塊中に明瞭な樹木根系の痕跡は認められない。また、調査区内の基本層序を見ると白色粘土層の下位には液状化しやすい砂礫層が堆積し、その上面は起伏があり部分的に白色粘土層の下面に食い込むような堆積状況が認められた。このことから、地震動の影響によって液状化した砂礫層上面をすべり面として、地表付近の堆積物が転倒した地震痕跡の可能性が考えられる。この土坑状変形の形成時期については、黒色火山灰起源の旧表土を含む堆積層が転倒し、生じた空隙に同様の黒色土が充填されていること（写真14）、弥生時代以前とみられる遺構に先行することからおおむね10,000-1,700yrBPの間と考えられる。周辺で大きな地震を引き起こす要因の一つとなりうる前述の村田断層を含む福島盆地西縁断層帯の活動時期は最新が約2,200-1,800yrBP、一つ前が10,000yrBP前後と考えられており（地震調査研究推進本部地震調査委員会2005）、このいずれかの活動と関係している可能性が想定できる。

今回確認した土坑状変形について、地震痕跡としての可能性やその形成時期をより厳密に検討するには、土坑状変形内の堆積物および底面の観察・記録・分析用試料採取、周辺における噴砂・地割れ痕跡などの確認が必要であった。しかし調査時点では調査者にそうした認識が欠如し、遺構群形成以前の自然現象と判断されたことから掘り下げを行なわなかった。これまで各地の遺跡でも地震に伴う断層、地すべり、噴砂、津波堆積物のほか、火山噴出物や洪水堆積物など様々な災害痕跡が認識されてきたが、これらをもとに地域の災害履歴を解明して将来の防災に役立てる取り組みは希薄と言わざるを得ないのが現状だった。東日本大震災の発生後、広範囲に堆積層の掘り下げを行なう遺跡の発掘調査で面的に確認される災害痕跡の分析が地域の災害履歴を解明する有力な手段として再認識され、考古学と地震学・自然地理学などの研究者による学際的研究が本格化している。今後、遺跡の発掘調査においては、通常の遺構調査に加えて災害痕跡の認識・公表が必要であるとともに、そうした自然史的イベントと人間活動との関わりを具体的に解明していくことも重要な課題として位置づけておく必要がある。

第7章 総括

1. 前戸内遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字小村崎字前戸内地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の円田盆地北西部に形成された標高約100mの低平な舌状丘陵上に立地している。
2. 今回の発掘調査は県営ほ場整備事業を原因とする事前調査として実施した。調査区は遺跡範囲の南東部を東西方向に横断する水路・沈砂池の予定地であり、発掘調査面積は3557.2m²である。
3. 確認した遺構は竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡35棟、柱列跡11条、井戸跡8基、近世墓10基、落とし穴状土坑10基、土坑85基、溝跡10条、竪穴状遺構1基、粘土探査坑2基、廃棄土坑1基、性格不明遺構1基、柱穴多数である。
4. 出土した遺物は、土師器（国分寺下層式・関東系）、ロクロ土師器（表杉ノ入式）、須恵器（8・9世紀、転用底）、灰釉陶器、中世陶器（13世紀後半）、近世陶磁器（18・19世紀）、弥生土器（円田式）、石器（石錐、スクレイバー、二次加工剥片）、石製品（砥石）、銅銭（至大通宝、寛永通宝）、金属製品（鉄釘、鉄製鍼先、鉄製刀子）、鉄滓、木製品（曲物柄杓・容器）である。このうち、主体を占めるのは竪穴住居跡や土坑から出土した奈良時代の土師器・須恵器と、平安時代のロクロ土師器・須恵器である。
5. 発掘調査結果を検討した結果、下記のことが明らかとなった。
 - ・縄文時代とみられる落とし穴状土坑10基が確認され、低湿地の水場に面した微高地が縄文時代の落とし穴獵の狩猟場として利用されていたことが判明した。
 - ・奈良時代中頃の竪穴住居跡4軒、粘土探査坑1基などが確認され、集落が営まれていたことが判明した。出土土器には関東系土師器が主体的に含まれており、関東系移民の存在が窺われる。
 - ・平安時代初頭の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟などが確認され、小規模な集落が営まれていたことが判明した。
 - ・平安時代前葉の竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡21棟などが確認され、まとまった集落が営まれていたことが判明した。集落内には主屋、倉庫などと考えられる掘立柱建物が逆L字形に配置される一角があり、有力者の居宅と考えられる。墨書き土器28点が確認され、「苅田」、「草手」などの文字が判読された。
 - ・中世前半の掘立柱建物跡10棟、溝跡2条などが確認され、屋敷が営まれていたことが判明した。
 - ・近世後半の近世墓10基、溝跡1条などが確認され、耕作地が営まれる微高地の一角に墓域が設けられていたことが判明した。
6. 奈良時代の関東系土師器を伴う集落は、当時の律令政府による対蝦夷政策の一端を反映したものと考えられる。円田盆地北部における伝統的内地社会の変化を知る上で重要な成果である。
7. 平安時代の有力者居宅を含む集落は、当時の律令型在地拠点集落の典型例と考えられる。陸奥国南部地域の在地社会における集落景観や律令支配の実態を考える上できわめて重要な成果である。
8. 今回の発掘調査成果は、円田盆地周辺に居住した当時の人びとの具体的な暮らししぶりを知る上で貴重な手掛かりとなるものである。

引用・参考文献

- 会津坂下町教育委員会 2000『会津坂下町内発掘調査報告書（荻ノ窪跡）』会津坂下町文化財調査報告書 51
- 会津若松市教育委員会 1993『会津大戸窯（上雨屋窯跡）』会津若松市文化財調査報告書 32
- 青木和夫 1974『古代豪族』日本の歴史 5 小学館
- 赤羽一郎・中野晴久 1995『中世常滑焼の生産地編年』『常滑焼と中世社会』永原慶二編 小学館
- 板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫 1981『仙台およびその周辺に分布する愛島軽石層』東北地理 37 東北地理学会
- 伊東信雄 1955『各地域の弥生式土器—東北—』『日本考古学講座4』河出書房
- 今泉俊文・松多信尚・渡辺満久・澤洋・中田高・宇根寛・丹波俊二 2000 1:25.000 都市圈活断層図「白石」国土 地理院技術資料 D.1-No.375
- いわき市教育委員会 2003『梅ノ作瓦窯跡群』いわき市埋蔵文化財調査報告書 98
- 氏家和典 1957『東北土師器の型式分類とその編年』歴史 14 東北大大学史学会
- 氏家和典 1967『陸奥国分寺跡出土の丸底环をめぐって』『山形県の考古と歴史 柏倉亮吉教授還暦記念論文集』山教史学会
- 大阪府近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし』大阪府近つ飛鳥博物館図録 40
- 小山正忠・竹原秀男 2005『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財团法人日本色彩研究所 色票監修 富士平工業
- 加藤道男 1989『宮城県における土師器研究の現状』『考古学論叢II』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会 東出版事業社
- 河南町教育委員会 1993『須江窯跡群 代官山遺跡 - 奈良。平安時代の須恵器生産遺跡 - 』河南町文化財調査報告書 6
- 河南町教育委員会 2004『闇ノ入遺跡』河南町文化財調査報告書 13
- 斎野裕彦 1994『出土遺物の検討と遺構群の変遷』『南小泉遺跡 第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財 調査報告書 192 仙台市教育委員会
- 藏王町史編纂委員会 1987『藏王町史 資料編I』
- 藏王町史編纂委員会 1989『藏王町史 資料編II』
- 藏王町史編纂委員会 1993『藏王町史 民俗生活編』
- 藏王町史編纂委員会 1994『藏王町史 通史編』
- 藏王町教育委員会 1990『堀ノ内遺跡』藏王町文化財調査報告書
- 藏王町教育委員会 1997『堀の内遺跡』藏王町文化財調査報告書 1
- 藏王町教育委員会 2002『諏訪館前遺跡』藏王町文化財調査報告書 2
- 藏王町教育委員会 2005『都遺跡ほか（都遺跡・窪田遺跡・新城館跡）』藏王町文化財調査報告書 3
- 藏王町教育委員会 2006『車地藏遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』藏王町文化財調査報告書 4
- 藏王町教育委員会 2007『中沢A遺跡』藏王町文化財調査報告書 5
- 藏王町教育委員会 2008『六角遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査一』藏王 町文化財調査報告書 6
- 藏王町教育委員会 2009a『戸ノ内遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査一』藏 王町文化財調査報告書 8
- 藏王町教育委員会 2009b『青竹遺跡』藏王町文化財調査報告書 9
- 藏王町教育委員会 2009c「藏王町前戸内遺跡—県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の概要ー』平成 21 年度宮城県 遺跡調査成果発表会 発表要旨
- 藏王町教育委員会 2011a『西浦 B 遺跡—商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査ー』藏王町文化財調査報告書 10
- 藏王町教育委員会 2011b『窪田遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査ー』藏 王町文化財調査報告書 11
- 藏王町教育委員会 2011c『小原遺跡—特別義謹老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査ー』藏王町文化財調査報告書 12
- 藏王町教育委員会 2011d『十郎田遺跡 I - 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査ー』藏 王町文化財調査報告書 13
- 藏王町教育委員会 2011e『十郎田遺跡 2 - 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 - SE66 井戸跡出土木製遺物編 附十郎田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』藏王町文化財調査報告書 14
- 藏王町教育委員会 2012『西屋敷遺跡 - 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 - 』

- 藏王町文化財調査報告書 15
 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 2005 「福島盆地西縁断層帯の長期評価について」http://www.jishin.go.jp/main/chousha/05apr_fukushima/
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 2002 「長町一利府線断層帯の評価」http://www.jishin.go.jp/main/chousha/02feb_rifu/
- 菅原祥夫 1998 「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群」福島県郡山市正直C遺跡・東山田遺跡の分析事例を中心として」『古代の糧倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 菅原祥夫 2007 「東北の豪族居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 菅原祥夫 2008 「東北の豪族居宅（補遺）」「南蔵王山麓の郷土誌」中橋省吾先生追悼論集刊行会
- 仙台市教育委員会 1987 「五本松窓跡・都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書 99
- 仙台市教育委員会 1994 「南小泉遺跡 第22次・23次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書 192
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1991 「山王遺跡 - 第10次発掘調査報告書 - 」多賀城市文化財調査報告書 27
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 2003 「市川橋遺跡 - 城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II - 」
- 田中広明 2003 「地方の豪族と地方の官人 - 考古学が解く古代社会の権力構造 - 」KASHIWA 学術ライブラリー 01 柏書房
- 田中広明 2008 「豪族のくらし」すいれん舎
- 辻秀人編 2007 「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」「東北・北海道における6~8世紀の土器変遷と地域の相互関係」平成15~18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 東京大学史料編纂所 2011a 「平安遺文フルテキストデータベース」<http://www.ap.h.t.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>
- 東京大学史料編纂所 2011b 「鎌倉遺文フルテキストデータベース」<http://www.ap.h.t.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>
- 東北古代土器研究会 2005a 「東北古代土器集成-古墳後期-奈良・集落編-<福島>」研究報告 1
- 東北古代土器研究会 2005b 「東北古代土器集成-古墳後期-奈良・集落編-<宮城>」研究報告 2
- 東北古代土器研究会 2008a 「東北古代土器集成-須恵器・黒跡編-<陸奥>」研究報告 3
- 東北古代土器研究会 2008b 「東北古代土器集成-須恵器・黒跡編-<出羽>」研究報告 4
- 福島県教育委員会・福島県文化財センター 1981 「国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告書VII（沼田平東遺跡）」福島県文化財調査報告書 96
- 福島県教育委員会・福島県文化財センター 2000 「常磐自動車道遺跡調査報告 21 鍛冶屋遺跡（第1次）」福島県文化財調査報告書 365
- 福島県立博物館 1993 「企画展 東北からの弥生文化」
- 藤沢敦 2000 「阿武隈川下流域の前方後円墳（その1）」宮城考古学 2 宮城県考古学会
- 古田和誠 2011 「総括」「観音堂山遺跡」宮城県文化財調査報告書 227 宮城県教育委員会
- 松田順一郎・井上智博 2005 「風倒木痕とは似て非なる古地震痕跡・大阪府譲良郡条里遺跡の例」日本文化財学会第22回大会ポスターセッション資料
- 宮城県教育委員会 1980a 「東北新幹線関係遺跡調査報告書2（台ノ山遺跡）」宮城県文化財調査報告書 62
- 宮城県教育委員会 1980b 「東北自動車道遺跡調査報告書II（赤鬼上遺跡）」宮城県文化財調査報告書 63
- 宮城県教育委員会 1980c 「東北自動車道遺跡調査報告書IV（青木遺跡・伊原沢下遺跡・大橋遺跡・持長地遺跡）」宮城県文化財調査報告書 80
- 宮城県教育委員会 1981 「東北自動車道遺跡調査報告書V（東山遺跡）」宮城県文化財調査報告書 81
- 宮城県教育委員会 1982 「東北自動車道遺跡調査報告書VI（御駒堂遺跡）」宮城県文化財調査報告書 83
- 宮城県教育委員会 1984 「東北自動車道遺跡調査報告書IX（二屋敷遺跡）」宮城県文化財調査報告書 99
- 宮城県教育委員会 1987 「硯沢・大沢窓跡ほか・仙台-松島道路建設関係遺跡調査報告書」宮城県文化財調査報告書 116
- 宮城県教育委員会 1989 「亘理町三十三間堂遺跡ほか（戸ノ内牆遺跡・台遺跡）」宮城県文化財調査報告書 131
- 宮城県教育委員会 1990 「継光寺跡ほか（白山遺跡ほか）」宮城県文化財調査報告書 135
- 宮城県教育委員会 1991 「合戦原遺跡ほか（中組遺跡ほか）」宮城県文化財調査報告書 140
- 宮城県教育委員会 1996 「一本杉窓跡群」宮城県文化財調査報告書 172
- 宮城県教育委員会 2001 「一本柳遺跡II」宮城県文化財調査報告書 185

- 宮城県教育委員会 2002『名生館遺跡ほか（窪田遺跡・都遺跡・新城館跡）』宮城県文化財調査報告書 188
宮城県教育委員会 2003『壇の越遺跡ほか（壇の越遺跡・十郎田遺跡ほか）』宮城県文化財調査報告書 195
宮城県教育委員会 2005『角山遺跡・三陸縦貫自動車道建設関係遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書 200
宮城県教育委員会 2010『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 222
宮城県教育委員会 2011『観音堂山遺跡』宮城県文化財調査報告書 227
宮城県教育委員会・利府町教育委員会 1990『利府町郷聚遺跡II』宮城県文化財調査報告書 134／利府町文化財
調査報告書 5
宮崎肇 2003「草手」『日本莊園史大辞典』瀬野精一郎編 吉川弘文館
村田晃一 1994「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－」『第3回東日本埋蔵文化財研究会 古代官衙の終
末をめぐる諸問題 第1分冊 問題提起・各地方の概要』東日本埋蔵文化財研究会
村田晃一 2007「宮城県中部から南部」「東北・北海道における6-8世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・
北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人編
柳澤和明 1994「東北の施釉陶器—陸奥を中心に—」『古代の土器研究・律令的土器様式の西・東 3 施釉陶器』
「古代の土器研究会 第3回シンポジウム』古代の土器研究会

写真図版



1. 伊丹盆地北部 航空写真（2002年撮影）



2. 伊丹盆地北部 航空写真（1956年米軍撮影）



3. 前戸内遺跡 近景（南東から）



4. 前戸内遺跡 近景（東から）

写真図版 2



1. 1区南 遺構確認状況（南から）



2. 1区南 調査風景（南東から）



1. 1区南 遺構確認状況 (南西から)



2. 1区南 S815・229・235・238 挖立柱建物跡 確認状況 (南から)

写真図版 4



1. 1区南 SB30・229・230・235 挖立柱建物跡、SA240 柱列跡 確認状況（東から）



2. 1区南 SB24・28・230・236・237 挖立柱建物跡 確認状況（東から）



1. 1区南 S89・10・17・18・22・26 挖立柱建物跡、SA27・241・242 柱列跡 確認状況（南から）



2. 1区南 S80・21・231・234 挖立柱建物跡、SA232・233 柱列跡 確認状況（西から）

写真図版 6



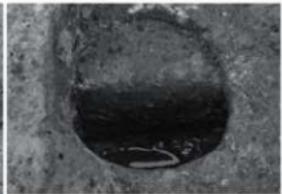
1. SII 窒穴住居跡 カマド（南から）

2. SII 窒穴住居跡 カマド（南から）

3. SII 窒穴住居跡 遺物出土状況（南から）



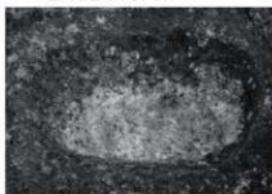
4. SII 窒穴住居跡（南から）



5. SII 窒穴住居跡 P2 断面（東から）



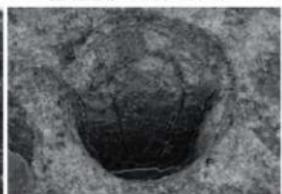
6. SII 窒穴住居跡 P3 断面（西から）



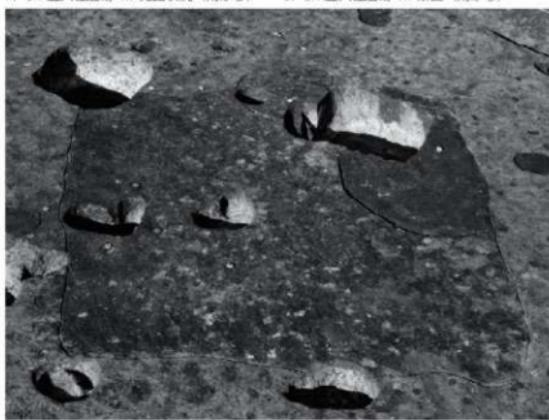
7. SII 窒穴住居跡 K1 完掘状況（南から）



8. SII 窒穴住居跡 K1 断面（南から）



9. SII 窒穴住居跡 P5 断面（東から）



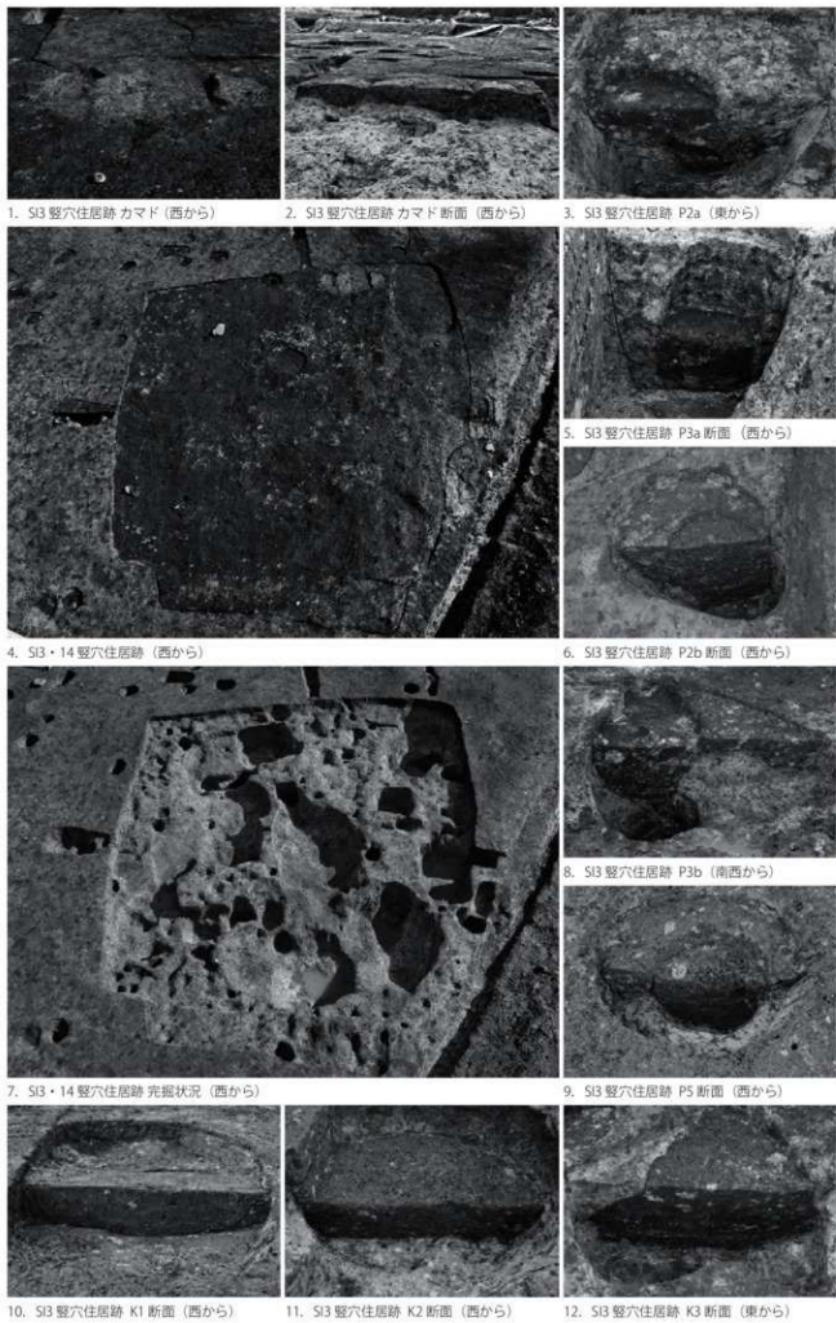
10. SII 窒穴住居跡（南から）



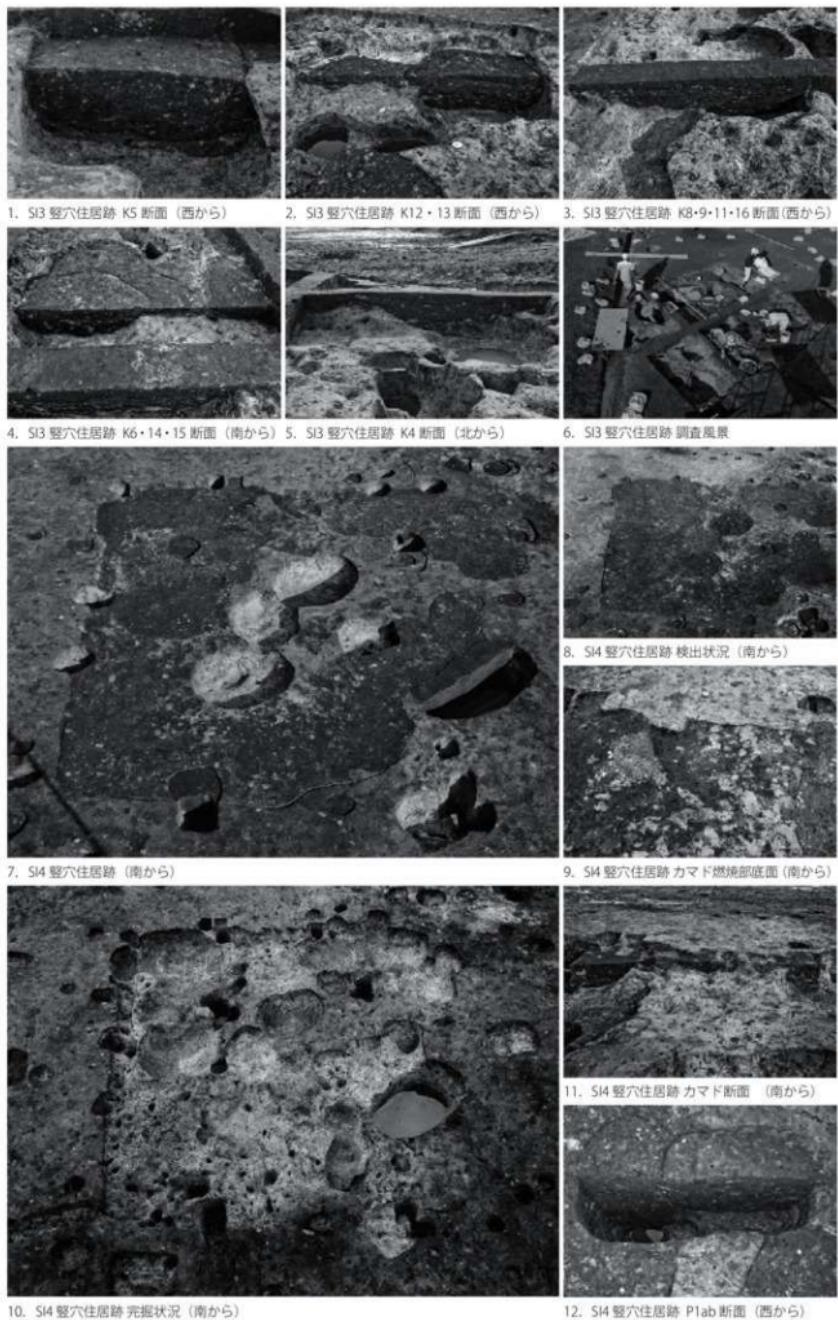
11. SII 窒穴住居跡 K1 完掘状況（南から）

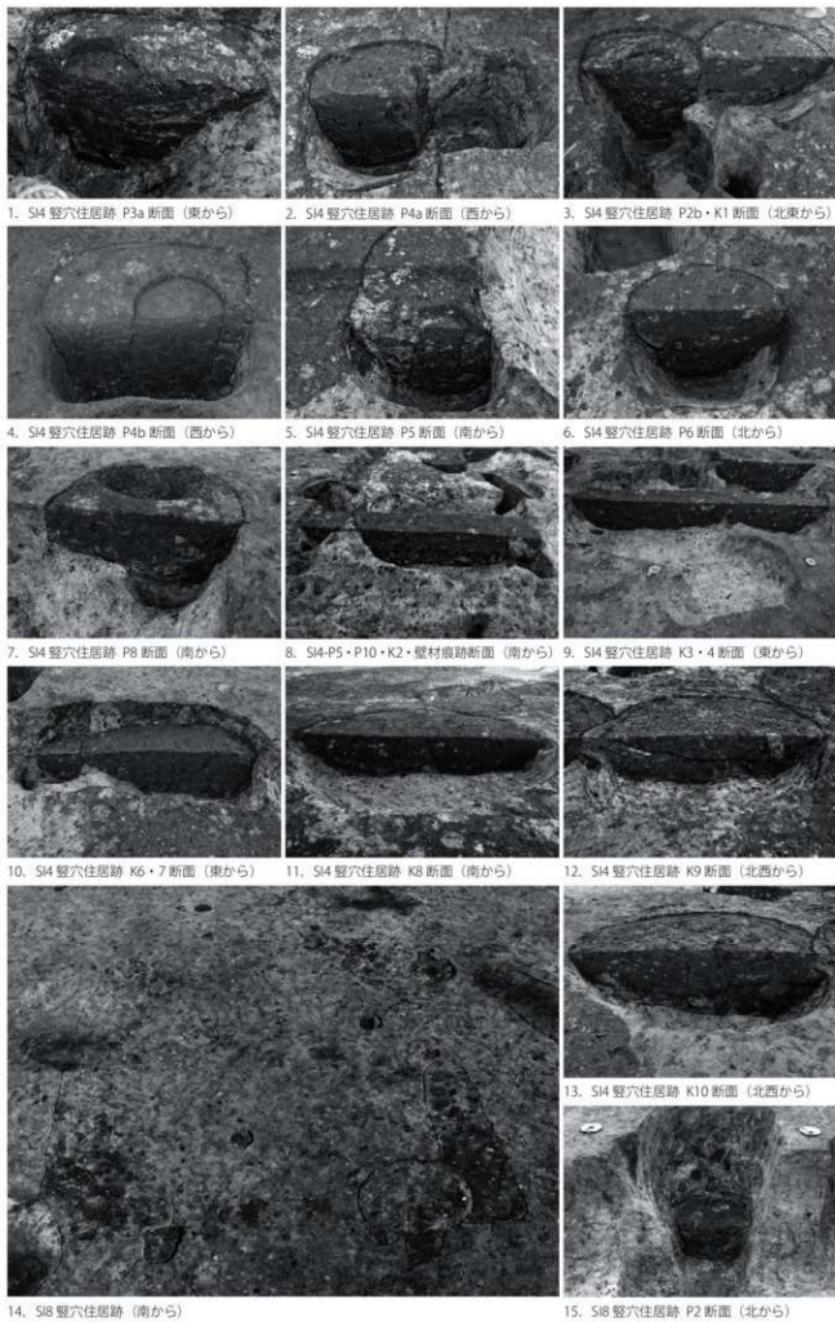


12. SII 窒穴住居跡 K1 断面（南から）



写真図版 8





写真図版 10



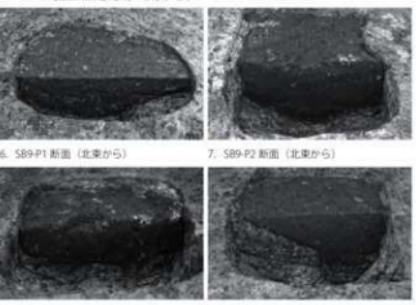
1. SB9 挖立柱建物跡（南から）

2. SB10 挖立柱建物跡（東から）



3. SB15 挖立柱建物跡（南から）

4. SB17 挖立柱建物跡（南から）



5. SB18 挖立柱建物跡（東から）

6. SB9-P1 断面（北東から）

7. SB9-P2 断面（北東から）

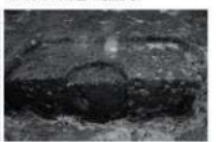
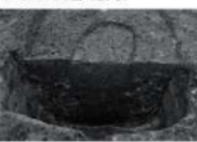
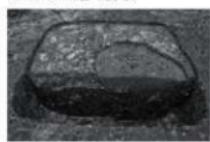


10. SB10-P1 断面（南から）

11. SB10-P3 断面（南から）

12. SB10-P5 断面（南から）

13. SB10-P6 断面（南西から）

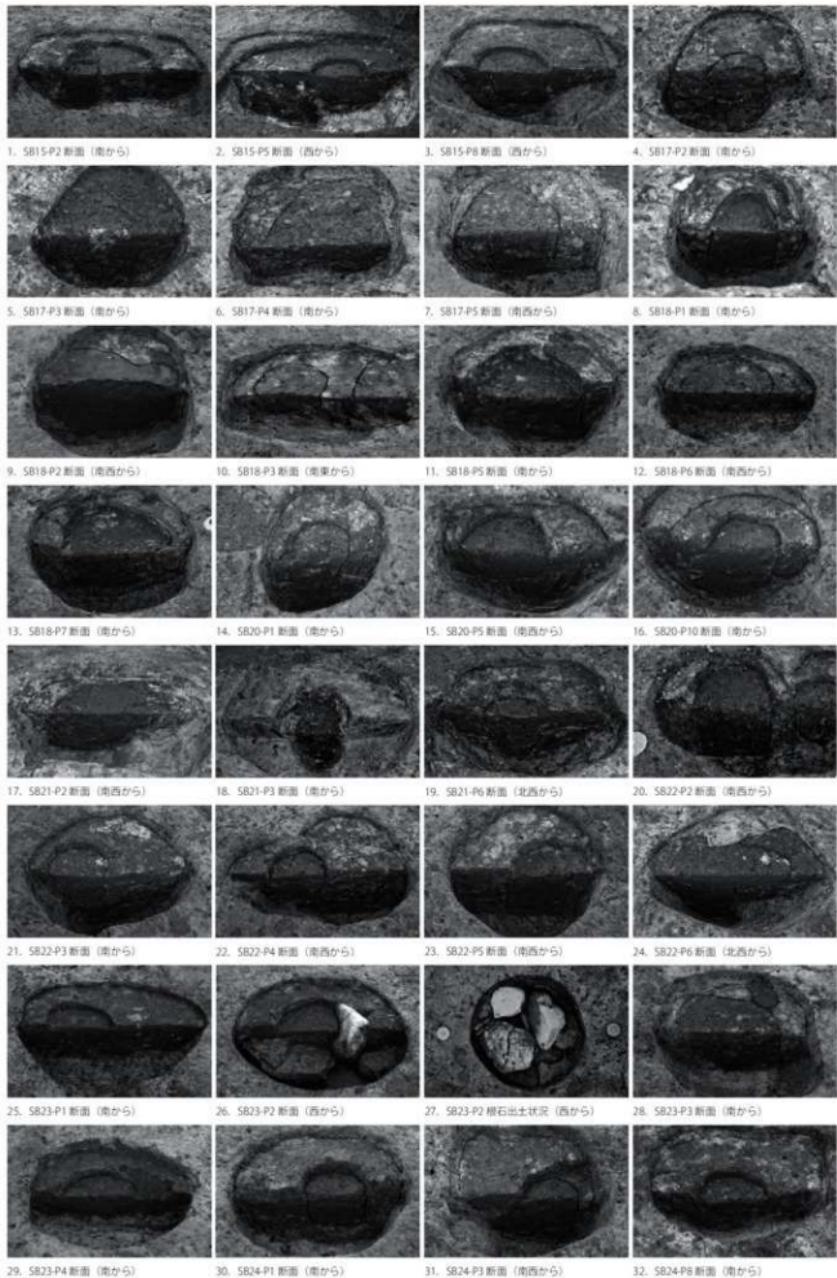


14. SB10-P7 断面（南から）

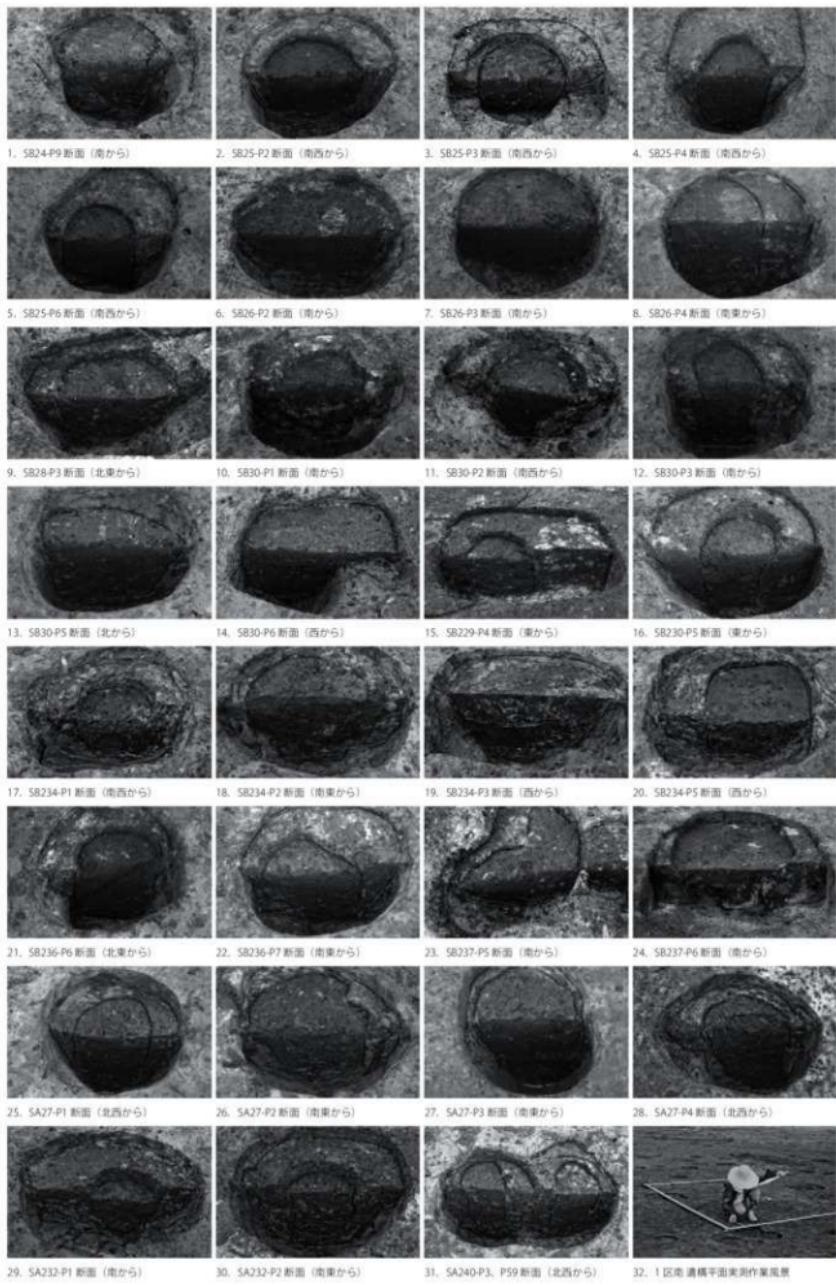
15. SB10-P8 断面（南から）

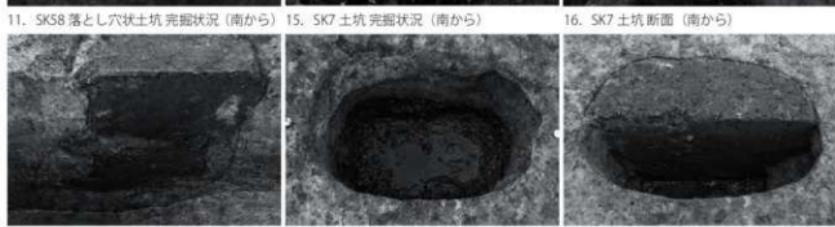
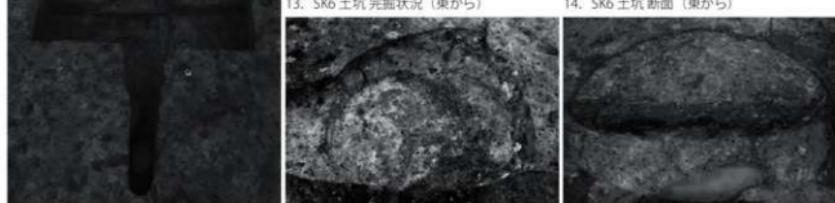
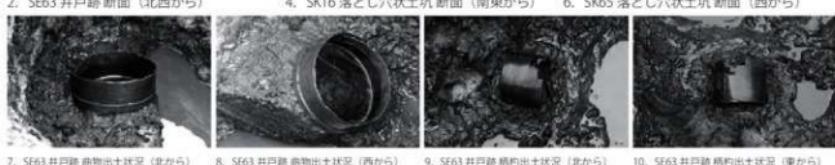
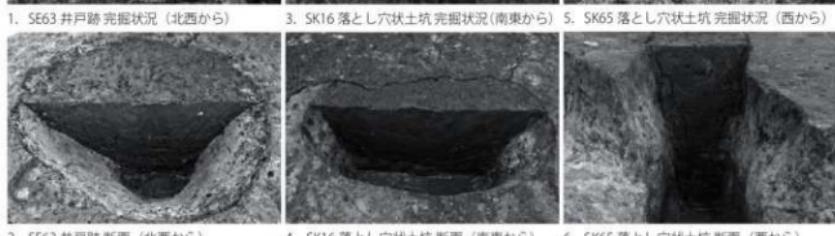
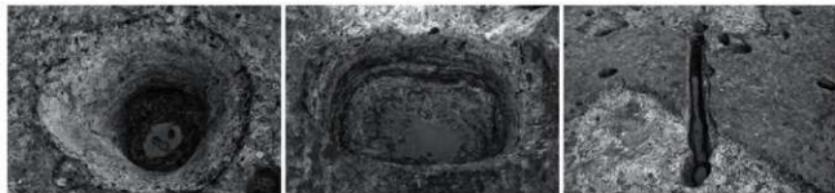
16. SB10-P10 断面（南から）

17. SB15-P1 断面（北から）

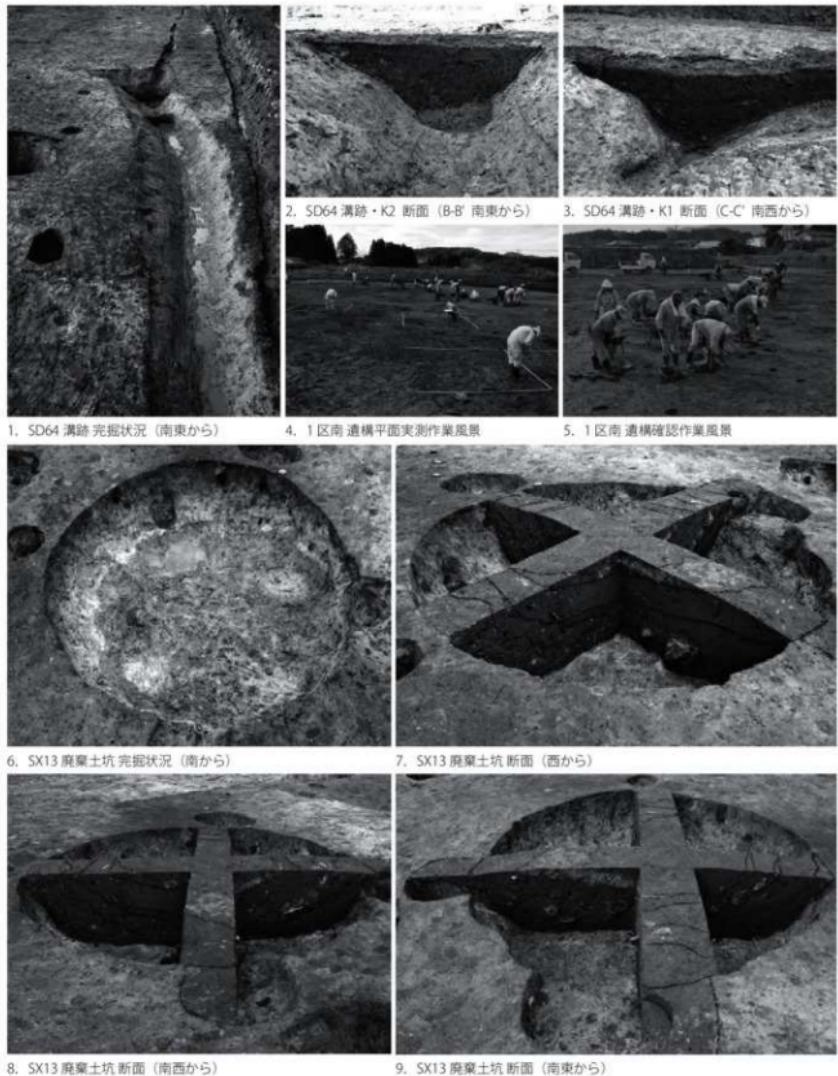


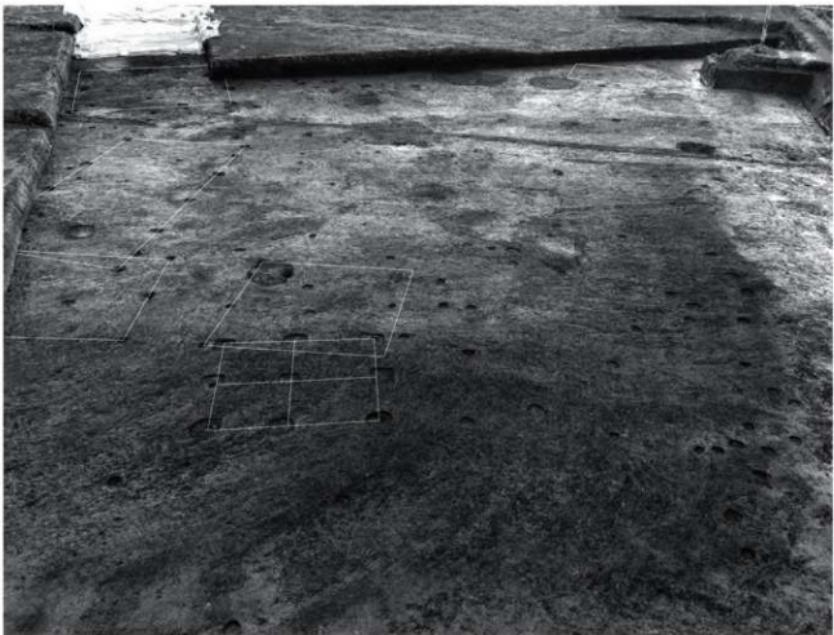
写真図版 12





写真図版 14





1. 1区北 道構確認状況。SB101・102・103・243・244・245 据立柱建物跡（西から）



2. 1区北 道構確認状況、SB103・245 据立柱建物跡（北東から）

写真図版 16



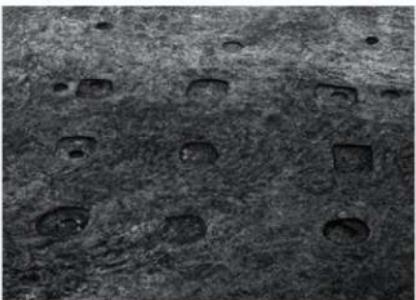
1. SB101 挖立柱建物跡（北西から）



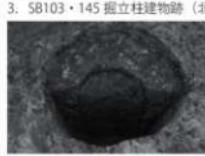
2. SB102 + 244 挖立柱建物跡（北西から）



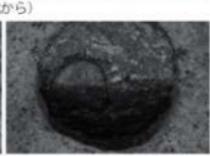
3. SB103 + 145 挖立柱建物跡（北から）



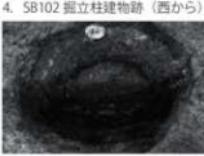
4. SB102 挖立柱建物跡（西から）



5. SB101-P1 新面（南から）



6. SB101-P2 新面（南東から）



7. SB101-P3 新面（南西から）



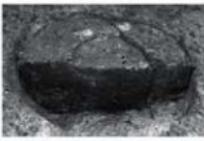
8. SB101-P4 新面（北東から）



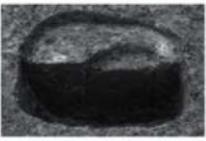
9. SB101-P5 新面（北東から）



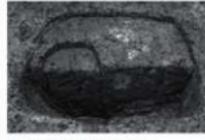
10. SB101-P8 新面（北東から）



11. SB102-P1 新面（北東から）



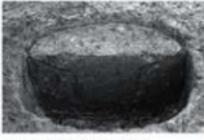
12. SB102-P2 新面（北東から）



13. SB102-P3 新面（北東から）



14. SB102-P6 新面（北東から）



15. SB102-P9 新面（北東から）



16. SB103-P1 新面（南から）



17. SB103-P2 新面（西から）



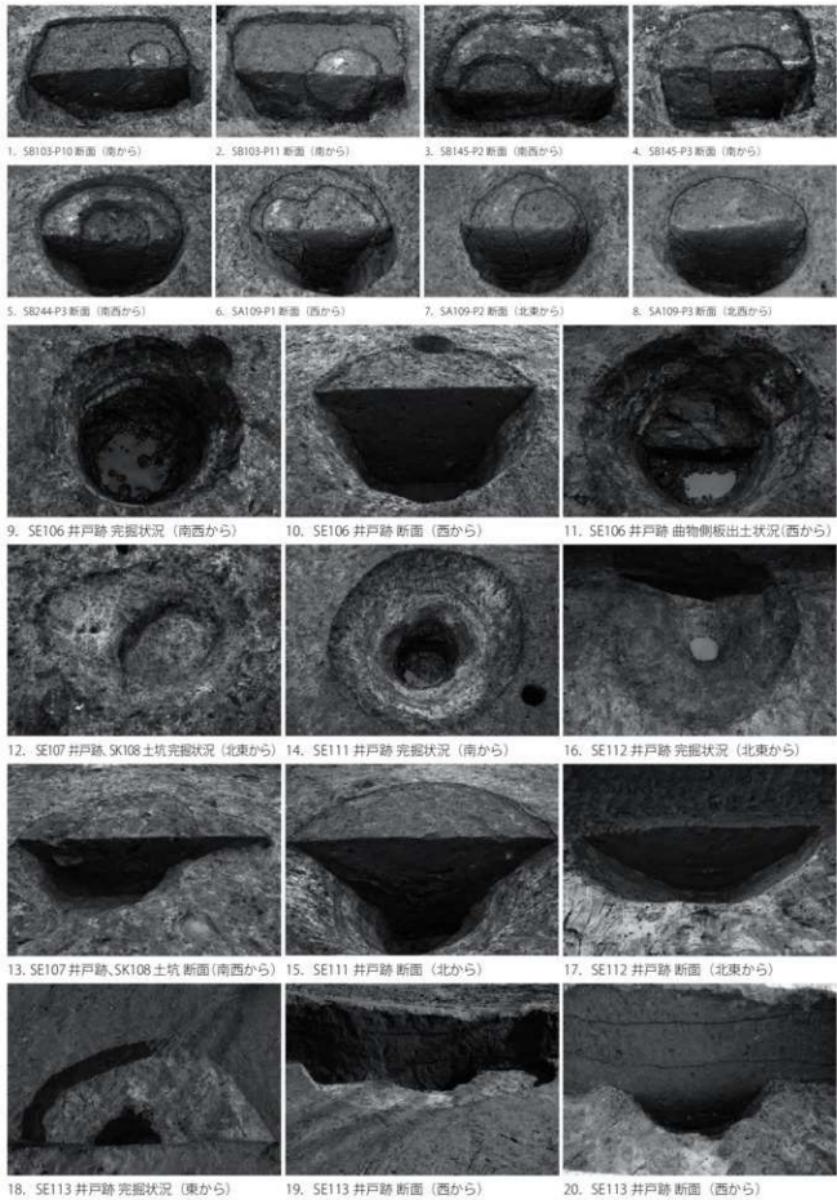
18. SB103-P4 新面（南から）



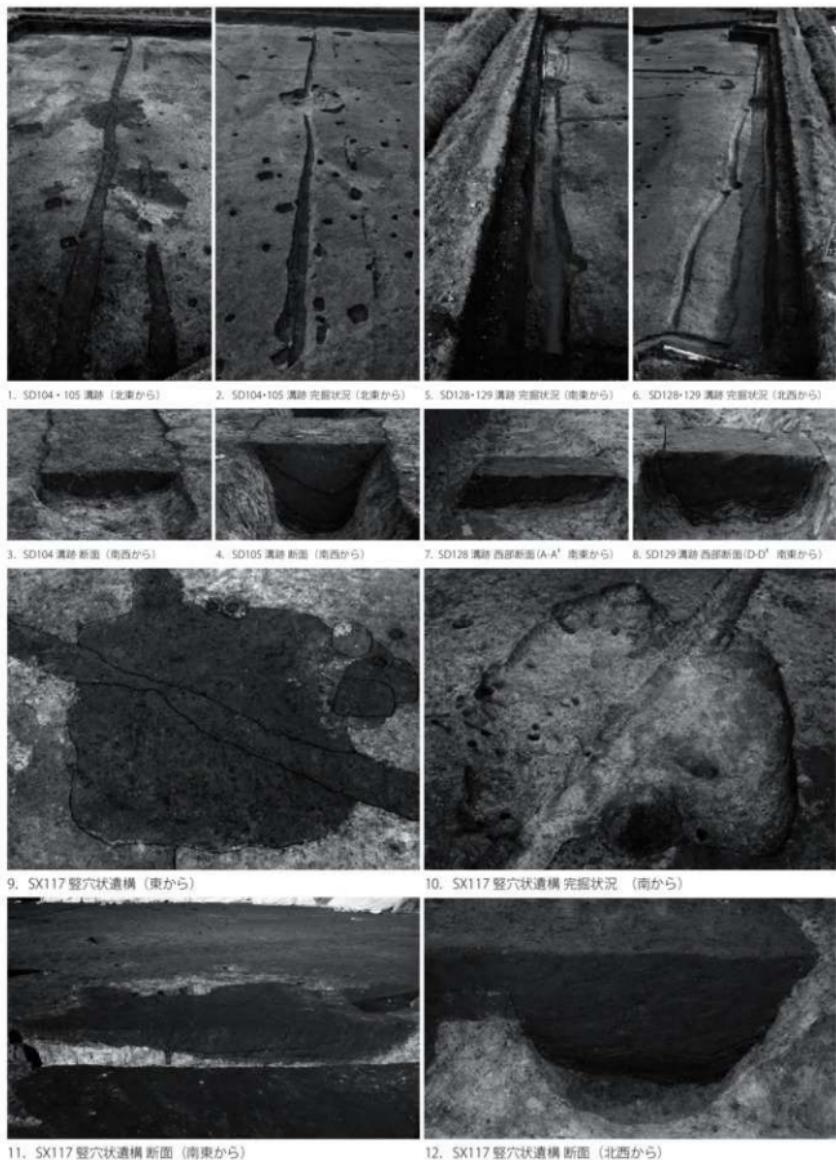
19. SB103-P5 新面（南から）



20. SB103-P6 新面（南から）



写真図版 18





1. SX114 粘土採掘坑 完掘状況（北西から）



2. SX114 粘土採掘坑 完掘状況（東から）



3. SX114 粘土採掘坑 断面（B-B' 南西から）



4. SX114 粘土採掘坑 断面（南から）



5. SX114 粘土採掘坑 断面（A-A' 北西から）



6. SX114 粘土採掘坑 断面（A-A' 北西から）



7. SX114 粘土採掘坑 調査風景



8. SX114 粘土採掘坑 焼土ブロック出土状況（北西から）



1. 2区 遺構確認状況（西から）



2. 2区 遺構確認状況（西から）



3. 2区 遺構確認状況（東から）



4. 2区 遺構確認状況（東から）



1. SI125 穹穴住居跡 完掘状況 (南から)



2. SI125 穹穴住居跡 断面 (南から)



3. SI125 穹穴住居跡 K1 完掘状況 (南から)



4. SI125 穹穴住居跡 K1 断面 (南西から)



5. SI139 穹穴住居跡 K1 完掘状況 (西から)



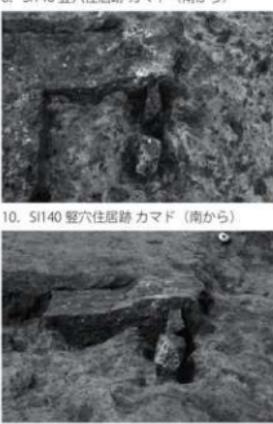
6. SI139 穹穴住居跡 完掘状況 (西から)



7. SI139 穹穴住居跡 K1 断面 (西から)

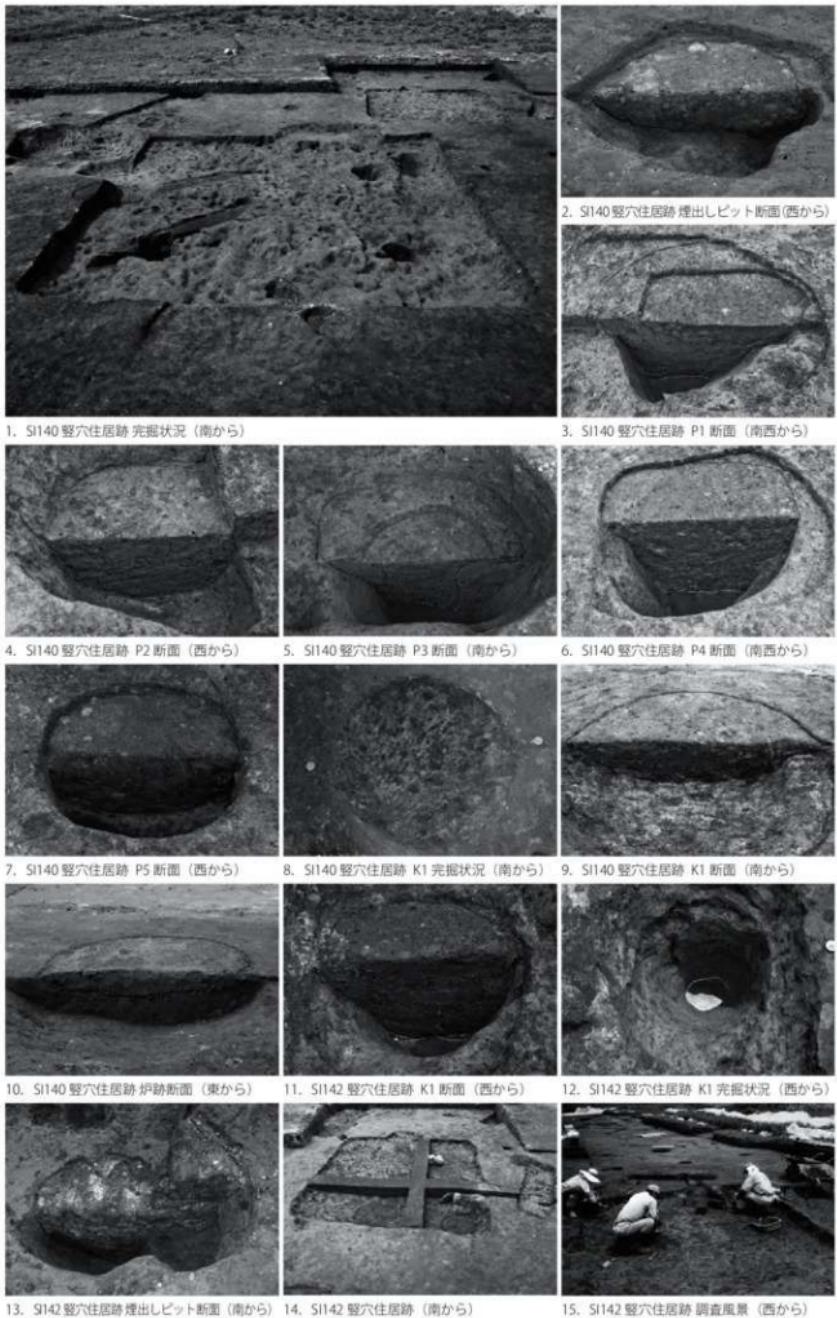


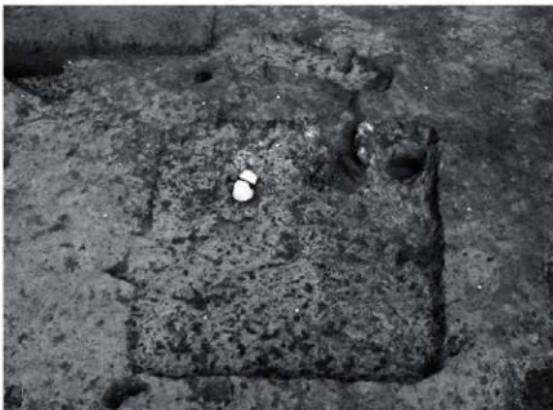
8. SI140 穹穴住居跡 カマド (南から)



9. SI140 穹穴住居跡 カマド断面 (南から)

写真図版 22





1. SI142 穹穴住居跡 (西から)



2. SI142 穹穴住居跡 カマド (西から)



3. SI142 穹穴住居跡 カマド (西から)



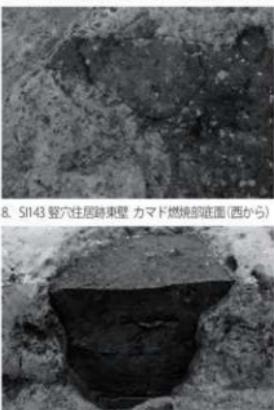
5. SI143 穹穴住居跡 (南から)



4. SI142 穹穴住居跡 断面 (西から)



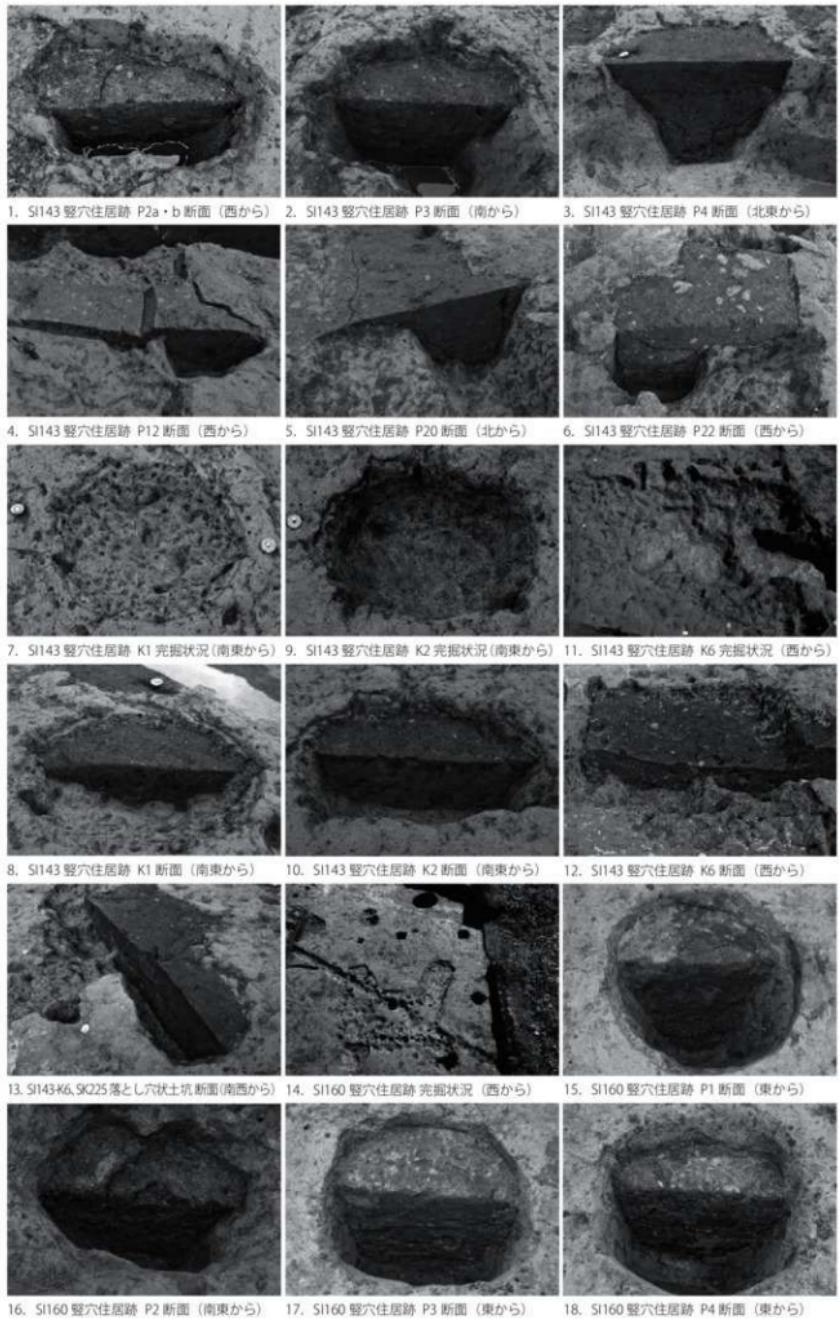
7. SI143 穹穴住居跡 完掘状況 (南から)

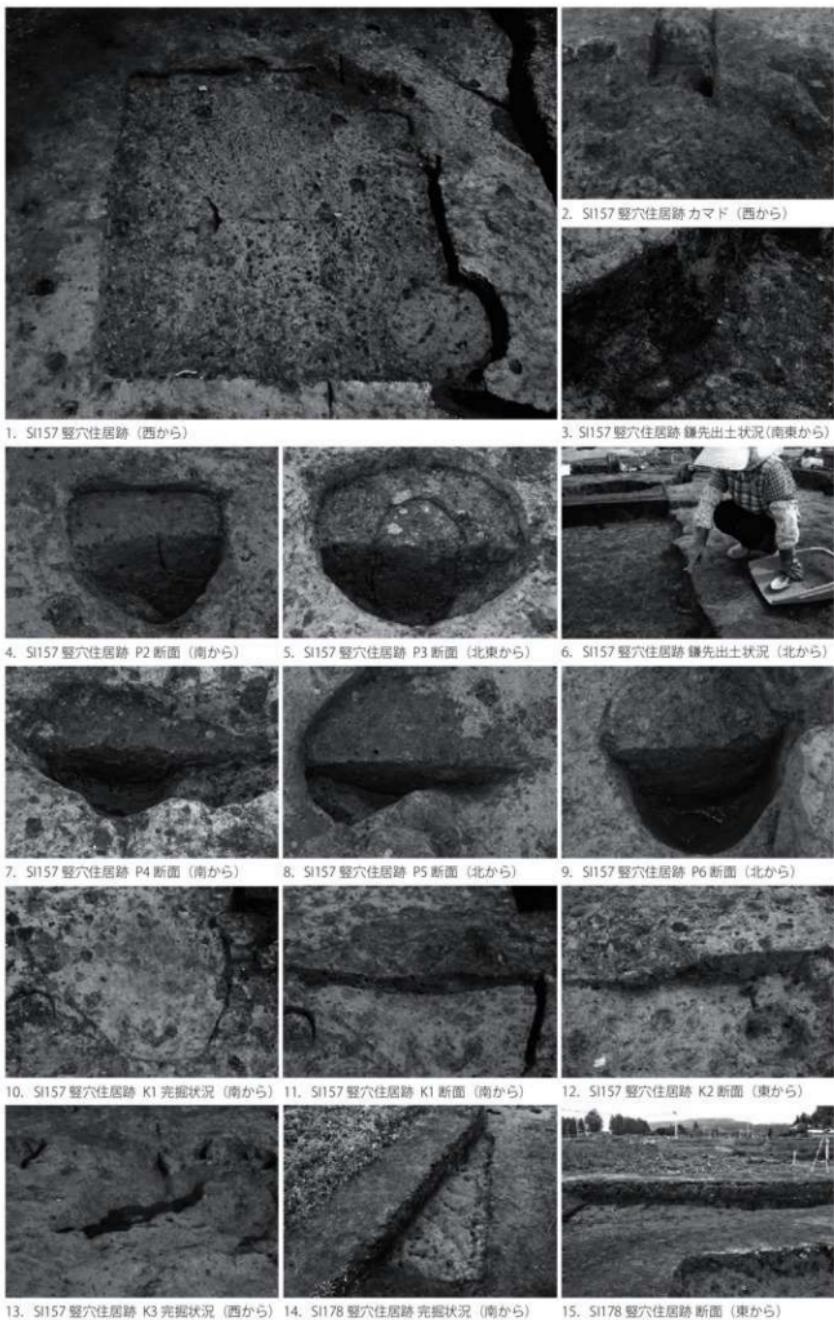


8. SI143 穹穴住居跡 東型 カマド燃焼部底面 (西から)

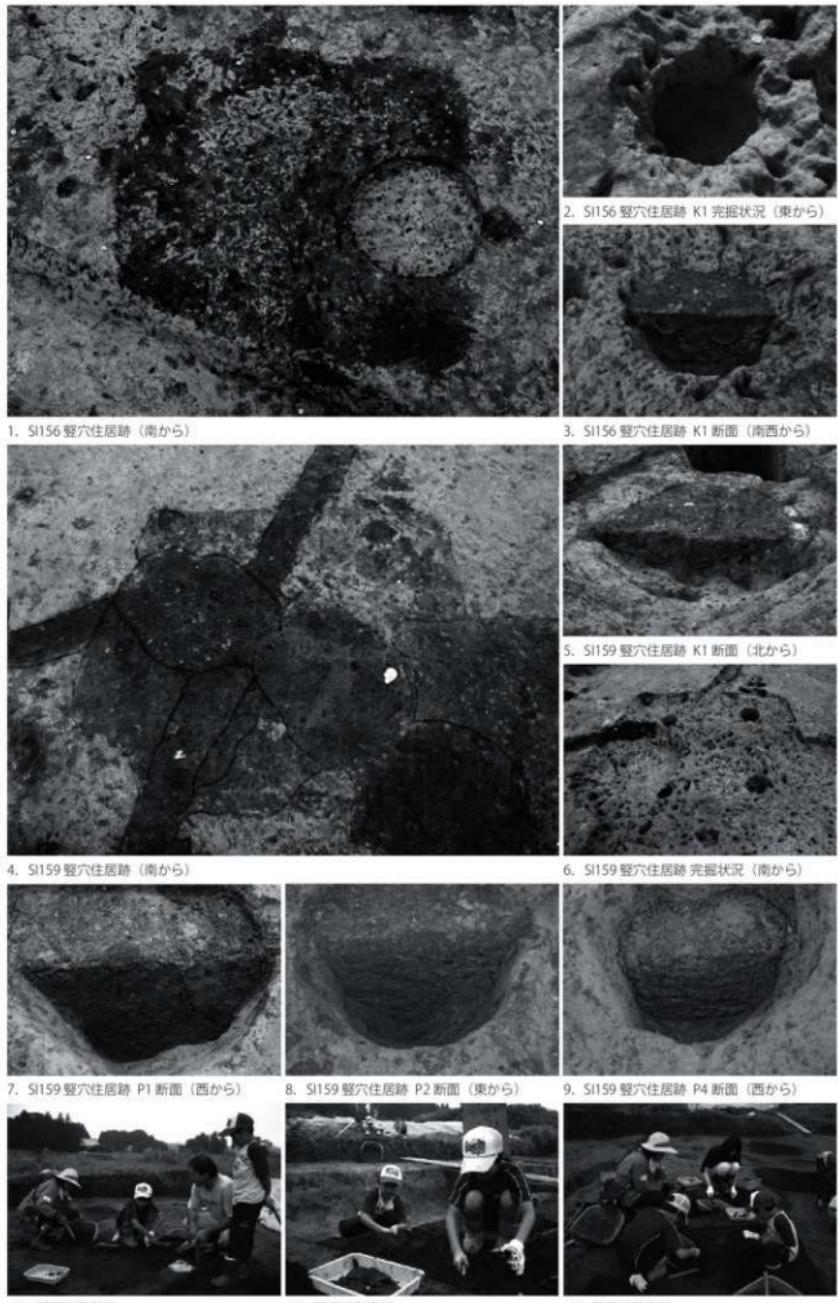
9. SI143 穹穴住居跡 P1 断面 (南西から)

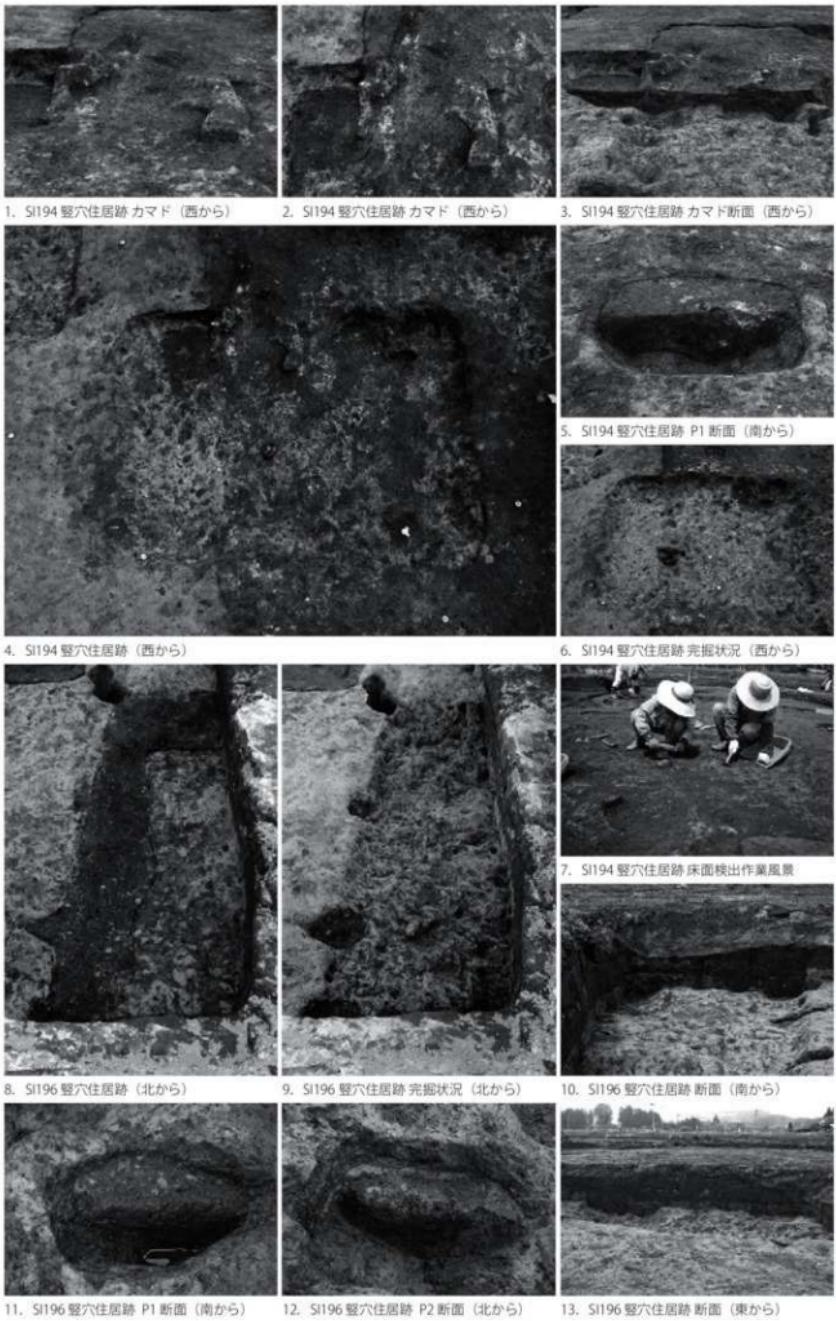
写真図版 24





写真図版 26





写真図版 28



1. SB127 挖立柱建物跡（北から）



2. SB127 挖立柱建物跡（東から） 3. SB127 挖立柱建物跡（西から）



4. SB127 挖立柱建物跡（北から）



5. SB127 挖立柱建物跡（南から）



6. SB199 挖立柱建物跡 完掘状況（南から）



7. SA118 柱列跡（東から）



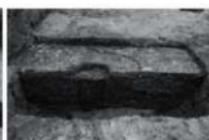
8. SB127-P1 断面（北から）



9. SB127-P2 断面（北から）



10. SB127-P3 断面（北から）



11. SB127-P4 断面（東から）



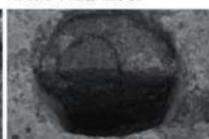
12. SB146-P1 断面（北東から）



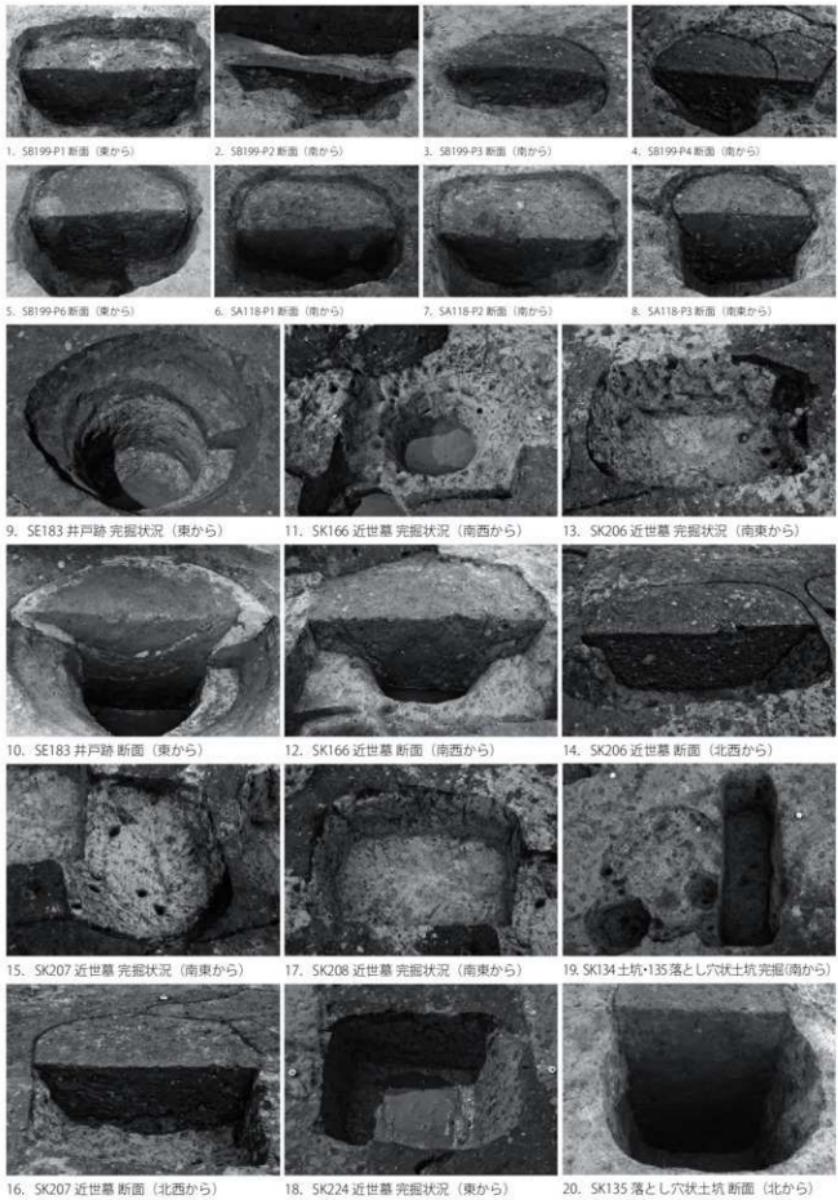
13. SB146-P2 断面（南東から）



14. SB147-P1 断面（南西から）

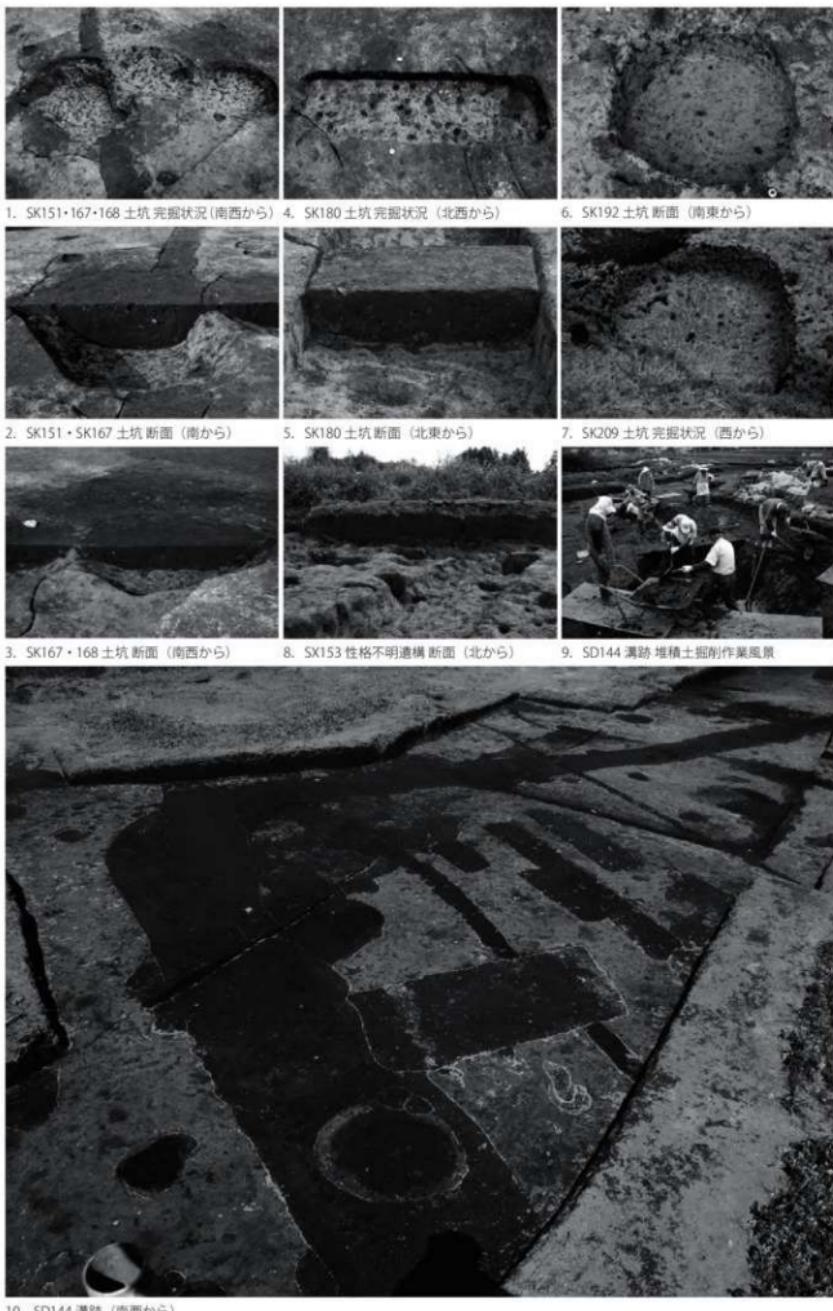


15. SB147-P4 断面（南から）



写真図版 30





写真図版 32



1. SI139 竪穴住居跡、SD144 溝跡（西から）



2. 2区 遺構完掘状況（東から）



3. SD144 溝跡 完掘状況（西から）



4. SD144 溝跡 北辺断面（A-A' 南東から）



5. SD144 溝跡 北辺断面（B-B' 南東から）



6. SD144 溝跡 西辺断面（C-C' 北東から）



7. SD144 溝跡 西辺断面（D-D' 北東から）



1. 3区 遺構確認状況（南西から）



2. 3区 遺構確認状況（北西から）



3. SE112 井戸跡 完掘状況（南東から）



4. SE112 井戸跡 断面（南東から）



5. SK123・124 土坑 断面（東から）



6. 発掘調査成果見学会



7. 発掘調査成果見学会



8. 発掘調査成果見学会



9. 発掘調査成果見学会

写真図版 34



1. T2 区 遺構確認状況（東から）



2. T2 区 遺構確認状況（西から）



3. T3 区 遺構確認状況（南東から）



4. T4 区 遺構確認状況、T4-6 区 トレンチ掘削状況（南から）



5. T5 区 遺構確認状況（南東から）



6. T6 区 遺構確認状況（東から）



7. 遺物洗浄作業風景



8. 土器接合作業風景



9. 土器修復作業風景



10. 土器拓本作業風景

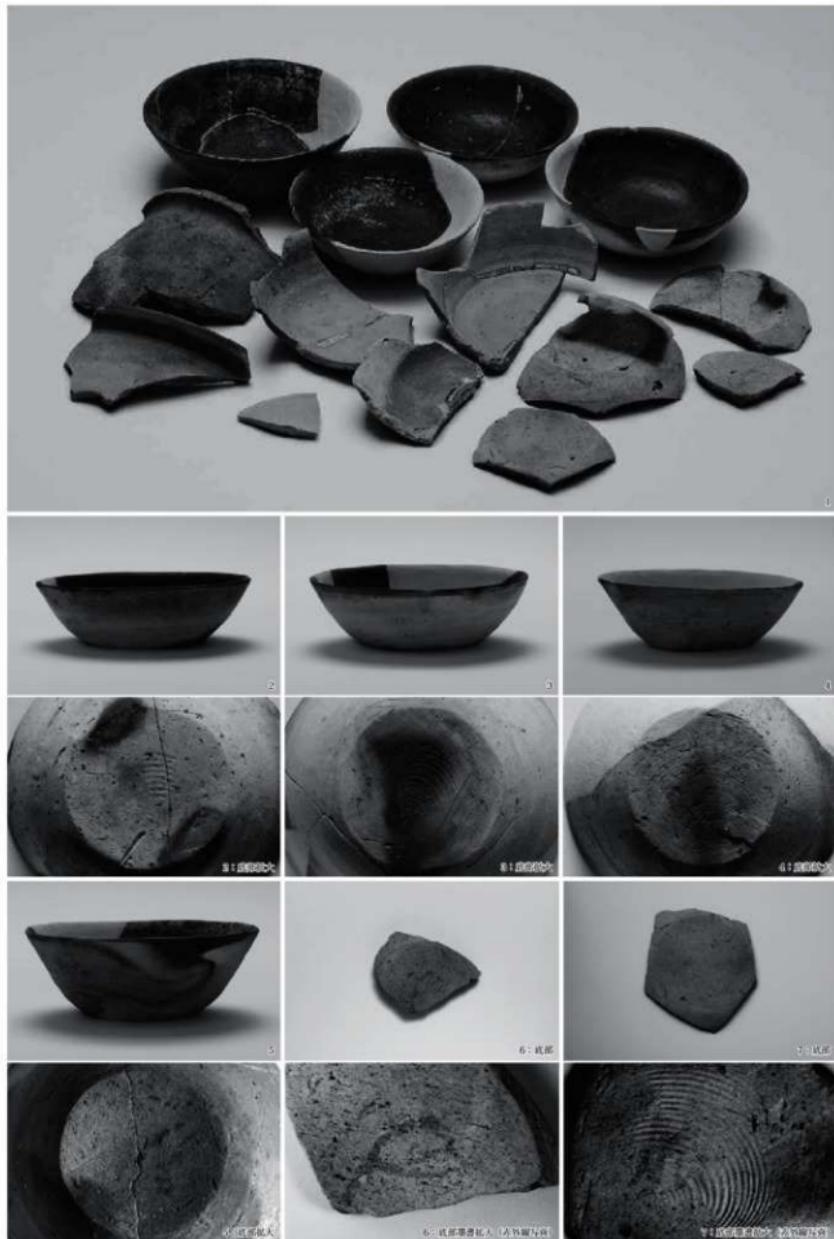


11. 土器実測作業風景



S11 穹穴住居跡出土遺物
(第 10 回)

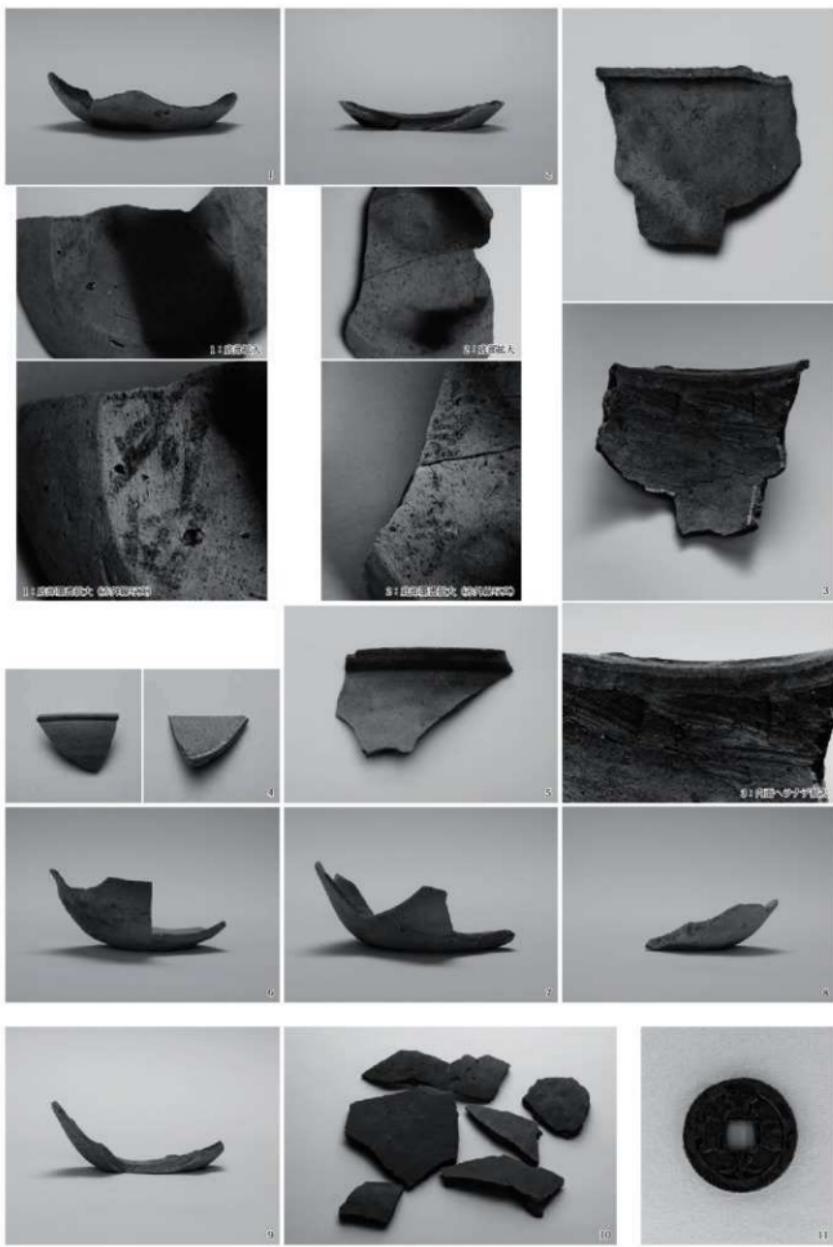
(S 与 1/3)



S13 穹穴住居跡出土遺物（1）

（第 16 回）

（2～7：S 与 1/3 1：任意）



SI3 穹穴住居跡（2）、SK7 土坑、SD64 溝跡出土遺物
（1～8：SI3・第16・17回。9：SK7・第43回。10：SK7。11：SD64・第47回）

（1～10：S号 1/3 11：S号 1/1）



(5 件 1/3)

S14 竪穴住居跡、SB10・SB15・SB20 据立柱建物跡、SK6 土坑出土遺物
(1-5: SB4・第21回、6: SB20・第25回、7: SB15・第25回、8・9: SB10・第25回7、10-13: SK6・第42回)



SE63 井戸跡出土遺物 (1)
(第 39 回)

(S 与 1/3)



SE63 井戸跡出土遺物（2）

(黒 39 回)

(5 今 1/3)

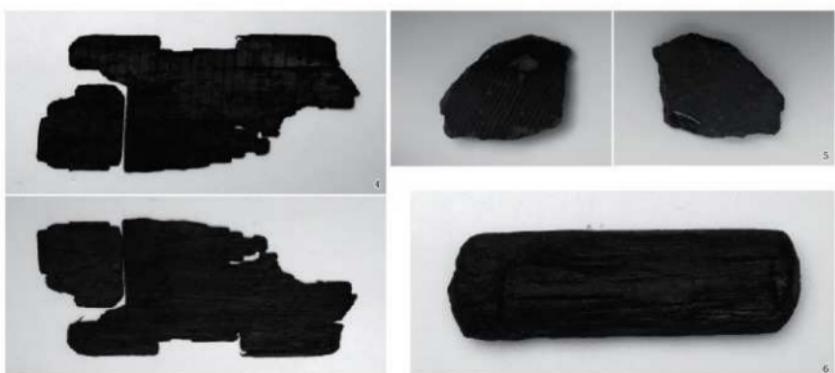


SX13 廃棄土坑出土遺物 (1)
(第 40 回)

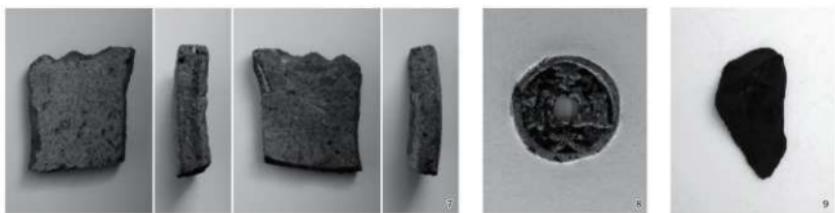
(2~8: 5 与 1/3 1: 任意)



1
2
3
4
5
6
7
8
9



4
5
6
7



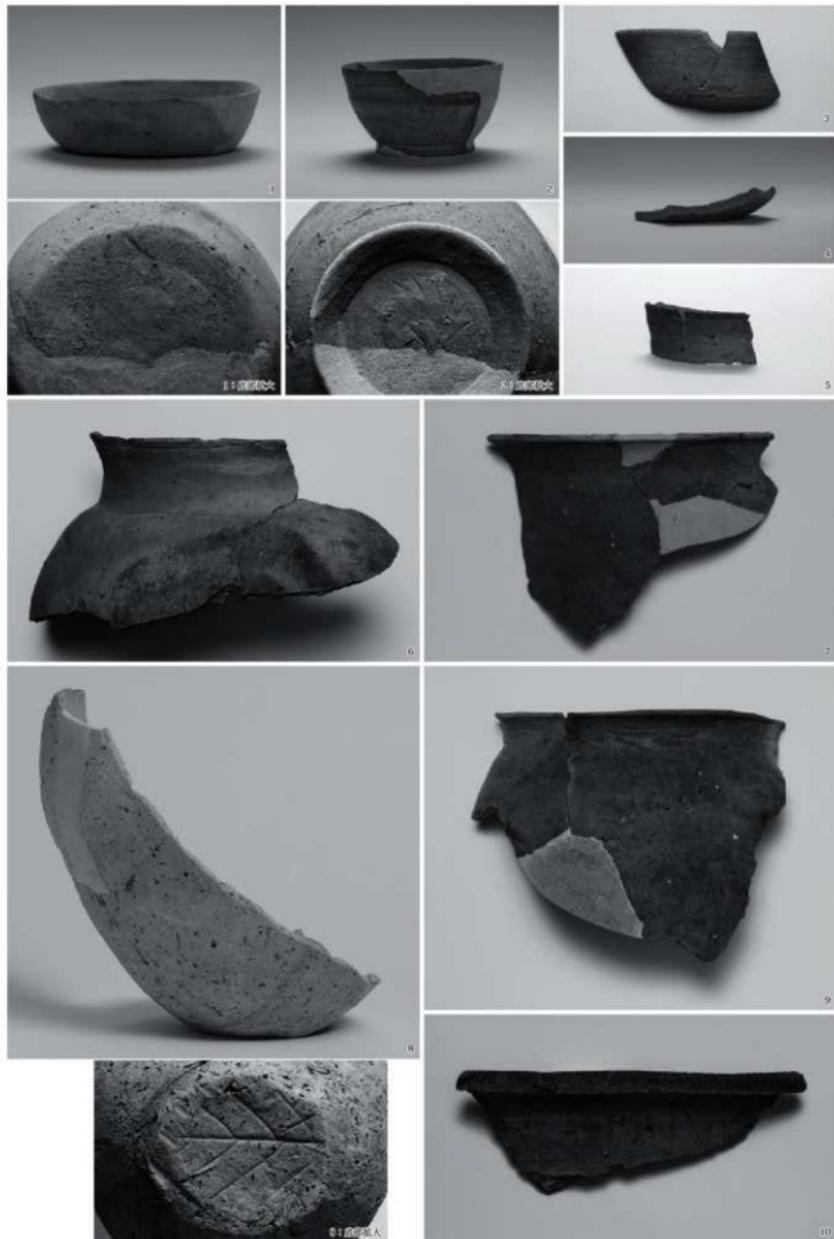
8
9

SB101 据立柱建物跡、SA233 柱列跡、SE106・SE111・SE112 井戸跡出土遺物、SX13 廃棄土坑出土遺物（2）
(1~3: SX13・第40回, 4: SE106, 5: SE106・第53回, 6: SE111・第53回, 7: SE112・第53回, 8: SB101・第48回, 9: SA233)



SX114 粘土採掘坑出土遺物（1）
(第 59 回)

(2～10: 5号 1: 任意)



SX114 粘土探査坑出土遺物（2）

（第 59・60・61 回）

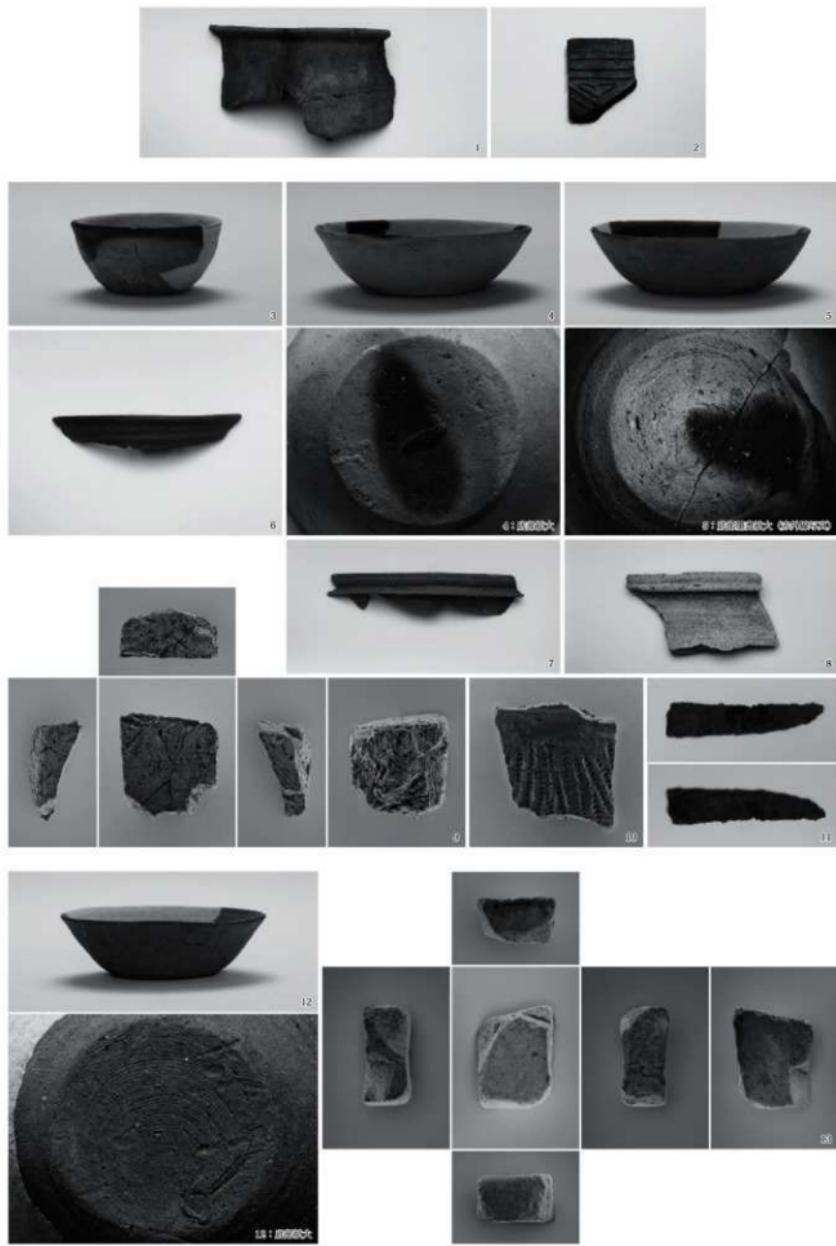
(5 件 1/3)



SX125 穹穴住居跡出土遺物、SX114 粘土採掘坑出土遺物（3）、SX117 穹穴状遺構出土遺物
①～⑥・⑧：1/3、⑦：5与1/5
①～③：SX114・第60回、④～⑥：SX125・64回、⑦：SX117・第62回、⑧：SX117



(2~5・10: S与1/3 6~8: S与1/2 9: S与2/3 1: 任意)
SI140 穹穴住居跡出土遺物
(2~8: 第69回, 9+10: 第70回)



(1・2・10: S 与 1/2 3～9・12・13: S 与 1/3 11: S 与 2/3)
SI139・142・143 穹穴住居跡出土遺物
(1・2: SI139・第66回, 3-11: SI143・第75回, 12・13: SI142・第71回)



1: 焼口部構築材

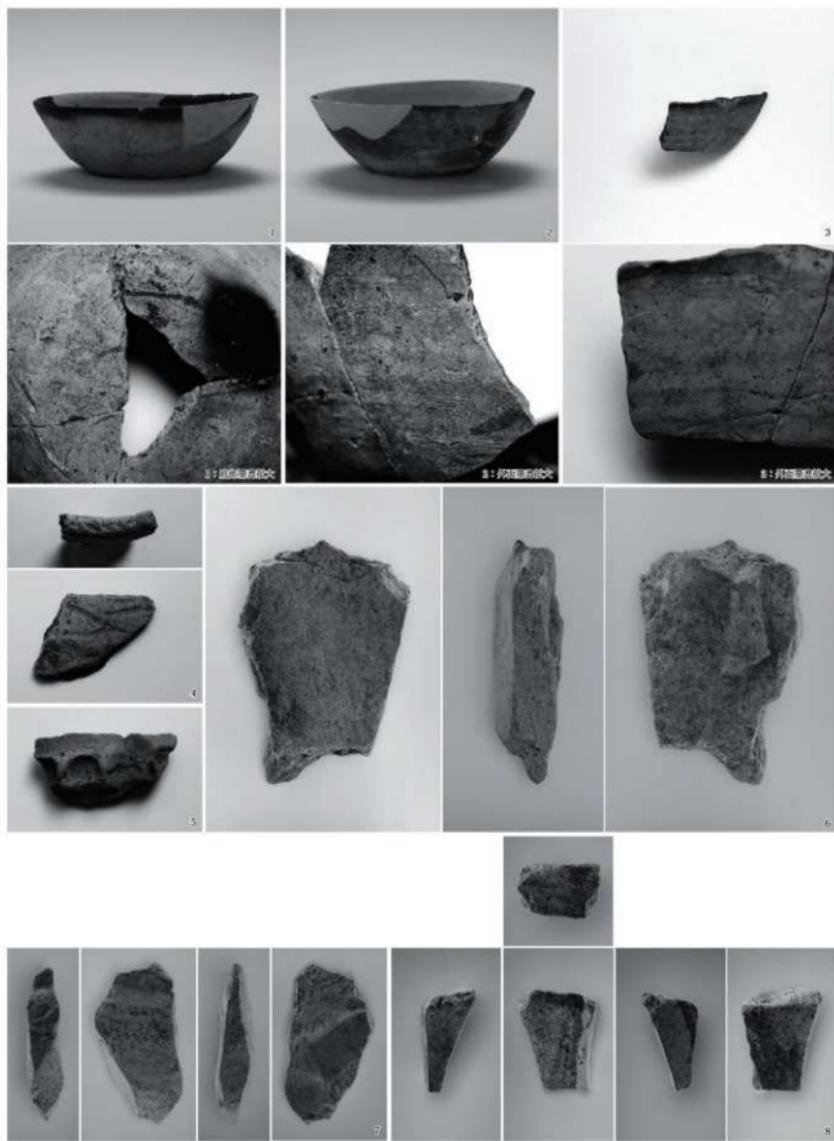


SI142 穂穴住居跡出土 カマド構築材



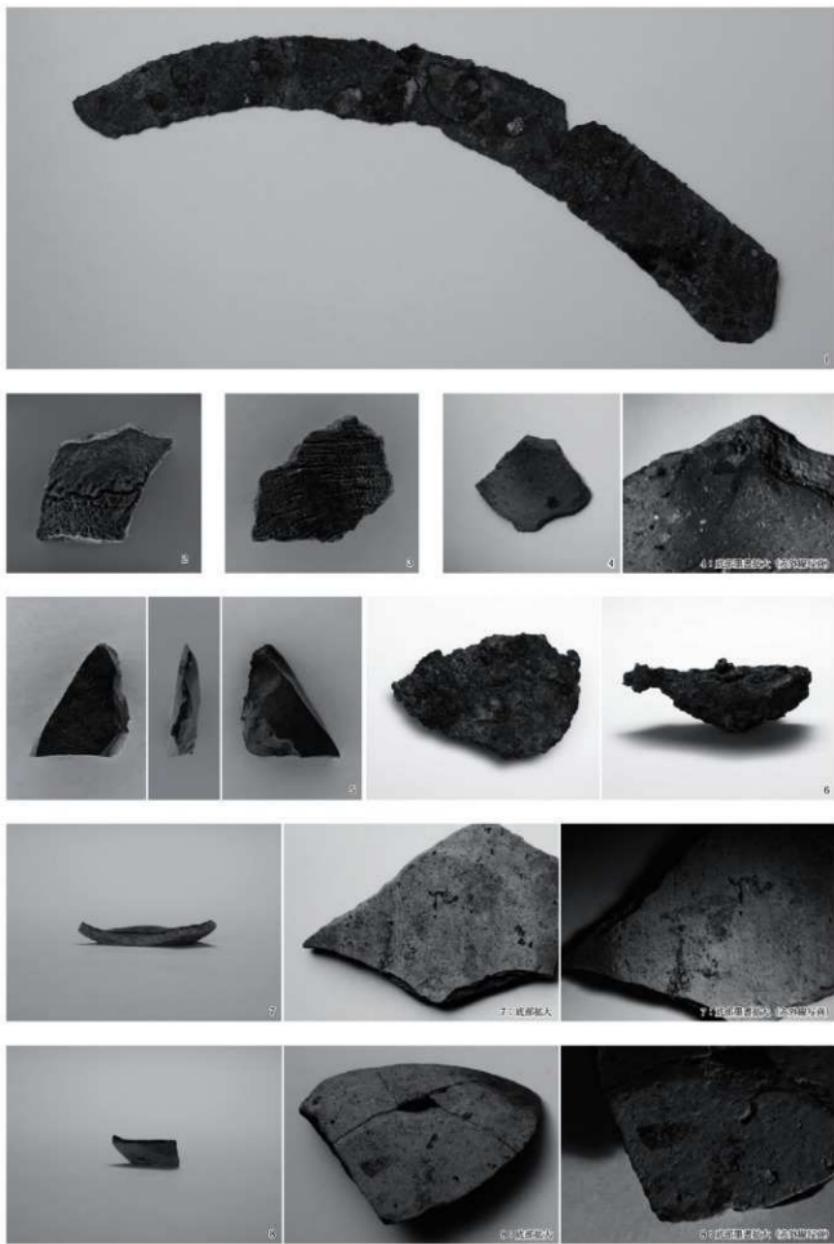
SI156・178 穫穴住居跡出土遺物
(1~5: SI156・第77回、6: SI178・第83回)

(1~3・5・6: 5号1/3 4: 5号2/3)



SI157 積穴住居跡出土遺物 (1)
(1~5: 第 80 図、6~8: 第 81 図)

(1~3・6~8: S 1/3 4~5: S 1/2)



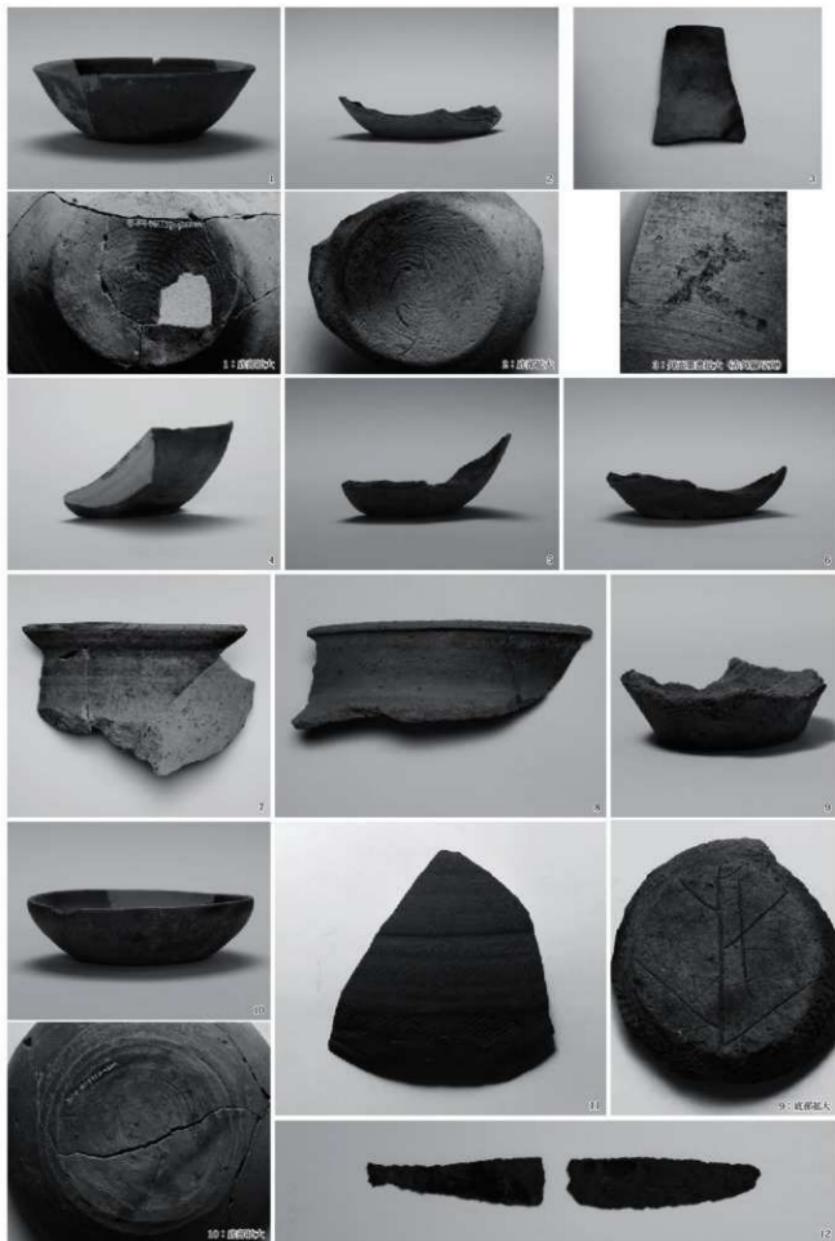
SI157 穹穴住居跡出土遺物 (2)、SB127 据立柱建物跡、SK131・132・151・170・193・227 土坑出土遺物
 (1: SI157・第80回、2: SB127・第87回、3: SK131・132・第96回、4: SK170・第98回、5: SK151・第97回、6: SK151、7: SK193・第102回、8: SK227・第102回)



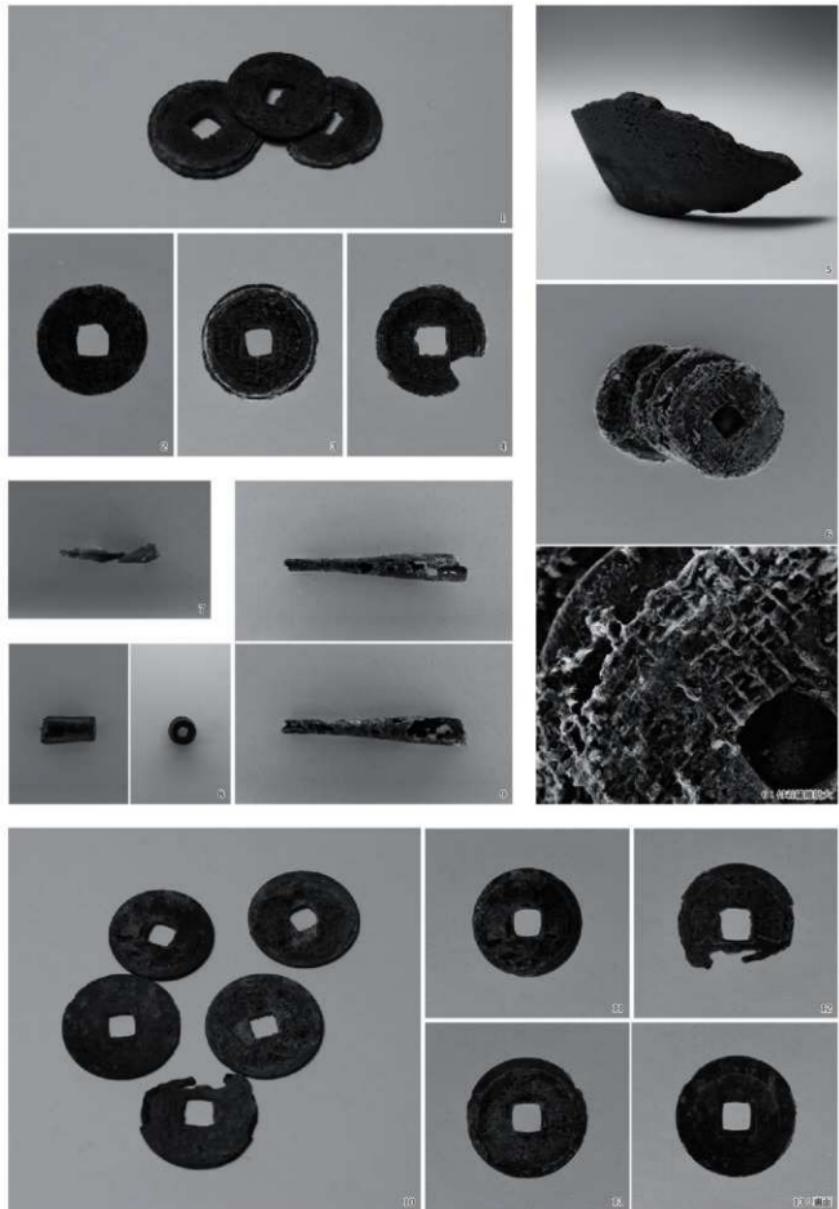
(2～6: S号 1/3 1: 任意)

SI194 穫穴住居跡出土遺物 (1)

(黒 85回)



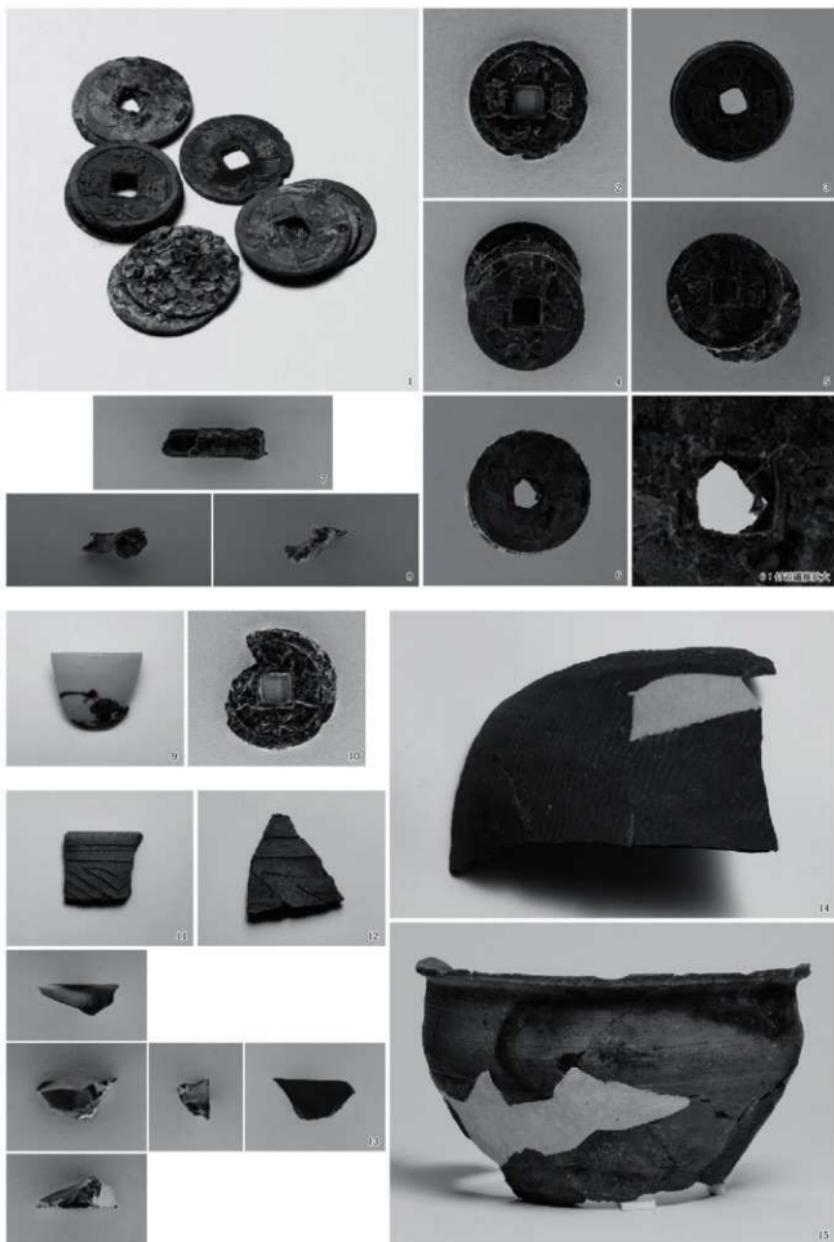
SI194 穹穴住居跡出土遺物（2）
 (1~8・10・11: S 与 1/3, 9: S 与 1/2, 12: S 与 2/3)
 (1~7: 第 85 回, 8~12: 第 86 回)



(2~4・6~11~13:5与1/1 5:5与1/3 7~9:5与2/3 1~10:任意)

SK163・166・205・207・208 近世墓出土遺物

(1~4:SK163, 5:SK166, 6:SK166, 7:SK205, 8~9:SK207, 10~12:SK208, 11~13:SK208, 第92回)



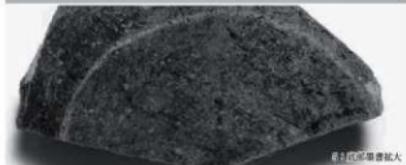
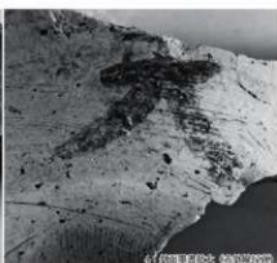
(2~6・10:SK216、7・8・13:SK226落とし穴状土坑、9・14・15:SK209土坑出土遺物
(1:5~8:SK216、2~4:SK216・第93回、9:SK226・第103回、10:SK226、11~15:SK209・第102回)



(1:SK211・第95回, 2~6・11・12:SD150・第106回, 3~4:SD161・第106回, 5~10:SD144・第105回)

SK211 土坑、SD150・161・144 溝跡出土遺物

(1:SK211・第95回, 2:SD161・第106回, 3~4:SD150・第110回, 5~12:SD144・第105回)



P82・130 柱穴跡、遺構外出土遺物
(1:P130・第111回、2:P82、3~6:遺構外・7:5)

【解説】

かけがえのない遺跡を未来へ

私たちの足もとには、昔の人びとが暮らした家の跡や、そこで使われた土器や石器などの道具が埋もれている場所があります。このように、昔の人びとの生活の跡が残されている場所を、「遺跡」と呼んでいます。遺跡は、長い歴史の中で大地に刻み込まれた私たち人間の生活の記憶なのです。

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた蔵王町には、私たちの祖先が残した多くの遺跡があります。人々がいつ、どのようにして郷土蔵王に住み着いたのか。彼らは日々の生活をどのように送り、何歳まで生きたのか。土器づくりは誰の仕事だったのか。興味の尽きないテーマです。

遺跡を調べることで昔の人びとの知恵に学び、私たちの歴史や文化をよく知ることは、私たち自身の生活を見直したり、将来を考えるためにとても大切な役割を果たしています。そのためには、長い歴史を経て今日に伝えられている大切な遺跡を、私たち国民共有の財産として、未来の子どもたちの世代へ守り伝えていかなくてはなりません。

遺跡を記録に残すための発掘調査

前戸内遺跡は、小村崎地区のなだらかな丘の上に埋もれている昔の人々の生活の跡です。小村崎・平沢地区の円田盆地では、水田や畑を使いややすく作り変えるは場整備工事が計画されました。できるだけ遺跡を壊さないで工事を行なうために、地元地権者の皆さんでつくる蔵王町土地改良区や工事を行なう宮城県大河原地方振興事務所ではたくさんの工夫をしました。それでも、どうしても遺跡が壊れてしまう部分では、工事を行なう前にどのような遺跡が残されているかを詳しく調べ、その様子を写真や図面に記録するために、蔵王町教育委員会が発掘調査を行なうことになりました。発掘調査では、たくさんの方々が汗を流しました。このように、たくさんの人びとの努力によって、前戸内遺跡の記録を残すことができたのです。

前戸内遺跡の時代

ここに刊行した「前戸内遺跡発掘調査報告書」をひも解くと、雄大な蔵王山麓に抱かれた円田盆地に暮らした人びとの歴史であり、前戸内遺跡が平安時代の地方の村の様子を具体的に知ることができる重要な遺跡だったことが分かります。発掘調査では、今から1,200～1,150年ほど前（平安時代はじめ頃）の村の跡が発見されました。当時の普通の農民の家は竪穴住居で、各地の遺跡からたくさんの住居跡が見つかっています。前戸内の村にも、たくさんの竪穴住居があったようです。そのような農民の村の一角に、豪族の居宅（住まい）がつくられたのです。豪族とはどんな人で、前戸内の村でどんな暮らしをしていったのでしょうか。



前戸内遺跡の発掘調査 平安時代の村の一角で、掘立柱建物が建ち並んでいた場所が見つかりました。主屋と倉庫などを備えた豪族の家の跡だったと考えられ、文字の書かれた土器などが出土しています。写真は、見つかった建物の柱の跡などを調査員がひとつひとつ図面に記録しているところです。

「豪族」と聞いて、みなさんはどんな人をイメージするでしょうか。歴史の授業を思い出してみましょう。飛鳥時代に大和政権の中核を担ったのは、蘇我氏や物部氏、葛城氏といった大和盆地に勢力を広げた豪族たちです。一方、平安時代には関東平野の平将門や瀬戸内地方の藤原純友といった地方の豪族が古代国家へ反逆を企てました。みなさんは、名取市の雷神山古墳や、仙台市の遠見塚古墳へ行ったことがあるでしょうか。これらは、古墳時代に仙台平野で活躍した豪族の墓です。私たちの住む東北地方でも、古くから様々な豪族たちが活躍していたのです。「豪族」は、その地域に昔から代々住み着き、多くの人々を使って農業や漁業などを大規模に經營した人々で、古代国家ともつながりがありました。彼らは地域のリーダーであり、有能な経営者であり、そして地方の役人でした（田中広明さん『豪族のくらし』より）。

もう少し日本の歴史を思い出してみましょう。奈良時代の中頃、仏教によって国を守り繁栄させようと考えた聖武天皇は、諸国に国分寺と国分尼寺を、奈良に東大寺と法華寺を建立する国家プロジェクトを進めていました。東大寺には大仏を造立するのです。しかし、これには莫大な資金が必要でした。このため、国家の税収を増やす方策として考え出されたのが「墾田永年私財法」の発布でした。これまで、田はすべて朝廷のものでしたが、この法律によって、新しく開墾した田は永久に開墾した人に所有権が認められたのです。地方の豪族たちは農民を集めて田を切り拓き、農民たちに稻を貸し付けて米づくりをさせ、そこから土地代や年貢を徴収しました。農民に暇ができる農閑期には、機織りや鉄器づくりといった手工業に従事させました。こうして税をはるかに超える生産を行ない、豪族たちは富を集積していくのです。前戸内遺跡は、このような豪族たちが活躍した時代の地方の様子を知ることができる興味深い遺跡なのです。

平安時代の村と豪族の居宅

平安時代のはじめ頃になると、前戸内の丘にはたくさんの大穴住居や掘立柱建物が建てられました。人びとが盆地の一角に村を作り、稲作を行なっていたのです。丘の少し小高いところには、豪族の居宅（住まい）がありました。主屋や倉が広場を囲むように建ち並び、まるで郡の役所を小さくしたようなつくりです。役所のように周りを取り囲む高い堀や大きな溝はなく、瓦を用いた建物もありませんが、当時の郡の名前である「対田」など、文字の書かれた土器がたくさん出土しているので、広場では大事な儀式や村の人びとを招いて酒宴が行なわれたようです。

当時の村は、およそ50戸ごとに「郷」という単位でまとめられ、その土地の豪族や有力な農民から「郷長」が選ばれました。郷長は、村の代表者であると同時に、税の取り立てや稻の貸付けの管理にあたる役人でもあったのです。前戸内の村につくられた豪族の居宅には稻を納めた倉が建ち



豊穴住居跡の調査 豊穴住居は地面を四角く掘り窪めたところに柱を立て、屋根を葺いた建物です。写真奥の壁際に見えるのはカマドの跡です。



大型の掘立柱建物跡 掘立柱建物は周囲に柱を立て、その上に屋根を葺いた建物です。写真は柱を立てた穴の跡で、柱の位置に人が立っています。

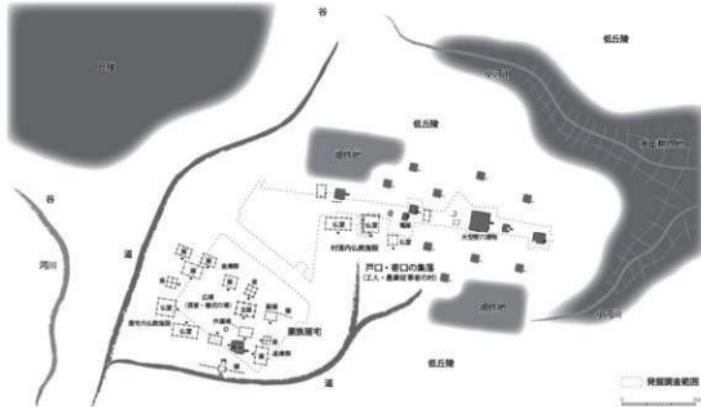
んでいたようですから、彼もまた郷長という役人でもあったのかかもしれません。

豪族の居宅から少し離れた水辺の近くには、農民の住居が建ち並んでいました。水辺の湿地に田を拓き、米づくりをしていました。住居やその周囲からは鉄の小刀や鎌、鉄くずや砥石が出土したので、米づくりの終わった冬には鍛冶をして鉄の道具づくりをしていました。そして、農民の村の一角には、正方形の大きな建物が建てられました。豪族の居宅の主屋よりも大きな建物です。この建物が何に使われたのか、発掘調査でははっきりとは分かりませんでした。他の地域で発掘された遺跡について調べてみると、このような建物の周辺から仏教に関係する道具などが出土することがあるので、仏像を安置した仏堂だったのかもしれません。奈良時代に聖武天皇が全国に広めた仏教は、平安時代には地方の村にも広まりつつありました。地方ではたくさんの農民たちの働きが豪族の活躍を支え、豪族は農民へ仏教の教えを広める窓口となつたのでしょう。

平安時代の村を復元する

発掘調査で見つかった村の跡や出土した土器などを詳しく調べ、各地の遺跡などと比較した結果、前戸内遺跡には平安時代の村がつくられ、そこには村を代表する豪族の居宅もあったことが分かりました。このようにして解き明かされた村の様子を視覚的に表現してみなさんに分かりやすく伝えるために、復元画を作成しました。遺跡から発掘されたのは、建物の柱を立てた穴やカマドで火を焚いた跡など地面に残された痕跡なので、地上の建物がどんな造りになっていたのか、屋根はどのように葺かれていたのかを知ることはできません。前戸内遺跡の村の跡を詳しく調べた鈴木調査員は、発見された建物の柱の配置をもとに、現在まで残されている平安時代の建物や、中世の絵図に描かれた建物などを参考にしながら村の様子を復元し、我妻調査員が復元画を作成しました。

今回発掘調査されたのは前戸内遺跡のごく一部なので、発掘の結果だけでは村の景観を十分に表現できません。このため復元画の製作にあたっては、調査の結果や他の遺跡の事例などを参考にしながら、周辺にあった可能性のある建物などをいくつか追加した想定復元図を作成しました。この想定復元図に基に、建物の様子などを描いた復元画を作成しました。



平安時代の村の想定復元図 破線で囲まれた部分が発掘調査をした範囲です。発見された建物は様々な時期のものがあるので、位置関係などから同時に存在した建物を推定し、最大公約数的な集落の姿を示しています。また、調査範囲内の建物の分布状況や類似する遺跡の事例などから、周囲に存在したと推定される建物や施設をいくつか追加しています。この復元図に基づいて復元画を作成しました。



← <門と塀>

調査では発見されていませんが、いくつかの豪族の居宅跡では築壁と門が見つかっています。ただし役所や寺などとは違い、居宅の敷地全体を取り囲むような塀は造られていません。



↗ <豪邸>

ガマのできる建物です。居宅の人びとの日々の食事を用意したり、広場で開かれる儀式や酒宴の食膳を提供したりしました。合所あるいは厨房のような施設です。地面を掘り深めたところに柱を立て、茅葺きの屋根を地面近くまで葺き下ろした建物で、農民の住まいも同じ造りでした。



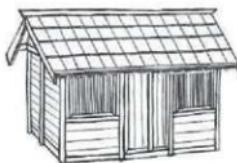
↗ <主屋>

豪族の住まいと考えられる建物で、他の建物よりも柱穴が大きく、太い柱を用いています。壁はなく吹き抜けで、むき出しの柱が重厚な茅葺きの屋根を支えています。壁がないかわりに、蔀戸という道具が吊るされました。



← <作業小屋>

厩屋のそばにある建物は、居宅内の労働者が様々な仕事をする作業場だったと考えられます。壁はなく吹き抜けで、主屋の蔀戸よりも簡素な扉が吊るされています。



← <倉庫>

主に穂積として用いるため、穂首刈りの状態の稻を保管したと考えられる倉庫です。穂積を農民に貰い付け、新しく拓いた田で稲作に従事させました。



→ <高床倉庫>

内部にも柱がある高床の建物で、穂首刈りした稻から取った粉付の米を保存したと考えられる倉庫です。食料としての貯蔵用の倉だったのでしょうか。



↑ <仏堂>

農民の村の一角に建てられた正方形の建物で、豪族の居宅の主屋よりも柱穴が大きく、太い柱を用いていました。調査では出土していませんが、いくつかの村の跡では、このような建物の周りから仏教に関する仏具などが出土しているので、仏像を安置した仏堂だったと考えられます。



← <仏堂>

調査では見つかっていませんが、いくつかの村の跡では、仏堂と考えられる正方形の建物跡の隣に長方形の建物の跡が見つかっています。経典の講義や説法を聞く講堂のような使われ方をしたのかもしれません。

←居宅内の仏堂>

調査では見つかっていませんが、いくつかの豪族の居宅跡では村の中に建てられたのと同じような仏堂の跡が見つかっています。当時の豪族たちも、仏教を高く信仰したのです。前戸内の豪族の居宅では、広場の西側にこのような施設が設けられていたかもしれません。

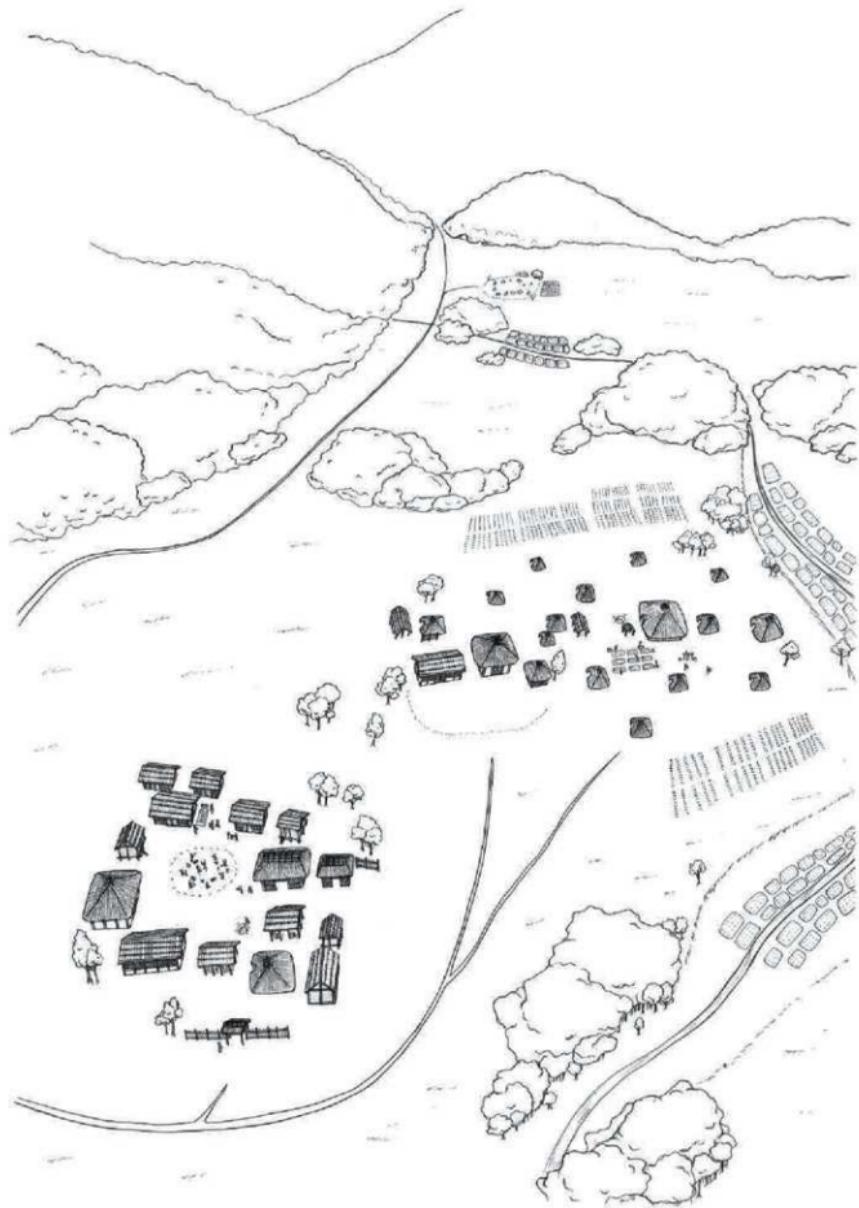


↑ <広場での儀式や酒宴>

居宅内の広場では、さまざまな儀式や酒宴が行なわれていたと推定されます。折に触れて農民たちを酒宴に招き、村の人びとの結束を強めたのでしょう。

おわりに

前戸内遺跡の発掘調査ではこのほかにも、縄文～弥生時代の人びとがシカやイノシシを捕らえた落とし穴の跡、奈良時代の住居跡、鎌倉時代の屋敷の跡、江戸時代のお墓の跡などが見つかりました。このように、前戸内の丘には、縄文時代から現代にいたるまで、幾重にもわたって人びとの生活の痕跡が残されていることが分かったのです。ここに記録された前戸内遺跡の考古学的成果は、地域の歴史を解き明かす鍵として大変貴重なものです。



復元画 前戸内遺跡で営まれた平安時代の村（画 我妻なおみ）

報 告 書 抄 錄

蔵王町文化財調査報告書 第16集

前戸内遺跡

—経営体育成基盤整備事業（県営ほほ整備事業）に伴う緊急発掘調査—

2013年（平成25年）3月25日 印刷・発行

発行 蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町丹田字西浦北10

TEL 0224-33-3008 FAX 0224-33-3831

印刷 株式会社 津田印刷

〒989-1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町13-5

TEL 0224-52-5550 FAX 0224-52-3097
